「近世のヴェネツィア共和国とオスマン帝国間の絹織物交易」

飯田巳貴

一橋大学

博士（経済学）学位論文

一橋大学大学院

経済学研究科

2013 年

目　次

問題提起 8
先行研究 11
史料について 21
(1)オスマン帝国の公定価格（ナルフ）台帳 23
(2)ヴェネツィアの商人文書、公証人文書 26
課題と構成 29

第 1 章　イスタンブルの宮廷および都市社会における絹織物の役割
（1）スルタンの可視性　ページェント・宮廷儀式・行進 31
（2）権力と富の象徴 33
（3）恩賜の御衣 37
（4）17 世紀前半のイスタンブルにおける絹織物取引の流れ 42

第 2 章　17 世紀前半のイスタンブル公定価格（ナルフ）台帳からみる絹織物消費市場 48
17 世紀のオスマン帝国経済 49

1．17 世紀前半のイスタンブル公定価格（ナルフ）台帳からみる、絹織物消費市場 52
（1）イスタンブル公定価格台帳にみられる絹織物製品 54
セラーセル 55
ヴェルヴェット 56
紋織り 58
薄地絹織物 61
交ぜ織り 63
まとめ 65
（2）絹織物の産地
セラーセル 66
ヴェルヴェット
紋織り 68
薄地絹織物 70
「ヨーロッパ製絹織物」の実態
交ぜ織り 72
まとめ 73
（3）絹織物以外の繊維製品 75
アンゴラ山羊毛織物（モヘア）と毛織物
綿織物と麻織物 77

2. 1624 年ブルサ台帳との比較 79
絹織物 80
毛織物・麻織物・綿織物 81

3. ヴェネツィア製繊維製品の位置づけ 83
絹織物
毛織物 86

第 3 章　16 世紀末から 17 世紀初めのヴェネツィアとオスマン帝国間の絹織物貿易 90

１．　15 世紀末までのヴェネツィア絹織物産業と東地中海地域への絹織物輸出 94
（1）絹織物の輸出入交易と織物製造技術の導入
ヴェネツィアの織物製造業におけるルッカ職人移住の影響 96
（2）東地中海地域への絹織物輸出　―　15 世紀のコンスタンティノープル（イスタンブル）
におけるヴェネツィア商人の絹織物取引より 99
・ジャコモ=バドエル（1436-1440）
・アルヴィーゼ=マリピエーロ（1481-1483 年） 100

２．16 世紀末から 17 世紀初頭における、ヴェネツィアとオスマン帝国の輸出入貿易 101
（1）16 世紀以降のヴェネツィア経済の性格変化と絹産業
海上輸送における相対的な地位の低下
輸出向け製造業の発展 103
（2）公証人文書に見る、ヴェネツィアとオスマン帝国の輸出入貿易、1597-1609 年 106
相手地域と主要貿易商品 107
ヴェネツィアからオスマン帝国への絹織物輸出 110
17 世紀後半の展開 113
ヴェネツィア製絹織物のオスマン帝国市場流入とブルサ絹織物製造業 117
ヴェネツィアの生糸輸入貿易とシリア 119

結論 124

資料編
資料 1　1600 年・1640 年台帳におけるセラーセルの産地と価格 133
資料 2　1600 年・1640 年台帳におけるヴェルヴェットの産地と価格 135
資料 3　1600 年・1640 年台帳における紋織りの産地と価格 136
資料 4　1600 年・1640 年台帳における薄地絹織物の価格と産地 138
資料 5　1600 年・1640 年台帳における交ぜ織り（綿絹）の価格と産地 139
資料 6　1600 年台帳におけるモヘア（＝アンゴラヤギ毛織物）・毛織物の産地と価格 140
資料 7　1640 年台帳におけるモヘア（＝アンゴラヤギ毛織物）・毛織物の産地と価格 141

資料 8　1600 年台帳における綿織物の産地と価格 144
資料 9　1640 年台帳における綿織物と麻織物の産地と価格 146
資料 10　1600 年台帳におけるフェルトの産地と価格 149
資料 11　1624 年ブルサ台帳における絹織物の産地と価格 150
資料 12　1624 年ブルサ台帳における毛織物の産地と価格 152
資料 13　1624 年ブルサ台帳における、麻と綿織物の産地と価格 153
図 56　1600 年台帳における絹織物産地の地理的分布 154
図 57　1640 年台帳における絹織物産地の地理的分布 155
図 58　1624 年台帳における絹織物産地の地理的分布 156
資料 14　ジャコモ=バドエルの取扱商品（1436-1440 年）（金額） 157
資料 15　ジャコモ=バドエルの取扱商品（1436-1440 年）（件数） 159
資料 16　ジャコモ=バドエルが扱った絹織物（1436-1440 年） 160
資料 17　ジャコモ=バドエルが扱った絹織物（厚手）（1436-1440 年） 161
資料 18　ジャコモ=バドエルがコンスタンティノープルからオスマン朝支配都市へ送った商品（1436-1440 年） 163
資料 19　ヴェネツィア商人アルヴィーゼ=マリピエーロの、イスタンブルにおける売却商品（1481 年 11 月 29 日-1483 年 8 月 29 日） 164
資料 20　イスタンブルへ輸出（1592-1609 年） 166
資料 21　ラグーザ（ドゥブロヴニク）へ輸出（1592-1609 年） 168
資料 22　ヴロラ（ヴァロナ）・レジャ（アレッシオ）・ドゥラス（ドゥラッツォ）へ輸出（1592-1609 年） 170
資料 23　イズミルへ輸出（1592-1609 年） 172
資料 24　シリアへ輸出（1592-1609 年） 174
資料 25　アレクサンドリアへ輸出（1592-1609 年） 175
資料 26　ヴェネツィア領へ輸出（1592-1609 年） 177
資料 27　イタリア半島（マルケ地方、アブルッツォ地方、プーリア地方およびシチリア島）へ輸出　（1592-1609 年） 183
資料 28　シリアからヴェネツィアへの輸入（1592-1609 年） 191

参考文献 195

図表一覧 209

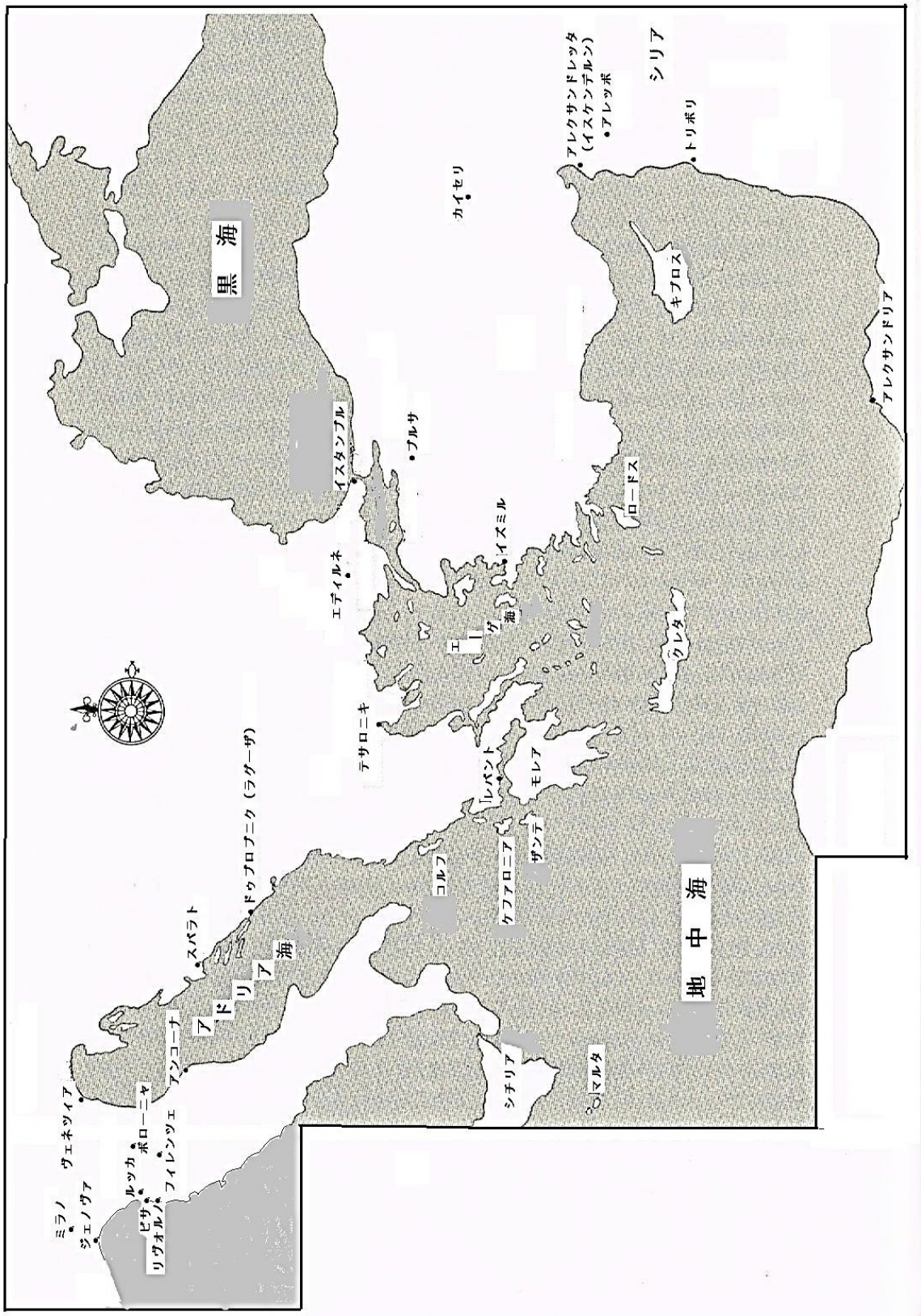


図 1　17 世紀の東地中海　（Daniel Goffman, *Izmir and the Levantine World, 1990,* p.8 より作成）

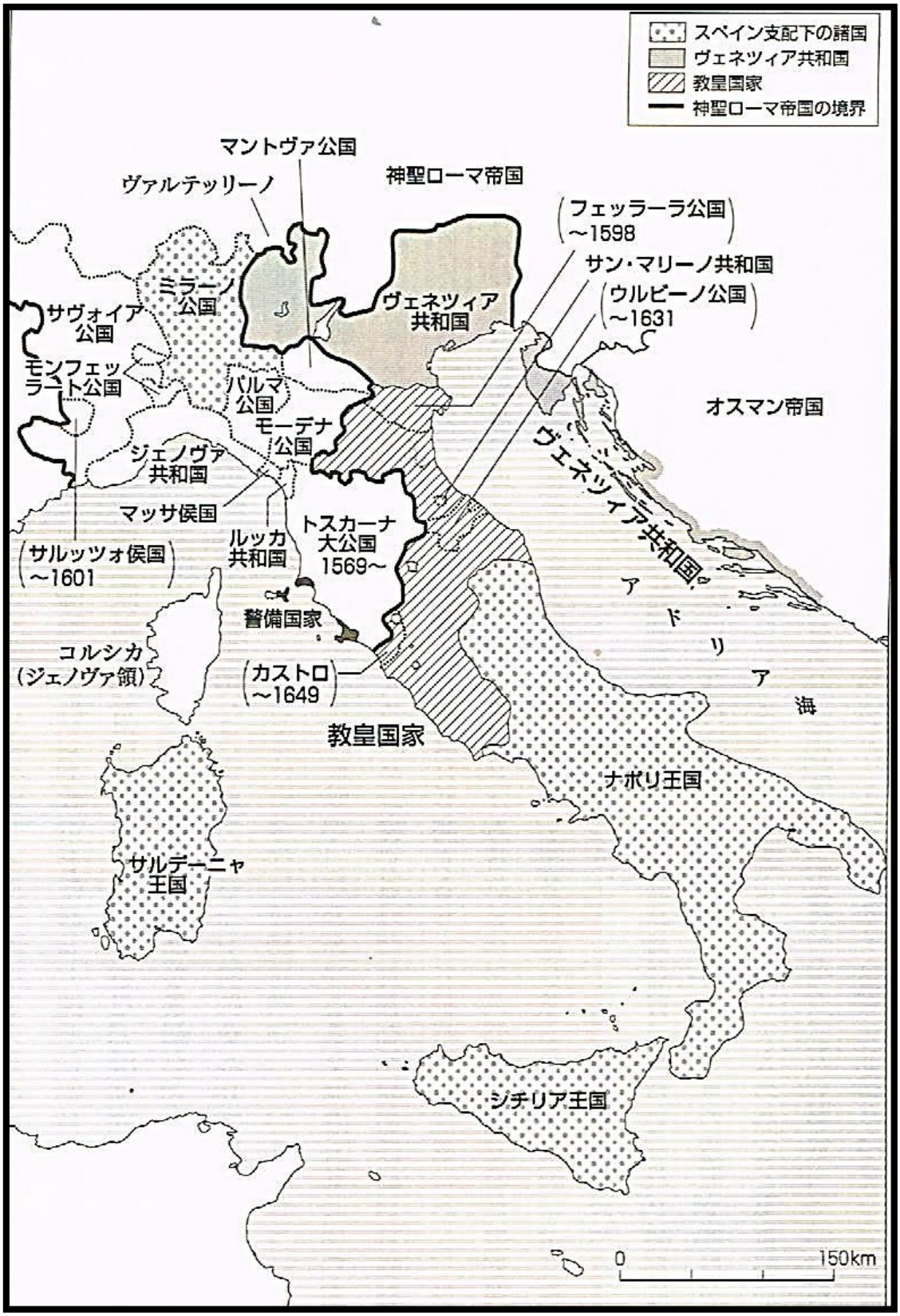


図 2　17 世紀なかばのイタリア　（『イタリア史』北原敦編、山川出版社、2008 年、271 頁）

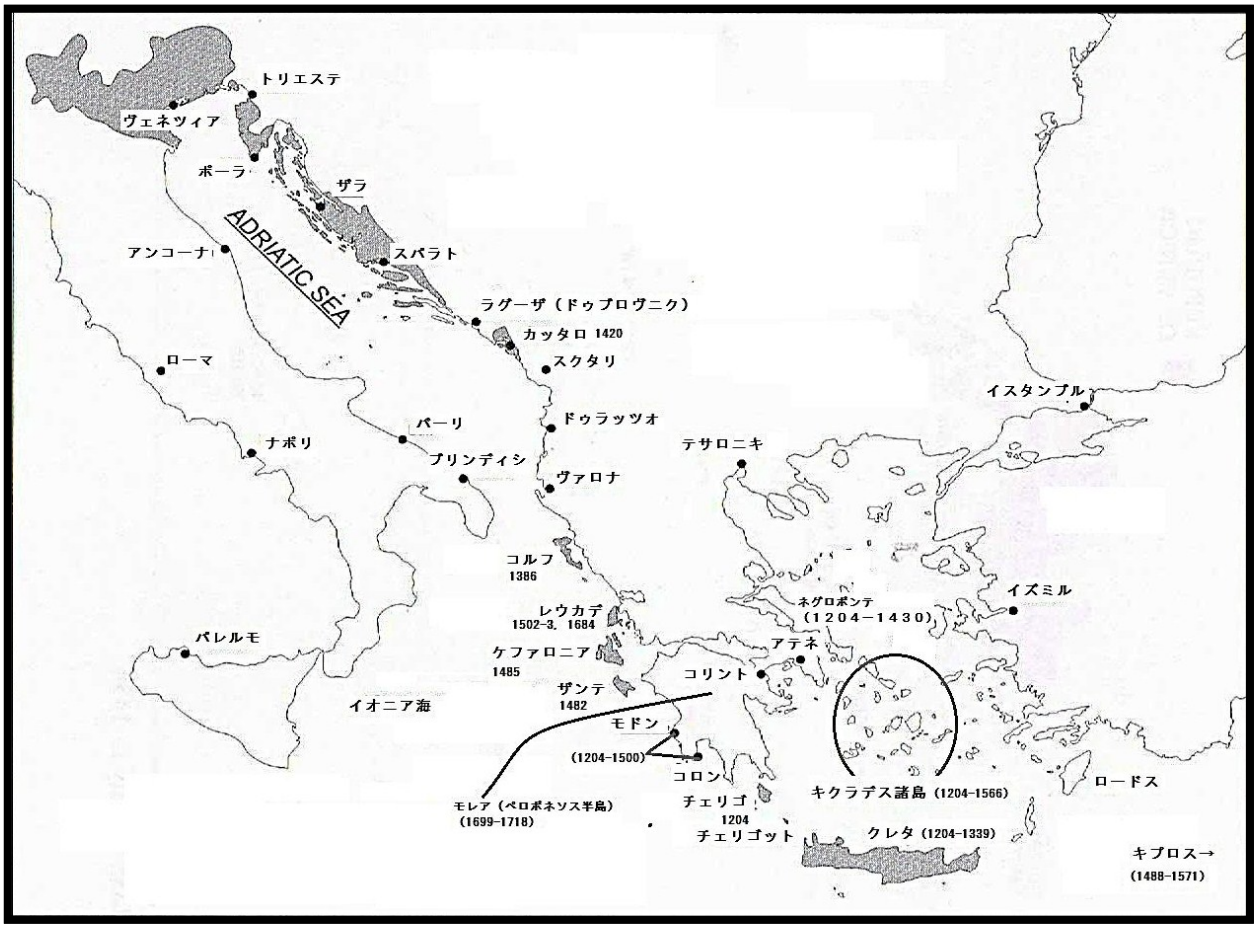


図 3 ヴェネツィアの海外領土

領土失地年のないものは、共和国崩壊（1797 年）まで続いたもの。小領土は省略した。

(*At the Centre of the Old World,* 2006, p.16 より作成)

「さあ私とともにここへ来て、目を向けようではありませんか。頭にターバンをかぶり、あるいは幾重にも純白の絹を巻いた膨大な数の人びとに。あらゆる種類と色合いの光り輝く衣装に。至る所で、金、銀、紫、絹そして絹サテンが輝いています。詳細を述べようとしたら、あまりに長大な文章になってしまうでしょう。この光景の斬新さを存分に描きだすには、言葉だけでは足りません。私はこれほどまで美しい壮観な眺めを目にしたことは、これまで一度もありませんでした。」

アマスヤ滞在中のスレイマン 1 世の御前に列席した、神聖ローマ帝国皇帝大使オジェ=ギスラン=ド=ビュズ ベクの報告より、1555 年 9 月[1].

[1] *The Turkish letters of Ogier Ghislin de Busbecq, Imperial Ambassador at Constantinople 1554-1562*, Translated from the Latin of the Elzevir Edition of 1633 by Edward Seymour Forster, 1927, reprinted edition, Louisiana State Univ. Press, 2005, p.61.

Ⅰ．問題提起

地中海は、古くから周辺地域を政治・経済・文化等様々な形で結びつけてきた。中世中期になると、イタリア半島北部に位置するいくつかの海洋都市国家が地中海交易に進出し、地中海地域内の経済交流がさらに活発化した。ヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサなどイタリアの海洋都市国家の商人は、東地中海地域のビザンツ帝国やイスラーム支配地域との交易を通じて繁栄し、その経済効果はイタリア半島北部の内陸にも及び、シエナ、フィレンツェ、ミラノ、ボローニャなどの都市が大きく成長したことは、これまで多くの研究によって実証されてきた。

イタリアと東地中海を結ぶ地中海地域内交易は、従来の研究では、15-16 世紀を頂点としてその後急速に不可逆な衰退に陥ったと考えられてきた。そしてイタリア半島の都市国家にかわって、オランダ、イギリス、フランスなど、アルプスの北の諸国が地中海交易を含むヨーロッパ経済世界の覇権を握ったと考えられている。

実際 17 世紀の地中海交易は、大別すると二つの点で大きな変化を経験している。第一の変化は、主力商品にあらわれた。従来の地中海交易の主力商品はイスラーム世界を中継してヨーロッパにもたらされる高価なスパイス（香辛料および香料）や生糸、および比較的安価であるが、ある程度特産品的要素を持つ故に需要が高い羊毛や綿、穀物、各種鉱物（明礬など）などであった。変化は特に前者において顕著にあらわれた。周知のように、ポルトガルによるアジアへの喜望峰航路開拓は、16 世紀の段階では、イスラーム世界とイタリアを結ぶ従来の地中海交易に対して致命的な影響を与えたわけではなかった。しかし 17 世紀に入ると、アジア産スパイスのヨーロッパへの輸送の大部分は、主にオランダ船による喜望峰航路に移行し、イタリア商人のスパイス貿易に対する支配力は決定的に後退したのである。

第二の変化は、北西欧諸国の船舶が本格的に地中海交易に参入してきたことである。東地中海地域を支配するオスマン帝国は、16 世紀になると、それまでヴェネツィアなどイタリア諸国に与えていた恩恵的特権待遇（キャピチュレーション）を、北西欧諸国にも与えてその交易を保護した。キャピチュレーションには、十分な物資の供給を確保する目的と、長年にわたる交易のパートナーではあるが、地中海内の領土（拠点）を巡って対立することもあったヴェネツィアを牽制する狙いもあった。

17 世紀になると、オランダ船やイギリス船は、ヴェネツィアなどイタリア船に比較して造船コストが安く、航海および海戦技術にも優位な点が多くなる。ヨーロッパ商人にとって、17 世紀の地中海はオスマン帝国の進出や海賊の跋扈によって危険が増していたこともあり、保護費用を含む輸送コストの面で、イスラーム支配下の東地中海地域でのイタリア船による輸送は、相対的な地位低下に陥った。その結果、イタリア船による海上輸送は、次第にイタリア半島およびその周辺との中短距離の往来が中心となっていったのである。

このように 17 世紀の地中海交易に関して、従来の研究では、イタリア諸国が衰退し、それにかわって北西欧諸国が進出し、その結果地中海地域は北西欧諸国に原料を供給する立場になったと考えられてきた。近世史におけるアルプス以北中心主義の背景には、たとえばフェルナン・ブローデルが 1949 年に刊行した『フェリペ二世時代の地中海と地中海世界』のなかで、16 世紀後半における地中海交易圏の繁栄を評価した結果、逆にそれ以降の地中海周辺地域の評価を停滞・衰退と認識させることになったという経緯があろう。

またブローデルの理論を一部引き継ぎ、1970 年代年から一貫して強固な北西欧中心史観に基づいて近世の地中海地域を周辺と位置付けるイマニュエル・ウォーラーステインの壮大な仮説、いわゆる『近代世界システム論』が、今日でも拭いがたい影響力を持っていることも考えられる。地中海周辺地域は、偉大な繁栄の過去を持つが、16 世紀末以降の重要性は低く、検討に値しないものと考えられてきたのである。

しかし、確かに中世以来数世紀にわたり続いてきたイタリアと東地中海地域の海上交易は、17 世紀に入って次第に相対的な地位を低下させたが、そのことが直ちに両者関係の急速な衰退を意味するとは限らない。たとえばヨーロッパと東地中海地域との交易における主力商品を見るだけでも、16 世紀にはスパイスであったが、17 世紀は生糸、18 世紀は綿に移行している。交易商品の変化に従って、それに従事する人間や、交易への関与のありかたもまた変化する。したがって 17 世紀におけるイタリア商人によるスパイス交易の縮小をイタリアと東地中海地域の結びつきの急速な衰退に直結させるのではなく、両者の関係が形を変えて存続した可能性も踏まえて検討すべきである。

こうした問題提起の根拠は、主として以下の二点に整理される。第一は、ヴェネツィアなどの北イタリア諸国が、16 世紀後半から 17 世紀にかけて経験した経済の構造変化である。前述のように、17 世紀になるとイタリア船による地中海の長距離輸送は減少し、中・短距離輸送が中心となった。従来の研究では、中世以来の地中海中継交易の縮小は、それを担ったヴェネツィアなどイタリア諸国の経済的衰退と不可分のものとされ、17 世紀以降のイタリアは不可逆的な衰退に陥ったと考えられてきた。

しかし 1980 年代以降、17 世紀の北イタリア諸国に関しては、中継交易にかわって輸出向け製造業が成長し、経済の急速な衰退をある程度まで回避することに成功したとする見方が主流となりつつある。北イタリアの製造業のなかで、特に輸出向け奢侈品製造業が成長したことが、多くの事例によって明らかにされている。輸出品は、織物や武器、印刷本のような完成品のみならず、絹撚糸などの半完成品を含み、さらにこうした製造業に直結する養蚕や桑栽培などの農業部門も成長した。

数百年にわたり地中海交易によって繁栄してきた「アドリア海の女王」ヴェネツィアの場合も例外ではない。ヴェネツィアでは、市内の絹織物製造業やガラス製造業（ムラーノ島）、印刷出版業、また大陸領土（テッラフェルマ）における養蚕と絹撚糸製造業、絹織物製造業が成功した。17 世紀には、それまで海外交易を担ってきたヴェネツィア貴族層による大陸領土の土地への投資が活発化したが、こうした動きについて、かつて考えられたような「封建化」で

はなく、近年では、獲得した土地で商品作物栽培（桑、米作、養蚕等）をおこなうことが目的であったと評価されている。

第二は、17 世紀の地中海における生糸交易の繁栄とイタリア商人の関わりである。ペルシアおよびシリア産の最高級生糸は、中世以来イタリアと東地中海地域間交易における主力商品のひとつであった。17 世紀にアジア産スパイス貿易が地中海交易ルートを離れた後も、生糸交易の大部分は地中海を通じてヨーロッパに輸出された。17 世紀にはアナトリア西岸で養蚕が軌道にって順調に成長し、従来のペルシアおよびシリア産生糸と共に、16 世紀までのスパイスに代わって、いわゆる「レヴァント交易」（ヨーロッパ諸国による東地中海地域との交易）の主役となった。

17 世紀の地中海地域において、ヨーロッパ商人が生糸の買い付けに訪れる主要な集散地は、アナトリアのブルサとシリアのアレッポであり、アナトリアのイズミルも大きく成長した。17 世紀のアレッポの生糸取引市場は、同世紀における地中海交易の中心地のひとつであった訳だが、そのアレッポ生糸取引市場において、ヴェネツィア商人が大きな力を維持していたことが明らかにされている。このことは、ヴェネツィア商人が 17 世紀においても地中海交易で重要な役割を果たしていたことを示している。アレッポ生糸取引市場には、マルセイユ商業会議所に所属するフランス商人も多数進出しており、このこともまた 17 世紀における地中海地域内商業圏の存続を示唆している。

このように 17 世紀のヴェネツィア経済は、海上交易に代わって絹産業など農業・製造業の割合が高まっていったが、実はヴェネツィア製毛織物および絹織物の主要な輸出先は、オスマン帝国が支配する東地中海地域であったことが、これまでたびたび示唆されてきた。同様の事例は、フィレンツェの毛織物製造業および絹織物製造業についても明らかにされている。また前述のように、生糸交易を通じてヴェネツィアと東地中海地域を結びつきを維持していた。つまり 17 世紀のイタリアと東地中海地域は、中世以来続いたスパイスを中心とした地中海交易とは異なる形で、「伝統的な」経済的結びつきを維持していた可能性が提示されているのである。

これまでのところ、絹織物を介した 17 世紀ヴェネツィアとオスマン帝国の交易関係は、ヴェネツィア絹織物製造史研究およびオスマン帝国の染織史研究において、主に叙述史料をもとに示唆されるにとどまっている。これまで研究史上で看過されてきた理由として、前述の 17 世紀地中海交易に対する歴史観に加えて、主に以下の二点があげられる。第一点は、比較的まとまった史料が得やすい製造業史研究が主流となって先行し、流通や消費の分析が遅れてきたことである。製造業の盛衰は、販売市場の成功によって決まる。したがって製造業に関する研究が一定の成果をかさねるなかで、流通や販売、消費の側面が検討されていない現状は、いかにもバランスが悪い。

第二点は、絹織物が奢侈的性格を持つ商品であるという点である。奢侈品は付加価値の高さがものをいい、膨大な費用をかけて手の込んだ細工を施された奢侈品の価値は、コストパフォーマンスの尺度で測ることが難しい。また奢侈品は原材料・工程・仕上がりの各々

における小さな違いをもとに細分化され、いわゆる一物一価の法則が当てはまらないことも多い。それ故に、経済史の分野においては、奢侈品の需要、製造、流通の分析は、概ね大規模に取引される日用品や工業原材料のそれと比較して、現状では遅れをとっていると言わざるを得ない。

しかし、17 世紀ヨーロッパ社会を解明する重要な鍵のひとつは、奢侈品の顕示的消費である。各地に宮廷を中心とした貴族文化が育ち、儀礼と恋愛が国家の中枢で大々的に展開した。衣服から食事、調度品、邸宅、庭園、音楽にいたるまで種々の奢侈品は、舞台装置として、人々の振る舞い（とその意図するところ）を一層効果的に演出した。奢侈品を求める動機を近代経済学の用語で合理的に説明することが難しく、また概して人口のわずか数パーセントのみを対象とするが、17 世紀に国家を動かす宮廷という場で奢侈品が果たした役割の大きさを考えるならば、奢侈品が持つ経済的意味は無視できない。

本論文ではこうした問題意識に基づき、17 世紀のヴェネツィアと東地中海地域（オスマン帝国）との絹織物を介した交易を事例として、中世以来の海上交易とは異なる形で存続した 17 世紀の地中海地域内交易圏（経済的紐帯）の実態について検討する。

ヴェネツィアとオスマン帝国を事例として取り上げる理由は、主に以下の二点である。第一には、ヴェネツィアは北イタリア諸国のなかでも、中世以来傑出して東地中海地域に確固たる足場を築き、ビザンツ帝国やイスラーム世界と、商業や外交あるいは文化交流を通じて結びつきを深めてきたことである。

第二には、かつてヴェネツィアは 17 世紀イタリア衰退説の代表格であり、1980 年代以降は奢侈品製造業をキーワードとする再評価において、活発な議論が展開されていることである。

第三に、17 世紀のヨーロッパにおける最大級の宮廷、首都人口、富裕層は、オスマン帝国の首都イスタンブルにあった。絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国の交易関係は、近世地中海地域の交易圏のみならず、奢侈品製造および消費が各々の社会経済において果たす役割について再考する手がかりも提供すると考えらえる。

以下では、まず先行研究を概観し、問題点をより明確にする。次いでオスマン帝国とヴェネツィアそれぞれの史料状況を概観する。最後に本論文の具体的な課題と構成を示す。

Ⅱ．先行研究

地中海交易は、ヴェネツィアをはじめとする北イタリアの海上都市国家が進出した中世中期以降、一段と活発化した。イタリアでは 13 世紀頃からの、いわゆる「中世の商業革命」期に商業関係文書の作成が盛んになったことから、豊富な史料が伝存し、それらの分析に基づいてこれまで多くの研究成果が発表されてきた。前述のようにイタリア船による

地中海の海上輸送は 15 世紀が最盛期であったと考えられており、イタリアと東地中海地域の交易に関する研究は、この時代に関するものが現在でも最も多い。

15 世紀におけるヴェネツィアと東地中海地域との交易研究の基礎を築いたのは、フレデリック・レイン(F.C. Lane, 1900-1984)である。レインはヴェネツィアの交易・造船・商人の活動等幅広い考察をおこなっているが、そのなかで 16 世紀に大西洋航路の発見が地中海経由のスパイス貿易に与えた影響について修正説を提示している。それまで、大西洋航路の発見によって地中海のスパイス交易は急速に衰退したと考えられていたが、レインの分析によって、少なくとも 16 世紀後半のヴェネツィアでは地中海経由のスパイス交易が（一時的ではあるが）復活したことが立証された[2]。

1950 年代から 1970 年代にかけて、15-16 世紀におけるヴェネツィアの地中海交易に関して、ブローデル、レインをはじめ、ウーゴ・トゥッツィ(Ugo Tucci, 1917-2007)[3]、フレディ・ティリエ（Freddy Thiriet, 1921-1986）[4]、アルベルト・テネンティ(Alberto Tenenti, 1924-2002)[5]らを中心に研究が進んだ。同時期には、オスマン帝国史研究者を含む地中海周辺地域の研究者による大規模なシンポジウム「15 世紀末までのヴェネツィアとレヴァント」(1968 年)、「16 世紀なかばの地中海」(1971 年)、「東西の架け橋ヴェネツィア（15-16 世紀)」（1973 年）などが次々に開催され、ヴェネツィアは中世後期の地中海において、交易を軸に地中海周辺地域を結びつける中心的な役割を果たしたと認識された[6]。またエリアフ・アシュトール（Eliyahu Ashtor, 1914-1984）もヴェネツィアの東地中海貿易について、費用と利潤のバランスなど詳細な分析を行い、多くの業績を残している[7]。ただし、同様に中世後期のヴェネツィアの地中海交易を分析した齊藤寛海によると、アシュトールの数値の扱いには誤りも多くみられる[8]。

---

[2] Frederic Chapin Lane (1962), “La Marine marchande et le trafic maritime de Venice à travers les siècles”, *Les Sources de l'histoire maritime en Europe du moyen âge au xviii siècle,* Michel Mollat (ed.), Paris, pp.7-32. レインの著作は末尾の参考文献一覧を参照。

[3] Ugo Tucci (1957), *Lettres d'un marchand vénitien Andrea Berengo (1553-1556)*, Avant-propos de Gino Luzzatto, S.E.V.P.E.N., Paris.; Ugo Tucci (1981), *Mercanti, navi, monete nel Cinquecento veneziano*, Il Mulino.

[4] Freddy Thiriet (1959), *La Romanie vénitienne au Moyen Age：le développement et l'exploitation du domaine colonial vénitien, XIIe-XVe siècles*, E. de Boccard.; Id., (1977), *Études sur la Romanie greco-vénitienne, Xe-XVe siècles*, Variorum Reprints.

[5] Alberto Tenenti (1959), *Naufrages, corsaires et assurances maritimes à Venise, 1592-1609,* S.E.V.P.E.N., Paris.; Id., (1961), Venezia e i corsari, 1580-1615, Laterza.; Id., (1962), Cristoforo da Canal, la marine vénitienne avant Lépante, S.E.V.P.E.N., Paris.; Id., (1968), Piracy and the decline of Venice, 1580-1615, With an introduction and glossary by Janet and Brian Pullan, University of California Press.; Alberto Tenenti, Branislava Tenenti (1985), *Il prezzo del rischio：l'assicurazione mediterranea vista da Ragusa, 1563-1591*, Jouvence.

[6] *Venezia e il Levante fino al secolo XV* ("Atti del I Convegno internazionale di storia della civiltà veneziana promosso e organizzato dalla Fondazione Giorgio Cini, Venezia, 1-5 giugno 1968), a cura di Agostino Pertusi, L.S. Olschki, Firenze, 1973-1974, 3 volls.; *Il Mediterraneo nella seconda metà del '500 alla luce di Lepanto* (Atti del convegno di studi promosso e organizzato dalla Fondazione Giorgio Cini, Venezia, 8-10 ottobre 1971), a cura di Gino Benzoni, L.S. Olschki, Firenze, 1974.; *Venezia：centro di mediazione tra Oriente e Occidente, (secoli XV-XVI)：aspetti e problemi* (Atti del convegno internazionale di storia della civiltà veneziana, 2d, Venice, Italy, 1973), a cura di Hans-Georg Beck, Manoussos Manoussacas, Agostino Pertusi, L. S. Olschki, Firenze, 1977, 2 volls.;

[7] アシュトールの著作は末尾の参考文献一覧を参照。

[8] 齊藤寛海(1989)「ダマスクスにおけるフィレンツェ毛織物の価格」『イタリア学会誌』 39 号、29-61 頁。

またトスカーナ史を専門とするフェデリゴ・メリス(Federigo Melis, 1914-1973)は、20世紀半ばからプラートのダティーニ研究所を中心に、トスカーナに限定せず組織的な商業関係史料の収集と分析をおこない、「中世の商業革命」を経て地中海における海上輸送の費用が低下し、その結果多角経営の時代が到来したことなどを提示した[9]。

筆者は1430年代にコンスタンティノープルに駐在したヴェネツィア商人ジャコモ・バドエルの帳簿（元帳）分析をもとに、ヴェネツィア商人がヴェネツィア～コンスタンティノープル間のみならず、周辺のイスラーム支配都市とも交易関係を築いていたことを提示した[10]。またケイト・フリート(Kate Fleet)は、14-15世紀にアナトリアのトルコ系君侯国とジェノヴァとの間で活発な交易が展開されていたことを提示している[11]。

15世紀の東地中海地域は、エジプトはマムルーク朝、アナトリアはトルコ系君侯国、コンスタンティノープル周辺はビザンツ帝国の支配下にあった。これらの地域は15世紀中葉以降、次第にオスマン帝国の支配下に組み込まれていった。後述するように、イスラーム世界では一般に商業関係史料の伝存が極めて少ないため、イタリア商人の手による史料が豊富に残るヴェネツィアやジェノヴァなどイタリアの交易史研究と比較して、イスラーム世界の史料に基く交易や商業に関する実証的な成果はそれほど多くない。15-16世紀についても、基本的にイタリアなどヨーロッパに伝存する史料の利用が多い。地中海を含む15-16世紀のオスマン帝国の長距離交易に関しては、オスマン帝国社会経済史研究の第一人者であるハリル・イナルジク(Halil İnalcık)が、イタリア史研究の成果も利用しつつ『オスマン帝国社会経済史』（1994年）のなかで総括している[12]。

このように15-16世紀のヴェネツィアと東地中海地域の交易関係に関しては、これまで多くの研究成果が発表され、ヴェネツィアをはじめとするイタリア半島の都市と東地中海地域が、経済・政治・文化など多方面で深く結びついてきたことが実証されてきた。しかし17世紀に目を転ずると、状況は一変する。17世紀のヨーロッパの社会経済全般に関する「危機論争」は、20世紀なかばからホブズボームらによって提唱されてきたが、そのなかで、北西欧諸国の発展と対照的に、ヴェネツィアやオスマン帝国を含む地中海周辺地域は衰退の代表格とみなされたのである。

ホブズボームによると、「十七世紀世紀に大きな衰微があったことは全く明白である。といのは、歴史上はじめて地中海が、経済、政治、そして最後には文化の影響力の中心であったことをやめて、貧窮化しよどんだ入り江になってしまったからである。イベリア半島の諸勢力、イタリア、トルコは明らかに落ち目であった。ヴェネツィアは観光の中心になりつつあった。北西部の諸国に依存していた（一般に自由港であった）少数の地域と、これも大西洋で活躍していた海賊のアルジェリアにおける中心地という例外を除いては、

---

9 メリスの著作は末尾の参考文献一覧を参照。

10 Miki Iida (1998), “Trades in Constantinople in the First Half of the Fifteenth Century”, *Mediterranean World*, XV, pp.41-49.

11 Kate Fleet (1999), *European and Islamic trade in the early Ottoman state：the merchants of Genoa and Turkey*, Cambridge University Press.

12 Halil İnalcık (1994), “Trade”, *An economic and social history of the Ottoman Empire, 1300-1914*, edited by Halil İnalcık, with Donald Quataert, Cambridge University Press, pp.179-379.

ほとんど前進はなかった。（中略）ドイツの没落は明らかであった」。一方、「海洋国家とそれに従属しているもの―たとえばイングランド、ネーデルランド連邦、スウェーデン―と、ロシア、さらにスイスのような若干の狭い地域においては、停滞よりも全身の印象が濃い。ことにイングランドは決定的な前進であった。フランスはこの両者の中間を占めた」[13]。

「17 世紀危機論争」をうけて 1957 年にヴェネツィアで開催されたシンポジウム「17 世紀ヴェネツィアの経済的衰退の諸相と原因」[14]では、北西欧船舶の地中海進出、ヴェネツィアにとってアジア産品の最大の販売市場であったドイツ市場が三十年戦争で荒廃したこと、アドリア海南部に出没した海賊（ウスコック）の脅威、そして同時代のオスマン帝国がいわゆる「価格革命」や農民反乱などの内憂によって混乱していたことなどが、ヴェネツィアの地中海海上交易、ひいてはヴェネツィア経済全体を衰退させた主な原因であると論じられた。

オスマン帝国史研究においても、オメル・ルトフィ・バルカン(Ömel Lutfi Barkan)らによって、17 世紀以降帝国は前述のような外憂内患により衰退・縮小期に入り、やがて近代ヨーロッパ経済に従属するに至ったとする説が主流を占めた[15]。ルトフィ・バルカンはインフレの上下動を時系列で示すと共に、その原因は新大陸銀がヨーロッパ経由でオスマン帝国に大量流入し（さらに東方のインド方面へ流出し）た余波であるとした。またインフレが生じた結果、オスマン臣民の生活が困窮し、製造業者の原料調達が北西欧諸国との競争において不利な立場におかれ不振を招いたことで、以後社会経済全般にわたる衰退が始まったと定義した。

このように、20 世紀の大半を通じて、ヴェネツィアやオスマン帝国をはじめとする 17 世紀の地中海地域内交易に対しては、同世紀以降縮小の一途をたどり、さらに同地域の社会経済全般も衰退期に入ったとする認識が一般的であった。前述のウォーラーステインによる「近代世界システム論」の影響もあり、17 世紀の地中海地域内交易に関して活発な議論はほとんど展開されていない。

しかし 1980 年代になると、17 世紀イタリア経済の再考が、主に製造業の分野で本格的に開始される。先鞭をつけたのは、元来ロンバルディア史を専門とするドメニコ・セッラ（Domenico Sella, 1926-2012）である。セッラは 1950 年代から一貫して、17 世紀ヴェネツィアの海上交易の縮小をヴェネツィア経済全体の衰退ではなく、方向転換と評価してきた[16]。セッラによれば、確かに 17 世紀にヴェネツィア港を出入りする船舶はヴェネツ

---

[13] E.J. Hobsbawm (1954), "General Crisis of the European Economy in the 17th Century", *Past and Present,* 5, (E.J.ホブズボーム（今井博編訳）「十七世紀におけるヨーロッパ経済の全般的危機」『十七世紀危機論争』創文社、1975 年、4-5 頁)。

[14] *Aspetti e cause della decadenza economica veneziana nel secolo XVII (* atti del convegno 27 giugno, 2 luglio 1957 Venezia, isola di San Giorgio Maggiore) Istituto per la collaborazione culturale, 1961.

[15] Ömel Lutfî Barkan(1975), "The Price Revolution of the sixteenth century: a turning point in the the economic history of the Near East", *International Journal of the Middle Eastern Studies*, 6, pp.3-28.

[16] Domenico Sella (1957), "Les mouvements longs de l'industrie lainière à Venise aux XVIème et XVIIème siècle", *Annales: Économies, Sociétes, Civilisations,* XII, translated in English by the author, "The Rise and Fall of Venetian Woolen Industry", *Crisis and change in the Venetian economy in the*

ィアよりも北西欧諸国の船舶が優勢となっていく一方で、ヴェネツィア港の取扱貨物量自体は、17 世紀初頭に一時落ち込むものの回復は早く、世紀を通じておおむね高い水準が保たれた。さらにセッラは、ヴェネツィア船による海上輸送の縮小は直ちにヴェネツィア経済の衰退を示すものではなく、16 世紀後半以降にヴェネツィア経済の質的変化が生じ、海上輸送業に変わって輸出向け奢侈品製造業と農業が成長して、これらの産業を梃子に急激な経済衰退をある程度まで回避し、世紀後半には多少とも上向きに転じていたと論じている。

セッラは 17 世紀北イタリア経済再編成の鍵として、輸出向け奢侈品製造業に注目した。ヴェネツィアでは 16 世紀後半から急成長した毛織物製造業、17 世紀初頭以降は毛織物製造業にかわって絹関連産業がヴェネツィアの製造業の中心的存在となった。絹産業はヴェネツィア市内の絹織物製造業のみならず、大陸領土における桑栽培、養蚕業、絹撚糸製造業、絹織物製造業を含み、中世以来の東地中海地域からの生糸輸入と再輸出業も継続していたことから、いわばヴェネツィア共和国全土をあげて絹産業に参入していたといえる。同時代、ヴェネツィアの貴族層による大陸領土の土地に対する投資が盛んにおこなわれたが、それも単なる「再封建的化」ではなく、むしろこのような桑栽培や養蚕を含む商品作物栽培を目的としたものと捉えている。この他には、厳密には奢侈品製造業の範疇に入らないが、印刷出版業、ガラス製造業も成長した。

セッラの問題提起をうけて、1980 年代以降サルヴァトーレ・チリアコノ(1945-)、ルカ・モラらによって、主に大陸領土の養蚕と絹撚糸製造業、そしてヴェネツィア市内の絹織物製造業の二分野に関連した実証研究が本格し、現在では 17 世紀に関してはおおむねセッラが提示した歴史観が主流となっている[17]。

近年では、17 世紀における輸出向け奢侈品製造の成功は、ヴェネツィアのみならず北イタリア各地における 17 世紀の経済に対する再評価を促す重要なキーワードとなっている。セッラは『17 世紀のイタリア』（ロングマン社イタリア史シリーズ、1997 年）のなかで、ヴェネツィアやフィレンツェの絹織物製造、ピエモンテの毛織物製造、ヴェネト、トスカーナ、アブルッツォの絹撚糸製造、クレモナのヴァイオリン制作、ムラーノ島（ヴ

---

sixteenth and seventeenth centuries, edited with an introduction by Brian Pullan, Methuen, 1968, pp.106-126; Id. (1959) “Il declino dell’emporio realtino”, *La civiltà Veneziana nell’età barocca*, Sansoni (translated in English by author “Crirsis and Transformation in Venetian Trade”, *Crisis and change in the Venetian economy*).; Carlo Livi, Domenico Sella, Ugo Tucci (1961), “Un problème d’histoire: la décadence économique de Venise “, *Aspetti e cause della decadenza economica veneziana nel secolo XVII*, *(* atti del convegno 27 giugno, 2 luglio 1957, Venezia, isola di San Giorgio Maggiore) Istituto per la collaborazione culturale.; Domenico Sella (1961), *Commerci e industrie a Venezia nel secolo XVII,* Venezia & Roma.

[17] D. Sella (1994), “L’economia”, *Storia di Venezia*, VI, Roma; Claudio Pezzolo (1997), “L’economia”, *Storia di Venezia,* VII, Roma.; Salvatore Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy in the XVII Century: Two Models Compared,” *The Journal of European Economic History,* X, pp. 167-199. ほか、チリアコノの著作は末尾の参考文献一覧を参照。Luca Molà (2000), *The Silk Textile Industry of Renaissance Venice*, Johns Hopkins Univ. Press; *At the Centre of the Old World: Trade and Manufacturing in Venice and the Venetian Mainland, 1400-1800,* edited by Paola Lanaro, Centre for Reformation and Renaissance Studies, Toronto, 2006.

ェネツィア）のガラス製造、リグーリアやロンバルディアでの武器製造などを列挙している[18]。

実は 17 世紀地中海地域内経済を再考する手がかりが、このイタリアにおける輸出向け奢侈品製造業の成長にある。なぜならばセッラとそれに続く一連の近世ヴェネツィア絹産業史研究において、ヴェネツィア市内で製造された高級絹織物の主な販売先はオスマン帝国であったと繰り替えし示唆されてきたからである[19]。

ヴェネツィア市内の絹織物製造業は 17、18 世紀を通じて金銀糸を用いた豪華な絹織物を主とした高級化が進み、この種の高級品の製造はある程度まで生産量を維持していた[20]。一方でオスマン帝国の宮廷を中心とした重厚で高価な絹織物に対する富裕層の好みは、近世を通じて維持された。ヴェネツィア市内の絹織物製造業は、オスマン帝国市場の好みに対応したと考えられたのである。

中世以来の地中海海上交易ではなく、奢侈品の製造地と消費地という新たなかたちでヴェネツィアと東地中海地域の経済的結びつきを捉える一連の主張は、近世においても地中海地域内商業圏が継続していたことを示しているようにみえる。問題は、セッラをはじめとする研究は主に製造業分野の史料に依拠しており、絹織物の輸出に関してはほとんど実証分析をおこなっていないことである。

絹織物輸出に関してセッラは、消去法のかたちで、フランスやイギリス市場は自国製造業の発展と保護貿易が進んでヴェネツィアの輸出が次第に減少し、ドイツ市場も三十年戦争の惨禍で荒廃した結果、オスマン帝国市場のみがヴェネツィア製絹織物の市場として残ったと論じている。金銀糸入りのヴェネツィア製高級絹織物がオスマン帝国市場で人気を博したとする叙述史料（旅行記等）が挙げられているが、正確な輸出量は不明である。
オスマン帝国市場におけるヴェネツィア製絹織物需要の理由としてセッラは、①他のイタリア絹織物生産地の衰退（特にフィレンツェとルッカ）、②ヴェネツィア製絹織物は太番手の金銀糸を使用し、高価というよりも派手であり、宮廷や高官さらに富裕層も魅了した（サヴァリー『完全なる商人』を引用）の 2 点を挙げている。1980 年代以降、大陸領土を含むヴェネツィアの絹産業に関して、サルヴァトーレ・チリアコノ、ルカ・モラをはじめ多くの研究成果が発表されているが、分析の中心は主として絹撚糸など製造分野におかれ、ヴェネツィア製高級絹織物の販売先については、主にオスマン帝国であるとしたセッラの研究が繰り返し引用されているだけである。

---

[18] Domenico Sella (1979)、*Crisis and continuity：the economy of Spanish Lombardy in the seventeenth century*, Cambridge, Mass.; Id. (1997), *Italy in the Seventeenth Century*, London & New York, pp.41ff.
[19] Domenico Sella (1961), *Commerci e industrie a Venezia nel secolo XVII,* Venezia & Roma; S. Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy",pp.194-195.; Luca Molà (2000), *The Silk Textile Industry of Renaissance Venice*, Johns Hopkins Univ. Press, pp.302-3.
[20] D. Sella (1961), *Commerci e industrie a Venezia nel secolo XVII,* Appendice F；pp.Marcello Della Valentina (2006), "The Silk Industry in Venice, Guilds and Labour Relations in the Seventeenth Century and Eighteenth Century", *At the Centre of the Old World: Trade and Manufacturing in Venice and the Venetian Mainland, 1400-1800,* edited by Paola Lanaro, Centre for Reformation and Renaissance Studies, Toronto, pp.110ff.。一方で大陸領土の絹織物製造業は、主として薄手の比較的安価な織物やリボン製造の方向で成長した。

既にトスカーナ史研究では、15 世紀の毛織物製造業、16 世紀以降の絹織物製造業の成長はイスタンブルを中心としたオスマン帝国市場での成功にあったことが、星野秀利[21]、鴨野洋一郎[22]らによって実証されている。トスカーナの毛織物および絹織物関連産業もまた、ヴェネツィアの絹織物産業と同様、16 世紀後半以降に輸出向け奢侈品製造業として成功した事例のひとつである。したがって、ヴェネツィア絹織物製造業と東地中海（オスマン帝国）市場の関係が実証されれば、単なる二者の関係を越えて、より広い視野で近世の地中海地域内交易圏の存在を提示する可能性があると考えられる。

オスマン帝国史研究に目を向けると、近世交易史に関してはこれまでもっぱらオスマン帝国とイギリス、オランダ、フランスなどの北西欧国家との関係が分析の中心となってきた[23]。イタリアとオスマン帝国の関係を分析したものは、ヴェネツィアとのクレタ戦争（1645－69 年）などを除くと非常に少なく、もっぱらこれら新興国家に押しやられた存在として言及されてきた[24]。

しかし広大なオスマン帝国の事情は、地域のよって異なる様相を示すことが少なくない。たとえばオスマン帝国社会経済史研究者のスライヤ・ファローキー(Suraiya Faroqhi)は、オスマン帝国関連史料の分析をもとに、17 世紀のアレッポやバルカンを事例としてとりあげ、ヴェネツィア商人の活動を分析している。ファローキーによれば、地方では、イスタンブルの中央政府のみならず地元役人の意向も強く働き、結果としてヴェネツィア商人は特にアレッポの生糸取引市場において、徐々に相対的地位低下はあったものの、17 世紀前半はかなりの程度まで商取引のレベルを維持していた[25]。

---

21 Hidetoshi Hoshino (1980), *L'arte della lana in Firenze nel basso Medioevo*, Firenze（星野秀利『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』齊藤寛海訳、名古屋大学出版会、1995 年）；H.Hoshino & M.F.Mazzaoui (1985/86), “Ottoman markets for Florentine eoolen cloth in the late fifteenth century”, *The International Journal of Turkish Studies*, 3-2, pp.17-31.; H.Hoshino (1984), “Il commercio fiorentino nell’impero ottomano：costi e profiti negli anni 1484-1488”, *Aspetti della vita economica medievale, Atti del convegno di studi nel Xe anniversario dellamorte di Federigo Melis*, Firenze, 1984, pp.81-90.;
Id. (1985/86), “Alcuni aspetti del commercio dei panni fiorentini nell’impero ottomano ai primi del ‘500”, *Annuario dell’Istituto Giapponese di Cultura* (Roma), XXI, pp.7-19.; Id. (2001), *Industria tessile e commercio internazionale nella Firenze del tardo Medioevo*, Firenze.

22 鴨野洋一郎(2010)「1500 年前後のフィレンツェ絹織物工業と国際市場--セッリストーリ金箔会社の経営記録から」『西洋中世研究 』 (2), 141-160 頁 ；同（2011）「15-16 世紀におけるフィレンツェ・オスマン関係と貿易枠組み」 (特集 オスマン帝国史の諸問題--世界秩序と国際関係)『 東洋文化』 (91), 25-45 頁

23 Ralph Davis (1967), *Aleppo and Devonshire Square：English traders in the Levant in the eighteenth century*, Macmillan.; Bruce Masters (1988), *The origins of western economic dominance in the Middle East：mercantilism and the Islamic economy in Aleppo, 1600-1750,* New York University Press.; Daniel Goffman (1990), *Izmir and the Levantine World, 1550-1650*, University of Washington Press.; Id., (1998), *Britons in the Ottoman Empire, 1642-166*0, University of Washington Press.; Edhem Eldem (1999), *French trade in Istanbul in the eighteenth century*, Brill.; *Friends and rivals in the East：studies in Anglo-Dutch relations in the Levant from the seventeenth to the early nineteenth century*, edited by Alastair Hamilton, Alexander H. de Groot, Maurits H. van den Boogert, Brill, 2000. マルセイユ諸港会議所が独占的に進めたフランスのレヴァント商業は、北西欧諸国の活動の一例であるとともに、その地理的関係から地中海地域内交易ととらえることもできる。マルセイユとアレッポの交易に関しては、Katsumi Fukasawa (1987), *Toilerie et commerce du Levant：d'Alep à Marseill*e, Editions du Centre national de la recherche scientifique.: 深沢克己（2007）『商人と更紗 ： 近世フランス=レヴァント貿易史研究』東京大学出版会、を参照。

24 Benjamim Braude (1979), "International Conpetition and Domestic Cloth in the Ottoman Empire, 1500-1650: A Study in Underdevelopment", *Review,* II,3, pp.437-451.

25 Suraiya Faroqhi (1987), “The Venetian Presence in the Ottoman Empire, 1600-30”, *The Ottoman Empire and the World Economy,* Hali İslamoğlu-İnan (ed.), Cambridge, pp.311-344.

2006 年にイタリアのプラートにおいて「13 世紀から 18 世紀におけるヨーロッパと経済関係」と題された大規模なシンポジウムが開催された。主催者のダティーニ財団は、長年にわたり中世イタリア経済史研究の中心的存在のひとつで、毎年社会経済史関連のシンポジウムを開催している。こうした開催地・主催者の影響もあり、報告の大半は中世後期から 16 世紀にかけての地中海を挟んだ南ヨーロッパとイスラーム世界の交流に関するものであった。しかし数は少ないが、近世分野でも、たとえば Rossitsa Gradeva は 17-18 世紀のソフィアでヴェネツィアの絹織物が高級品として高い需要を維持していたことを報告しており、近世においても絹織物交易を介してイタリアと東地中海が結びついていたことが提示されている[26]。

またアナトリアのブルサ絹織物製造業および生糸取引市場に関する研究でも、絹織物および絹産業を介したイタリアとオスマン帝国の結びつきの深さが示唆されている。ブルサは 16 世紀なかばまでオスマン帝国第一の高級絹織物製造地であり、生糸取引市場としても、17 世紀後半にイズミルにその地位を譲るまでアナトリアにおける首位を維持した。

1960 年代から 70 年代にかけて発表されたファフリ・ダルサール(Fahri Dalsar)やムラト・チザクチャ(Murat Çizakça)の研究によれば、ヴェネツィアなどイタリア製絹織物がオスマン帝国に大量に輸入された結果、17 世紀以降ブルサ絹織物製造業が衰退した。またイタリア商人がブルサ市場で活発な生糸買い付けを行った結果原料の高騰を招き、これもブルサの衰退につながったと論じた。しかしこれらの研究は主にオスマン帝国の製造業に関する史料に依拠しており、イタリアからオスマン帝国への絹織物輸入量などを示す史料もこれまで見つかっていないことなどから、その影響を示唆するに留まっている[27]。

絹織物を介した近世イタリアとオスマン帝国の深い関係は、近年の染織史研究においても指摘されている。かつての染織史研究では、紋様（デザイン）がオスマン風であれば、すなわちオスマン帝国で製造されたものと判断されていた。しかし 1990 年代以降、染織史研究における科学的分析（生糸や染料の成分分析、織組織の構造解明等）の成果が目覚ましく、トプカプ宮殿に残るスルタン一族の衣装の調査などをもとに、ヴェネツィアを含むイタリア製絹織物が宮廷を中心に相当程度使用されていたことが判明している[28]。

---

[26] Rossitsa Gradeva (2007) “On ‘Frank’ Objects in Everyday Life in Ottoman Balkans, the Case of Sofia, Mid-17th – mid 18th Centuries”, *Relazioni economiche tra Europa e mondo islamico secc. XIII-XVIII (Europe's economic relations with the Islamic world 13th-18th centuries)*(Atti della Trentottesima Settimana di Studi 1-5 maggio 2006), a cura di Simonetta Cavaciocchi, Fondazione Istituto Internazionale di Storia Economica “ F. Datini”, Prato, vol.1, Le Monnier, pp.769-799.

[27] Fahri Dalsar (1960), *Türk Sanayı ve Ticaret Tarihinde Bursa'da İpekçilik*, İstanbul.; Murat Çizakça (1978), *Sixteenth -Seventeenth Century Inflation and the Bursa Silk Industry: A Pattern for Ottoman Industrial Decline?,* Ph.D. Thesis, University of Pennsylvania ; Id., (1980), "Price History and the Bursa Silk Industry : A Study in Ottoman Industrial Decline, 1550-1650", *The Journal of Economic History*, XL(3), pp.533-550.; Id., (1983), "A short history of the Bursa silk industry (1500-1900)", *Journal of the Economics and Social History of the Orient,* XXIII, pp.142-152.

[28] “Italian silks for the Ottoman market”, *İpek, The Crescent and the Rose, Imperial Ottoman Silks and Velvets,* Julian Raby & Alison Effeny (eds.), London, 2001, pp.182-190.; Louise W. Mackie (2001), “Italian Silks for the Ottoman Sultans”, *Electronic Journal of Oriental Studies*, IV (M. Kiel, L Landman & H. Theunisse (eds.), (*Proceedings of the 11th International Congress of Turkish Art*, Utrecht- The Netherlands, August 23-28, 1999), No.31, pp.1-21.; Louise W. Mackie (2004), “Ottoman *kaftans* with an Italian identity”, *Ottoman Costumes, From Textile to Identity,* S.Faroqhi & C.K.Neumann(eds.,),

また従来の研究では、オスマン帝国における製絹織物製造の最盛期は 16 世紀と考えられていたが、近年では、17 世紀に最高級品の製造の中心がブルサからイスタンブルにほぼ移行し、一方でブルサ周辺で桑栽培と養蚕・絹撚糸製造業が軌道に乗ったことから、むしろ 17 世紀を最盛期とする見方が優勢となりつつある。

現在クリーヴランド美術館でイスラーム染織部門の学芸員を務めるルイーゼ・マッキー(Louise W. Mackie)によると、宮廷をはじめとするオスマン帝国の富裕層の間で主に使用されたのは、セラーセル（金糸織り）[29]、ヴェルヴェット、ケムハーなどの紋織りの 3 種類であったが、トプカプ宮殿に残る 325 点のカフタン（長衣）のうち、約 24 点がイタリア製のヴェルヴェットであることが判明している[30]。

マッキーはイタリア製絹織物がオスマン帝国市場で成功した背景として、フローレンス・デ・ルーヴァー（Florence Edler De Roover）などの研究を引用して、フィレンツェなどイタリアの絹織物製造業者の努力を挙げている。特にオスマン帝国市場向けの輸出用絹織物は、国内やヨーロッパ向けの製品とはデザインが異なっていたことを、残存する絹織物など現物史料を挙げて指摘している。しかし絹織物など現物史料の提示は説得力がある一方で、たとえばイタリア製絹織物の輸入の実態に関して、史料分析に基づいた数値は提示されていない。

以上 17 世紀のイタリアと東地中海地域との交易に関する研究史を、ヴェネツィアとオスマン帝国の関係を事例に概観した。その結果、これまで見過ごされてきた近世の地中海地域内交易の存在が、絹織物を介したイタリアの奢侈品製造とオスマン帝国市場という関係のなかにおぼろげながらも見出されることがわかった。一方でいくつかの問題点が浮上してくるが、それらは概ね以下のように整理される。

第一には、絹関連産業史の分析は、17 世紀地中海地域の経済史を再評価するなかで大きな役割を果たしたが、イタリアとオスマン帝国のどちらも、これまでもっぱら製造業分野を中心に分析が進められてきたことである。その結果、技術や製造に関する研究が一定の成果を積み重ねている一方で、販売・消費市場に関しては実証的な分析が乏しい。たとえばヴェネツィア製絹織物がオスマン帝国に相当量輸出されていたことは、ほとんど叙述史料に基づく示唆に留まっている。

第二には、地域間の研究の相互交流の欠如である。前述のように 1960-70 年代にかけて開催されたシンポジウムでは、中世後期を中心に、交易をはじめとする地中海地域内の交流の諸相が積極的に提示されてきた。一方で 17 世紀に関しては、当初より地域内交易圏の衰退は自明のこととされてきた。20 世紀末にかけてイタリアやオスマン帝国の 17 世紀経済が再考される過程でも、地中海地域内の関係は示唆されつつも、積極的に研究の枠組

Istanbul, pp.219-229.; ヒュルヤ・テズジャン（1980)、「スルタンの衣裳とトルコの織物」『トプカプ宮殿博物館　スルタンの衣裳』森雅夫監修、トプカプ宮殿博物館全集刊行会.

[29] セラーセルはイスタンブルの宮廷内工房および許可を受けた私営工房でのみ製造されることが許可されていた。セラーセル他、オスマン帝国市場で流通していた絹織物については、本論文第 2 章を参照。

[30] Louise W. Mackie (2004), “Ottoman *kaftans* with an Italian identity”, *Ottoman Costumes, From Textile to Identity,* S.Faroqhi & C.K.Neumann(eds.,), Istanbul, pp.219-229.

みを超えて相互の結びつきを見出そうとする努力がはらわれることなく過ぎてきたのである。

しかし、地中海地域の交流の歴史を再考する機運が現在も全くないという訳ではない。特に最近の約 10 年間、前述のプラートのシンポジウム（2006 年）をはじめとして、イスラーム世界とキリスト教ヨーロッパの歴史上の交流の諸相をテーマとする文献の出版やシンポジウムの開催が、1960 年代・70 年代ほどの規模ではないが、多少とも増加する傾向にある[31]。これは「9.11」やイラク戦争など近年の現代世界における不幸な対立を目の当たりにして、あらためて両者の共存・交流の歴史を問い直す歴史研究者の姿勢の現れとも考えられる。これらの研究からは、一国の首都に限定されず地方都市や島などローカルなレベルに分析が進展していること、商人その他交流や対立に関係する「人」（および人間集団）の分析が進んでいることが伺える[32]。

しかしその一方で、経済史的な分析は進展しているとは言い難い。その背景には、依拠すべき史料の伝存状況や、文化圏による史料の性質の違いも影響していると考えられる。そこで以下では、ヴェネツィアとオスマン帝国の史料状況について概観し、続いて本論文の課題を提示する。

---

[31] 本論文に関連するものとして、たとえば Eric R. Dursteler (2006), *Venetians in Constantinople：nation, identity, and coexistence in the early modern Mediterranean*, Johns Hopkins University Press .; *Venice and the Islamic world 828-1797,* Metropolitan Museum of Art , Yale University Press, 2007; *Merchants in the Ottoman Empire*, Suraiya Faroqhi, Gilles Veinstein (eds.), Peeters, Leuven, 2008; *Trade and Cultural Exchange in the Early Modern Mediterranean, Braudel's Maritime Legacy,* Maria Fusaro, Colin Heywood, Mohamed-Salah Omri (eds.), Tauris, N.Y., 2010.

[32] 古代から近現代に至る地中海地域研究を集成したものとして、日本では以下のシリーズがある。歴史学研究会編『地中海世界史』全 5 巻、青木書店、1999-2003 年。

Ⅲ．史料について

ヴェネツィアとオスマン帝国の交易関係を実証的に分析するにあたり、当然のことながら、双方の史料を突き合わせることによって、より明確な歴史像の提示が可能となる。しかし、元来オスマン帝国とヴェネツィア、広義にはイスラーム世界とイタリアでは、国家の制度や政策が全く異なり、また商業慣行にも大きな相違があった。広い意味での文化的な違いが、作成・保管された史料の相違を生んだのである。

前項で述べたように、近世のオスマン帝国とヴェネツィアとの経済的結びつきに関して、その重要性が指摘されながらも経済史分野での研究が進んでいない理由の一つに、こうした伝存史料の問題もあると考えらえる。

中世後期以来、北イタリア諸都市では、帳簿や契約書など個々の商人の取引を記録した史料が大量に作成・保管された。記録作成と保管の目的は、当初は裁判における証拠であったと考えられている。

ヴェネツィアでも、中世後期以来の商人文書が多数伝存する。しかしヴェネツィアでは中世後期から共和国末期まで個人経営の形態が維持され、その結果、商業関係史料の大半は基本的に個人単位で作成され、伝存も系統立てて行なわれていない。この点で、近世になると主に国家に認可を受けた特許会社のもとでレヴァント（東地中海地域）やアジアとの海外貿易が営まれ、結果としてまとまった形で史料が残されたイギリス、オランダ、フランスなどの北ヨーロッパ諸国と異なり、商業関係史料の伝存はかなり散発的であると言わざるをえない[33]。

またヴェネツィアでは、主に航海毎に共同出資を清算する航海勘定によって取引がおこなわれた。これによりヴェネツィアでは、フィレンツェにおける会社組織のように、長期間にわたって取引に関する史料が作成・保管されることは少なかった。

一方、前近代のイスラーム世界に関しては、商取引に関連する史料の伝存例は少ない。例えばオスマン帝国では、広い領土を支配管理するため膨大な文書および帳簿が作成され、伝存する史料（文書および帳簿）は、現在トルコ共和国に所蔵されるものだけでも 1 億点以上（大半は 19 世紀後半以降に作成されたもの）にのぼる。オスマン朝アーカイブにおいても、伝存する帳簿類のうち、国家財政関連などの膨大な公文書にひきかえ、商取引など私文書の現物の伝存例は極めて希少である[34]。

---

[33] 国立ヴェネツィア文書館の史料については以下を参照。*Archivio di stato di Venezia* (Guida Generale degli Archivi di Stato Italiani, vol.IV), Roma, 1994.

[34] オスマン帝国の史料伝存状況については以下を参照。高松洋一（2004）「オスマン帝国における文書・帳簿の作成と保存　―18 世紀から 19 世紀初頭を中心に」『東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」』、106-126 頁；『イラン式簿記術の発展と展開：イラン、マムルーク朝、オスマン朝下で作成された理論書と帳簿』高松洋一編、共同利用・共同拠点イスラーム地域研究拠点、2011 年；『比較史のアジア　所有・契約・市場・公正』三浦徹・岸本美緒・関本照夫編（イスラーム地域研究叢書④）、東京大学出版会、2004 年；『記憶と表象　史料が語るイスラーム世界』林佳世子・桝屋友子編（同⑧）、東京大学出版会、2005 年；三浦徹（2003）「中東・イスラム世界にみる法廷の契約と当事者の合意」『日本中東学会年報』（19-1）、45-74 頁。

こうした史料の伝存状況には、イスラーム世界における商業慣行の影響が大きいと考えられている。イスラーム法では、売買において証人の立会や文書契約は、推奨されるが義務ではないと解釈されている。また売買取引では双務性・同時性が法的要件とされ、申し込みと承諾の後、(少なくとも理念的には) 品物と代金が相互に授受されて完了するため、動産の売買は通常口頭の契約で済まされた。契約は当事者双方の合意の上でなされるので文書契約は必須ではなく、諸経費を負担してカーディー（イスラーム法官）が主催するイスラーム法廷に登記する必要もないと考えられていたのである（契約の効力が当事者以外の家族、親族、子孫に関わり、永続性を持つ不動産の移転や相続、債権債務、婚姻などの家族関係は、しばしば法廷に登記された)。

さらにイスラーム法廷では、当事者と証人による証言が証拠として採用され、文書は副次的なものとみなされた。つまり、司法制度上も契約書や帳簿などの役割が非常に小さかったため、商取引に関わる文書の作成や保存は重要視されなかったといえよう。またイスラーム世界の特徴として、数代にわたって存続する商人家系がほとんど見られないことも、文書の保存状況に相当の影響を与えていると考えられる。こうした商業慣行により、イスラーム世界では、ムスリムによる商取引なかでも動産の売買に関する契約書の伝存は特に少ないという状況が生じたのである。

しかし当然のことながら、イスラーム世界の商取引はムスリムのみが関与したのではない。ユダヤ教徒やキリスト教徒、アルメニア教徒などもイスラーム法の保護のもとで活発な商業活動を行った。イスラーム世界では、商取引の相手を選ぶ際に宗教の違いが直ちに障害となることはほとんどなかった。たとえばユダヤ教徒が作成した、数十万点に上る「カイロ・ゲニザ文書」には、11 世紀を中心にムスリムも含めた商取引の記録が多く含まれており、非ムスリムの記録からイスラーム世界の商取引の実態を解明することは十分可能である[35]。

国家全体に目を向けると、オスマン帝国は財政重視の国家であり国家財政に関する帳簿類が伝存している（ただし 19 世紀中葉以前の伝存例は少ない)。しかし国土も広大であったことから中央（イスタンブル）に残る帳簿の記載内容はほとんど合計・総計で記入され、大半は細目不明である。一方で地方に関する伝存例は、中央に比較すると一般に少ない。

このようにヴェネツィアとオスマン帝国では、主に商業慣行の違いから伝存する史料の性格の違いが大きく、両者の交易関係を分析する際には、もっぱら断片的で性格の異なる史料を突き合わせざるをえない。しかしこうした史料の性格の違いは、必ずしも乗り越えられない障壁ではない。近年では史料の性格の違い、さらには歴史学の地域的枠組みを乗り越えた社会経済の比較も試みられている。たとえばオスマン帝国史に関しては、シェヴ

---

[35] ゲニザ文書分析に基づく研究として Shlomo Dov Goitein, *A Mediterranean society：the Jewish communities of the Arab world as portrayed in the documents of the Cairo Geniza*, University of California Press, 6 volls., 1967-1993 のうち、特に第 5 巻 *Economic foundations*(1967) に商取引の情報が多い。ゲニザ文書の分析は現在も続いている。商業に関係するものでは Jessica L. Goldberg (2012), *Trade and Institutions in the Medieval Mediterranean. The Geniza Merchants and their Business World,* Cambridge Univ. Press を参照。

ケト・パムク（Şevket Pamuk）の研究が挙げられる。パムクは公定価格台帳等の公的史料および宗教施設等の私的史料を組織的に大量収集・分析し、500 年にわたるイスタンブルおよび主要都市の物価（主として日用品）及び賃金の動向を提示した[36]。パムクの成果によって、近世から近代におけるヨーロッパとオスマン帝国の社会経済を比較分析する新たな道が開かれたといえよう[37]。

本論文では、主として第 2 章でオスマン帝国の史料、第 3 章でヴェネツィアの史料に依拠して分析をおこない、史料の性格の違いに留意しつつ、各章の分析結果を突き合わせて両者の交易関係を検討する。以下では、本論文で利用する史料について概観する。

（1）オスマン帝国の公定価格（ナルフ）台帳

第 2 章では、17 世紀前半にイスタンブルとブルサの市場に対して作成されたナルフ台帳(*Narh Defteri*)を分析の対象とする。本論文では、トルコ史家キュチュクオウルが編纂校訂し現代トルコ語に転写して刊行した、イスタンブル向けナルフ台帳（1600 年、1640 年）[38]と、ブルサ向けナルフ台帳（1624 年）[39]の計 3 点を用いる。

ナルフとは、政府当局によって様々な商品に対して定められた最高価格を示すオスマン・トルコ語である。ナルフ台帳を分析の対象とする理由は、第一にオスマン帝国の繊維製品に関する史料状況にある。オスマン帝国では、繊維製品の価格を記した史料は大部分が断片的なものに留まっており、現況では、比較的まとまった形で記録が残されているのは、ほぼナルフ台帳のみである[40]。したがって同台帳は、現在のところオスマン帝国における織物価格の情報を得る、最も有用な史料であるといえよう。

イスラーム法では、売買は双方の合意によって行われ、価格に関する国家の介入は非常事態に限られる。しかしオスマン帝国政府は、臣民の生活を保護するため、ナルフ制度を非常に重要視していた[41]。ナルフの作成は、職人の代表やムフテシブ（市場監督官）の助言に従って、カーディー（イスラーム法官）の監督下でおこなわれた。様々な原材料から作られる製品の価格は、全ての材料代を計算し、それに 10～20%の労賃と利潤を足して

---

[36] Şevket Pamuk (2000a), *A Monetary History of the Ottoman Empire*, Cambridge Univ. Press.; Id. (2000b), *İstanbul ve Diğer Kentlerde 500 Yıllık Fiyatlar ve Ücretler, 1469-1914* [500 Years of Prices and Wages in Istanbul and Other Cities], Ankara, State Institute of Statistics of Turkey.; Id.(2001), "The Price Revolution in the Ottoman Empire Reconsidered", *International Journal of Middle East Studies*, 33-1, pp. 69-89.;

[37] Süleyman Özmucur, Şevket Pamuk (2002), "Real Wages And Standards Of Living In The Ottoman Empire, 1489-1914", *The Journal of Economic History*, 62-02, pp.293-321.

[38] Mubahat Kütükoğlu（1978）"1009/1600 Tarihli Narh Defterine göre İstanbul'da Çeşitli Eşya ve Hizmet Fiatları"（「1009/1600 年付けナルフ台帳によるイスタンブルにおける諸物資の価格と賃金」）, *Tarih Enstitüsü*, 9.; Id. (1983), *Osmanlılarda Narf Müessesesi ve 1640 Tarihli Narh Defteri*,（『オスマン朝におけるナルフ制度と 1640 年付けナルフ台帳』）,İstanbul.

[39] Id.,(1984), "1624 sikke tashihinin ardından hazırlanan narh defterleri",（「1624 年の貨幣改正の後作成されたナルフ台帳」）*Tarih Dergisi*, 34。同台帳には、イスタンブル、バルケスィール、ブルサ、テキルダーの市場に対するナルフ価格が記載されているが、このなかで繊維製品価格に言及しているのは、ブルサの部分だけであることから、本論文ではブルサのみを分析の対象とする。

[40] Özmucur and Pamuk (2002), "Real Wages and Standards of Living in the Ottoman Empire, 1489-1914", *The Journal of Economic History,* 62/2, pp.299, 302.

[41] ナルフ制度に関する基本的な情報は、以下を参照。"*Narkh*", *Encyclopaedia of Islam,* 2nd ver., vol.VII, pp.964-965.

決められる。決められた価格は、カーディーの台帳に記載され、引き続いて職人に布告された。また布告人を通じて民衆にも公表されていた。イスタンブル以外の場所では、町のアーヤーンやエシュラーフ（ともに名士層のこと）も、ナルフの決定と管理に参画した。その際、イスタンブルのナルフ価格が、物価の目安として、地方都市に送られていたと考えられている。

ナルフはほとんどあらゆる商品が対象となっていたが、なかでも食料や靴、そしていくつかの日用品に関して、最も細かい注意が払われ、たとえば、食料に関するナルフ価格は通常季節ごとに変わった[42]。澤井によれば、食品や日用品のナルフ価格に関しては、ナルフ台帳だけではなく、ミュヒンメ・デフテル（御前会議議事録）やカーヌーンナーメ（布告）で頻繁に言及されている[43]。

このように食料価格が様々な法令で言及されている一方で、ナルフ台帳そのものの作成は、必ずしも定期的ではなかった。なぜならナルフ台帳は、主に日用品、中でも食料価格が急騰あるいは急落した時や、貨幣市場が不安定な時期に作成されたからである。そうした非常事態の背景には、戦争や不作など都市への供給に支障をきたすような事件、そして貨幣改悪や貨幣改革による貨幣価値の動揺などがあった[44]。パムクによれば、ナルフ台帳が最も頻繁に作成されたのは、1585 年—1640 年、1785 年—1840 年の時期である[45]。これらの時期は、共に貨幣と物価の不安定期であった。17 世紀前半では、1600 年、1618 年、1624 年そして 1640 年に貨幣改悪がおこなわれ、続いてナルフ台帳が作成されている。
当然のことながら、分析に当たっては、価格に関する歴史史料としてのナルフ台帳の根本的な問題点を看過するわけにはいかない。第一の問題点は、ナルフ台帳に記載された価格は公的に定められたもの、つまり公定価格であるので、それが常に市場価格と一致するとは限らないことである。

また一般的に、絹織物のような高付加価値商品（奢侈品）には、いわゆる一物一価の法則が適応しない場合が少なくないことも、留意しておかなければならないだろう。

加えて、繊維製品の場合は、他の商品に比べて残存する織物および史料中の名称の両方において非常に種類が多いということも、製品の質と価格の関係に複雑な要素を持ち込んでいる。つまり、史料に見られる名称から織物の種類や質を的確に判断することが相当に困難、もしくは不可能である場合が少なくないのである[46]。

さらに、高価な絹織物のような商品は、常に市場の店舗で取引されるわけではないという問題もある。なぜなら、そうした商品は、オスマン帝国の上層の人々を主な顧客としていることが推測され、したがって宮廷、高級官僚の館、外国大使や商人の住居などの、あらゆる私的な場でも取引されうるからだ。実際、本論文第 3 章でみるように、ヴェネツィ

---

42 "*Narkh*", *EI,* 2nd ver., vol.VII, pp.964-965.
43 澤井一彰 (2002)「16、17 世紀イスタンブルにおける公定価格制度」,『オリエント』45(2)号,75-92 頁。
44 Ş. Pamuk (2000), *A Monetary History of the Ottoman Empire,* Cambridge Univ. Press, pp.14-15.
45 Ibid., p.15, note 46.
46 Ş.パムク教授からは、オスマン帝国における繊維製品の価格の問題、特に史料中の用語の複雑さについて、直接貴重なアドヴァイスをいただいた。.

ア商人がオスマン宮廷で絹織物を売り込んだり、スルタンや高級官僚がヴェネツィアへ直接注文している事例も見られる。

つまり、ナルフ台帳に記録された絹織物の価格は、あくまでも目安であるうえに、日用品に比べて市場における価格との乖離の幅が小さくなかったことが想定されうる。しかも、文書史料中の名称を見ても、それがどのような製品であったのか判断できない場合も少なからずあるのだ。

その一方で、ナルフ制定の過程で職人の長が加わっていたことなどを考慮すると、市場の状況が、ある程度までナルフ価格に反映されていたと考えることができる。たとえばパムクは、ワクフ（宗教寄進）施設の帳簿、トプカプ宮殿の厨房の帳簿、ナルフ台帳、の 3 種類、合わせて約 3000 点という膨大な数の史料分析をもとに、1469 年から 1998 年までのイスタンブルおよびその他の（旧）オスマン帝国の都市の消費者物価指数を計算している[47]。分析の中心は日用品であるが、データが不足ないし不確実なため除外した商品についても、おおよそのトレンドを提示している。パムクの研究では織物は非日用品に含まれるが、パムクによれば、上記 3 種類の史料から得られる織物価格の数値は、断片的ではあるが、おおむね近似した動向を示している[48]。

したがって、ナルフ台帳の数字は、一次史料として扱うに際して、市場価格との乖離は分析の方向を大きく左右する重大な問題とはならないと推測され、ナルフ台帳を用いた消費の分析の有効性は低くないと考えられる。

なお本論文では直接用いなかったが、近年、オスマン朝の有力者層（特に軍人階級）の遺産目録に依拠した分析も始まりつつあり、今後新たな消費の側面が明らかにされることが期待できる[49]。

---

[47] Ş. Pamuk (2000), *İstanbul ve diğer kentlerde 500 yıllık fiyatlar ve ücretler, 1469-1998* [500 years of prices and wages in Istanbul and other cities], Ankara.; S. Özmucur, Ş.Pamuk (2002), “Real Wages and Stadards of Living in the Ottoman Empire, 1489-1914”, *Journal of Economic History,* 62-02, pp.293-321.

[48] 織物価格の長期トレンドは西ヨーロッパと平行しており、パムクは、オランダの例を参考に約 80%ダウンと推測している。この数字を日用品の物価の指標に加えると、全体で 5%のダウンとなる。Özmucur and Pamuk (2002), “Real Wages and Stadards of Living”,p.302.

[49] 例えば、*Ottoman Costumes, From Textile to Identity* (2004), S. Faroqhi & C.K. Neumann (eds.), İstanbul.

（2）ヴェネツィアの商人文書、公証人文書

第 3 章では、国立ヴェネツィア文書館(Archivio di Stato di Venezia、以下 ASV と表記する)[50]に所蔵されている商人文書および公証人文書を主な分析の対象とする。

周知のように、中世後期以降、北イタリア各地の都市国家において、膨大な商業関係の文書類（書簡、帳簿、購入および売却価格報告書等）が作成され、その多くが現在に至るまで各地の文書館に所蔵されている。ヴェネツィア史研究においても、こうした文書類に依拠して商人・商業活動に関わる多くの研究が発表されてきた。しかしヴェネツィアの場合、商業関係の一次史料が比較的まとまった史料群のかたちで残されているのは、ほぼ 15 世紀末を下限としている。16 世紀に入ると残存史料は次第に散発的となり、17 世紀にはかなり限定的な残存状況を呈する。その理由は明確ではないが、ヴェネツィア経済の中心が商業から他の分野へ移行したこと、ヴェネツィア商業の相対的な縮小等が考えられよう。

さらにヴェネツィアの商業形態が、例えばフィレンツェのような会社組織をとるのではなく、荷口毎の決済を基準とした比較的小規模な単位で行われていたため、損益の分配を明確にするために帳簿を確実に締め切って決済をおこなう必要は必ずしもなかったという事情も存在する。そのため、商業関係の文書史料を（会社単位で）まとめて保存する必要性あるいは習慣が比較的希薄であったとも推測できる。15 世紀までの商業関係文書も、その多くはヴェネツィアの貴族家系の私的な史料群、あるいは遺産管理を目的とするサンマルコ財務官史料群などから、近代以降、文書館員によって発見・再編纂された史料群[51]に含まれている。

本論文では、ヴェネツィア国立文書館所蔵史料のなかから、主に、①15 世紀前半のコンスタンティノープルで作成された帳簿[52]、②15 世紀末のイスタンブルとヴェネツィアの間で取り交わされた商業関係の書簡類[53]、③16 世紀末から 17 世紀初頭にヴェネツィアで作成された公証人文書（海上保険契約書）[54]を使用する。以下で、各史料について概観する。

① 帳簿は、1436 年から 1440 年にかけて、ヴェネツィア商人ジャコモ・バドエル(Jachomo Badoer)が、オスマン帝国による征服直前のコンスタンティノープルで、彼が行った日々の取引を余すところなく書き残した元帳であり、当時の市場に関する情報が豊富に含まれている。同帳簿は、現在国立ヴェネツィア文書館に所蔵され、商業関係の諸事を取り扱う

[50] 国立ヴェネツィア文書館所蔵史料については、以下のガイドを参照。*Archivio di Stato di Venezia (Guida Generale degli Archivi di Stato Italiani, Vol.IV)*, Roma, 1994.

[51] 代表的なものとして、19 世紀後半に文書館員の Francesco Gregolin が商業関係の文書を中心に再編集した「グレゴリン史料群」（*Miscellanea Gregolin.*）がある。しかし同史料群に含まれる 16 世紀後半から 17 世紀の一次史料は、あまりにも判読困難な字面であり、本論文では使用しなかった。*Archivio di Stato di Venezia,* p.1133.

[52] ASV, Cinque Savi alla Mercanzia, b.958. (U. Dorini と T. Berteleによる批判テキスト *Il libro dei conti di Giacomo Badoer,* Roma, 1956)。

[53] ASV, Miscellanea di carte non appartenenti a nessun archivio, b.29

[54] ASV, Archivi Notarili, Andrea Spinelli, Giovanni Catti. （A.テネンティによる批判テキスト, *Naufrages, Corsaires et Assurances maritimes à Venise 1592-1609*, Paris, 1959.）。

部局であった「商業五賢人委員会」（*Cinque Savi alla Mercanzia*）史料群に含まれているが、なぜこの史料群に収蔵されているかという理由は不明である[55]。本論文では 1956 年にドリーニとベルテーレによって校訂出版された刊本を使用するが、必要に応じて原史料も参照する[56]。

② 国立ヴェネツィア文書館に所蔵されている 1479 年末から 1489 年にかけて、ヴェネツィア在住のマルコ・ベンボおよびその息子ジェロニモ・ベンボのもとで作成された 3 冊の書簡複写帳（発送書簡複写帳 2 冊、受領書簡複写帳 1 冊）である[57]。3 冊の書簡複写帳には、マルコとジェロニモが各地の商人や代理人と交わした 384 通（発送 321、受領 63）の商業書簡が筆写されている。

宛先で最も多いのはクレタ島のカンディア(71 通）であるが、イスタンブル（書簡ではコンスタンティノープル）宛ては 45 通、一方でイスタンブルから発送されたものは 28 通あり、またエディルネ（書簡ではアドリアノープル）からの 2 通が記載されている。

書簡複写帳の内容から、マルコ・ベンボのイスタンブルにおける代理人はアルヴィーゼとマリンのマリピエーロ兄弟であったことがわかっている。アルヴィーゼ・マリピエーロは、1484 年のなかごろテサロニキに移住し、1485 年に同地で死亡している。

同史料は、「どの史料群にも属さない雑文書集」（*Miscellanea di carte non appartenenti a nessun archivio*）に含まれている。同史料群は、19 世紀にいくつかの史料群から取られた史料をまとめたものである[58]。

③海上保険の契約書群は、1592 年から 1602 年にかけて、ヴェネツィアで二人の公証人カッティ(Giovan Andrea Catti)とスピネッリ(Giovanni Spinelli)によって作成された公証人文書である。これらは、公証人の名前ごとに、各人が取り扱った証書を保管した「公証人史料群」（*Archivi Notarili*）に含まれている。本論文ではテネンティが、1021 隻にのぼる船舶名を基準に整理した批判テキスト版（フランス語）を使用した。

テネンティによれば、カッティは 1577 年から 1621 年まで公証人の業務に携わり（途中から息子と共同、おそらく 1624 年に死亡）、公証人組合でも数次にわたり委員に選出されるなど重要人物であったらしい。スピネッリは 1591 年から公証人を務め、同職者組合内の指導者には選出されなかったものの、同職者の仲間内でそれなりの地位を得ていたと考えられる。甥と共に 1617 年まで仕事を続け、その後まもなく死亡した。

---

[55] *Archivio di Stato di Venezia,* pp.980-982.
[56] A.S.V., Cinque Savi alla Mercanzia, b.958. (*Il libro dei conti di Giacomo Badoer,* a cura di Umberto Dolini e Tommaso Bertele, Roma, 1956),
[57] A.S.V.,Miscellanea di carte non appartenenti a nessun archivio, b.29。同史料を分析したものとして、拙稿(2001)「十五世紀末のイスタンブル市場」『歴史学研究』、757 号、12-23 頁。ティリエは同史料をもとに、テサロニキにおけるヴェネツィア向け小麦買い付けについて分析している。Freddy Thiriet (1957), “Les lettres commerciales des Bembo et le commerce vénitien dans l’Empire ottoman à la fin du XVe siècle”, *Studi in onore di Armando Sapori*, Milano- Varese.
[58] *Archivio di Stato di Venezia,* p.1129.

証書の大部分は「*cessio*」と呼ばれるもので、保険の放棄、つまり保険契約によって予想された遭難、略奪、損害などのアクシデントを被った商品や船舶の所有者（被保険者）に対し、商品や船舶に関する彼らの全ての権利を放棄させた証書である。同史料に記載された商品の種類や量、価格などの記録には部分的な欠落があり、完全なものではないが、当時のヴェネツィアに出入りした船舶に積載された商品の傾向を示す有力な史料である。

以上３点の商業関係史料に加えて、外交関係文書も参照する。国立ヴェネツィア文書館に所蔵されている外交関係文書では、イスタンブル（史料ではコンスタンティノープルと表記される）駐在領事の報告書群(*Dispacci*)[59]、ヴェネツィア共和国とオスマン帝国の君主あるいは有力者同士が取り交わした公私の書簡群(*Documenti Turchi*)[60]を使用する。領事報告書は、その内容の大半が軍事・外交問題に関するものであり、しかも暗号を用いて書かれている部分が多々あるため、判読不可能な部分が多い。しかし商況に関する情報も、非常に僅かではあるが見つかっている。書簡群には、オスマン宮廷からヴェネツィアにあてた絹織物購入の注文書などが含まれている。

外交文書としては、この他に任期を終えて帰国した領事が議会に提出した報告書群(*Relazioni*)[61]があるが、これらはもっぱら形式的な内容に留まっており、商業関係の情報はほとんど含まれていない。

[59] ASV, Archivi propri delle ambasciate e dei consolati, Bailo a Costantinopoli, regg. e bb.588 (1540-1797).

[60] ASV, I Documenti Turchi, bb.24, (1454-1813)。同史料群の完全なカタログがMaria Pia Pedaniによって、*I Documenti Turchi*, Venezia, 1994 として刊行されている。

[61] ASV, Archivi propri degli ambasciatori, Costantinopoli, (1615-1740)。批判テキスト *Relazioni degli ambasciatori veneti al Senato*, *ser. 3: Relazioni degli stati ottomani. 3 v,* a cura di Eugenio Albèri, Firenze; *Relazioni di ambasciatori veneti al senato, volume XIV, Costantinopoli relazioni inedite (1512-1789)*, a cura di Mari Pia Pedani-Fabris, Padova, 1996.

課題

本論文の課題は、17 世紀の地中海地域において、実証はされないもののこれまで先行研究において繰り返し示唆されてきた、ヴェネツィアと東地中海地域（オスマン帝国）との絹織物を介した交易を、可能な限り一次史料を用いて実証的に分析することである。具体的な課題は、おもに以下の 3 点である。

第一の課題は、17 世紀のオスマン帝国、特に首都イスタンブルの繊維製品市場の実態を解明し、そのなかでヴェネツィア製品の位置付けを明らかにすることである。ヴェネツィアの製品と競合する他の製品との比較もおこない、イスタンブルおよび周辺の絹織物消費市場の構造を、可能な限り時系列的に分析する。

第二の課題は、絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国間の交易関係を、17 世紀を中心に、中世後期から遡って流通の側面から分析することである。ヴェネツィア製絹織物の輸出がオスマン帝国の絹関連産業に与えた影響についても、考察する。

第三の課題となるのは、17 世紀のヴェネツィアとオスマン帝国が絹織物交易を介して経済的に結びついた要因を明らかにすることである。製造技術や商人の販売努力が想定されるが、本論文ではそれに加えて、人間社会において絹織物が関わる重要な場面のひとつである顕示的消費を、需要の源として取り上げる。

構成

第 1 章では、主に既存の研究に依拠して、イスタンブルを中心としたオスマン帝国における絹織物消費文化を通じて、社会・経済両面における絹の位置づけを考える。絹織物のような奢侈品の最大の購入者は、一般に王侯貴族や大都市に住む富裕層である。ここでは絹織物に対する需要が生じた背景として、オスマン帝国の宮廷およびその周囲で、誰が、何のために、どのような場面で絹織物を使用したのかということを考える。

第 2 章では、オスマン帝国、特にイスタンブルにおける絹製品消費の実態を、オスマン帝国の史料を用いて分析する。使用する史料は、17 世紀前半にオスマン帝国で作成された 3 点の公定価格（ナルフ）台帳である。ナルフ台帳に見られる絹織物の種類、産地、評価を時系列で比較し、毛織物、綿織物および麻織物との比較をおこなう。またイスタンブルとブルサにおけるヴェネツィア製絹織物および毛織物の位置づけを検討し、ヴェネツィア製品がオスマン帝国の絹織物消費市場においていかなる地位にあったかを考える。

第 3 章では、主にヴェネツィアの史料に基づいて、オスマン帝国領に向けたヴェネツィア絹製品輸出の実態を考察する。まず 11 世紀から 15 世紀末に至るヴェネツィア絹織物製造業および絹関連産業の概略と、東地中海地域におけるヴェネツィア商人の絹織物取引の事例を紹介する。次いで 16 世紀後半から 17 世紀にかけて生じたヴェネツィア経済の性格変化を概観する。続いて 16 世紀末から 17 世紀初頭の、ヴェネツィアからオスマン帝国領

に向けた絹織物輸出の実態を、史料に基づいて可能な限り具体的に示す。絹織物および生糸を軸としたヴェネツィアとオスマン帝国の交易関係がオスマン帝国のブルサの絹織物製造業に与えた影響についても、検討する。

結論では、まず本論各章の分析内容を概観し、次いで絹織物を介して 17 世紀のヴェネツィアとオスマン帝国を結びついた要因を検討する。最後に今後の課題を提示する。

第１章　イスタンブルの宮廷および都市社会における絹織物

（1）スルタンの可視性　～ページェント・宮廷儀式・行進

「宮廷の奥深くに鎮座し神秘に包まれた存在」という一般的なイメージとは異なり、オスマン朝のスルタンにとって、首都イスタンブルにおいて人びとの前に姿を現すこと（人びとに見られること）は、非常に重要な行為であった。スルタンが首都民および首都駐在の軍隊の前に姿をあらわし、受け入れられた結果、スルタンの権力と帝国の威信が帝国全体に波及していく。実際、僅かな例外を除いて、歴代のスルタンは毎週金曜日の礼拝前後に宮廷から出て街路を行進し、沿道を埋める人びとからの挨拶にこたえた。

これはまた、スルタンに直接請願を差し出す（少なくとも請願が受理される可能性を表明する）機会でもあった。18 世紀初頭パトロナ・ハリルの乱後にマフムド 2 世（在位 1730－54 年）が行ったように、都市内で騒乱が起こった直後には、毎金曜日のスルタンの「行幸」は特に念入りに設定され、スルタンは首都各所のモスクに立ち寄り、人びとの前に出現した。スルタンが常に首都住民の直接的な反応を無視しえなかったと同時に、この行為は首都イスタンブルにとっても、スルタンの玉座を有する都市＝首都としての権威を維持高揚する重要な機会であり、その意味でスルタンとイスタンブルは相互補完的な関係にあった[1]。

歴代のスルタンは、重要な政策のひとつとして、首都民の賞賛を確保するため、毎週金曜日の集団礼拝以外にも首都や宮廷で様々な祝祭や儀礼式を催した。オスマン帝国の権力と富を帝国内外に可視化し誇示するため、スルタンや宮廷高官・軍人・従者の豪奢な装いや祝祭の装置が考案されたが、そのなかでも絹織物は最も雄弁で効力のある道具として、非常に重要な役割を担っていた。

スルタン（および皇子）の通過儀礼として、宮廷では様々な儀式が行われた。代表的なものを挙げれば、前スルタンの葬儀と新スルタンの即位式および帯剣の儀式、皇子の教育開始の日、割礼、結婚等である。

前スルタンの葬儀と新スルタンの即位式では、スルタンの空位を防ぐため儀式を迅速に行う必要があることから、あまり豪華な衣装が用意されることはなく、哀悼の意および信仰心の表明である比較的地味な濃い色の衣装が選ばれた。

首都の人びとに新スルタンが初めて披露されるのは、即位数日後におこなわれる帯剣の儀式である。帯剣の儀式では、新スルタンは通常、宮廷から金角湾の奥にあるエユップの墓廟まで、高官たちを引き連れてパレードをおこなった。

---

[1] E.Boyal & K. Fleet (2010), *A Social History of Ottoman Istanbul*, Cambridge Univ. Press, pp.28-38

帯剣の儀式に限らず、こうしたパレードの際には、スルタンや重要人物が通る道に高価な絹織物(*sal*)が敷かれた。(図4参照)。1695年におこなわれたムスタファ二世の帯剣の儀式は、イスタンブルではなくエディルネで行われたが、この時新スルタンは金糸で織られた最高級絹織物セラーセルで作られた衣装を着用している[2]。

皇子が初めて教育を受ける日、宮廷では盛大な儀式が催された。17 世紀末のフンドゥクルル・メフメト・アーの年代記には、6 歳のマフムード皇子の教育開始を祝う祝宴の様子が記録されている。祝祭の宴会に集まった者は、法官長や高官から王子の家庭教師（ララ）に至るまで、全員儀式用の衣服と毛皮を身に着けていた。マフムード皇子は宝石の付いたフロッグ（上着の前をとめる紡錘形ボタンと輪になった紐）留めのピンクのセラーセル（金糸銀糸で織られた最高級の絹織物）のローブを着て、宝石で飾られたキルトの帽子をかぶり、その帽子のまわりは、エメラルドと真珠で刺繍された頭布に貴重な羽根でできた前立て飾り毛がついていた。皇子は君主のテント内に置かれた玉座に座る父親に近づき、彼の手に接吻し、玉座の前に置かれた絹のクッションの上に座った。

図 4 『スール・ナーメ(Surnâme-i Hümâyûn)』（1582 年頃）

皇子の割礼式は、最も豪華な祝祭が催される機会のひとつである。ここでも数週間にわたって贅沢な披露宴および織物等の贈答が行われた。西暦 1720 年 9 月 18 日から 10 月 2 日にかけて、アフメト三世の 3 人の皇子の割礼式がイスタンブルで催され、その祝祭の様子はスール・ナーメ（『祝祭の書』）に克明に描かれている。様々な種類の豪奢な絹織物からつくられた各人の衣装やテント、敷物、壁掛けは、宮廷でいかに多くの織物が使用されていたかということを伝えている。臣下からの贈答品には、高価な織物が数多く含まれていた[3]。

---

[2] ムスタファ三世の帯剣のパレード（1757 年）では、おそらく宗教的な禁欲を象徴するために、白（吉兆の色）一色の毛織またはモヘアのカフタンが用いられている。*İpek, The Crescent and the Rose, Imperial Ottoman Silks and Velvets,* Julian Raby & Alison Effeny (eds.), London, 2001, p.25.

[3] スルタンが主催した割礼式をはじめとする祝祭における政治的機能については以下を参照。奥美穂子（2006）「オスマン帝国における祝祭の社会史的考察--王家主催の 1582 年祝祭を中心に」『駿台史学』129, 83-104 頁；同（2009）「オスマン帝国における「王の祝祭」像の再構築に向けて」『明大アジア史論集』13, 111-125 頁；

(2) 権力と富の象徴

首都イスタンブルでは、最大限の視覚的効果をねらった豪華に演出されたパレードがしばしば行われた。毎週金曜日の午後、スルタンは礼拝に出席するために宮廷の外のモスクに赴いた。このパレードは、首都の臣民だけでなく外国人にも披露され、帝国の富と権力を内外に見せ付ける絶好の機会であった。

17 世紀末、フンドゥクル・メフメド・アーは、ムスタファ二世（在位 1695－1703 年）期の逸話をひいて、こうした公式行事の目的と意義を述べている。「金曜日の行列の際にスルタンは袖なしの白テンの毛皮で縁取りされたセラーセル（最高級の金銀糸織り絹織物）のローブを着て、インド製の前立て飾り毛をターバンに飾る。スルタンの意向で、ロシアの使節が、モスク[4]の中庭を見下ろす宮廷門番長のムスタファ・アーの屋敷から行列を見ることを許された。これはトルコのスルタンの偉大さとオスマンの儀式の輝かしさを、ロシア使節に印象づける目的であった。大使は、目もくらむばかりの壮麗さに直面して、ほとんど圧倒されてしまった」（下線は筆者による）[5]。

1563 年ごろ、スレイマン一世とその側近たちが金曜礼拝に向かう姿を描いた無名の画家の手による一続きの版画が、ドメニコ・ディ・フランチェスキによってヴェネツィアで出版された。この版画は特に人物の服装に細かい注意が払われており、オスマン帝国において、パレードの際に用いられた織物の種類に関する、価値ある史料となっている。以下は、行列の参加者とその衣装である。

[1]行列の最初は constable に伴われた王室直属の騎士（スィパーヒー）軍団。

[2]ローブと背の高いフェルト帽を着用した、イェニチェリ軍団長とその軍団。

[3]二人の騎馬の司令官、海軍提督（カプダン・パシャ）、大元帥（イムラホル・パシャ）。

[4]騎馬の官僚エリートたち、つまり 3 人の侍従長（カプバシ）、3 人の財務長官（デフテルダール）。彼らの上着は、遠くからもよく見えるような、派手で大ぶりなデザインを用いた金銀糸入りのブロケードである。

[5]法官の長官（カドゥアスケル）。宗教関係の役人は、一般には金糸銀糸を用いない、単色の毛織物を身につける傾向にあったにもかかわらず、ここでは手の込んだ模様のある絹織物を着て描かれている。

同（2010）「オスマン帝国の「王の祝祭」にみる政治文化 ： 1530 年と 1582 年の割礼祭の比較」『比較都市史研究』29(1), 13-30 頁 ; E.Atil (1999), *Levni and the Surname, The story of an Eighteenth-Century Ottoman Festival,* Istanbul, Illustration No.11 (p.224-5), 43 (pp.160-161).

[4] オスマン家の夏の首都である、エディルネのスルタン・セリム二世モスク。

[5] *İpek* (2001), p.28.

[6]徒歩の馬丁(*solak*)の一団。

[7]騎馬の伝令官（使者）(*cavus*)とその長官。

[8]宰相たち。宰相の衣服の華麗な模様は、厳格なイスラームの伝統では男性が身に着けるべきでなく、馬の馬衣につけるべきだとされるような大きな宝石状のデザインで、はっきり描かれている。

[9]大宰相。スレイマンの義理の息子（娘婿）であるリュステン・パシャ。彼は 1550 年代にオスマン朝の絹産業を再建した。

[10]小姓(*peyk*)。鍍金された銅の兜をかぶっている。

[11]スルタン。背の高い馬に乗って、巨大な白絹のターバン、太陽、月、星の象徴をアップリケしたモノクロのカフタンを着ている。

図 5（左より） 海軍提督（カプダン・パシャ）、大元帥（イムラホル・パシャ）
3 人の侍従長（カプバシ）、3 人の財務長官（デフテルダール）。
（Domenico de' Franceschi による木版画、1568 年ヴェネツィアで出版）.

図 6（上）宰相

図 7（下）（左より）大宰相、小姓、スレイマン１世

外国使節に対してスルタンの権威や豪華さを披露する目的とした儀式として、他には、毎週金曜日におこなわれたイェニチェリ部隊への俸給支払いがある。この日招待された諸外国の使節は、最初に、正装した全ての官僚およびイェニチェリが全員沈黙し直立不動で居並ぶ前で（「まるで人形のようであった」と、ある外国使節は記している）、コーヒーと食事の接待を受ける。やがてスルタンが入場すると、外国使節が持参した書簡が音読された。読み上げられる間の長い時間は、スルタンの豪華な衣装、宝石類を、外国使節につぶさに観察させる機会として利用された[6]。（図 8,9 参照）

オスマン宮廷における服装規定はかなり厳しく、各人は地位にあった衣装を身に着けることが厳命されていた[7]。16 世紀末にイスタンブルに滞在したモロッコからの使節は、「オスマン宮廷では、同じ服、ターバン、飾りを身につけたり、同種の椅子に座る者は決していない」と証言している[8]。

オスマン帝国から送られる重要な外交文書の上下には、文書の保護も兼ねて豪華な絹織物が貼り付けられた。現在国立ヴェネツィア文書館には、西暦 1619 年 1 月（8-17 日）および同 1625 年 4 月（19-28 日）付けの、オスマン帝国とヴェネツィア間の和平協定文書に用いられた 3 点の絹織物が保存されている（図 10,11）[9]。

---

6 *İpek* (2001), p.32.
7 Z. Żygulski (1991), *Ottoman Art*, pp.103-4.
8 *İpek* (2001), p.34.
9 Archivio di Stato di Venezia, Documenti turchi, n.1237, n.1319. 本来は和平協定などの最も重

図 8 （左） オスマン宮廷におけるオーストリア大使への食事供応（1628 年）
図 9 （右） オーストリア大使のスルタン謁見（16 世紀）

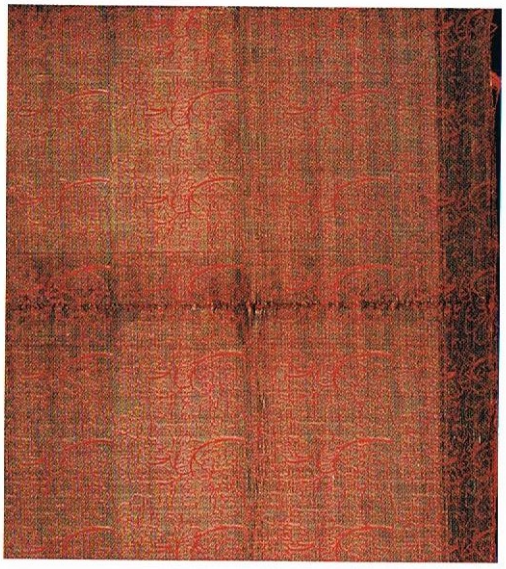


図 10 （左）ヴェネツィアとオスマン帝国の和平協定文書に貼り付けられた絹織物、緑と金糸（西暦 1612 年 1 月 8-17 日付、オスマン 2 世の花押入り）、ヴェネツィア国立文書館蔵
図 11 （右）同、赤色（西暦 1625 年 4 月 19-28 日付け、ムラト 4 世の花押入り）、同蔵

要な外交文書の全ての上下に絹織物が貼り付けられていたと考えられている。しかしヴェネツィアの場合、1805 年にオスマン帝国関係文書がウィーンの国立文書館に移され、イタリア王国成立後の 1866 年に再び返還された時の混乱で、こうした目的で使用された絹織物のうち現存するのは 3 点のみである（*Venezia e Istanbul. Incontri, Confronti e Scambi,* a cura di Ennio Concina, Udine, 2006, p.89）.

(3) 恩寵の御衣(*hil'at*)

オスマン帝国において、絹織物が政治的な象徴として使用されたことが最も顕著に現れているのは、ヒルア（「恩寵の御衣」(*hil'at*)と呼ばれた行為であろう。これは、臣下に対して、褒章や好意の印として主に絹製のカフタン（衣装）を贈ることを指し、着用者の贈り主に対する服従、あるいは後者の保護を受けていることを示す。

語源がアラビア語の *khil'at* にあることから分かるように、オスマン帝国以前から存続していた行為であった。最初のヒルアは、預言者ムハンマドがある詩人に自らの衣装を与えたことに始まるとされ、8 世紀中葉には、ムスリムの慣行となっていたと考えられている[10]。さらに、イスラーム誕生以前のビザンツ帝国においても、同様の慣行が見られた[11]。

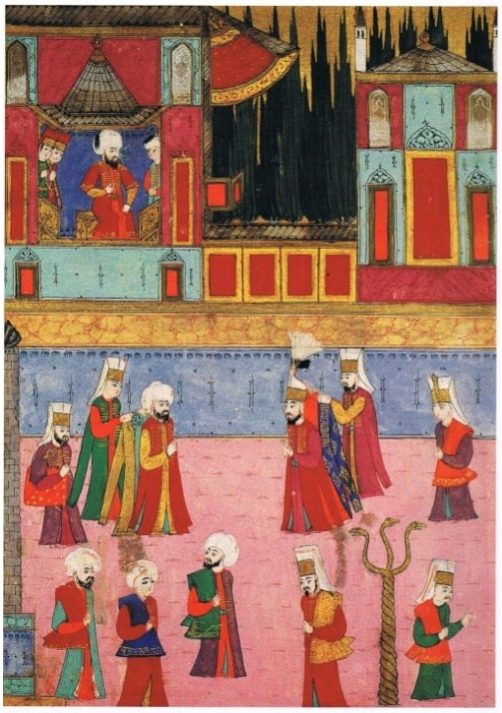


図 12　（左）カリフのアル・カーヒルから下賜された衣装を着るガズナ朝の君主マフムード、1000 年。
図 13　（右）恩賜の御衣　ムラト 3 世が大宰相メフメトらに恩賜の御衣を与える。『スール・ナーメ』より.

恩寵の御衣を下賜する場合、織物の質やカフタンの数、また毛皮の縁取りの有無等によって、それを贈られた意味が表現されていた。つまり質の悪いカフタンを贈ることや、数が少ないことは、贈り主の不快を表していると受け取られていたのである。この行為はオスマン帝国の宮廷生活に広く普及した。贈り主はスルタンや授与資格のある高級官僚で、帝国の臣民、外国人を問わずあらゆる地位の者へ贈られた（図 13)。

---

10 P.L. Baker (1967), "Islamic Honorific Garments", *Costume*, 1, pp.25-35.
11 A. Muthesius (1992), "Silk, Power and Diplomacy in Byzantium", *Proceeding for 3rd Biennial Symposium of Textile Society of America, September 24-26*, 1992 Seattle, 再録 Id. *Studies in Byzantine and Islamic Silk Weaving*, London 1995, pp.231-244.

カフタンが下賜される機会は、皇子や外交官の訪問、軍事遠征の開始、スルタン一族内の祝い事、毎年の宗教祭日等の特別の場合であった。それ以外にも、新任者の任命式や、役人に俸給を支払う際にその一部として渡される等、日常的に行われる行為でもあった。

なかでも外交儀礼での下賜は特に重要視されていた。なぜなら贈られるカフタンの数と質が相手に対するスルタンの意向を表明するので、外国使節は自国および他国の使節に贈られるカフタンの数と質に神経を尖らせていたからである。たとえば、1674 年にヴェネツィアの使節が常に 17 点のカフタンを贈られているという情報を得たイギリス大使は、スルタンに嘆願書を送り、イギリス大使への下賜を 2 点増やしてヴェネツィアと同数にすることに成功している[12]。

外国使節への下賜は、スルタンに謁見する前におこなわれ、使節はこれを着用してスルタンに拝謁した。神聖ローマ皇帝使節ジークムント・フォン・ヘルベルシュタイン Siegmund von Herberstein（1486－1566）は、1560 年に出版した自伝のなかで、各国君主への大使を務めた際に着用した、もしくは下賜された衣装を身に着けた 6 点の木版画による自画像を残している[13]。ヘルベルシュタインの例から明らかなように、当時外交儀礼として衣装を下賜することは、多くのキリスト教諸国でも見られた行為であった。

次頁の図 15 は、スレイマン一世から授与された儀式用カフタンを着用した木版画である。当時の外衣の長さは、一般に西欧は短く、オスマン帝国では長かった。ヘルベルシュタインと同じく神聖ローマ帝国の使節としてスレイマン一世のもとに派遣されたビュスベックは、衣装の長さが人物に権威を与える効果について、以下のように述べている。「トルコ人は、我々が彼らの衣服を目にした時と同じくらい、我々の服装に驚いている。彼らはほとんど踝まで届く様な長いローブを着ていて、それは堂々としているだけでなく、背丈を高く見せている。一方、我々の衣服は非常に短くぴったりしているので、見せるよりは隠すべき体の線を覆うことができない。そして、その他の理由もあるが、[短くタイトな服のせいで]背が低く、歪曲されたような外観を与える」（[　] 内は筆者による加筆）[14]。

---

[12] *İpek* (2001), p.34.
[13] John L.Nevinson (1959), “Siegmund von Herberstein. Notes on 16th Century Dress”, *Waffen und Kostumkunde*, 1/2, pp.86-93.
[14] Ogier Ghiselin de Busbecq, *The Turkish Letters of Ogier Ghiselin de Busbecq, Imperial Ambassador at Constantinople 1554-1562,* Translated by E.S.Forster, Oxford Univ. Press, 1927, Louisiana Atate Univ. Press, 2005, p.61.

（左より）
図 14
オスマン朝のスルタンへの使節としての服装。

図 15
オスマン朝のスルタンから下賜された衣装.

図版から検討すると、ヘルベルシュタインが贈られた衣装は、トルコ製ヴェルヴェットの内カフタンと、イタリア風文様の儀式用外カフタンである[15]。ウェルデン(Jennifer Wearden)は、これらの衣装をイタリア製と推測している[16]。マッキーによれば、オスマン朝宮廷において、イタリア製ヴェルヴェットは、豪華さと格の点で金銀糸織のセラーセルに次ぐものと認識されていた[17]。イタリア風文様のカフタンを贈られたことは、ヘルベルシュタインに対して、つまり彼をスレイマンのもとに派遣した神聖ローマ皇帝に対してオスマン朝スルタンが示した敬意がうかがえる。

下賜されたカフタンを着ることは、理念的には、使節（とその主人）がスルタンに対する嘆願者の地位に置かれたことを意味する。つまり、外交上は臣下あるいは格下におかれることになった。しかし、同等とみなした相手とは、恩寵の御衣を贈ることで外交関係を強固にする役割も果たしていた。例えば 1547 年に、ペルシアのサファヴィー朝から、君主であるシャー・タフマスプの兄弟がスレイマン一世のもとへ亡命した際には、オスマン宮廷の高官から、毛皮外套、金銀細工物、宝石、玉座、武器、馬、高価な織物とともに恩寵の御衣が送られている[18]。

---

15 *İpek* (2001),p.33.
16 Jennifer Wearden (1985), “Siegmund von Herberstein: An Italian Velvet in the Ottoman Court”, *Costume*, 1, p.22.
17 *İpek* (2001), p.183
18 オスマン帝国における外交儀礼、外国秩序の問題に関しては、以下を参照。

（左より）
図 16　ポーランドおよびロシアへの大使としての服装.

図 17　モスクワ大公より下賜された衣装.

（左より）
図 18
スペインその他の諸国への大使としての服装.

図 19
第 2 回のロシアへの大使を務めた際に下賜された衣装と帽子.

初期のイスラーム教の指導者たちは、聖典クルアーンおよび預言者ムハンマドの言行に従って、男性が絹を身につけることを非難している。そのため、たとえばオスマン帝国の高位宗教官僚たちは、通常はモヘアや装飾の無い毛織物の衣服を着用していた（図 20）。

宗教指導者以外にも、毛織物の衣装は、しばしば信仰心の表明として用いられた。たとえばスルタン・スレイマン一世は、特に晩年になって信心深くなった後は、私的な場では、装

飾の無い濃い青や緑の、アンゴラ山羊毛織の衣服を着ることも多かった。これは、自身の息子を処刑した自責の念を示すためであったとされている（図 21）。また前スルタンの葬儀の際に、新スルタンは、哀悼の意を示すためしばしば毛やモヘアの衣装を着用した。

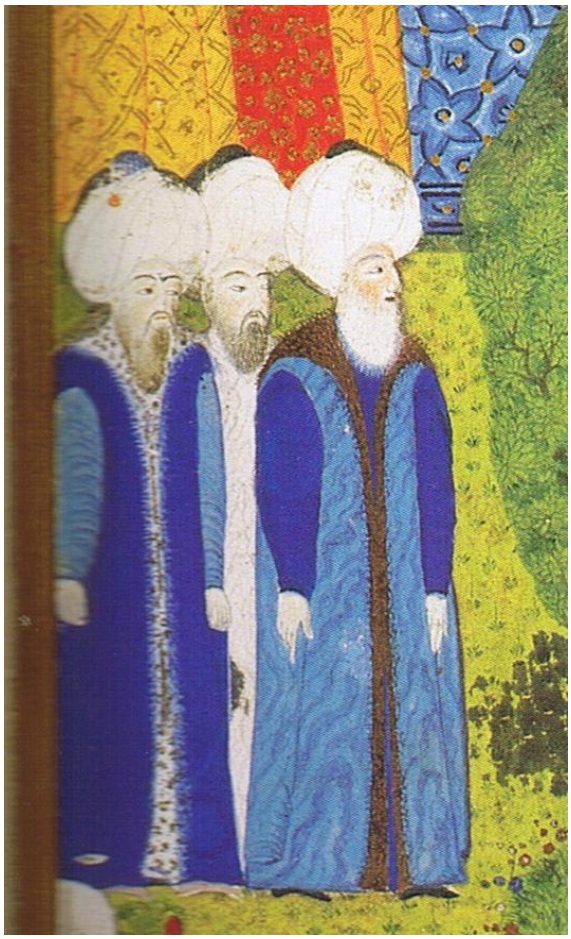


図 20（左）高位の宗教官僚たち　「スレイマン・ナーメ」より
図 21（右）晩年のスレイマン大帝

このように、絹織物はオスマン宮廷において、社会的、政治的に非常に重要な役割を持っていた。オスマン帝国における高級絹織物製造の中心地は、16 世紀後半（1575 年前後）まではブルサ、それ以降はイスタンブルである。イスタンブルでは、*ehl-i hiref*（造形の名工たち）と呼ばれる宮廷工房の職人集団と、宮廷外の工房の両方が製造を担っていた。また、イタリアをはじめ外国からの輸入品もカフタンに仕立てられ、スルタンや高級官僚が着用したり、恩寵の御衣として下賜された。

宮廷を中心とする美術工芸の技術やデザインの考案は、絹織物のほかにも、宝飾品、武器、テント、建築装飾、書、絵画、絨毯、陶器、タイル、装身具、家具、什器等あらゆる範囲にわたっていた。これらの工芸技術や美意識は、公的な需要を満たすだけでなく、イスタンブルの町へ、さらにはオスマン帝国全域へと発信された。

たとえば、スルタンや高級官僚が下賜した織物は、イスタンブル市民の「宮廷風」芸術趣向へと発展した。また、スルタンのハレム（後宮）からさがって軍人や官僚と結婚した女性たちが、市民の間に宮廷風文化や生活様式を広めた。一般の人びとにも披露される、豪華絢爛なパレードや祝祭もまた、都市の人びとに宮廷文化や芸術を伝える絶好の機会でもあった。宮廷は、オスマン帝国における流行発信地としての役割も果たしていたのである[19]。

３）17 世紀前半のイスタンブルにおける絹織物取引の流れ

1640 年ごろのイスタンブルについて記述を残したエヴレヤ・チェレビーは、当時イスタンブルには以下の織物職人／商人が存在したと記している。当時、職人と商人の専門分化は未発達で、大半の職人は自らが製造した商品を販売していた[20]。第 2 章で検討するオスマン帝国の公定価格（ナルフ）台帳においても、一つの商品についてもっぱら製造に従事する「職人」と、販売に従事する「商人」の区分は明確ではない。本論文で分析の対象としたナルフ台帳における価格リストの大半は、①「織物の公定価格（*Es'ar-ı akmişe*）」等の商品名、ないしは②商品名に「～を扱う者」を意味するトルコ語の接尾辞「*~ci* (*cı*)」が付けられた名称のどちらかで区分されている。本論文では、後者のような表現を、たとえば「綾織り綿織物を扱う[職人／商人]の公定価格（*Es'ar-ı Bogasıcıyân*）」（[　]内は筆者による加筆）と表記し、その商品を製造および販売する者が守るべき公定価格と解釈する。

チェレビーの記述においても、商品の名称の後に「～を扱う者」を意味するトルコ語の接

---

19 *İpek* (2001),pp.165-172..; ヤマンラール水野美奈子(2007)「トプカプ宮殿の至宝とオスマン芸術」『トプカプ宮殿の至宝展』198－199 頁；

20 R.Mantran (1962), *Istanbul dans la second moitié du XVIIe siècle,* Paris, pp.452 ff pp.467-474 ff.

尾辞「~*ci* (*cı*)」が用いられており、その実態は職人、職人＋商人、あるいは商人と様々であったと考えられる。本論文では特に職人と商人を区別する記述がある場合を除いて、この名称は全て「職人／商人」とした。チェレビーの著述については、往々にして数値の誇張があることが指摘されている。下記の職人／商人の人数や店舗数についても、確かなものとは言い難く、「非常に数が多い」ことを示唆する目安として参照した。なお、一覧中のトルコ語名称語尾の *yân* は、ペルシア語由来の複数接尾辞である。

サテン絹織物職人／商人(*atlasçıyân*)	300 人[21]、店舗数 150
高価な錦絹織物職人／商人（*dîbâcıyân*）	65 人、店舗数 16
ヴェルヴェット職人／商人（*kadifeciyân*）	200 人、店舗数 70
金糸入りヴェルヴェットのクッション職人／商人（*yağtık çıyân*）	400 人、店舗数 100
金糸刺繍または波紋モアレ絹織物職人／商人（*dârâyîcıyân*）	500 人、店舗数 200
恩賜の御衣用カフタン職人／商人（*hilatçı*）	105 人、店舗数 50
歩兵用の赤い腰帯職人／商人（*mühtemcı*）	40 人、店舗数 17
毛織物商人[22]（*çukacıyân*）	107 人、店舗数 100
テント等の裏地用綾織り綿織物職人／商人（*bogasıcıyân*）[23]	100 人、店舗数 4

一般に、イスタンブルを含むイスラーム地域の大都市では、絹織物のような高級品はトルコ語でベデステン（又はベテスタン）と呼ばれる商業施設でもっぱら取引された。ベデステンとは、貴金属商や両替商、絹織物賞等が店を構えた商業施設である。一般に窓や出入り口の少ない堅固で独立した石造りの建物で、常設店舗（トルコ語ではドゥッカーンと呼ばれる）の連なる市場の中核に位置する場合が多い。ベデステンという名称は、ベッザーズ（織物商）に由来すると考えられている。ベデステン内部では高価な商品や遠来の珍品が売買され、また都市住民の財産を預かる貸金庫的な役割も果たした[24]。

イスタンブルには複数の商業取引の中心地が存在したが、絹織物をはじめとする高級品はもっぱら前述のベデステンを有する大バザール、および大バザールから金角湾の船着き場へ向かう斜面周辺が取引の中心であった。同地域にはベデステンやハーン（後述）等の堅固な商業施設が多数建設され、今日まで商工業の機能を維持しているものも多い。ベデステンは

21 「主にユダヤ教徒」。
22 「ロンドン、フィレンツェ、アンコーナ、マルセイユから来た布を売っている」。
23 「リヴォルノからの *Lekefuri*, 中国からの *hatayi*、ダマスクスからの *şami* を売っている」。
24 ベデステンについては、以下を参照。林佳世子「ベデステン」『岩波イスラーム辞典』871 頁、岩波書店、2001 年 ; H.İnalcık(1980), “The Hub of the City: The Bedestan of Istanbul”, *International Journal of Turkish Studies,* I, pp.1-17.

その堅固な作りに加えて、夜間には施錠して無人となり、さらに警備員が常に巡回するという安全面が重視されたことは言うまでもない。また大バザール周辺には複数の大モスクおよびその複合施設（神学校、病院、宿坊等）があり、そこに居住する多くの宗教関係者が、これも貴重品であった本や紙を扱う商人にとって絶好の顧客であったことも関係していると考えられている[25]（図 22,23）。

イスタンブルで最も古いベデステンは、メフメト 2 世によって、コンスタンティノープル（後のイスタンブル）占領直後の 1460－61 年に建設された。これは現在グランド・バザールとして知られる大バザール（市場）の中心に位置する「古いベデステン（エスキ・ベデステン）」または「内のベデステン（イチュ・ベデステン）」である。このベデステンは、アヤ・ソフィア・モスクのワクフ物件として建設され、店舗の賃貸料がモスクを中心とする複合施設の運営費に充てられた[26]。この第一のベデステンは、別名「宝石のベデステン（ジャワーヒル・ベデステン）」と呼ばれたことからもわかるように、宝石や絹織物、毛皮、武器等の高価な商品が売買された（図 24）。

1520 年、古いベデステンの東側に、同様にアヤ・ソフィア・モスクのワクフ物件として、「サンダル・ベデステン」が建設された。「サンダル」とは絹を意味し、12 の丸屋根がかかり 72 の店舗を有する大バザール最大のベデステンとなった。古いベデステンとは多少異なり、こちらのベデステンでは宝石の売買はなく、もっぱら高級服地や絹織物が取引されたといわれる[27]。1489 年のワクフ台帳に記載された常設店舗数は、ベデステン内に 126、その周囲に 782、計 908 と計上されている

[25] R.Mantran (1962), *Istanbul dans la second moitié du XVIIe siècle,* pp.452 ff,
[26] ワクフについては、以下を参照。林佳世子「ワクフ」『岩波イスラーム辞典』1076－78 頁；同（1999）「都市を支えたワクフ制度　イスラム世界の宗教寄進制度の経済的側面」『ネットワークの中の世界史』（地中海世界史 3）歴史学研究会編、青木書店、256－284 頁；加藤博（2001、初出 1995）『文明としてのイスラーム　―多元的社会記述の試み』東京大学出版会。
[27] Evliya Çelebi, *Seyahatname,* Vol.1, pp.614, 617.

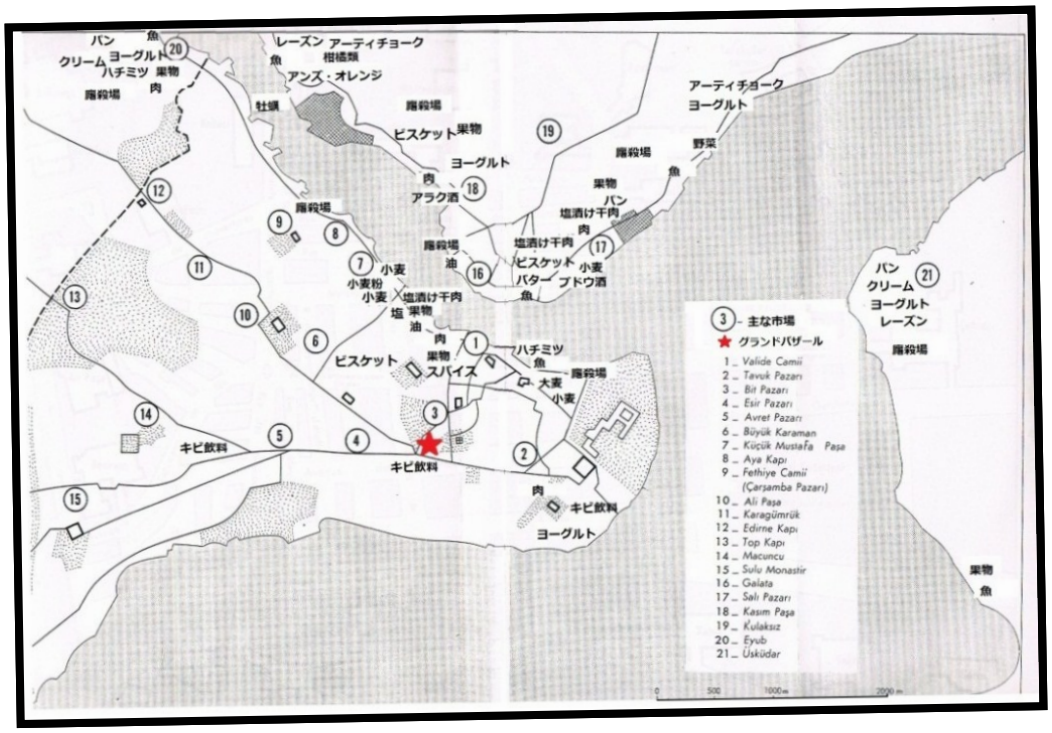


図 22　イスタンブルの商業中心地

（R.Mantran (1962), *Istanbul dans la second moitié du XVIIe siècle,* Paris, Carte13 より筆者加筆修正）

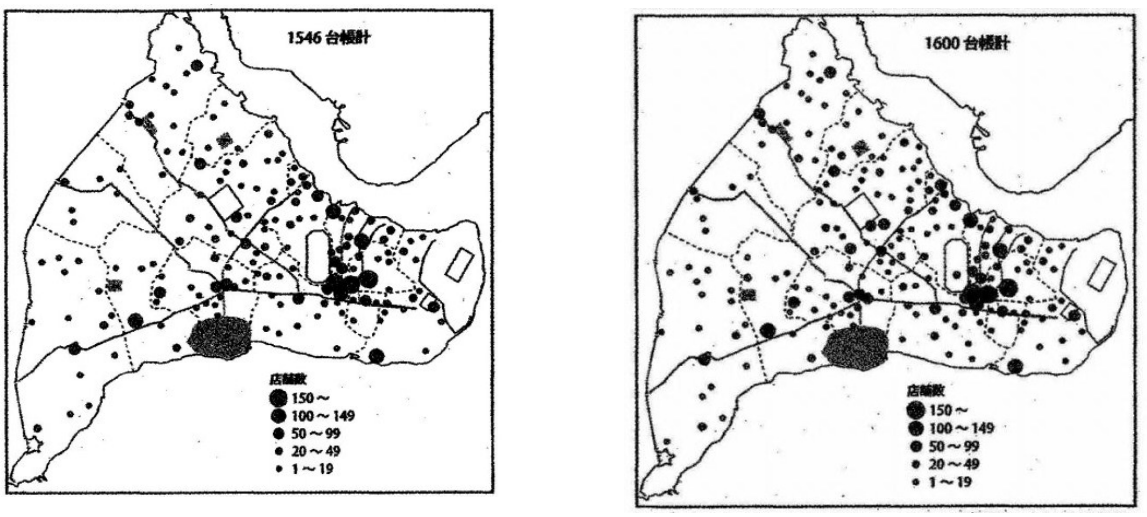


図 23　『イスタンブル・ワクフ調査台帳』からみる 1600 年時点の店舗数および増加数

（守田正志・篠野志郎(2008)「『イスタンブル・ワクフ調査台帳』にみる 16 世紀後半のイスタンブルのワクフの実態と都市構造の変容　―オスマン朝初期におけるイスラーム都市の史的研究　2―」『日本建築学会計画系論文集』第 73 巻 624 号、483 頁）

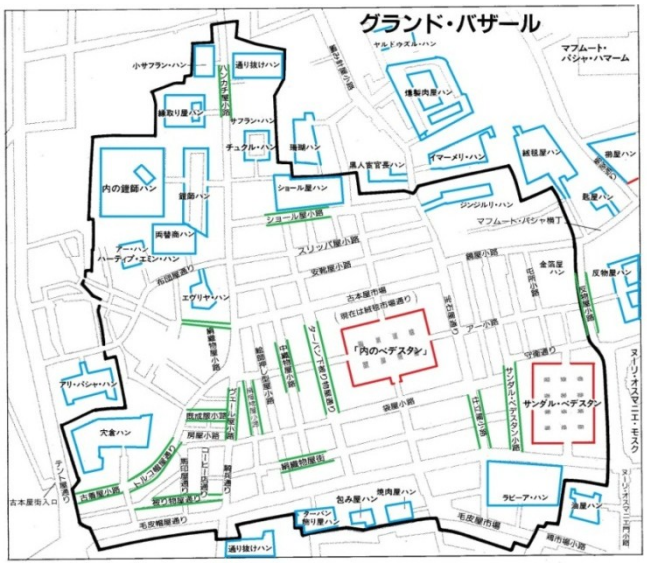


図 24
グランドバザールの内部とその周辺
赤＝ベデステン
青＝ハーン
緑＝織物関連の名称を持つ小路

鈴木董・大村次郷（1993）『図説イスタンブル歴史散歩』より筆者作成）。

エヴレヤ・チェレビーは、当時「古いベデステン」で製造および販売されていた織物として、絹織物ではサテン、ディーバー（厚地の絹織物）、ヴェルヴェット、錦絹織物、絹製の恩寵の御衣（スルタンや高官が下賜する衣装）、絹綿交ぜ織りのアラジャ（ティール製、ダマスクス製）、その他では枕カバー、バスタオルとエプロン（絹、絹綿交ぜ織り、綿等）、綿織物を挙げる。また「新しい織物のベデステン[つまりサンダル・ベデステン]では、「値段が付けられないほど高価な絹織物で作られた衣装が売られている」と記している（[　]内は筆者による加筆）[28]。大バザール内の小道には、織物関連の名称をつけられたものが多く、同地域における織物関連商品の重要性が伺える。(図 24 参照)。大バザール内の店舗はその後も増加を続け（現在は約 3000)、19 世紀半ばまでイスタンブルの商業中心地としての機能を維持していた。

ベデステンの店舗に加えて、その周辺に点在するハーンで絹織物を製造する職人もまた商品の売り手であった。前述のように職人と商人の区分が明確でなかったためである。ハーンは、いわゆる「都市内の隊商宿」であり、地域によってサラーイ、ハーン、ワカーラ、フンドゥク等様々な名称で呼ばれている。多くは市場の中や周辺等に位置する方形中庭式の堅牢な建物で、ベデステンと同様に内部の安全性が高く保たれていた。ハーンの機能は大きく分けて二つあり、一つは遠来の商人が宿泊し、同時に運ばれてきた商品を取引する場であった。もう一つは、商品の倉庫、商人や仲買人の事務所としても利用され、さらに同業の職人が一

[28] さらに金角湾対岸に位置するガラタの織物市場では、「アルジェリアのショール（*ihlam*)、キオスのファスティアン（*dimi*、厚地の綿または綿麻混紡の織物)や錦絹織物が売られている」と述べている *İpek* (2001),p.167 note142.

つのハーンに集まって製造と販売をおこなう場としての機能である[29]。

ところで絹織物等の高級品取引は、通常デッラール（*dellâl*）と呼ばれる仲介人を通じて行われた。デッラールは毛皮や高級織物、宝石等の高級品と、奴隷や馬等、特殊な商品の売買に介入し、通常原材料や食料の売買には関わらない。デッラールは政府の許可証を取得してリストに登録されており、その取引は政府当局の管理下にあった。彼らは商人の同業組合には属さず、理念的にはあくまでも仲介者であって、売買の直接の当事者ではないことが求められた。扱う商品が限定されていたことから、彼らの活動はもっぱらベデステンの内部で展開された[30]。

オスマン朝における仲介人の存在は 15 世紀から記録に残っているが、17 世紀にはデッラールは特に高級織物、なかでも外国からの輸入高級織物の取引において、輸入商人と小売商人の間を取り持つ必要不可欠な存在であった。特にユダヤ教徒デッラールの存在が指摘されているが、トルコ人やギリシア正教徒のデッラールも多く存在したと考えられている[31]。

---

29 ハーンについては、以下を参照。羽田正「隊商宿」『岩波イスラーム辞典』592 - 3 頁。
30 これに対しチェレビーはベデステン外の、おそらく蚤の市が開催された場所でもデッラールが取引を行ったと述べている。Evliya Çelebi, *Seyahatname,* Vol.1, pp.600.
31 R.Mantran (1962), *Istanbul,* pp.472-474.

第 2 章　17 世紀前半のイスタンブル公定価格（ナルフ）台帳からみる絹織物消費市場

第 2 章では、17 世紀前半のイスタンブルにおける絹織物消費の実態について考察する。既に問題提起でも述べたように、ヴェネツィア共和国経済は中世以来海上貿易が中心であったが、16 世紀後半以降に構造変化を経験し、絹織物をはじめとする輸出向け奢侈品製造業とその関連産業が成長した。そしてヴェネツィア製絹織物の最も重要な輸出先は東地中海地域、つまりオスマン帝国であったと繰り返し示唆されてきた。

ヴェネツィアに限らず、フィレンツェ（トスカーナ大公国）の絹織物製造業、ミラノやブレシアの武器（甲冑、銃器等）製造業等にとっても、オスマン帝国市場は、自国の奢侈品製造と販売網拡大のために不可欠であったと考えられている。

第 1 章でみたように、オスマン帝国の奢侈品消費の中心は帝国の首都イスタンブルであった。17 世紀のイスタンブルは 50 万以上の人口を擁し、当時のヨーロッパおよびインド以西のアジアにおける最大級の都市であった。イスタンブルの経済活動は、人口の大多数を占める首都住民はもちろんのこと、広大なオスマン帝国の領土を統括するスルタンとその一族、大宰相を頂点とする官僚群、そして「都市ブルジョワジー」らによって上流階級が形成された。こうした富裕層に加えて、首都に駐在する常備軍、宗教関係者および神学校学生達の需要を満たすことも必要とされた。オスマン帝国では、支配者層は物質的豊かさと豪華さを公に顕示することで、内外に帝国の威信を知らしめるという文化的伝統が堅持され、当時イスタンブルを訪れたヨーロッパの旅行者は、揃ってその並外れた物質的豊かさと上流階級の絢爛たる豪華さに驚愕している。なかでも絹織物は宮廷調度や服飾、あるいは祭礼に大量に用いられ、オスマン帝国の豊かさを内外に示す最も重要なシンボルのひとつであった。その痕跡は、イスタンブルのトプカプ宮殿美術館の所蔵物に含まれる宮廷調度や服飾品等からも十分確認できる。

それでは、17 世紀のイスタンブルにおける奢侈品消費の実態はどのようなものであったのだろうか。そして、その中でヴェネツィアをはじめとする北イタリアの製品は実際にはどのように評価されていたであろうか。実は、前述のように首都イスタンブルにおいて絹織物をはじめとする奢侈品消費が非常に盛んであったことはほぼ間違いないと考えられる一方で、その実態の解明は年代記や旅行記の記述、あるいは祭礼を描いた細密画もしくは残存する調度や装飾品等の分析にとどまっており、経済史の視点から奢侈品の消費市場を考察する試みはほとんどみられない。同市場を重要な販売先としていたイタリア製品の位置づけも、曖昧なままである。

その背景には、関係する数量的なデータが決定的に不足しているという史料事情もある。しかし関係史料が限られているとはいえ、それらをもとに奢侈品の消費市場を経済史の側面から分析することは、イスタンブルにおける旺盛な奢侈品消費の実態をさらに鮮明にすると考えられる。また、同市場におけるヴェネツィア製品の位置づけを明らかにする。

そこで第 2 章では、まず 17 世紀のオスマン帝国経済に関する既存研究を概括する。次いで第 1 節では、17 世紀前半にオスマン朝政府当局がイスタンブルの市場について作成した公定価格（ナルフ）台帳を用いて、同市場における絹織物消費の実態の解明を試みる。第 2 節では、同時期にアナトリア西部の都市ブルサについて同様に作成された公定価格台帳を比較の対象として取り上げる。オスマン朝初期の首都であったブルサは、15 世紀以降、生糸（主にペルシア産）取引および絹織物製造の中心地として成長し、さらに各種の繊維製品が取引される一大集散地であった。ブルサ市場に持ち込まれた商品は、イスタンブル以外にもアナトリア各地の都市に再輸出されたと推測されることから、ブルサにおける絹織物市場の分析は、イスタンブルに加えてアナトリアの地方市場の動向を知る手掛かりになると考えられる。第 3 節では、これら 3 点の公定価格台帳におけるヴェネツィア製繊維製品（毛織物・絹織物）の位置づけを分析する。

17 世紀のオスマン帝国経済

近世という時代は、顕示的消費が飛躍的な成長を果たし、社会・経済的に重要な要素となった時代である[1]。17 世紀の北イタリアに関しては、ピーター・バーク[2]、リチャード・ゴールスウェイト[3]、和栗朱里[4]らによって北イタリア各地で奢侈品消費の飛躍的な成長が確認されている。またオスマン帝国においても、第 1 章でみたように、首都イスタンブルを中心に帝国の威信を内外に示す装置として、様々に演出された顕示的消費の場が展開され、そのなかで絹織物が重要な役割を果たしていたことが明らかにされている。

ところでオスマン帝国史研究では、1960 年代にオスマン帝国経済史家オメル・ルトフ

---

1 W. Sombart (1922), *Luxus und Kapitalismus,* Munchen（ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』金森誠也訳、論創社、1987 年。

2 Peter Burke (1982), “Conspicunous consumption in seventeenth-century Italy”, *Proceeding, The Eighteenth International Economic History Congress,* reprinted in *The historical anthropology of early modern Italy,* Cambridge, 1987, pp.132-149.

3 Richard Goldthwaite (1987), “The Empire of Things: Consumer Demand in Renaissance Italy”, *Patronage, Art, and Society in Renaissance Italy*, Camberra & Oxford, pp.153-175.

4 和栗朱里(1990)、「ヴェネツィア芸術の興隆と土地所有」『イタリア学会誌』40 号、179—204 頁；同 (2004)「ポスト・カンブレー期ヴェネツィアの寡頭支配層とパトロネジ」『西洋史学』214 号、1—21 頁。ヴェネツィアに関しては I. Cecchini (2000), *Quadri e commercio a Venezia durante il Seicento*, Venezia、ローマに関しては R. Ago (1998), *Economia Barocca, Mercato e istituzioni nella Roma del Seicento*, Roma も参照。

ィ・バルカンが主張した 16 世紀から 17 世紀におけるイスタンブルのインフレ、いわゆる「価格革命」に関する数量的分析以来、「17 世紀衰退論」が長く支持されてきた[5]。ルトフィ・バルカンによれば、インフレの上下動を時系列で示すと共に、その原因は新大陸銀がヨーロッパ経由でオスマン帝国に大量流入し（さらに東方のインド方面へ流出し）た余波である。またインフレが生じた結果、オスマン臣民の生活が困窮し、製造業者の原料調達が北西欧諸国との競争において不利な立場におかれ不振を招いたことで、以後社会経済全般にわたる衰退が始まったと考えられている。

ルトフィ・バルカンの説は、20 世紀を通じて長くオスマン朝社会経済史研究の通奏低音であった。こうした歴史観の背景には、イマニュエル・ウォーラーステインが提唱した「近代世界システム論」、つまりオスマン朝が 17 世紀は自閉的な帝国（辺境）であり、18 世紀以降は周辺として経済面で従属的な立場におかれたとする理論の影響が無視できない[6]。

しかし近年、オスマン経済史家シャヴケト・パムクが、詳細なオスマン朝物価史、貨幣史分析をもとに、バルカンが算出したインフレ率を下方修正した。パムクはイスタンブルの物価や賃金をヨーロッパ諸都市のそれと比較検討し、17 世紀以降のオスマン朝社会経済全般にわたる急激かつ不可逆な衰退論に異議を唱えている[7]。

またオスマン帝国の染織や繊維産業に対する見直しも進められており、近年では、オスマン帝国における染織の最盛期は、従来の定説であった 16 世紀ではなく、17 世紀とする見方が大勢を占めている[8]。さらに、ドナルド・カータルト(Donald Quataert)やメフメト・ゲンチ(Mehmed Genç)らによって、時代は多少下るが繊維製造業を中心とする 18 世紀および 19 世紀オスマン朝製造業が再評価されている[9]。オスマン帝国史においても 17 世紀

---

[5] Ö.L.Barkan(1975), "The Price Revolution of the sixteenth century: a turning point in the the economic history of the Near East", *International Journal of the Middle Eastern Studies*, 6, pp.3-28.

[6] 17 世紀後半、イズミル港周辺を中心として、北西欧諸国の諸工業への原料輸出が急成長した。オスマン帝国社会経済史研究と「近代世界システム」論については、*The Ottoman Empire and the World Eoconomy,* H.İslamoğlu-İnan(ed.), Cambridge, 1987 を参照。

[7] Ş.Pamuk,(2000a), *A Monetary History of the Ottoman Empire*, Cambridge Univ. Press.; Id., (2000b), *İstanbul ve diğer kentlerde 500 yıllık fiyatlar ve ücretler (1469-1998) (500 years of prices and wages in Istanbul and other cities),* Ankara.; Id., (2001), "The Price Revolution in the Ottoman Empire Reconsidered", *International Journal of Middle East Studies,* 33, pp.69-89; S.Özmucur & Ş.Pamuk, (2002), "Real Wages and Standards of Living in the Ottoman Empire, 1489-1914", *The Journal of Economic History,* 62(2), pp.293-321.

[8] 大宰相（つまりオスマン政府当局）のイニシアティブのもと、ブルサ周辺の養蚕奨励が軌道に乗り、イスタンブルの宮廷直属の工房および私的工房において、最高級品が作られたのは後者の時代である。*İpek* (2001).

[9] Donald Quataert (1993), *Ottoman manufacturing in the age of the Industrial Revolution*, Cambridge Univ. Press.; Mehmed Genç (1994), "Ottman Industry in the Eighteenth Century: General Framework, Characteristics, and Main Trends", *Manufacturing in the Ottoman Empire and*

以降の不可逆的な経済・社会の衰退論は再考されつつあるといえよう。

捺染技術の西方への伝播を考察するなかでオスマン帝国における綿織物の消費を分析した深沢克己によれば、富裕な特権身分が集中する近世イスタンブルでは最高級の繊維製品や毛皮が消費され、一方で一般消費には安価な国産品が供給される消費の二重構造が見られた[10]。またカータルトは、オスマン帝国における消費、特に奢侈品のそれがもつ重要性を美術史・染織史のみならず社会経済史的に分析する方向性を提起した[11]。

さらに 2004 年には、オスマン帝国社会経済史家のスライヤ・ファーローキーらによって、服飾を製造・消費・文化の多方面から分析する試みが提示されている[12]。このように定説の軌道修正が試みられ、近世オスマン帝国の社会・経済の見直しが進められるなか、消費市場、特に高級品や奢侈品消費に関する分析は、オスマン経済・社会の構造を理解するうえで、注目すべき重要なキーワードのひとつとなっているのである。

Turkey, 1500-1950, D.Quataert (ed.), N.Y., pp.59-86.

[10] 深沢克己(1986)「レヴァント更紗とアルメニア商人　―捺染技術の伝播と東西貿易―」『土地制度史学』111 号、18－37 頁（深沢克己(2007)、『商人と更紗』東京大学出版会に再録）。

[11] *Consumption Studies and the History of the Ottoman Empire, 1550-1922, An Introduction*, D.Quataert (ed.), N.Y., 2000.

[12] *Ottoman Costumes, From Textile to Identity,* S.Faroqhi & C.K.Neumann(eds.,), Istanbul, 2004.

１．17 世紀前半のイスタンブル公定価格（ナルフ）台帳からみる絹織物消費市場

第 1 節では、17 世紀前半にイスタンブルで作成された 2 点の公定価格（ナルフ）台帳をもとに、同地における絹織物消費市場を分析する。絹織物に加えて、毛、綿、麻等の繊維製品も比較の対象として用いる。また、イスタンブル以外の都市の事例として、同時期に作成された、アナトリア西部の都市ブルサのナルフ台帳も利用する。

使用する史料は、トルコ史家キュチュクオウルが編纂公定した、以下のイスタンブル向けナルフ台帳（1600 年、1640 年）[13]と、ブルサ向けナルフ台帳（1624 年）[14]の計 3 点である[15]。1624 年のナルフ台帳には、イスタンブル、バルケスィール、ブルサ、テキルダーのナルフ価格が記載されているが、このなかで繊維製品価格に言及しているのは、ブルサの部分だけであることから、本論文ではブルサの部分のみを分析の対象とする。史料の詳細については、序論Ⅲ「史料について」の項を参照されたい。

これらの台帳における商品区分には、統一基準が設けられていない。1600 年台帳では、大部分が、例えば「アバ毛織物職人／商人」のような職種毎に区分されている。一方、1640 年台帳では、1600 年台帳と同様の区分と、「ペルシアのアバ毛織物の公定価格(*es'âr-ı aba furûşân*)」のような商品による区分が混在している。いずれにしても、本論文で扱う繊維製品に限っていえば、同じ台帳内で、同種商品や職種の重複はほぼ皆無である。

また個々の区分内で、さらに細分類されている場合もある。例えば 1640 年台帳では、「ペルシアの毛織物の公定価格(*es'âr-ı furûşân*)」内に、「ロンドン[毛織物](*londura*)」、「イギリスのサーイェ毛織物(*sâye-i ingiliz*)」、「カージー毛織物(*karziyye çuka*)」が含まれる。

1600 年台帳における区分は全体で 65、1640 年台帳では同 67 である。このうち、本論文では繊維関連に的を絞り、1600 年台帳は 10、1640 年台帳では 14 の区分を分析の対象とした。また 1624 年のブルサ台帳では、8 の区分を選んだ。内訳は次頁の通りである。(p. は校訂史料のページ)。

---

[13] Mubahat Kütükoğlu（1978）"1009/1600 Tarihli Narh Defterine göre İstanbul'da Çeşitli Eşya ve Hizmet Fiatları"（「1009/1600 年付けナルフ台帳によるイスタンブルにおける諸物資の価格と賃金」）, *Tarih Enstitüsü*, 9.; Id., (1983), *Osmanlılarda Narf Müessesesi ve 1640 Tarihli Narh Deteri*,（『オスマン朝におけるナルフ制度と 1640 年付けナルフ台帳』）, İstanbul.

[14] M. Kütükoğlu Id.,(1984), "1624 sikke tashihinin ardından hazırlanan narh defterleri",（1624 年の貨幣改正の後作成されたナルフ台帳）*Tarih Dergisi,* 34.

[15] 他に編纂校訂されているナルフ関係史料は、以下の通りである。Ö.L.Barkan (1942),（「15 世紀末の主要ないくつかの都市における物資と食料の価格を統制する目的で制定された法令」）イスタンブル、ブルサ、エディルネのナルフ価格について。; H. Sahillioğlu (1967), "Osmanlılarda Narh Müessesesi ve 1525 Yılı Sonunda İstanbul'da Fiyatlar"（「オスマン朝におけるナルフ制度と 1525 年末のイスタンブルの物価」）, *Bergelerle Türk Tarihi Dergisi*, 1.

1600 年（イスタンブル）

Kumaş narhları	織物の公定価格	pp.18-19
Çukacılar narhı	毛織物の公定価格	pp.19-20
Alaca narhları	アラジャ絹綿交ぜ織りの公定価格	p.21
Sof ve muhayyer narhları	山羊毛織物と光沢波紋織物の公定価格	p.21
Dübendciler narhı	綿モスリン職人/商人の公定価格	p.21-22
Bogasıcılar narhı	綾織り綿職人/商人の公定価格	pp.33-34
Bezciler narhı	綿織物職人/商人の公定価格	p.34
Kebeciler narhı	極薄フェルト職人/商人の公定価格	pp.39-40
Abacılar narhı	アバ毛織物の公定価格	pp.40-41
Keçeciler narhı	フェルト職人/商人の公定価格	p.41

1640 年（イスタンブル）

Es'âr-ı	*Sof-furûşân*	ペルシア[風]の山羊毛織物の公定価格	pp.109-110
Es'âr-ı	*Çuka- furûşân*	ペルシア[風]の幅広[毛]織物の公定価格	pp.110-112
	Londura	ロンドラ[毛織物]	pp.112-113
	Sâye-i İngiliz	イングランドのサーイェ[毛織物]	p.112
	Karziyye çuka	カージー毛織物	p.113
Es'âr-ı	*Akmişe*	織物の公定価格	pp.113-117
Es'âr-ı	*Serâser-i altunum-gümüşün*	金銀セラーセルの公定価格	pp.117-126
Es'âr-ı	*Bogasıcıyân*	綾織り綿織物職人/商人の公定価格	pp.126-132
Es'âr-ı	*Alaca*	アラジャ絹綿交ぜ織りの公定価格	pp.135-136
Es'âr-ı	Bezzâzân	綿織物職人/商人の公定価格	pp.156-158
Es'âr-ı	*'Aba-furûşân*	ペルシア[風]のアバ毛織物の公定価格	pp.168-170
Es'âr-ı	*Keçe-i Sofya*	フェルトの公定価格	p.170
Es'âr-ı	*Dimi-furûşân*	ペルシア[風]ファスティアンの公定価格	pp.170-171
Es'âr-ı	*Keçe-i 'Acem*	ペルシア[風]のフェルトの公定価格	p.180
Es'âr-ı	*Selânik ve Edirne*	テサロニキとエディルネのフェルトの公定価格	p.180
Es'âr-ı	*Velense*	厚地の毛布の公定価格	p.180
Es'âr-ı	*Kebe- furûşân*	ペルシア[風]極薄フェルトの公定価格	pp.182-183

1624 年（ブルサ）

Kettancılar	亜麻布職人/商人	p.144
Kazzazlar	絹織物職人/商人	p.144
Abacılar	アバ毛織物職人/商人	p.144
Kumaşcılar	織物職人/商人	pp.144-145
Kumaş kaftancılar	カフタン生地職人/商人	p.146
Bezzazlar	綿織物職人/商人	pp.149-150
Bogasıcılar	綾織り綿織物職人/商人	pp.150-151
Çukacılar	毛織物職人/商人	pp.151-152

（1）．イスタンブル公定価格台帳にみられる絹織物製品

下記の表をみるとわかるように、イスタンブルの 2 点の台帳では、記載された絹織物のうち、セラーセル（*serâser* 金銀糸織）、ヴェルヴェット（トルコ語名チャトマ *çatma* またはカディフェ *kadife*）、紋織り（トルコ語名ケムハー*kemhâ* など）の記載が目立つ。これらは全て、金銀糸を用いることも多い重厚な織物である。厚地の絹織物は、記載された絹織物全 187 点のうち、100 点を占める。一方比較的薄地の絹織物は全体で 45 点記載され、そのなかではサテンが最も多い。絹綿交ぜ織りは全体で 42 点みられ、波型模様が付いたモアレ（トルコ語名ハーレ *hâre*）の記載が最も多い。

マッキーによれば、オスマン帝国の宮廷では、セラーセル、ヴェルヴェット（チャトマ）、紋織り（ケムハー）の 3 種が最も愛好されており、その傾向はナルフ台帳の記載でも確かめられる[16]。以下では、イスタンブルの 2 点の台帳に記載された絹織物について概観する。

名称	● 厚地 ○ 薄地 ▲ 交ぜ織り	1600 年（イスタンブル）	1624 年（ブルサ）	1640 年（イスタンブル）	記載数計
金糸織り（セラーセル）	●	4	0	15	19
ヴェルヴェット（チャトマ、カディフェ）	●	8	7	15	30
紋織り（ケムハー）	●	6	8	7	21
紋織り（ダーラーイー）	●	2	10	6	18
紋織り（ディーバー）	●	1	0	9	10
紋織り（セレンク）	●	1	0	1	2
厚地織物小計		22	25	53	100
サテン（アトラス）	○	6	14	9	29
タフタ	○	4	0	4	8
ハターイー	○	0	0	3	3
ヴェール	○	3	0	0	3
ロカ	○	2	0	0	2
薄地織物小計		15	14	16	45
モアレ（ハーレ）	▲	2	9	5	16
アラジャ	▲	5	4	0	9
クトゥヌ	▲	6	0	2	8
バグダーディー	▲	0	5	2	7
サンダル	▲	0	0	2	2
交ぜ織り小計		13	18	11	42
総計		50	57	80	187

[16] L. Mackie (2004) , “Ottoman *kaftans* with an Italian identity”, *Ottoman Costumes, From Textile to Identity,* Istanbul, p.219.

セラーセル

セラーセルは、金糸または銀糸入りで織られた織物で、縦糸は絹糸、緯糸には金と銀の合金糸または銀糸を用いる。非常に重く、貴重で高価であった。宮廷で恩寵の御衣用として最も多く使用された。極上品はイスタンブルの宮廷工房で織られたものである。無地と花模様の 2 種類があった。金銀糸が織り込まれるので、この布地を織る織機は絶えず政府の監督を受け、金銀の消費量を抑えるため、しばしば勅令によって織機の台数を減らす努力がはらわれた[17]。

大宰相ソコルル・メフメト・パシャ（在位 1565-78 年）が就任した当初に 318 台あったセラーセル織機は、彼の晩年には 268 台に減少した。

セラーセルには必ず官営（ミーリー）と捺印され、この官印の無い布地の販売は禁止された。イスラム暦 1022 年 9 月（西暦 1613 年）にイスタンブルの法官に対して発布された勅令において、セラーセル織機は 100 台に限定し、それ以上の操業を禁止する旨命ぜられている。

17 世紀以降セラーセルの品質が低下しはじめ、ムラート四世期（1623－40 年）には、金銀糸入りの織物の製造が[一時的に]禁止されたこともあった。セラーセルは、それを着用する人々の地位に応じて種々の名称で呼ばれた。例えば「高官中の高官（ハス・ウル・ハス）のセラーセル」、「大臣（ヴェジール）のセラーセル」、「総督（ベイレルベイ）のセラーセル」等の如くである。そのほかに、中級や並みの品質のものも存在した。

図 25（右上）セラーセルのカフタン、17 世紀、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵.
図 26 （左下） セラーセルのカフタン、16 世紀後半、同蔵。
図 27（右下） 同部分

[17]ヒュルヤ・テズジャン（高橋昭一・護雅夫訳）（1980）「スルタンの衣裳とトルコの織物」『トプカプ宮殿博物館　スルタンの衣裳』護雅夫監修、トプカプ宮殿博物館全集刊行会、145 頁。

ヴェルヴェット

ヴェルヴェットは、布面全体あるいは一部に、輪奈（パイル）あるいは毛羽を立てた織物である。二種の経糸を用い、一種類は地組織をつくり、他の一種類が立てられて輪奈をつくる。輪奈をそのままにすれば輪奈ヴェルヴェット、輪奈をカットすれば切ヴェルヴェットになる。なお、緯糸で輪奈をつくる場合もある[18]。経または緯に針金を織り込み、織りあげて後にこれを抜き取るとき、経または緯の輪奈をなしているのを切り取って毛羽を立たせる。

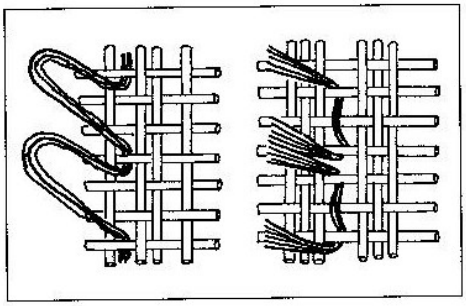


図 28 ビロード（ヴェルヴェット）織りの組織
左　輪奈ビロード
右　切ビロード

イタリア製のヴェルヴェットは、2 段パイルで、同じ織物の表面には、カットしていない輪奈のループと、金銀糸のループが、カットされた輪奈（立毛）と混在している。一方、トルコ製ヴェルヴェットは、輪奈（全て立毛）＋紋織り金銀糸の緯糸＋模様のない中抜き（＝輪奈がなく地組織が見えている）部分のサテン織（経糸）から構成され、輪奈は全てカットされて、立毛にされている[19]。

ヴェルヴェットの歴史は、羊毛で輪奈をつくったエジプトのコプト織にまでさかのぼることができる。ヨーロッパで本格的に制作されたのは 13 世紀以後のことで、ヴェネツィアで発展した。つややかで豪華な感じが珍重され、ことに宗教儀式の衣服として用いられた、装飾効果をあげるために金銀糸を織りこんだり、あるいは輪奈を一部切らずにおいて、毛羽と対照させたりする工夫もなされた[20]。

トルコ語では、一般にカディフェがヴェルヴェットを指すが[21]、カディフェのほかに、チャトマもヴェルヴェットの一種である。カディフェとの差異は、花模様やその他の柄の毛足が長い点にある。イスラム暦 886－891 年（西暦 1481－86 年）に、県（サンジャック）の総

---

18 佐野敬彦（1999）『織りと染めの歴史　西洋編』昭和堂、41 頁、註 6.
19 L. Mackie (2004), “Ottoman *kaftans* with an Italian identity”, pp.225-6.
20 日本には天文年間（1532 - 55 年）にポルトガル人の手で伝えられた。「ビロード」はポルトガル語ヴェルード *veludo* またはスペイン語 *velludo* のなまりである。17 世紀初めから京都の西陣その他で生産されるようになった。別珍、本天、コール天、輪奈天、フラシ天、金華山織等の種類がある(『平凡社世界大百科事典』、第 26 巻、114 - 5 頁)。
21 *İpek* (2001), Glossary.

督に転出した皇子たちに与えられた品物のなかに、「主馬頭（ミラーフール）用カフタン」があげられ、「ブルサ製のチャトマ・ヴェルヴェット製で金糸入りである」と述べられている[22]。オスマン帝国文書におけるヴェルヴェットの初出は、15 世紀半ばのものである[23]。1502 年に作成されたイスタンブルとブルサの市場監督官に対する布告(*Bursa Ihtisâb Kanunnâmesi*)にも、ヴェルヴェットが含まれている[24]。

近年の調査によって、イスタンブルのトプカプ宮殿に残るスルタンとその家族が着用した衣装に使われたヴェルヴェット（チャトマ）は、イタリアからの輸入品が多くを占めていることが判明している。また室内装飾やソファのクッションに使われることも多かった[25]。

図 29(左)　ヴェルヴェット（カディフェ）のカフタン、チンタマニ模様（三円文と二重波状線）、メフメト 2 世、15 世紀、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵。

図 30(右)　イタリア製ヴェルヴェット（チャトマ）のカフタン、ムラト三世（1574－95 年）、同蔵。

---

22 テズジャン（1980）「スルタンの衣裳」、132 頁。
23 テズジャン（1980）「スルタンの衣裳」、138 頁。
24 イスタンブルの布告では、紋織り(*kemhâ*)、ヴェール(*vale*)、ヴェルヴェット(*kadife*)、タフタの 4 種類、一方ブルサの布告には、金糸入りヴェルヴェット(*müzehheb (altınlı) kadife*)、紋織り(*kemhâ*)、ヴェール(*vale*)、タフタ、サテン(*atlas*)、*meton*、*bürümcük* の 7 種類が含まれている（H.İnalcık (2008), *Türkiye Tekstil Tarihi üzerine araştırmalar*, Istanbul.p.246）。.
25 長さ 14 ズィラー（410cm）、幅 1.25 エンダーゼ（80cm）の室内装飾用の織物や、長さ 2 エンダーゼ（120cm）で幅 1.25 エンダーゼ（80cm）のクッション用チャトマがあった。1680 年付けの宝蔵台帳には、ブルサ以外にもビレジック、マルディン製の室内装飾用チャトマの名称が記録されている（テズジャン（1980）、「スルタンの衣裳」132 頁）。

紋織り

図 31（下）ケムハーのカフタン、バヤジット 2 世、15 世紀、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵。

紋織りは、ヨーロッパではブロケードともよばれ、上記のヴェルヴェットのような輪奈や毛羽を作らずに、織物の表面に模様を織りだした織物である。ケムハー(*kemhâ*), ダーラーイー(*dârâyî*)、ディーバー(*dîbâ*)、セレンク(*serenk*)、ゼルバーフト(*zerbâht*)等いくつかの種類が見られる。

ケムハーは、多色の絹糸を用いてランパ構造[26]で織られ、金銀糸で紋様をだした織物である[27]。経糸緯糸とも絹糸を使用し、上層の緯糸が別に金糸か銀糸かで強化された二重織の布地である。16 世紀までイランのヤズド製やヨーロッパ製のケムハーが用いられていたが、それらにまじって、ブルサの赤紫のケムハー、アマスィヤの赤いケムハー等の記録も見られる。なかでもバヤズィド 2 世（在位 1481－1512 年）のケムハー製カフタンが有名である（図 31）。これは経糸が 8,000－9,000 本であり、ギュリスターニー（「バラ園」）とよばれる紋様が施されている。

金銀糸の有無、色、文様、産地等により様々な名称が付けられ、またイタリアのランパ織等外国からの輸入品も多かった[28]。カフタン以外に帯やクッションにも使用された。イスタンブルでも宮廷付属の工房で作られ、宮廷付属の織り機工房平面図には、ケムハー製造専用区画が示されている。ケムハーはオスマン帝国の宮廷における需要が非常に多く、担当責任者には重要な人物が任命された[29]。

---

26 ランパは紋織物の技法のひとつで、平織あるいは斜光織の地に緯糸の浮きで文様がつくられるものである。文様と地の組織が同じではないため、浮きあがってみえる。サミが文様と地が同じ組織であったのに対して、文様がより明確にあらわされることとなった。歴史的にはサミの発展したもので、10 世紀末ごろから始まった（佐野（1999）『織りと染めの歴史—西洋編』、41 頁、註 4。）。サミも絹の紋織りの技法のひとつで、経糸が二種類、緯糸は四種類までの色糸を使い、文様部分を地部分も斜交組織となっているものである。西アジアでササン朝ペルシア以来用いられ、13 世紀末ごろまで続いた。サミはギリシア語で 6 本の糸または 6 枚綜絖を意味する「エクザミトス(*hexámitos*)」から始まり、変化してイタリア語のシャミート(*sciamito*)からフランス語のサミ（あるいはサミット）になった。ビザンチン、イスラーム初期、イタリア中世の絹織物に見られる。ヴェネツィアのシャミートは厚地の絹織物で、一般に深紅だが他にも様々な色があり、ヴェルヴェットに似た織物であった（*Tessuti nel Veneto*, (1993), Glossario, pp.27-28.）。

27 セルバーフトよりは安価で、セレンクよりも高価な織物であるとされ（*İpek* (2001), Glossary）、これを、立毛のないヴェルヴェット（カディフェ）と分類する研究者もいる（サバハッティン・バトゥル（高橋昭一・護雅夫訳）（1980）、「トルコの織物について」『スルタンの衣裳』52 頁。）。

28 基本は 8 種類で、「単色」、「ペシュリー」、「金糸入り」、「ドラービー」、「捺染」、「ブルサ赤紫」、「アマスィヤ赤」、「バラ園」である。その他に、金糸入り多彩、帯用、クッション用、ヤズド三円文、ケフィリー、白生地、ヨーロッパ製、ヤズド格子模様等がある。1680 年付の宝蔵台帳には、ジェノヴァ製、多色ヴェネツィア製、同キオス製、黄色キオス製（ソファ用）、白生地等のケムハーが記録されている（テズジャン（1980）、「スルタンの衣裳」140 頁）。

29 19 世紀中葉、スルタン・アブドゥルメジットがヘレケに織物工場を開設した際にも、ケムハー部門が付設されている。ケムハー製造 局長（ケムハージュバシュ）メフメット・アーの遺言に従って、1650 年にイスタンブルのフェトヒーイェ・モスクの付近に「ケムハー」の名を冠した礼拝堂が建てられた（テズジャン（1980）、

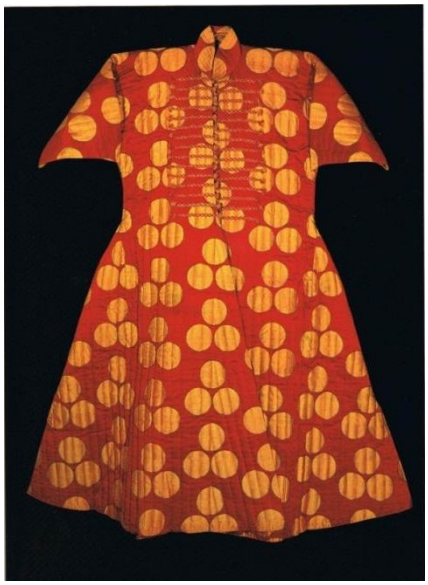


図 32　（左）ケムハー子供用カフタン、17 世紀、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵。
図 33　（右）カフタン、セレンキ（シャーベネッキ）、セリム 1 世、16 世紀、同蔵。

ダーラーイー(*dârâyî*)は、イランに由来する多色・厚地の絹織物で、金銀糸を使用して織った。ダマスクスで作られる類似品が「ダマスクスのダーラーイー」とよばれる等、産地の名を冠すことが多かった[30]。

ディーバー（*dîbâ*）は、経糸にも緯糸にもねじりがかけてある厚地の絹織物で、もっぱらカフタン用に使用される[31]。花模様の高価な絹織物で、金糸を用いることもある。フランス語で ”*brocard*” と呼ばれる、代表的な紋織りのひとつである。「ペルシア織り」、「ダマスクス織り」、「ジェノヴァ・レペ織り」、「七色ペルシア織り」、「ネムチェ（オーストリア）織り」[32]、「ヴェネツィアのディーバー」、「イスタンブルの金銀糸入り朱色のディーバー」、「ヨーロッパのディーバー(*Dîbâ-yi Frengî*)」「インドのディーバー(*Dîbâ-yi Hindî*)」、「ダマスクスのディーバー(*Dîbâ-yi　Şam*)」等産地を名称としたものが多く記録されている[33]。

セレンキも絹織物であるが、金属糸の代わりに黄色の絹を使い、ランパ織構造で織られた絹織物である[34]。赤紫の地色で、模様が入り三色で織られているものが多い。セラーセルよりも廉価なため、イスラム暦 985 年（西暦 1577－78 年）に「イスタンブルにおいて 100 台以上のセラーセル用織機を稼働させないこと。ただし、残りの織機所有者は損害を被らない

「スルタンの衣裳」、140 頁)。
30 Mine Esiner Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”, *Tarih Dergisi,* 33, p.310.
31 *İpek* (2001), Glossary
32 1680 年付の宝蔵台帳より（テズジャン（1980）「スルタンの衣裳」163 頁)。、
33 テズジャン（1980）「スルタンの衣裳」163 頁; M.Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”, p.311.
34 *İpek* (2001), Glossary;バトゥル(1980)「トルコの織物」p.52;テズジャン(1980)「スルタンの衣裳」150 頁。

ため、セレンキを織るのが適当である」旨の命令が出された。セレンキに三円文のあるものをシャーベネッキ（図 33）、無地のものをサーデ・セレンキという[35]。

本論文で取り上げた台帳には記載がないが、ランパ構造で織られた金糸入りの多色絹織物としてゼルバーフトもある[36]。花柄と横縞があり[37]、「ヴェネツィアの［ゼルバーフト］」と名付けられたものは、君主たちへの贈答品に用いられた[38]。

トプカプ宮殿に残存する衣装には、ダマスクを使ったものもある。ダマスク織りは、経繻子（経糸が多く表面にあらわれているもの）と、緯繻子（緯糸が多く表面にあらわれているもの）の組み合わせで地と文様をあらわすものである。絹以外に木綿、亜麻でも織られるが、一色で、光線の反射で地紋のように文様が浮き出る（図 34）。経糸と緯糸の色を変えた二色ダマスク織りもある[39]。

図 34　ダマスクのカフタン、部分、オスマン 2 世（在位 1618－1621）、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵。

35 テズジャン（1980）、「スルタンの衣裳」150 頁。
36 *İpek* (2001), Glossary
37 M.Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”, p.333.
38 Idem. p.340.; バトゥル（1980）、「トルコの織物」52 頁。
39 佐野（1999）『織りと染めの歴史—西洋編』、21 頁、註 3。

薄地絹織物

2 点のナルフ台帳には、薄地の絹織物であるアトラス（サテン）、綿絹の交ぜ織りではモアレ（ハーレ）の記載数も多くみられる。ナルフ台帳から見る限り、こうした比較的安価で軽量な絹織物も、17 世紀前半のイスタンブルでは、商品として重要な地位を占めていたことがわかる。

トルコ語でアトラスとよばれるサテンは、繻子組織に織った生地である（図 35）。織物の表面に糸が長く浮き出て並んでいるため、糸の方向には平らですべりがよく、光沢に富む点が特色である。細い絹糸で堅く織られ、たいていは無地であり、地に刺繍のあるものもある。光沢があるために、装飾用の生地として用いられ、平滑である点を利用して裏地にも使われる。一般的には緋色であるが、スルタンのカフタン用にはブルーか緑色のアトラスが使われることもあった。色や縞の種類、産地によって、多様な名称が付けられる。オスマン帝国では、イスタンブル製のアトラスが最も美しいとされた[40]。

図 35　サテン（アトラス）のカフタン、スレイマン 1 世、同蔵.

「フィレンツェのアトラス(*atlas florentin*)」は、犠牲祭の時に警固兵長（ボスタンジバシュ *bostancıbaşı*）に対し、君主の[衣服の]裾に接吻した後に与えられる習慣となっていた。この際には 7 枚の衣服(*donluk*)が与えられたという[41]。

アトラス（サテン）と同様の平織絹織物に、タフタがある。タフタは経緯とも練絹糸[42]を用いる。経糸は、太さは緯糸の約半分で、しかも密度は緯糸の倍以上もあり、したがって緯の方向にうねがある。色糸で織った無地もの、縞もの等がある。生地は堅く張りがあり、ドレス類に適している[43]。語源はペルシア語で「織物」をさす *tafté* であり、トルコ語を通じてフランス語の *taffetas* となり、他のヨーロッパ語へ普及した[44]（次頁図 36）。

---

[40] 1680 年付け宝蔵台帳には次のようなアトラスの種類がみられる。すなわち縦縞（タクラル）、横縞（チュブクル）、白生地（サーデ）、ケトシレズ、多色（エルヴァン）、スルマ・イ・エルヴァーニー、ギュルニューミー（「バラのかんばせ」）、大理石（メルメリー）、メルテバーニー、フィレンギー（「ヨーロッパ製」）である。オスマン帝国の末期には、白生地で銀糸の刺繍入りのアトラスもあったという記録がある（テズジャン（1980）、「スルタンの衣裳」124 頁）。

[41] M.Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”, p.302.

[42] 生糸や玉糸を製錬してセリシンを除いた糸で、撚りがかけられていない。

[43] 「タフタ」『平凡社世界大百科事典』19 巻、421 頁。

[44] *Tessuti nel Veneto* (1993), Glossario, p.29.

図 36　タフタの子供用カフタン、16－17 世紀、同蔵。

タフタの語源はアラビア語の *attabi* であるともいわれ、この織物が製造されていたバグダードの街区名(*al-'Attãbiyya*)からとられているとも考えられている[45]。タフタと同様イスラーム世界に起源をもつ類似の絹織物に、イタリアで製造された、波型模様のタビー(*tabi*)がある。

ハターイーも古い歴史を持つ絹織物の一種で、絹糸と金糸とで織られた堅い布地である。地は黒く金銀糸を用いる。経糸は生糸で、これが布地に必要な強さを与える。緯糸は、よりをかけた 2 本の絹糸と 1 本の金糸とからなっている[46]。この布地の名称は 16 世紀の後半以後に用いられ始めたが、語源は「カタイ(*Catay*)」つまり中国である。細い茎の上のハスの花や、中国由来の文様を用いた文様が施された[47]。スルタンのドゥシュ・カフタンに使われる他、宮廷において婦人服用として大量に使われた[48]（図 37）。ロカ（*Loka, Loktay*）も、中国風の絹織物で、ケルメス（緋色）染めに長い黄色の斑点が施されている[49]。

図 37
ハターイー（「中国風」）のカフタン、18 世紀、クリーム色地に濃いベージュの模様、同蔵。

本論文で取り上げたナルフ台帳に記載はないが、ジャンフェス（*Canfes*）は、1 本の経糸と 1 本の緯糸で交代に編むように織られる。極薄で艶がなく、常に無地である。艶消しの表

45 *Tessuti nel Veneto* (1993), Glossario, p.29.; *Lo Zingalli, Vocabolario della Lingua Italiana*, (1999).
46 M.Özen(1980/81), "Türkçe'de kumaş adları",p.316.
47 *İpek* (2001),Glossary.
48 1680 年付の宝蔵台帳にはハターイーの種類として、金糸入り、白生地、金縞模様入り、白生地インド織り、多色インド織り等があげられている。1687 年付けのテルヒース（大宰相がスルタンに提出した報告書の要旨）によると、ハレムの婦人たちのために 7080 ズィラー（約 5305m）の金糸入りハターイーと、4800 ズィラー（3596m）の白生地ハターイーとが購入された（テズジャン（1980）、「スルタンの衣裳」164-5 頁）。
49 M.Özen(1980/81), "Türkçe'de kumaş adları",p.325.

面に、ハーレと同様に光沢のある波模様がみられる[50]。

交ぜ織り

綿絹混紡の交ぜ織りは、主にモンゴルやペルシアを原産として、アナトリアを中心に生産されており、オスマン朝にとっていわば「地元の」織物である。本論文で扱った 3 点のナルフ台帳では、モアレ（ハーレ、ゲズィ）の記載が比較的多い。

モアレ（ハーレ、ゲズィ）は、経糸が絹糸、緯糸は絹と綿の混紡で、目の詰まった木目模様（ハーレ、モアレ *moiré*）のある布地である。緯糸は綿糸によって強化されているので、経糸より太く、一見してそれとわかる。布地の表面の木目模様は、織りあげられた後、2 本のローラーの間を通して圧搾して揉むことによってできる。16 世紀以降にみられるこの種の絹で、スルタンのドゥシュ・カフタン（外カフタン）が作られた。1680 年付宝蔵台帳には、金銀糸入り、白生地、色無地ほか、鱗状や日月文のものもある[51]（図 38）。

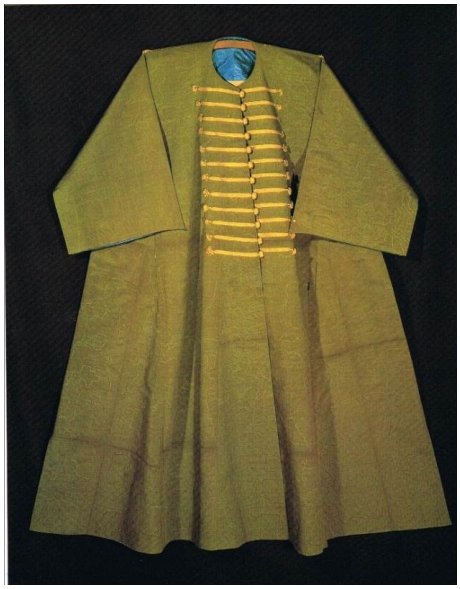


図 38　ハーレのカフタン、スレイマン 1 世、同蔵。

アラジャとクトゥヌは、共に絹と綿の交ぜ織りでほぼ同種の織物である。アラジャは、一般にケルメス色の地の上に黄色の縞がある。カシュガル原産とされ、13 世紀以降モンゴルからインド、イラン、トルコで用いられた絹と綿の交ぜ織り類を、アラジャ(*alaca*)あるいはクトゥヌ(*kutnu*)と呼んだ。14 世紀にはモンゴル系の君主に献呈され、15 世以降、オスマン朝の史料にその名があらわれる。

サテン（アトラス）や紋織り（ケムハー）の代わりに、安いカフタンの類はアラジャで作られた。ティールとエルズィンジャン産を筆頭に、オスマン帝国内の多くの産地で作られている[52]。インドネシアでは、同種の織物がイカットとよばれている[53]。

50　「玉虫色(*yanardöner*)」「小鳩の胸色(*kumrugöğsu*)」、「紫」「将棋の駒(*Dama taşı*」等の種類があった（M.Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”,p.306.）。
51　テズジャン（1980）、「スルタンの衣裳」、129 頁。
52　ブルサ、アレッポ、マニサ、カスタモヌ等。現在もボドゥルム、Arapkir、ガズィアンテップで古い手本にのっとって織られている。「五本指(*başparmak*)」ともいう（H.İnalcık(2008), *Türkiye Tekstil Tarihi üzerine*

クトゥヌも綿絹混紡で、縞模様の交ぜ織りである。ダマスクスが主要な産地であったが、バグダード等の地名がつけられた商品も見られる[54]。黄色とケルメス色 2 色の縞の上に、花模様やその抽象系の模様が織り込まれ、縁飾りが織られる場合もある[55]（図 39-42）。ダマスクス近郊で織られた交ぜ織りには、黄色とケルメス色の縞模様で、絹 1 と綿 3 の[混紡糸]で織られるチターリ(*çitarı*)がある[56]。

サンダル(*sandal*)も絹綿交ぜ織りで縞模様の織物である。サンダルは縞 1 本が絹、1 本が綿で、枝(*dal*)や斑点(*benek*)等の模様もあった。ビュリュムジュク(*bürümcük*)という生糸または綿との交ぜ織りで、縮れた薄い織物も知られている。最も美しいものは、Üsküp, İşkodra、ブルサとカスタモヌで織られ、他にも非常に多くの名称が確認されている[57]。

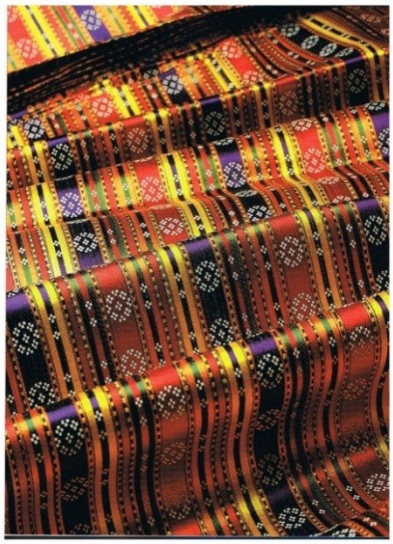


図 39（左） クトゥヌ

図 40（中）クトゥヌの子供用カフタン、キルティング、1610 年頃、スルタン・アフメド 1 世の皇女のものと推定される、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵.

図 41（右）クトゥヌのエンターリ

---

araştırmalar, p.107; M.Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”,p.300.）。

53 H.İnalcık (2008), *Türkiye Tekstil Tarihi*, pp.102-103.

54 「バグダードのクトゥヌ(*kutni-i Bağdad*)」「ダマスクスのクトゥヌ(*kutni-i Şam*)」（*İpek* (2001), Glossary）。

55 M.Özen(1980/81), “Türkçe’de kumaş adları”,p.324.

56 Idem., p.309.

57 Idem., p.306.

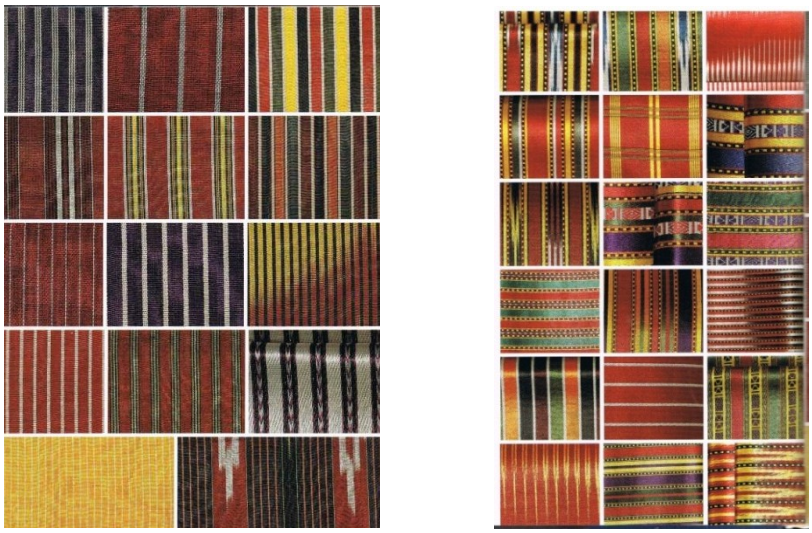


図 42　各種のクトゥヌ。

まとめ

以上みてきたように、1600 年と 1640 年のイスタンブル公定価格台帳から見る限り、同地における絹織物消費は、重厚な商品（セラーセル、ヴェルヴェット、紋織り）の記載が最も多いことから、高級品に対する関心が最も高かったと考えられる。一方で比較的安価で薄地の商品（サテン）や綿と絹の交ぜ織り（ハーレ、アラジャ、クトゥヌ）の記載も少なくない。つまり広い価格帯の商品が首都住民の需要を満たす、消費の多重構造が提示されているといえる。

それでは、これらの絹織物はどこで製造され、イスタンブルに持ち込まれたのであろうか。周知のようにオスマン朝の経済背策の基本姿勢は、第一に臣民への十分な物資の供給にあった。それゆえ、輸入を奨励し輸出を抑える政策が展開されたのである[58]。この基本方針をもとに生活必需品や製造業の原材料に対して、もっとも厳しい注意が払われたが、絹織物をはじめとするいわゆる奢侈品に対しても、同様の姿勢がとられたことは間違いない。なぜならば、後述するように、帝国を統治するスルタンおよびその家族や政府高官および軍人らは、帝国の威信をかけて豪華に飾り立てた姿を内外に示すことを常に求められており、首都イスタンブルは、そうした顕示的消費の最前線だったからである。

そこで次節では、17 世紀前半のナルフ台帳に記載された絹織物の産地を分析し、イスタンブルを核として絹織物産地が結ぶ地域の広がりを考察する。

---

58 H.İnalcik (1970), “The Ottoman economic mind and aspects of the Ottoman economy”, *Studies in the economic history of the Middle East,* M.A. Cook ed., London, pp.207-18.

（2）絹織物の産地

17 世紀前半のイスタンブル公定価格（ナルフ）台帳には、当時各地の生産拠点から送られた各種の絹織物が記載されている。その生産地は、ヨーロッパからインドに至る帝国内外の広い範囲にわたって展開している（次頁表 1）。

前述のように、これらの台帳では、金糸織り（セラーセル）、ヴェルヴェット、紋織りの 3 種類の記載が最も多くみられることから、これらの重厚な絹織物に対する需要が高かったことは、ほぼ間違いない。

1640 年台帳では、全ての絹織物に関して 1600 年台帳より記載数がかなり増えている。記載される絹織物の半数以上が高級品で占められていたことと併せると、17 世紀前半のイスタンブルにおいて、高級絹織物のような付加価値の高い商品（奢侈品）の需要が伸びていた、つまり奢侈品市場が成長していたとも考えられる。以下では、記載された絹織物産地を概観する。

セラーセル　（文末資料１）

金糸織り（セラーセル）は、もっぱらイスタンブルで製造されており、これは 1600 年、1640 年両方の台帳に共通している。

1600 年台帳では、セラーセルの記載は 4 点にとどまっているが、1640 年台帳では 36 点（12 点の商品各々について、最上級・中級・下級の 3 種類が記載されいてる）となっている。つまり時代が下がるにつれて最高級品であるセラーセルの記載数が激増し、商品情報がより詳細になることから、世紀中葉にかけて、イスタンブルにおける奢侈品市場の成長があったことが示唆される。

ヴェルヴェット　（文末資料 2）

ヴェルヴェットについては、右の表の様に、1600 年台帳では、産地が記載された商品は全部で 8 点で、内訳はヨーロッパ 2 点、イタリア（ジェノヴァ）1 点、キオス 1 点、アレッポ 1 点、産地記載無しが 3 点である。1640 年台帳になると、全体で 15 点記載され、その

ヴェルヴェットの産地	1600 年	1640 年
ヨーロッパ	2	6
ジェノヴァ	1	-
ヴェネツィア	-	2
イスタンブル	-	3
イスタンブル＋ブルサ	-	4
キオス	1	-
アレッポ	1	-
記載なし	3	-
計	8	15

表 1　ナルフ台帳に記載された絹織物数（1600 年, 1624 年 1640 年）

産地　　年	1600 イスタンブル	1624 ブルサ	1640 イスタンブル	計	備考
イスタンブル	5	-	55	60	（＋イスタンブルとブルサ 4）
ヨーロッパ	7	5	17	29	
キオス	4	9	5	18	（＋ブルサとキオス 2）
フィレンツェ	5	2	9	16	
ブルサ	4	6	4	14	（＋イスタンブルとブルサ 4） （＋ブルサとキオス 2）
ヴェネツィア	-	7	5	12	
バグダード	1	6	2	9	
アレッポ	1	1	5	7	（＋シリアとアレッポ 5）
シリア	1	4	1	6	（＋シリアとアレッポ 5）
ペルシア	-	3	3	6	
シリアとアレッポ	-	-	5	5	（＋シリア 6＋アレッポ 7）
インド	4	-	1	5	
イスタンブルとブルサ	-	-	4	4	（＋イスタンブル 60＋ブルサ 9）
ヤズド	-	-	4	4	
メネメン	-	-	3	3	
エジプト	-	3	-	3	
ブルサとキオス	1	-	-	1	（＋ブルサ 9＋キオス 18）
マルディン	1	-	-	1	
ホムス	1	-	-	1	
ダミエッタ	1	-	-	1	
ブーラーク	1	-	-	1	
ジェノヴァ	1	-	-	1	
スペイン	1	-	-	1	
フランス	-	-	1	1	
その他	4	2	1	7	
産地記載なし	19	20	-	39	
計	62	68	125	255	

内訳をみると、ヨーロッパとイタリア製ヴェルヴェットの記載が増加（3→8）しているが、他方で 1600 年台帳に記載されていなかったイスタンブルとブルサのヴェルヴェットが、1640 年台帳では 7 点記載されている。

ではヴェルヴェットの商品価値、つまり価格のランキングはどうであろうか。残念ながら 1600 年台帳では、記載された価格がどれくらいの長さ（ズィラー、アルシンなど）あたりのものなのかを示す単位が記載されておらず、比較が不可能である。しかし仮に全て同じ長さでの価格で記載されているとすれば、価格の高い順に並べてみると、産地が記載されているものでは、①ヨーロッパ②アレッポ③ヨーロッパ③ジェノヴァ⑧キオスの順となる。このことは、ヨーロッパとジェノヴァのヴェルヴェットが、同種の商品カテゴリーの中では比較的高級品に属していたことを示唆しているといえよう。

1640 年台帳では、ヴェルヴェットは全て 1 ズィラー（≒68cm）あたりの価格で記載され、全 15 点のうち 1 位から 7 位までをヨーロッパとヴェネツィアのヴェルヴェットが占めている。価格の違いは、産地だけでなく、染め（ケルメス染めが最も高価である）、金銀糸の有無等にも左右されるが、いずれにしても、1640 年台帳では、ヨーロッパとイタリア（ヴェネツィア）のヴェルヴェットは、高級品に属する商品が主であることがわかる。

つまり、1600 年・1640 年台帳からみるかぎり、イスタンブルにおけるヴェルヴェット市場は、17 世紀初頭にはヨーロッパとイタリア製品が主であったが、世紀中葉にかけて商品が多様化している。特にオスマン帝国の製品の成長が著しいが、世紀中葉においてもヨーロッパとイタリアの製品が最も高級であり、地元の商品はその下位に置かれていたということになる。

紋織り　（文末資料 3）

ヴェルヴェットにみられる産地評価は、イスタンブルにおける人気商品であった紋織りについても認められる（右の表参照）。1600 年台帳では、全 10 点のうち、ヨーロッパとイタリア（フィレンツェ）の製品（5 点）が、僅かにオスマン帝国の製品（3 点）よりも記載数が多い。

紋織りの産地	1600	1640
ヨーロッパ	3	6
フィレンツェ	2	3
ヴェネツィア	-	2
イスタンブル	1	5
キオス	2	3
シリアとアレッポ	-	3
ペルシア	-	2
ヤズド	-	1
記載なし	2	-
計	10	25

1640 年台帳では、紋織りの記載数は全 25 点であり、1600 年台帳から 2.5 倍増えている。その内訳を地域別にみてみると、ヨーロッパとイタリア製紋織物（11）よりも、オスマン帝国以東[151]（14）の記載数が多い。

紋織りの価格ランキングはどうであろうか。1600 年台帳では、産地が記載されている紋織物全 6 点のうち、上位はヨーロッパとフィレンツェの製品が占めている。1640 年台帳では、記載された全 25 点のうち、価格第 1 位はペルシア製のディーバーである。以下 3 位にサファヴィー朝のヤズド、4 位にペルシアの製品がランクされる。しかしこの 3 点を除くと、ヨーロッパ、ヴェネツィア、フィレンツェの紋織りが上位 14 位を独占している。

したがって、2 点の台帳から見る限り、17 世紀前半のイスタンブルにおける紋織物市場は、ヨーロッパとイタリア（ヴェネツィア、フィレンツェ）の紋織りが高級品に属し、その下位にオスマン帝国の製品が位置している。しかし世紀中葉には後者の方が記載数を増やしており、中下級製品が多様化して市場が成長していることを示している。

図 43 （左） 紋織り、ペルシア（ヤズド又はイスファハン）、16 世紀末-17 世紀初め、フィレンツェ、バルジェッロ美術館蔵

図 44（右）紋織り、ペルシア（ヤズド?）、16 世紀後半、同蔵。

[151] 本論文では、オスマン帝国およびそれより東の地域を指す。

薄地絹織物　（文末資料 4）

薄地絹織物の産地について見ると、右記のように 1600 年台帳に記載された全 15 点の内訳は、ヨーロッパおよびイタリア（フィレンツェ）製品（5 点）と、オスマン帝国以東の製品（6 点）の記載数がほぼ拮抗している。

1640 年台帳では、全 19 点の薄地絹織物のうち、ヨーロッパ・フランス・イタリア製品の記載（8 点）よりも、オスマン帝国製品（11 点）の方が記載数が多い。

薄地絹織物の産地	1600	1640
ヨーロッパ	2	3
フィレンツェ	3	4
ヴェネツィア	-	-
フランス	-	1
イスタンブル	-	2
ブルサ	-	2
キオス	1	2
ブルサとキオス	1	-
シリア	-	2
アレッポ	-	2
ヤズド	-	3
インド	1	-
産地記載なし	4	-
計	15	19

薄地絹織物の価格ランキングは、1600 年台帳では、ヨーロッパやイタリアの製品がほぼ上位を独占している。一方 1640 年台帳では、1 位から 3 位までは全てサファヴィー朝のヤズドの製品である。以下は 4 位から 9 位まではヨーロッパとフィレンツェの製品、10 位から最下位 19 位までは、ほぼオスマン帝国の製品である（11 位にフィレンツェ、12 位にフランスの製品が入っている）。

したがって、2 点の台帳から見る限り、ヴェルヴェットや紋織り等の重厚な絹織物と同様、薄地絹織物市場においても、ヨーロッパとフィレンツェの製品が上位にランクされる。一方で、オスマン帝国以東の商品の記載数が過半数を占め、重厚な絹織物に比較すると、地元調達の傾向が強まることがわかる。

「ヨーロッパ製」絹織物の実態

ここまでの分析において、ヴェルヴェット・紋織り・薄地全ての絹織物において、「ヨーロッパ製(*firengî*)」絹織物が、高級品に属するものとして頻出していることが目立つ。これは、以下に述べる交ぜ織り（絹綿）には見られない傾向である。実はこうした「ヨーロッパ製(*firengî*)」絹織物は、実際にはヴェネツィアやフィレンツェ、ルッカ等、北イタリアの都市で生産された製品である可能性が高い。なぜならば北イタリアは、ヴェルヴェットや紋織り等の重厚な絹織物に関して、17 世紀前半のヨーロッパの高級絹織物産業において、技術・意図・品質において圧倒的な優位にたってい

たと考えられるからである[152]。

具体的な産地ではなく「ヨーロッパ」という名称でまとめた理由は、以下のように推測できる。ここまで見てきたように、具体的な産地名が記載されているヨーロッパの都市は、もっぱらヴェネツィアとフィレンツェに限られている。両者は 17 世紀以前から、ヴェネツィアの場合は主に地中海の中継交易、フィレンツェの場合は毛織物輸出や生糸購入等を通じて東地中海地域と深く結びついていた。その過程で両者の名が東地中海地域の人びとにとって馴染み深いものになっていた可能性は否定できない。したがって 17 世紀に両都市からの絹織物輸出が増加していった際に、数あるイタリアの絹織物生産地のなかでもっぱらこの二都市の名がナルフ台帳に残され、（東地中海地域の人びとにとって比較的馴染みの薄い）他のヨーロッパの生産地の製品、および産地不明のヨーロッパ製製品（ここにはヴェネツィアおよびフィレンツェ製品も含まれる可能性がある）が、まとめて「ヨーロッパ製」と記載されたとも考えられる。

あるいは、しばしばオスマン帝国と戦争状態に突入したヴェネツィアの製品について、オスマン帝国の人びとの心情を考慮してあえてヴェネツィアの名前を付けず、「ヨーロッパ製」として販売していた可能性もある。

しかしイタリア半島から東地中海地域への絹織物輸出の実態については、ヴェネツィアとフィレンツェを除くとこれまでほとんど検討されていない。ナルフ台帳における「ヨーロッパ製」絹織物実態解明は、イタリア半島および他のヨーロッパの生産地の輸出動向を突き合わせて、総合的に判断すべき今後の課題である。

またキオス製絹織物の記載も目立つが、キオスはアナトリア西部海岸に近接する島で、1346 年から 1566 年までの約 200 年間ジェノヴァの支配下にあり、その後オスマン帝国に征服された。同島では、絹織物業のほかに、おそらくジェノバ支配期に始まった養蚕業や撚糸製造業もおこなわれていた。

15 世紀末、ジェノヴァ本国から最新の絹織物製造の技術が伝えられたことから、同地の絹織物はイタリアの技術を用いた製品であったことがわかる。16 世紀初めキオスのマオーナ（ジェノヴァから植民した人々の組合）が、オスマン帝国へ納める貢納の一部を絹織物で代納することが取り決められており、キオス絹織物産業とオスマン宮廷との密接な関係が示されている[153]。ブルサやイスタンブルでは、ジェノヴァ系のキオス商人が絹織物の取引に参加していた[154]。

---

[152] S. Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy".; F. Battistini (2000), "La tessitura serica italiana", pp.335-351.

[153] ジェノヴァのキオス支配については、以下を参照。P. Argenti (1958), *The occupation of Chios by the Genoese and their administration of the island, 1346-1566,* Cambridge Univ. Press. ; ジェノヴ

つまり、キオスの絹織物はイタリア製絹織物と、技術や意図の点でかなり類似した製品であった。実際、本論文で分析の対象としている 1600 年と 1640 年のナルフ台帳に記載されたキオスの絹織物は、重厚な絹織物が多い一方で交ぜ織りには登場しない点で、イタリア製が主と推測されるヨーロッパおよびイタリア製品と同様の傾向がみられる。

重厚なイタリア製高級絹織物は、イタリア系のキオス製品の人気にもみられるように、17 世紀前半のイスタンブル市場においてナルフ台帳に記載すべき重要な商品であったと認識され、その数を増やしつつあったのである[155]。

交ぜ織り　（文末資料 5）

最後に交ぜ織り（綿絹）について検討する。1600 年台帳に記載された 15 点の交ぜ織りには、価格の単位が記載されていない。したがって価格の比較は難しいが、前述の絹織物（セラーセル、ヴェルヴェット、紋織り、薄地絹織物）と全く異なる特徴として、記載がある産地が、全てオスマン帝国以東であることがあげられる。

1640 年台帳では、全部で 11 点の交ぜ織りが記載されている。ここでもオスマン帝国以東の製品（6 点）が目立つが、特筆すべきことは、前述の絹織物（紋織り、薄地）とは逆に、ほぼ同数のヨーロッパとイタリア（ヴェネツィア、フィレンツェ）製品（5 点）が登場していることである。後者は、1600 年台帳には全く記載されていない。

さらに 1640 年台帳における交ぜ織り価格ランキングには、この製品市場の特徴が、より明確に表れている。つまりヴェルヴェット、紋織り、薄地絹織物とは異なり、ヨーロッパとイタリアの交ぜ織りがもっぱら上位にランクされるのではなく、それらはむしろ中位～下位に位置づけられているのである。

したがって公定価格台帳から見る限り、17 世紀前半のイスタンブルにおける交ぜ織り市場は、オスマン帝国以東が独占的である。しかし世紀中葉になると、中級以下の

ァのキオス殖民およびマオナの活動については、以下を参照。永沼博道（1993）「中世ジェノヴァ植民活動の特質--マオ-ナ・ディ・キオの事例によせて」『関西大学経済論集』Vol.42, No.5, 837～854 頁。

[154] 17 世紀中葉の旅行家エヴレヤ・チェレヴィーの記述によれば、キオス製のディミや紋織り絹織物（ケムハー）が、イスタンブルのガラタの絹織物市場で売られていた。キオスでは、ペルシア風文様の絨毯製造も行われており、繊細な文様の礼拝用絨毯が各地に残されている。同島の絹織物製造業は近世を通じて活動しており、18 世紀の段階でも、工房が 50 から 60、約 1200 台の機が稼動していた。*İpek* (2001), pp.173-175.; P. Argenti (1953), *The costumes of Chios : their development from the 15th to the 20th century*, London.

[155] たとえばイスタンブルにおけるヴェネツィア製絹織物の高い評価については以下を参照 D. Sella (1961), *Commerci e industrie a Venezia*,; M.Iida-Sohma (2006), "I tessuti serici veneziani e il mercato ottomano nell'epoca premoderna (secoli XVI-XVIIo)," *Mediterranean World*, XVIII, pp. 63-73.

ヨーロッパやイタリアの製品が登場し、地元や東方の製品と混在競合していたことがわかる。

まとめ

1600 年、1640 年のイスタンブル公定価格台帳からみるかぎり、17 世紀前半のイスタンブルにおけるヴェルヴェットおよび紋織絹織物市場は、ヨーロッパとイタリア（ヴェネツィア、フィレンツェ）の製品が価格の上位を占めている。こうした傾向は、特にヴェルヴェットに顕著にみらる。ヴェルヴェットは、17 世紀初頭にはヨーロッパとイタリア製品が主であった。世紀中葉にかけてオスマン帝国の製品の成長も著しく、商品が多様化するが、それでも世紀中葉においてもヨーロッパとイタリアの製品が最も高級であり、地元の商品はその下位に置かれていた。

紋織りも同様にヨーロッパとイタリア（ヴェネツィア、フィレンツェ）の製品が高級品に属し、その下位にオスマン帝国の製品が位置している。しかし世紀中葉には後者の方が記載数を増やしており、中下級製品が多様化して市場が成長していることを示している。

薄地絹織物市場においても、ヴェルヴェットや紋織り等の重厚な絹織物と同様、ヨーロッパとフィレンツェの製品が上位にランクされる。一方で、オスマン帝国以東の商品の記載数が過半数を占め、重厚な絹織物に比較すると、地元調達の傾向が強まることがわかる。

また交ぜ織り市場は、2 点の台帳から見る限り、世紀前半はオスマン帝国以東が独占的であるが、世紀中葉になると、中級以下のヨーロッパやイタリアの製品が登場し、地元や東方の製品と混在競合していたことがわかる。

2 点の台帳に記載された絹織物は、伝統的な厚地の高級品が大部分を占め、金銀糸入り、刺繍入り、高価な赤色染料であるケルメスで染められたもの等も多い。一方で、サテンやタフタ等、比較的薄地の織物も記載されているが、これらの製品もケルメス染め等が多くみられ、大半の薄地絹織物は、価格を見る限り、厚地織物に匹敵する高級品であったと考えられる。

イスタンブルの絹織物消費が高級品中心であった背景には、第 1 章でみたように、オスマン帝国において、自らの政治的社会的プレステージを目に見える形で内外に大々的に披露する顕示的消費文化が根強く存在しており、そこで絹織物が非常に重要

な役割を果たしていたことが考えられる[156]。そうした文化の中心は、当然のことながらスルタンが君臨する宮廷を有する首都イスタンブルであった。

したがって、17 世紀前半の 2 点のイスタンブル公定価格台帳において、伝統的な厚地の高級品およびこれに匹敵する高級薄地絹織物の記載が中心となっていることは、オスマン朝政府が、イスタンブルにおける高級絹織物の需要を深く考慮し、その供給と価格動向に最深の注意を払っていたことを示している。

さらに 3 点のナルフ台帳に記載された絹織物製品の数を見てみると、1600 年から 1640 年の間に、64 から 81 に増えている（産地の数は 16 で大きな変化はない）。つまり、台帳に記載される絹織物の商品情報が、時代が下がるにつれてより詳細になったのである。このことは、前述のように記載される絹織物の半数以上が高級品で占められていたことと併せると、17 世紀前半のイスタンブルにおいて、高級絹織物のような付加価値の高い商品（奢侈品）の需要が伸びていた、つまり奢侈品市場の成長を示していると考えられるのである。

[156] 例えば、E.Boyal & K. Fleet (2010), *A Social History of Ottoman Istanbul*, 第 2 章。

（3）絹織物以外の繊維製品

ここまで 17 世紀前半に作成された 2 点の公定価格（ナルフ）台帳を用いて、イスタンブルにおける絹織物消費市場を考察した。ところで当然のことながら、これらの台帳には、絹織物以外の繊維製品、つまりアンゴラ山羊毛織物（モヘア）、毛織物、フェルト、綿織物、麻織物等に関する記述がみられる。これら絹以外の繊維製品もまた、帝国内外からイスタンブルにもたらされていたが、製品の性質からみて、用途は絹織物よりもさらに多様であったと推測される。そこで、台帳に記載された絹以外の繊維製品の詳細とその産地や価格をもとに、絹織物消費市場との比較をおこない、それらの特徴を概観する。

なお羊毛を圧縮して製造するフェルトは、布地ではあるが厳密には「織物」とは言えないため、本論文では分析の対象から除いた。ちなみに 1600 年、1640 年台帳共に、記載されたフェルトの産地は全てオスマン帝国以東である。

アンゴラ山羊毛織物（モヘア）と毛織物（文末資料 6）

絹以外の繊維製品のなかで、一般に最も高価であったのは、アンゴラ山羊の毛織物、つまりモヘア毛織物(トルコ語でソフ *sof*、波線模様のあるものはムハッヤル *muhayyar* とよばれる)であった。また薄地のチュハー毛織物（*çuha*）のなかでも、ケルメス染の商品は、絹織物に匹敵する高い価格がつけられている。

モヘアと毛織物は、絹織物製品と比較すると、その特徴がいくつかあげられる。まず絹織物製品に頻出した「ヨーロッパ製」という名称の商品が全くみられないことである。また絹織物製品に多く見られたイタリア（フィレンツェ、ヴェネツィア）製品に加えて、商品によってはイングランド、パリ、カルカソンヌ等、北西ヨーロッパの製品が登場する。特に薄地のチュハー毛織物の高額商品と、厚地のサーイェ毛織物にこの傾向が見られる。高額のチュハー毛織物は、産地が記載されていないものが大半であるが、価格面でヴェルヴェットや紋織りの重厚な絹織物に匹敵する評価を受けている。

モヘア、ロンドラ毛織物、カージー毛織物、アバ毛織物にはヨーロッパ方面の製品は全く見られない。「ロンドラ」毛織物(*londura*)は、本来はロンドンのラシャ織り(broadcloth)を指すが、オスマン帝国では、むしろこの製品の模造品（主にフランス製）

を意味する[157]。カージー毛織物(*kerziyye*)、 アバ毛織物(*aba*)はともに厚地の毛織物である。17 世紀前半のナルフ台帳から見る限り、イスタンブル市場においては、これらの毛織物は基本的にオスマン帝国内で調達されるものであったといえる。

つまり、17 世紀前半のナルフ台帳から見る限り、イスタンブルで売買された毛織物は、絹織物と比較すると、産地の分布が若干西方に拡大する一方で、オスマン帝国内の製品の比重が、より増大したということになる（資料編・図 56-58）。

毛織物について、もう少し詳しく見ると、1600 年台帳には、モヘア 4 点、チュハー毛織物 13 点、その他の毛織物が 5 点の計 22 点が記載されている。産地の記載があるものは少ないが、ヴェネツィア製が 4 点で最も多く、次いでモヘアの産地としてトスヤ 2 点、ボドルム 1 点、ウストルムジャ 1 点、カルチン 1 点、クルド 1 点がみられる。モヘアは長さの単位が記載されていない。一方でケルメス染のチュハー毛織物は、1 ズィラーあたりの価格がヴェルヴェットや紋織りの絹織物の最上位と並ぶ高い価格が記載されていることから、重厚な絹織物に匹敵する高額商品であったことがわかる。

1640 年台帳では、モヘア 27 点、毛織物 61 点（チュハー23、ロンドラ 6、カージー 4、アバ 20、サーイェ 8）の計 88 点が記載されており、記載数は 1600 年台帳から 4 倍に増えている。モヘアはアンカラがアンゴラ山羊毛の特産地である[158]ことから、同地の製品が大半を占める。毛織物は 5 種類に大別され、最多はチュハー毛織物である。その内訳はパリ 2 点、カルカソンヌ 3 点、イングランド（またはパリかカルカソンヌ）2 点、テサロニキ 1 点、産地記載なしが 12 点となっており、約半数の産地が記載されていないことから、同商品内での価格の比較は難しい。しかし「パランゴン」と付記されたものに代表される、上位にランクされた商品は、1600 年台帳と同様に、1 ズィラーあたりの価格がヴェルヴェットや紋織りの絹織物の最上位と並ぶ高い価格がつけられ、重厚な絹織物に匹敵する高額商品であることが示されている。

「ロンドラ」毛織物(*londura*)は、1640 年台帳では 6 点記載され、価格からみると、前述の薄地のチュハー毛織物の下位製品と同等となる。カージー毛織物(*kerziyye*)は、1640 年台帳に記載された価格をみると、ロンドラ毛織物よりもさらに下位に位置づけられている。アバ毛織物(*aba*)は 1640 年台帳には 20 点記載されており、産地は全てオスマン帝国内である。アバと同じく厚地の毛織物であるサーイェ毛織物(*sâye*)は、アバ毛織物とは逆に、記載された 8 点のうち、産地の記載がない 1 点と、ベンリュレル製を除いた 6 点がイタリア（フィレンツェ）とイングランドが各 3 点となっている。サ

157 *Turkish-English Lexicon.*
158 「アンゴラ」の名称は、特産地アンカラの地名に由来する。

ーイェ毛織物は、1640 年台帳に記載された価格をみると、ロンドラ毛織物とカージー毛織物の中間に位置づけられる。

綿織物と麻織物　（文末資料 8,9）

イスラーム世界では、一般にムスリム男性は絹を肌の上に直接着ることはせず、綿や麻の下着を絹の衣服の下に着用していた。しかしスルタンや一部の高級官僚は、絹製の下着をつける場合もあった。ハンマーム（トルコ式蒸し風呂）では、非常に手の込んだ刺繍が施された綿のタオルやバスタオルが使われることもある。

綿および麻織物について、1600 年台帳では 38 点の綿織物が記載されている（ベズ 14、モスリン 11、ボアシ 9、ファスティアン 2、アスタル 2）。産地は全てオスマン帝国以東（オスマン帝国およびそれより東方の地域）である。1600 年台帳の記載をみると、記載すべきとされた産地はほぼその商品に固有のものとなっており、一定のブランド化傾向がみられる。

例えば、もっとも一般的な綿織物であるベズ綿布[159]の産地は、1600 年台帳では黒海沿岸のリゼ、スィノプ、エレウリと、アナトリア西部のアクジャシェヒール、ナズィッリ、メネメン、ベイシェヒールが記載されている[160]。これらの産地は、他の綿織物には記載されていない。モスリン[161]、ボアシ[162]、ファスティアン、アスタルについても同様のことがいえる。産地が記載されていない商品も 9 点あり確定はできないが、1600 年台帳から見る限り、当時綿織物の産地はかなりの程度まで専門化していたことになる。

薄地綿布のモスリンは、1600 年台帳では大半の商品について産地の記載がないが、2 点については、語源であるモスルの地名が記載されている。ボアシ綿布は、9 点のうち産地記載のない 3 点を除くと、アナトリア西部のボルル、アレッポ、ペルシアがみられる。

1640 年台帳では、綿織物の記載に変化が見られるだろうか。同台帳には 61 点の綿織物（ベズ 14、ボアシ 24、ファスティアン 9、アラジャ 3、その他 11）と 2 点の麻織物が記載されている。産地が全てオスマン帝国以東であることは、1600 年台帳と同様

159 麻との交ぜ織りで製造される場合もある。
160 アコヴァ（*Acova*）、,ジャニク(*Canik*)については場所を特定できなかった。
161 トルコ語で *dülbend* または *tülbent*。薄地の綿織物。産地名モスルを語源とする。
162 トルコ語で *bogasi* または *boğasi*。縁取りや裏地に使用される、綾織り（ツイル）の綿織物。イタリアの *boccasino*, フランスの *bogasin*, スペインの *bocaci* に相当する。

である。一方 1640 年台帳では、1600 年台帳にはみられなかったイスタンブルの地名が付いた製品が目立つ（ベズ 4、ボアシ 9）。

製造の専門化という点では、イスタンブル、キオス、アナトリア西部のマニサを除いて、ほぼ一種類の製品にのみ同一の地名が記載されていることから、1640 年台帳においても、前述 3 都市を除いて、1600 年台帳と同様、綿織物の産地がかなり専門化していたことが示されている。

綿製品産地としてのイスタンブルの成長は、同地の人口増大の結果とも考えられる。1640 年台帳では、イスタンブル製綿織物は絹の縁取り付きの極上品等、日用品のレベルを超えた高級品も確認される。またイスタンブルにもたらされる綿織物のなかには、カスタモヌ（黒海地域の都市）のケルメス染ボアシ綿布等も多くみられた。これらの高級綿織物の存在は、17 世紀前半のイスタンブルにおける、奢侈品市場の盛況を示唆している。

さらに綿織物全体に共通している特徴として、規格の多様さがあげられる。これは産地の豊富さが第一の要因であると推測されるが、綿織物の用途が、絹や毛織物に比べてはるかに多様であったことも背景にあると考えられる。

1600 年と 1640 年台帳では、中下級商品の記載も多く見られ、イスタンブルにおいて経済状況や身分に応じた消費の多重構造が展開されていたことがわかる[163]。残念ながら中流やそれ以下の人々の衣生活について、残存史料および現物の情報は非常に乏しい。この点は今後の課題となろう。

ここまで、公定価格台帳からみた 17 世紀前半のイスタンブルにおける綿織物市場を概観したが、その特徴は以下のように考えられる。綿織物は、世紀前半を通じてほぼ全てオスマン帝国およびその東方地域から調達されていることから、産地の分布は、絹織物のそれと比較すると、かなり東方に移動する（資料編・図 60）。世紀中葉にかけてイスタンブルが製造拠点としてかなり成長してブランドを確立し、商品は日用品に加えて、ケルメス染綿織物等の高級品も多い。イスタンブルと若干の例外を除くと、台帳に記載されるような有名な綿織物産地は、かなり特定の商品製造に専門化していたことが示されている。

[163] 深沢克己（2007）『商人と更紗』172 頁。

2. 1624 年ブルサ台帳との比較

アナトリア西部に位置する古都ブルサは、16 世紀中葉まで、ペルシアから陸路キャラバンで運ばれる高級生糸の取引地、ならびに付加価値の高い重厚な絹織物製造の中心地であった。ブルサ絹織物製品の最大の消費地は、宮廷をかかえる首都イスタンブルであり、イスタンブルの宮廷からブルサに送られる絹織物の注文は、ヴェルヴェットやセラーセル、紋織り等の重厚な最高級絹織物が大部分を占めていた。

しかし 1535 年頃を境に、イスタンブルの宮廷からブルサへの注文は中級以下の製品に移行し、かわってイスタンブルが高級絹織物製造の中心地として成長する。この変化の理由として、ブルサの絹織物製品が、イスタンブル宮廷が求める高い品質を満たすことができなくなったことがあげられている。オスマン朝政府は、イスタンブル宮廷内に絹織物工房を設置し、ブルサの職人を招いて技術を教授させ、セラーセル、ヴェルヴェット、紋織りの製造をおこなった。それらの技術は程なく宮廷の外へも伝わり、宮廷内外で活発な絹織物製造が展開する。さらに政府主導の事業として、ブルサ周辺で養蚕業が促進され、17 世紀に入るとそれが本格化していく[164]。

このように、17 世紀前半にはイスタンブルが国内最大の（かつ地中海地域で最大級の）高級絹織物消費地であることに加えて、国内最大級の高級絹織物製造地に成長した。一方ブルサは、高級絹織物製造の首位はイスタンブルに譲ったものの、中下級絹織物製造をおこない、さらに、当時のオスマン帝国で最も活発な商品集散地のひとつとしての機能を維持していた[165]。

したがって、ブルサで製造される絹織物および同地に供給される帝国内外の絹織物は、地元で消費されるだけでなく、かなりの部分が他の地方都市に送られていたと考えられる。したがってブルサ公定価格台帳を分析することによって、ブルサにおける絹織物消費傾向の考察に加えて、地方都市のそれを多少とも類推することも不可能ではない。

そこで、以下では 1624 年に作成された、ブルサ向け公定価格台帳[166]を用いて、同地における絹織物消費市場を考察し、イスタンブルとの比較を行う。なお、ブルサ台帳では、以下のカテゴリーの内容を検討の対象とした。(p.は校訂史料のページを示す)。

---

164 オスマン帝国の絹織物製造については *İpek* (2001), pp.155-175 を参照。
165 Haim Gerber (1988), *Economy and society in an Ottoman city: Bursa, 1600-1700*, Hebrew University.
166 M. Kütükoğlu(1984), “1624 sikke tashihinin ardından hazırlanan narh defterleri”, （1624 年の貨幣改正の後作成されたナルフ台帳）, *Tarih Dergisi,* 34.

Kettancılar	亜麻布職人/商人	p.144
Kazzazlar	絹織物職人/商人	p.144
Abacılar	アバ毛織物職人/商人	p.144
Kumaşcılar	織物職人/商人	pp.144-145
Kumaş kaftancılar	カフタン生地職人/商人	p.146
Bezzazlar	綿織物職人/商人	pp.149-150
Bogasıcılar	綾織り綿織物職人/商人	pp.150-151
Çukacılar	毛織物職人/商人	pp.151-152

絹織物　（文末資料 11）

1624 年のブルサ台帳において、絹織物の記載数は、イスタンブルの 2 点の台帳（1600 年、1640 年）の中間に位置する。セラーセルは、1600 年・1640 年台帳に見られるような布地や衣服単位での記載はなく、もっぱらキャップ、クッション、スカーフ等の小物が記載されている。

ヴェルヴェットは、記載された 7 点は全てオスマン帝国領内の製品で、うち 6 点はキオスの製品である。この点で、ヨーロッパやイタリアの製品が上位を占める 1600 年・1640 年のイスタンブル台帳と大きく異なる。

紋織り絹織物は、記載された 18 点のうち、ヴェネツィア製の 1 点と産地の記載がない 3 点を除くと、他は全てオスマン帝国以東（オスマン帝国領とそれより東）の製品（ブルサ 5、キオス 3、シリア 3、ペルシア 2、アレッポ 1）である。ここでもヴェルヴェットと同様に、イスタンブル台帳と比べると、産地の分布はかなり東方に移動する。

薄地絹織物は 16 点記載され、サテンが大半（14 点）である。産地の記載がない 5 点を除くと、ヴェネツィア 4 点、ヨーロッパ 3 点、フィレンツェ 2 点、ブルサ 2 点となり、ヨーロッパとイタリアの製品が圧倒的に多い。これは、1600 年・1640 年のイスタンブル台帳の記載にかなり似た分布となっている。

交ぜ織り絹織物は、記載された 18 点のうち、産地の記載がない 7 点を除くと、ヴェネツィア製 2 点とヨーロッパ製 1 点以外は、全てオスマン帝国以東の製品（バグダード 5、エジプト 3）である。これは、ヨーロッパやイタリアの製品が混在する 1640 年イスタンブル台帳よりも、1600 年イスタンブル台帳に近い分布である。

毛織物・麻織物・綿織物　（文末資料 12,13）

毛織物は、全部で 17 点（チュハー11、カージー2、アバ 4）記載されているが、半分強（9 点）に産地の記載がないため、分析は難しい。産地が記載されているもののうち、ヴェネツィア（カージー）、ロンドン（チュハー）各 1 点を除くと、他はオスマン帝国の製品である。

麻と綿織物は、全部で 24 点（麻 2、ベズ綿布 4、ボガシ綿布 11、モスリン 5、アスタル綿布とファスティアンが各 1）記載されている。1600 年・1640 年のイスタンブル台帳と比較すると、産地が全てオスマン帝国以東であることは共通しているが、1624 年ブルサ台帳では黒海沿岸地域（リゼ、カスタモヌ等）の製品の記載がない。

以上 1624 年ブルサ公定価格台帳にみられる絹織物の記載について概観したが、1600 年、1640 年のイスタンブル台帳と比較すると、その特徴は以下のように考えられる。

まず全体的な傾向として、イスタンブル台帳と比較すると、オスマン帝国以東の製品の割合が大きいことが挙げられる。特にヴェルヴェット、紋織り、交ぜ織りにこの傾向が見られる。イスタンブル台帳において最高級~上位にランクされていた、ヨーロッパやイタリアのヴェルヴェットや紋織りは、ブルサ台帳にはほとんど記載されていない。一方で、薄地絹織物のみはヨーロッパとイタリア製品の記載が大半を占め、イスタンブル台帳と同様の産地分布を示している。

第二の特徴として、交ぜ織りの割合が比較的大きいことがあげられる。前述のように、イスタンブルの 1600 年台帳と 1640 年台帳の比較においては、時間の経過とともにセラーセルや紋織り等の重厚な絹織物の記載が増え、相対的に薄地や交ぜ織りの記載の割合は減少する。両者の間の年代に位置する 1624 年のブルサ台帳では、交ぜ織りの割合は、1600 年のイスタンブル台帳の比率に近い。

このように、1624 年のブルサ公定価格台帳から見ると、地方都市ブルサでの需要は、首都イスタンブルの公定価格台帳においてみられたような、イタリアを中心とした輸入品を頂点とする重厚な絹織物人気とは異なることがわかる。ブルサ台帳には重厚な絹織物も記載されているが、セラーセルの記載は小物類に限られ、ヴェルヴェットや紋織りの大部分は、ヨーロッパ製品の下位に位置する国産の製品である。ブルサ台帳の記載は、同地における高級品の嗜好が、比較的軽量な薄地絹織物（ヨーロッパやイタリアのケルメス染）や、交ぜ織り（ケルメス染、金銀糸入り、刺繍入り）に向かう傾向を示している。

宮廷や高級官僚、上流階級等の富裕層を多く抱える首都イスタンブルと、地方都市とでは、絹織物消費の内容に差異が生じることは、ある程度予測が可能である。しか

し本論文では、17 世紀のブルサないしは他の地方都市に関する公定価格台帳は、1624 年のブルサ台帳 1 点しか利用できなかった。したがって、ここに挙げた傾向がブルサ特有のものか、あるいはこの時期に特有のものであるか、等の比較検討はできなかった。イスタンブル以外の地方都市における絹織物消費の分析は、今後の課題である。

3.ヴェネツィア製繊維製品の位置づけ

本論文で分析の対象としている 1600 年・1640 年のイスタンブル公定価格台帳、および 1624 年のブルサ公定価格台帳において、ヴェネツィア製と記載された絹織物、毛織物は下記の表のようになっている。綿と麻に関しては、綿絹交ぜ織りを除いて記載がない。それではこうしたヴェネツィアの繊維製品は、公定価格台帳ではどのように評価されていたのであろうか。

1600 年、1624 年、1640 年の公定価格台帳における絹織物の記載数
(F=フィレンツェ　／　V=ヴェネツィア　／ E=ヨーロッパ)

ナルフ台帳	1600 年（イスタンブル）			1624 年（ブルサ）			1640 年（イスタンブル）		
	F	V	E	F	V	E	F	V	E
絹織物　ヴェルヴェット	-	-	2	-	-	-	-	2	6
紋織り	2	-	3	-	1	-	3	2	6
薄地織物	3	-	2	2	4	3	4	-	3
交ぜ織り	-	-	-	-	2	1	2	1	2
毛織物	-	4	-	-	1	-	5	-	-

絹織物

1600 年のイスタンブル台帳には、全 50 点の絹織物が記載されているが、そのなかに「ヴェネツィア製 *Venedik*」と表記された商品は記載されていない。しかしこのことは、当時のイスタンブル市場において、ヴェネツィア製品が全く取引されていなかったことを必ずしも意味しない。

なぜなら、前述のように同台帳には「ヨーロッパ製 *Firengî*」と表記された絹織物が、高級な厚地の商品（ヴェルヴェット、紋織り）を中心に計 7 点記載されており、そのなかにヴェネツィアで製造された絹織物が含まれていた可能性が否定できないと考えられるからである。1600 年当時のヨーロッパでは、こうした高級絹織物製造に関して、北イタリアはまだ圧倒的な優位に立っており、なかでもヴェネツィアは最先端都市のひとつであった[167]。

このように1600年のイスタンブル公定価格台帳からみると、ヴェネツィア絹織物は、当時のイスタンブル市場では未だ独自のブランドを確立するには至っていない。一方

[167] S. Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy", pp. 167-199.; F. Battistini (2000), "La tessitura serica italiana", pp.335-351.

で、「ヨーロッパ製」の重厚な高級絹織物中にヴェネツィア製品が含まれ、「ヨーロッパ製」絹織物として当時のイスタンブル市場で名声を得て需要を確保していた可能性があると考えられる。

次に 1624 年のブルサ台帳をみると、全 57 点の絹織物が記載されているが、そのなかにヴェネツィア製絹織物は 8 点（紋織りケムハー1、薄地サテン 4、絹綿交ぜ織り 2、絹綿交ぜ織りハーレ 1）含まれている。この数は、記載された産地のなかでは地元ブルサ（7 点）よりも多く、キオス（9 点）に次ぐ第 2 位である。特にヴェネツィア製のサテンは、ケルメス染等も含まれ、同種の商品のなかで上位にランクされる高級品である。

16 世紀、ヴェネツィアでは軽量で安価な中級織物に対する需要の増加を受けて、1507 年に絹織物経糸数規制が撤廃され、海外輸出向け絹織物(*drappi da navegar*)の縦糸数が自由化された。その後 16 世紀半ばに再び一時的に規制が強化されたが、布地の軽量化傾向（=経糸数減）は止まらず、結局 1612 年に大幅な規制緩和が行われた。この規定で、ダマスク織り（広幅）とサテン（ケルメス単色ないし多色）の経糸は 6,400 本以上、その他は 5,000 以下と定められた。これは 1457 年の規定と比較して 1/3 減少したことになり、150 年間で布地の軽量化がかなり進んだことがわかる。1612 年の規定では、大半の中級絹織物とドイツ人商館向け絹織物の縦糸数も大幅に自由化された[168]。

布地の軽量化に加えて、16 世紀のヴェネツィア絹織物産業では中・低級絹糸の使用や、他素材の糸との交ぜ織りの発展もみられた。絹糸と異素材との交ぜ織りは元々地中海世界やアジアでは古くから見られたが、ヴェネツィアの政府当局は当初一級品以外の織糸の使用を厳しく取り締まっていた。しかし交ぜ織りへの需要が 16 世紀半ばから急増し、様々な新製品が登場したことから、ヴェネツィア政府当局はこれに追従するかたちで、1580 年に経糸と緯糸に異素材を使用した数種類の絹織物製造を許可している[169]。

16 世紀に絹織物の軽量化が進み、また交ぜ織りが急増した背景には、一方で様々な海外市場の需要に合わせた生産を目指す柔軟な姿勢が、他方で過熱するイタリア半島の絹織物産地間の競争があったと考えられている。そうしたなかで、1572 年にヴェネツィアの絹織物職人集団から政府当局に提出された請願書は、ヴェネツィア絹織物産業におけるオスマン帝国市場の重要性を示すものとして注目に値する。同嘆願書では、

---

[168] Archivio di Stato di Venezia （以下 A.S.V.）Compilzione Leggi Seta. b.349 (Doretta Davanzo Poli (1984), *I mestieri della moda a Venezia nei sec. XIII-XVIII, Documenti,* I, Venezia, pp.61-66).; L.Molà (2000), *The Silk Industry*, p.151.
[169] L.Molà (2000), *The Silk Industry*, p.173, Table 7.1.

「約四半世紀前（1546 年）に設定された古い規制が時の流れと共に時代遅れとなり、絹織物製造工程で重量規制のない[軽い]、安価な国外の生産地の製品がラグーザ、メッシーナ、アレクサンドリア、シリア他の市場でヴェネツィアの製品よりも優位に立っている」、と記されている（[　]内は筆者による加筆）。同嘆願書ではまた、海外輸出向け絹織物に用いる染料の規定量減量も求め、こうした規制緩和によってヴェネツィア製品の値下がりが実現し、再び国際市場で競争力を得るであろうと述べている[170]。

1624 年のブルサ台帳では、8 点（紋織りケムハー1、薄地サテン 4、絹綿交ぜ織り 2、絹綿交ぜ織りハーレ 1）のヴェネツィア製絹織物が台帳に記載すべき商品と認識されている。既に述べたように、当時のブルサはオスマン帝国随一の商品集散地であった。したがって、ブルサにおけるヴェネツィア絹製品に対する高い評価は、帝国内の地方都市に向けて十分な波及効果があり、その結果ヴェネツィア絹製品が当時オスマン帝国の広い地域に浸透していた可能性を示唆している。

前述のヴェネツィア絹織物職人の嘆願書は、ヴェネツィア絹織物産業において中級絹織物に対するオスマン帝国の消費者の好みの変化が重要視されていることを示しているが、そうしたヴェネツィア職人の情報収集と製品製造への努力の成果が、1624 年のブルサ台帳、そして以下に続く 1640 年のイスタンブル台帳におけるヴェネツィア絹製品の評価にあらわれているともいえよう。

1640 年のイスタンブル台帳では、全 80 点の絹織物のなかで、ヴェネツィア製絹織物は 5 点（ヴェルヴェット 2、紋織りのディーバー2、絹綿交ぜ織りのハーレ 1）記載されている。この記載数は、イスタンブル（56）、フィレンツェ（9）に次いで、第 3 位を占めている。イスタンブル製品の記載数が突出して多いのは、製造がイスタンブルに限定されているセラーセルが 36 点含まれていることも影響していると考えられる。

さらに、同台帳には、ヨーロッパ製絹織物が 17 点（ヴェルヴェット 6、紋織のディーバー1・ダーラーイー2・ケムハー3、薄地のサテン 3、絹綿交ぜ織りのサンダル 2）記載されているが、このなかにヴェネツィア製品が含まれている可能性が低くないことは、前述の通りである。

1640 年台帳におけるヴェネツィア製ヴェルヴェットと紋織りの価格をみると、同種の商品の中では高級に属するものであったことがわかる。ヨーロッパ製絹織物（当然ここにもヴェネツィア製品が含まれる可能性が高い）も同様の傾向を示しており、特にヴェルヴェットはヨーロッパとヴェネツィアの製品が上位をほぼ独占しており、こ

[170] A.S.V., Colleggio, Risposta di dentro, fz.5, n.12, 23 marzo 1572 (L.Molà (2000),*The Silk Industry*, p.149).

の製品に関して相当優位に立っていたと考えられる。

マッキーによれば、イスタンブルのトプカプ宮殿に残存する 325 点の衣装のうち、イタリア製の生地を使用したものは 20 点、その大半はオスマン・トルコ語でチャトマと記載されるヴェルヴェットである[171]。このことと、ナルフ台帳におけるイタリア製ヴェルヴェットの評価を合わせて考えるならば、イタリア製のヴェルヴェットは高級品としてオスマン宮廷の外国製高級品の中で高い評価を受けていたことがわかる。

一方でヴェネツィア製の絹綿交ぜ織りの価格をみると、ヴェルヴェットや紋織り等の重厚な絹織物に対する高い評価とは異なり、交ぜ織り全体の中では中級に位置づけられている。それでも、同台帳に記載された交ぜ織り全 11 点のなかに、ヴェネツィア製 1 点、ヨーロッパ製 2 点、フィレンツェ製 2 点が含まれ、これらを合わせて約半数を占めていることから、交ぜ織りに関しても、当時のイスタンブル市場においてヴェネツィアを含む北イタリア製品の名声がある程度確立していたことがわかる。

ここまで 1600 年・1640 年のイスタンブル公定価格台帳および 1624 年のブルサ公定価格台帳におけるヴェネツィア製絹織物に対する評価を考察した。その結果、ヴェネツィア製絹織物は、1600 年の段階ではまだ独自のブランドを確立するには至っていないが、その存在は強く示唆され、1624 年および 1640 年では、産地別記載数が上位 3 位に入り、その製品は重厚な高級絹織物を中心として、高い評価を受けていたと考えられる。

毛織物

1600 年のイスタンブル公定価格台帳には、全 18 点の毛織物が記載されており、そのうちヴェネツィア製毛織物は 4 点記載されている。1624 年のブルサ台帳では、ヴェネツィア製毛織物は 1 点のみ記載され、1640 年のイスタンブル台帳にはヴェネツィア製毛織物はまったく記載されていない。

3 つの台帳に記載されたヴェネツィア製毛織物は、わずか 5 点であり、これらをもってヴェネツィア製毛織物に対する評価を分析することは困難である。ここでは参考程度に考察を行い、この問題については今後の課題としたい。

1600 年のイスタンブル台帳に記載されたヴェネツィア製毛織物（4 点）の価格をみると、台帳に表記された毛織物のなかで 1 ズィラー（*zira'* ≒68cm）あたりの価格が最高額の商品の半額以下であることから、これらはイスタンブル市場では中級の商品で

[171] L.Mackie (2004), “Ottoman Kaftans with an Italian Identity”, pp.219 ff.

あると考えられる。

1624 年台帳には、ヴェネツィア製毛織物は、厚地のカージー毛織物 1 点のみ記載されているが、カージー毛織物はヴェネツィア製を含めて計 2 点しか記載されていないため、ヴェネツィア製品の位置づけは難しい。1640 年台帳にはヴェネツィア製毛織物の記載はない。

以上、僅かな事例から、17 世紀前半のイスタンブルおよびブルサ市場におけるヴェネツィア製毛織物の位置づけを試みた。その結果、台帳への記載数は非常に少なく、ヴェネツィア製絹織物と明らかに差があること、そして 1600 年のイスタンブル台帳には僅かながら記載があるものの、時代が下った 1640 年台帳には、全く記載されていないことがわかった。

ヴェネツィアの史料を用いて 16－17 世紀ヴェネツィアにおける毛織物製造と輸出の動向を分析したセッラによると、ヴェネツィアにおける毛織物製造およびオスマン市場に向けた自国毛織物輸出は 17 世紀初頭に最盛期をむかえる。しかしその後、ヴェネツィア製毛織物は急速に生産量と輸出量が減少し、代わって絹織物製造と輸出が成長していった[172]。

本論文で考察した公定価格台帳の記載内容は、セッラの主張を補完している。つまり、ヴェネツィア製毛織物は 17 世紀初頭の最盛期には、イスタンブル市場で公定価格台帳に記載されるほどにブランドを確立しているが、世紀中葉頃になると台帳には全く名前が見当たらなくなる。それに代わり、既に述べたように、1600 年のイスタンブル台帳では全く名前が見られなかったヴェネツィア製絹織物が、世紀中葉に向かって記載数を増やして独自のブランドを確立していくのである。

このように、17 世紀前半において、ヴェネツィアからオスマン帝国への輸出品は、毛織物から絹織物へシフトしていった。その説明として、前述のセッラは、17 世紀中葉になると北イタリアにおける従来の毛織物製造業中心地、特にフィレンツェが復活し、新興のヴェネツィアを追い抜いたことを主な要因として挙げている。

実は、17 世紀前半のオスマン帝国市場におけるヴェネツィアとフィレンツェの毛織物輸出をめぐる攻防は、本論文で分析対象としている 3 点の公定価格台帳にもあらわれている。ヴェネツィア製毛織物が記載されている 1600 年と 1624 年の台帳には、フィレンツェ製毛織物の記載が見られないが、1640 年のイスタンブル台帳では、ヴェネツィア製毛織物が消える一方で、突如として 5 点のフィレンツェ製毛織物が登場して

[172] D. Sella (1957), “Les mouvements longs de l’industrie lainière à Venise”.; Id. (1968), “The Rise and Fall of Venetian Woolen Industry”.; Id. (1961), *Commerci e Industrie.*

いるのである。

17 世紀前半のオスマン帝国市場におけるフィレンツェ製品の存在は、毛織物に留まらない。絹織物に関しても、本論文で分析の対象としている 3 点の公定価格台帳において、フィレンツェ製品の記載数はヴェネツィアのそれを上回っている。特に 1640 年のイスタンブル台帳ではヴェネツィア製絹織物 5 点に対し、フィレンツェ製絹織物は 9 点記載されており、同台帳から見る限り、後者の名声がヴェネツィアのそれを上回っていた可能性が高い。

また 1624 年のブルサ台帳では、ヴェネツィア製やブルサ製の絹織物のなかで、「フィレンツェ風(*filorentin*)」と併記されている商品が 2 点記載されている（「フィレンツェ風ヴェネツィア製サテン」（*Atlas-ı filorentin Venedik*）、「ブルサで製造されたフィレンツェ風サテン」（ *Bursa'da işlenen filorentin atlas* ）[173]。ちなみにフィレンツェ製は「*filorentin*」とのみ記されている。このことは、当時のブルサ市場において、フィレンツェ絹織物が高い評価を受けていたことを示している。

オスマン帝国市場におけるフィレンツェ製繊維製品については、星野秀利によって、15 世紀に関して、毛織物に相当の需要があったことが明らかにされている[174]。また近年では、鴨野洋一郎が 15-16 世紀初めにおけるフィレンツェ繊維製造業とオスマン帝国市場との関係を、毛織物および絹織物を軸として分析している[175]。

17 世紀前半のフィレンツェでは、毛織物製造業の復活と並行して養蚕業・絹織物製造業・絹撚糸製造業の成長が見られた[176]。従来の研究では、こうした製品の輸出先は主に東欧やロシアであったと考えられていたが、ここでみた公定価格台帳の分析結果は、オスマン帝国も重要な輸出先であったことを示している[177]。

残念ながら、16 世紀後半以降のフィレンツェ繊維製造業とオスマン帝国への輸出に関して、現状ではほとんど検討されていない[178]。この問題が明らかにされれば、ヴェ

---

173 M.Kütukoğlu (1978), "1009 (1600) tarihli Narh Defterine", pp.145, 152.

174 星野によれば、15 世紀のオスマン帝国ではフィレンツェ製毛織物も高い人気を得ていた。H.Hoshino & M.F. Mazzaoui (1985/86), "Ottoman Markets for Florentine woolen cloth in the Late Fifteenth Century,"; H. Hoshino (2001), *Industria tessile e commercio internazionale nella Firenze*.

175 鴨野洋一郎『フィレンツェ商人とオスマン帝国　—15-16 世紀におけるフィレンツェ繊維工業とオスマン帝国との経済的関係』（学位請求論文、東京大学大学院総合文化研究科、2011 年）ほか、文末の参考文献一覧を参照。

176 D.Sella (1997), *Italy in the Seventeenth century*, pp.19-49.; F. Battistini(1997), *Gelsi, bozzeli e caldaie.* ; Id. (2003), *L'industria della seta in Italia nell'eta moderna*.

177 フィレンツェ製絹織物と東欧・ロシアとの密接な関係について、2009 年にフィレンツェ近郊の都市プラートにおいて、興味深い展示会が開催された。同展示会については、以下を参照。*Lo stile dello zar, Arte e Moda tra Italia e Russia dal XIV al XVIII secolo,* Prato, Museo del Tessuto (19 settembre 2009- 10 gennaio 2010), Skira editore, Milano, 2009.

178 ナルフ台帳分析に基づく 17 世紀オスマン市場におけるフィレンツェ繊維製品の位置づけについては、Miki Iida (2012), "Florentine Textiles for the Ottoman Empire in the Seventeenth Century",

ネツィア製絹織物に関する本論文の分析に加えて、オスマン帝国市場における北イタリア製繊維製品の位置づけに、より深い理解が得られると予測されることから、今後検討すべき重要課題である。

図 45(左)　トスカーナ大公妃エレオノーラ・ディ・トレドと息子、アニョーロ・ブロンズィーノ作、1545 年、フィレンツェ、ウフィッツィ美術館蔵。

図 46(右)　オスマン二世のカフタン、フィレンツェ製ヴェルヴェット、1540 年頃、イスタンブル、トプカプ美術館蔵.

Mediterranean World, XXI, pp.179-196 を参照。

第 3 章　16 世紀末から 17 世紀初頭のヴェネツィアとオスマン帝国間の絹織物貿易

第 3 章では、主にヴェネツィアの史料に依拠して、近世におけるヴェネツィアとオスマン帝国間の絹織物交易の実態を分析する。第 2 章でみたように、17 世紀前半のイスタンブル市場において、ヴェネツィア製絹織物は相当の人気を得ていた。しかしヴェネツィアから東地中海地域への絹織物輸出は、近世に始まったわけではない。ヴェネツィアと絹との係わりは、中世中期に始まった。10 世紀以前、ヴェネツィアはビザンツ帝国およびイスラーム世界で製造された絹織物を輸入し、アルプス以北へ再輸出していた。ヴェネツィアでは 11 世紀頃に絹織物製造が開始されるが、当初は生糸や染料などの原材料はもっぱら東地中海地域からの輸入に依存していた。

前述のように 16 世紀なかば以降ヴェネツィアは経済構造の変化を経験し、絹関連産業は主幹産業のひとつとなっていった。17 世紀のヴェネツィアの絹関連産業は、主なものだけでも、桑栽培、養蚕業、絹撚糸製造業、絹織物製造業、生糸輸出入業（主に東地中海地域から輸入した生糸を扱う）、大陸領土産の生糸および絹撚糸輸出業、絹織物輸出業というように、農業・製造業・商業の複数の分野で展開し、ヴェネツィア市内と大陸領土の双方がこれに関わるという、複雑な内部構造を持っていた（図 48 参照）。

ヴェネツィア市内の主な絹産業は、生糸輸出入と、絹織物製造および輸出であった。これらはおおむね市民階級（*cittadini*。ヴェネツィアの海外領土の市民および国外から移住して市民権を獲得した者も含む）を中心に展開した。17 世紀のイスタンブルの事例にみられるように、海外交易に関して、当時のヴェネツィア貴族は国外に直接商取引に赴くことが少なくなっている[1]。また伝統的に貴族は手を使う製造業に直接従事しないことから、絹織物製造において、原料購入から生産の調整に至るまで親方や職人に対して支配的な立場にある織元（セタイオーロ *setaiolo*）も基本的に市民であった。

ヴェネツィア貴族が積極的に関与したのは、むしろヴェネツィアに近い大陸領土の土地を購入し農場を経営することであった。こうした 17 世紀におけるヴェネツィア貴族の「地主化」は、近年では商品作物栽培（桑栽培、養蚕を含む）を目的とした投資であったと評価されている[2]。生産された生糸や絹撚糸は、大半がアルプス以北に輸出された。

一方で大陸領土の絹産業は、絹撚糸製造業、それへの原材料供給を目的とした桑栽培および養蚕業、軽量な織物が中心の絹織物製造業で、生糸、絹撚糸、絹織物など製

---

[1] Eric R. Dursteler (2006), *Venetians in Constantinople：nation, identity, and coexistence in the early modern Mediterranean*, Johns Hopkins University Press, pp.41ff.

[2] Paola Lanaro (2006), ”Reinterpreting Venetian Economic History” *At the Centre of the Old World*, p.37.

品の大半は国外、特にアルプス以北に輸出された。

15 世紀以降にヴェネツィアの支配下に入った大陸領土の大半は、ヴェネツィア支配以前から複数の都市を中心に固有の共同体（コムーネ）として長い歴史を持っている。このことは、大陸領土の絹産業にも影響を及ぼし、例えばブレッシャやベルガモなど、大陸領土の西半分を占めるロンバルド=ヴェネト地方の諸都市は、元来ヴェネツィアよりもミラノ市場を志向している。ヴェネツィア支配下に入った後も、同地方から輸出される生糸や絹撚糸、絹織物などの大半は、ヴェネツィアを経由せず直接ミラノやアルプス以北に輸送された。

また大陸領土のほぼ中央に位置するヴェローナも、古代からアルプス以北とイタリアやアドリア海を結ぶルート上に位置する、重要な商業都市であった。ヴェローナ近郊で生産される生糸や絹撚糸も、多くはヴェネツィアを経由せずにアルプス以北に輸出された。ヴェローナよりも東方に位置しヴェネツィアに近いヴィチェンツァの場合も、同様である[3]。

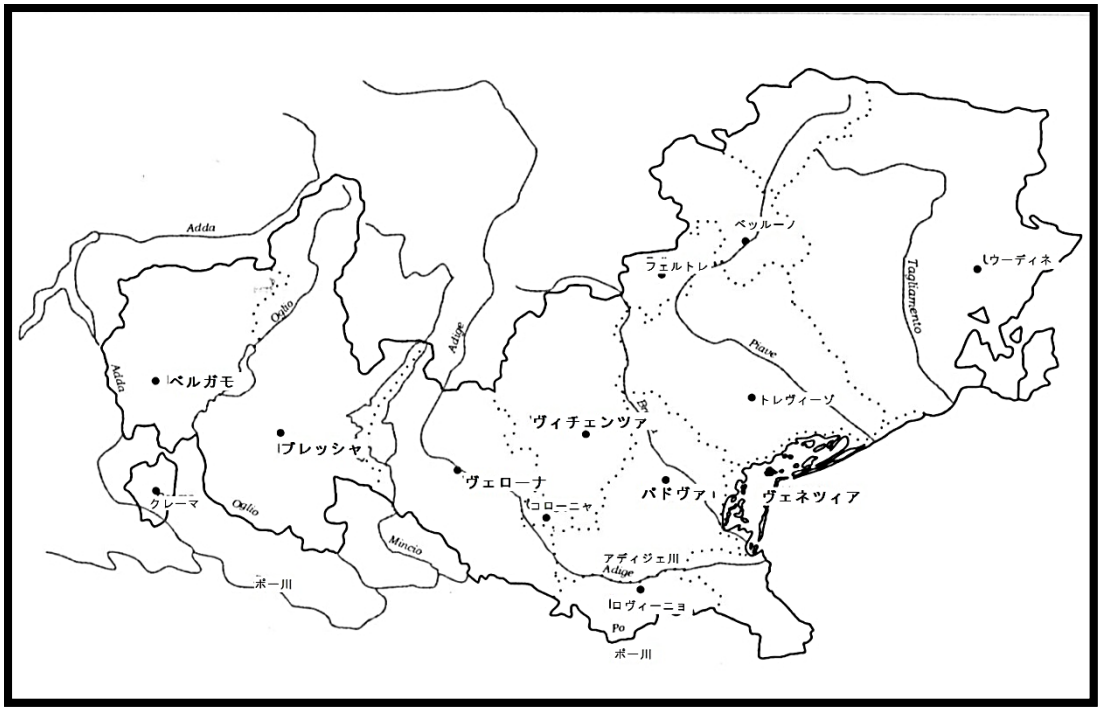


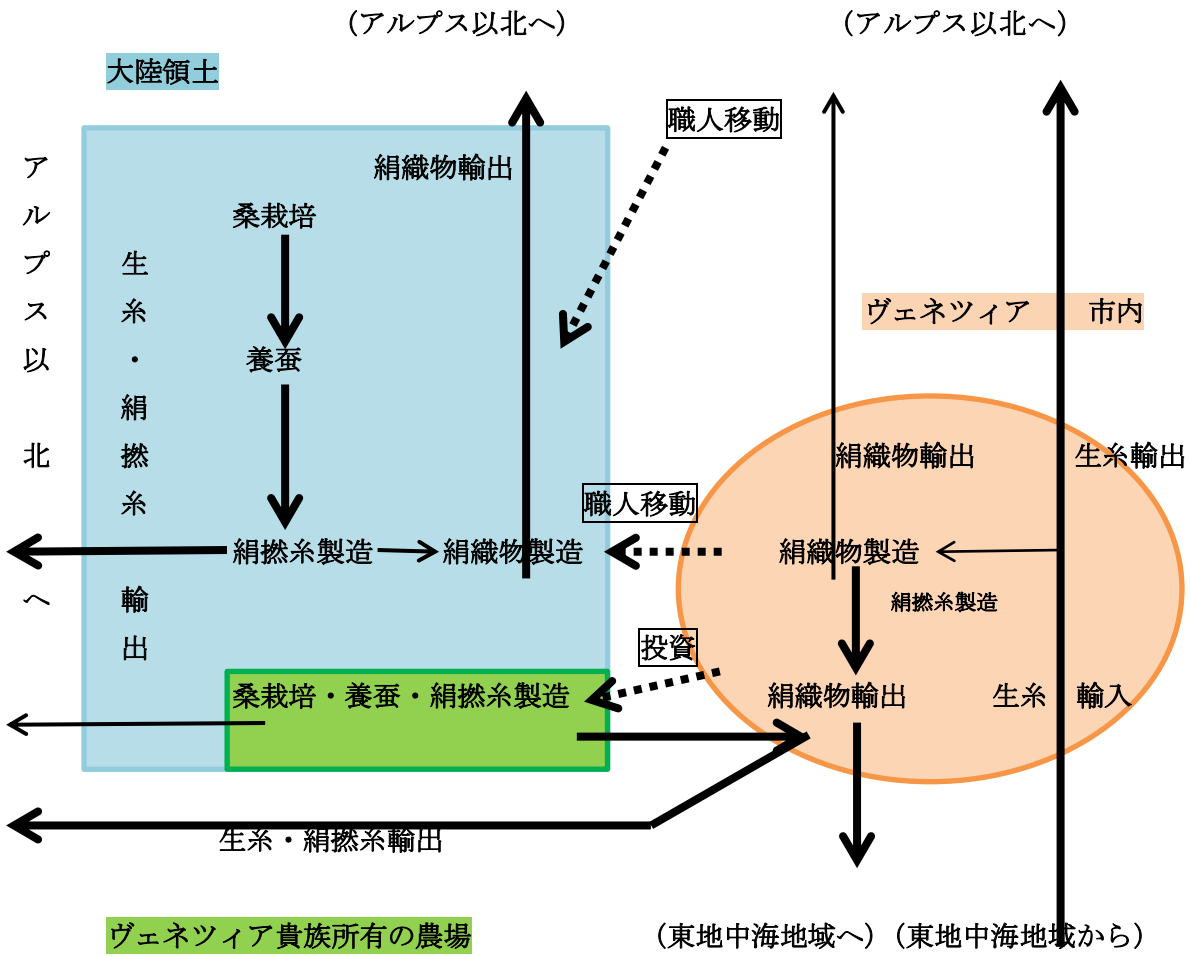
図 47　ヴェネツィアの大陸領土（*At the Centre of the Old World*,2006, p.17 より作成）

[3] Idem., pp.19-50.

大陸領土で生産された生糸・絹撚糸は、ヴェネツィア市内で製造される高級絹織物製造には適しなかったが、アルプス以北では高級品であり、特にフランス市場に輸出され、同市場で 17-18 世紀を通じて常に 5 割以上の圧倒的なシェアを維持した[4]。

大陸領土における絹織物製造業は、もっぱら比較的軽量で安価な絹織物、もしくはリボンなどの小物類製造の方向で成長した。背景には、重厚な高級品製造の独占を図るヴェネツィア市内の絹組合(*Arte della seta*)の意向が強く働いており、ヴェルヴェットなどの高級絹織物の製造はヴェネツィアに限定され、大陸領土都市に対しては製造が禁止された。

図 48. 近世ヴェネツィア共和国の絹産業概略図



以上のように、大陸領土に点在する都市とその近郊では、絹撚糸製造業と軽量絹織

[4] S. Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy", pp.196ff.

物を軸とした絹産業が展開された。これは高級絹織物製造と生糸輸出入業を軸とするヴェネツィア市内のそれとは、性質を異にしている。大陸領土の絹産業に関しては、概してヴェネツィア政府よりもむしろ地元経済界の意向が強く働いており、ヴェネツィア政府は市内の絹産業の利害と衝突しない限り、納税を条件にかなり自由を認めている。第 2 章で検討したように、オスマン帝国市場で評価されたヴェネツィア製品はヴェルヴェットなどの高級品が中心であった。17 世紀において、こうした高級絹織物製造はヴェネツィア市内に限定されていたことから、本論文では、ヴェネツィア市内の絹織物製造及びヴェネツィアからの絹織物輸出を主な検討の対象とし、アルプス以北の市場を志向した大陸領土の絹産業については、参考に留める[5]。

第 3 章では、まずヴェネツィア絹織物製造業の歴史を概観し、あわせてヴェネツィア商人が作成した帳簿や書簡の分析をもとに、15 世紀におけるヴェネツィア商人のコンスタンティノープル（イスタンブル）向け絹織物輸出について検討する。

さらにヴェネツィア経済の構造が変化し、絹織物製造業が成長しつつあった 16 世紀末から 17 世紀初めに関して、ヴェネツィアで作成された公証人文書（海上保険契約書）の分析を通じて、オスマン帝国との輸出入貿易の事例を提示し、そのなかで絹織物貿易の位置づけをおこなう。

---

[5] 大陸領土における絹産業および商業ネットワークに関しては、チリアコノ、モラの研究の他以下を参照。*At the Centre of the Old World* (2006); Francesco Vianello (2004), *Seta fine e panni grossi. Manifatture e commerci nel Vicentino 1570-1700,* Milano; Paola Lanaro (1999), *I mercanti nella Repubblica Veneta. Economie cittadine e stato territoriale (secoli XV-XVIII)*, Venezia.; *Mercanti e vita economica nella Repubblica Veneta (secoli XIII-XVIII),* a cura di Giorgio Borelli, Verona,1985.

１．15 世紀末までのヴェネツィア絹産業と東地中海地域への絹織物輸出

（1）絹織物の輸出入交易と織物製造技術の導入

ヴェネツィアに絹織物技術が導入されたのは、およそ 11 世紀頃と考えられている。それ以前 10 世紀頃まで、ヴェネツィア共和国と絹のかかわりは、おもに完成品の絹織物を、東地中海地域（ビザンツ帝国、イスラーム支配地域）あるいはイスラーム支配下のスペインから輸入し、西ヨーロッパへ再輸出することであった[6]。

ヴェネツィアに輸入された絹織物は、おもにフランク王国時代のイタリア王の首都であったパヴィア（ミラノの南方約 50 キロ）の年市で売却された。パヴィアとヴェネツィアはポー川の河川交易によって結ばれていた。当時ビザンツ帝国では最高級の緋色の絹織物製造は皇帝の特権であり、その一般への販売は禁止されていた。ヴェネツィアは、このような最高級品を除く絹織物の輸出・販売特権をビザンツ帝国から得る一方で、神聖ローマ帝国の成立以降は、その皇帝（イタリア王を兼ねる）からパヴィア年市での絹織物販売特権を獲得し、絹織物の中継交易をなかば独占していた[7]。

10 世紀を過ぎると、ヴェネツィアでは、絹織物の輸出入と平行して自国における絹織物の製造が始まった。絹織物製造が開始された正確な年代は判明していないが、11 世紀初めに絹織物が製造されていたことは、ほぼ確実である[8]。11 世紀後半、ヴェネツィアに金銀糸入り絹織物の技術が伝えられた。伝承によれば、直接ビザンツ帝国から来た職人がこの技術を伝えたという[9]。ビザンツ帝国の絹織物には、ペルシア等東方起源のデザインが多いが、ヴェネツィアの絹織物にも、技術やデザイン面で東方からの影響は明白にあらわれており、この伝統はその後長く続いた（次頁図 49-51, 図 55）。

同時期にイタリア半島で絹織物製造を開始したのは、ヴェネツィアだけではない。当時、半島北部の数都市に絹織物製造技術が導入されつつあった。たとえばトスカーナ地方のルッカには、おそらくシチリアから両地域を結ぶ交易に従事していたピサ商人を介して製造法が伝えられ、遅くとも 11 世紀前半には絹織物製造が行われている。

---

[6] David Jacoby (1997), "Silk crosses the Mediterranean", *Le vie del Mediterraneo. Idee, uomini, oggettti (secoli XI-XVI)*, a cura di G. Airaldi, Genova, pp.57 ff.
[7] Doretta Davanzo Poli (1993), "La produzione serica a Venezia", *Tessuti nel Veneto, Venezia e la Terraferma,* Verona, p.21.
[8] P.G. Molmenti (1880), *La Storia di Venezia nella vita privata,* I, Trieste, 1880(1973), p.310, n.3.
[9] ビザンツ時代の絹織物産業については、Robert Lopez (1945), "Silk Industry in the Byzantine Empire", *Speculum,* 20, pp.1-42 を参照。

図 49　（左）　「円環連珠文の中のセンムルブ」　ササン朝ペルシア、６－７世紀頃、サミ織り、ロンドン、ヴィクトリア＆アルバート美術館蔵
図 50　（中）　「獅子狩文」ビザンツ帝国、８－９世紀頃。同蔵。
図 51　（右）　ワシと円環蓮花文様」　ヴェネツィア製、14 世紀，絹と金糸、リヨン、染織博物館蔵。

13 世紀になると、北イタリアのルッカ、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ボローニャが絹織物の四大製造地となった。なかでもルッカは最も有名で、多種多様な絹織物を産する最先端地域として、ゆるぎない名声を保っていた。ジェノヴァとヴェネツィアの特産品は金銀糸を織り込んだ高級品、ボローニャのそれはセンダル（*sendal*）と呼ばれる比較的安価な布地であったらしい。

職人たちの組織化（＝同職組合の認可）が史料に初出するのもこの頃のことである。ヴェネツィアでは、1254 年に最初の絹織物職人の同職組合（アルテ）として、サミテール（*samiteri*）同職組合の設立が認可された[10]。サミテールとは、ギリシア語で六枚綜絖（そうこう）[11]を意味する *hexámitos* を語源とするサミト織り（ヴェルヴェットに似た厚地の絹織物）職人をさし、ここでもヴェネツィアとビザンツ帝国の深い関係が伺える[12](図 52-54)。組合規約では、織物の幅、経糸・緯糸の質や糸の総数・密度、欠陥商品の扱い等が細かく定められた。

図 52　サミト織り、ヴェネツィア、13 世紀

10 Davanzo Poli (1993), "La produzione serica a Venezia", p.21.
11 綜絖とは、織物製造の際、緯糸を通す杼（ひ）道を作るために経糸を上げさせる道具。主要部を、絹糸、カタン糸、毛糸、針金等でつくる。
12 サミト織りの起源は、ササン朝ペルシアのサミ織りであると考えられている。経糸が二種類、緯糸は四種類ほどのまでの色糸を使い、文様部分も斜行組織となっている。

図 53　（左）サミト織り、多色絹と麻、ヴェネツィア、13 世紀、フェリチアーノ・ベンヴェヌーティ・コレクション蔵
図 54　（右）サミト織り、ヴェネツィア、14 世紀、サン・マルコのライオンの紋章付き、フォルリ大聖堂蔵

ヴェネツィアの織物製造業におけるルッカ職人移住の影響

14 世紀に、ヴェネツィアの絹織物製造は新たな発展期を迎える。世紀前半に、当時の最先端都市ルッカで都市内の政治紛争が激化し、これを避けて多くの職人やセタイオーロ（*setaiolo*＝絹織物企業家）が流出し、ヴェネツィアにも多くのルッカ職人が移住したのである。ルッカ職人の移住先は、絹織物製造が盛んになっていた北イタリアの都市であった。彼らの移動は、高度な織物技術が北イタリア各地に伝えられ、それらの絹織物製造業が発展する契機となった。14 世紀末には前述の四大製造地にフィレンツェが加わり、五大製造地となる。

ヴェネツィアは、ルッカ職人の最大の移住先のひとつと考えられている[13]。ヴェネツィア政府は、住居の斡旋や資金提供あるいは税制優遇等各種の手段を講じて、ルッカ職人の移住を誘致した。1347 年、ヴェルヴェット製造技術を持つルッカ系職人とそれを伝授されたヴェネツィアの職人が、共同で一種の互助会である兄弟団を創設した。この組織は、従来の平織り絹布（サミト織り）職人とは別に組織された。14 世紀以降、ヴェルヴェットはヴェネツィア製絹織物の中心的存在となり、様々なデザインや技術が開発されていった。ルッカ職人の移住は、絹織物製造の技術のみならず、そのデザ

[13] F. Brunello (1981), *Arti e mestieri a Venezia nel Medioevo e nel Rinascimento,* Vicenza, pp.123-4.ルッカ職人のヴェネツィア移住とその影響については、L. Molà(1994), *La communità dei lucchesi a Venezia. Immigrazione e industria della seta nel tardo Medioevo,* Venezia を参照。

インにも影響を与えた。たとえばヴェネツィアの絹織物は、前述のように伝統的に東方起源を色濃く示す文様が織り込まれていることが多い。しかし 14 世紀には、トスカーナ風のデザインも多く見られた[14]。

15 世紀後半以降、イタリア半島における絹織物製造は、五大製造地（ルッカ、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ボローニャ、フィレンツェ）から中規模の諸都市へ拡大し、16 世紀に入ると、各地の小都市でも絹織物製造が始まる。

フランチェスコ・バッティスティーニ(Francesco Battistini)の概算によると、16 世紀におけるイタリア半島各地の絹織物製造業の成長は、17 世紀初頭の織機台数に顕著にあらわれている（次頁表 2 参照）[15]。さらに 18 世紀初頭の数値を見ると、イタリア全体の織機数が減少するなかで、ヴェネト（＝ヴェネツィア共和国領）は唯一地域全体での織機数を増やしている。つまり、ヴェネツィア共和国では、16-17 世紀を通じて、イタリア半島における主要な絹織物製造業の地位を維持し、かつ成長していたと考えられるのである。

図 55　「ザクロ文様」ヴェルヴェット織、ヴェネツィア、15 世紀、ヴェネツィア染織・衣装研究所蔵

[14] D.Davanzo Poli (1993), "La produzione serica a Venezia", p.26.
[15] Francesco Battistini (2000), "La tessitura serica italiana durante l'età moderna", *La seta in Italia,* p.344.

表 2. イタリアにおける絹織物織機の数、1500－1700 年（概数）

地域および都市	16 世紀初頭	17 世紀初頭	18 世紀初頭
ピエモンテ			650
トリノ	数十	数十	500
その他			150
ロンバルディア	300	3,300	500-600
ミラーノ	200	3,000	450
コモ	—	30	僅か
その他	数十	150 - 200	僅か
ヴェネト	2,100	2,800	3,400
ヴェネツィア	2000	2,300	2,500
その他	数十	500	900
ハプスブルグ支配領	—	—	100
エミーリャ	1,800	3,300	2,400
ボローニャ	1,500	2,500	2,000
その他	2-300	7-800	3-400
リグーリア	5,000	4,000	3,000
ジェノヴァとリヴィエラ-ディ-レヴァンテ	5,000	4,000	3,000
トスカーナ	3,600	4,000	4,000
フィレンツェ	1,000		2,200
ルッカ	2,500		1,200
その他	150		400
南イタリア	1,400	5-6,000	3,000
ナポリ	500		1,500
カタンツァーロ	500		800
シチリア	3 - 400		700
イタリア	14,000	23,000	16,000

F. Battistini (2000), "La tessitura serica italiana durante l'età moderna", *La seta in Italia,* p.344 より筆者作成。

（2）東地中海地域への絹織物輸出　―15 世紀のコンスタンティノープル（イスタンブル）における、ヴェネツィア商人の絹織物取引より

ヴェネツィア製絹織物の東地中海市場への輸出は、製造が本格化する中世後期に始まるが、その詳細はほとんど明らかにされていない。しかし、個々の取引からその重要性を伺うことは可能である。

①ジャコモ・バドエル(Jachomo Badoer)の元帳（1436-1440 年）

1436 年から 40 年にかけて、ヴェネツィア商人ジャコモ・バドエルが、オスマン帝国による征服直前のコンスタンティノープルで、彼が行った日々の取引を余すところなく書き残した帳簿（元帳）が、現在国立ヴェネツィア文書館に所蔵され、1956 年にドリーニとベルテーレによって校訂出版された[16]。同帳簿では、ヴェネツィアからコンスタンティノープルに絹織物が輸送・売却された取引の実態が示されている。

ジャコモ・バドエルがコンスタンティノープルで売買した商品の扱い件数・金額は、文末の資料 14、15 を見るとわかるように、ともに毛織物が第 1 位を占めているが、絹織物の扱いも上位にランクされている。バドエルが扱った絹織物は、ゼターニ織(*zetanin*)[17]、ダマスク織(*damascin*)、ヴェルヴェット(*veludo*)等重厚な高級品が 21 点、薄地絹織物(*veli*)が 408 箱(*caseta*)と 1 梱(*bala*)である（文末資料 16,17）。

これらの絹織物は、同元帳に記載されている毛織物とは異なり、1 点を除いて産地名が記載されていない[18]。しかし価格が高い高級品の厚地絹織物は全てヴェネツィアおよびヴェネツィア領のポーラ（イストリア）から輸送されており、ヴェネツィアで購入されたことが併記されている商品も 4 点含まれている（文末資料 17 の⑭⑰⑲㉑）。当時ヨーロッパの高級絹織物製造は、北イタリアが最も優れていたことを考慮すると、バドエルの元帳に記載された重厚な高級絹織物の製造地はヴェネツィアを含む北イタリアである可能性が最も高い[19]。

一方、薄地絹織物は、ヴェネツィアに加えてアレクサンドリアから輸送された商品も含まれている[20]。これらがただちにエジプト産であると断定はできないが、厚地の高

---

16 A.S.V., Cinque Savi alla Mercanzia, b.958. (*Il libro dei conti di Giacomo Badoer,* a cura di Umberto Dolini e Tommaso Bertele, Roma, 1956).
17 中国の都市泉州（ザイトゥーン）に由来する名称。
18 「コローニャ製緑金蘭ヴェルヴェット風ゼターニ織(*verde brochado d'oro da Chologna*)」(c.10)。ただし、コローニャという都市は現在のヴェネト地域にも複数あり、当時どこの都市を指していたかはわからない。
19 佐野敬彦(1999)『織りと染めの歴史　西洋編』昭和堂、42-62 頁。
20 c.52, 142.

級絹織物とは異なる地域を産地とする商品であることも考えられる。

バドエルがコンスタンティノープルで受け取った絹織物は、毛織物と同様、コンスタンティノープルで売却されるほか、アドリアノープルやブルサ、ロドスト等周辺のオスマン朝支配都市へ転送され売却されており、これらの都市における需要が示唆されている（文末資料 18）。

②アルヴィーゼ・マリピエーロ（Alvise Malipiero）（1481-1483 年）

バドエルの帳簿から約 40 年後、1479 年末から 1489 年にかけて、ヴェネツィア在住のマルコ・ベンボ(Marco Bembo)およびその息子ジェロニモ・ベンボ(Jeronimo Bembo)のもとで作成された 3 冊の書簡複写帳（発送書簡複写帳 2 冊、受領書簡複写帳 1 冊）が国立ヴェネツィア文書館に所蔵されている[21]。3 冊の書簡複写帳には、マルコとジェロニモが各地の商人や代理人と交わした 384 通（発送 321、受領 63）の商業書簡が筆写されている。宛先で最も多いのはクレタ島のカンディア(71 通）であるが、イスタンブル（書簡ではコンスタンティノープル）宛ては 45 通、一方でイスタンブルから発送されたものは 28 通あり、またエディルネ（書簡ではアドリアノープル）からの 2 通も筆写されている。

書簡複写帳の内容から、マルコ・ベンボのイスタンブルにおける代理人はアルヴィーゼとマリン(Marin Malipiero)のマリピエーロ兄弟であったことがわかっている。アルヴィーゼ・マリピエーロは、1484 年のなかごろテサロニキに移住し、1485 年に同地で死亡している。

マリピエーロ兄弟がベンボ親子の代理人としてイスタンブルで売却した商品の大半は、40 年前のジャコモ・バドエルの取引と同様、ヨーロッパ製の毛織物であった（文末資料 19）。ジャコモ・バドエルと比較すると、マリピエーロ兄弟の取引ではフィレンツェ製と併記された毛織物が見られない。しかしこのことは、オスマン帝国でフィレンツェ製毛織物の需要が減ったことを意味するのではない。産地の記載がない毛織物にフィレンツェ製品が含まれていることも考えられるが、むしろ 15 世紀後半のフィレンツェ製毛織物は、それまでのようにヴェネツィアを経由するのではなく、アンコーナもしくは南イタリアを通ってアドリア海を渡り、陸路でイスタンブル方面に向かう

[21] A.S.V.,Miscellanea di carte non appartenenti a nessun archivio, b.29。同史料を分析したものとして、拙稿(2001)「十五世紀末のイスタンブル市場」『歴史学研究』、757 号、12-23 頁。ティリエは同史料をもとに、テサロニキにおけるヴェネツィア向け小麦買い付けについて分析している。Freddy Thiriet (1957), “Les lettres commerciales des Bembo et le commerce vénitien dans l’Empire ottoman à la fin du XVe siècle”, *Studi in onore di Armando Sapori*, Milano- Varese.

のが一般的となったためであると考えられる[22]。

一方、絹織物の取引は 9 件で、毛織物の取引（42 件）に比較すると少なく、産地の記載もない。しかし 1484 年 4 月 18 日付けのアルヴィーゼ・マリピエーロからの書簡には、イスタンブルの情報として、「[オスマン]宮廷は大量の金蘭絹織物を購入し、1 ピッコあたり 150 アスプロで売却した」と記載され、イスタンブル、特に宮廷における高級絹織物の需要の大きさと、ヴェネツィア商人の売り込みが伺える[23]。

２．16 世紀末から 17 世紀初頭における、ヴェネツィアとオスマン帝国の輸出入貿易

（1）16 世紀以降のヴェネツィア経済の性格変化と絹産業

・海上輸送における相対的な地位の低下

中世後期におけるヴェネツィア経済の中心は海上交易であり、ヴェネツィアは地中海を通じて遠近各地から様々な商品を運んでいたが、中でも東地中海地域との結びつきはその大黒柱であった[24]。

ヴェネツィア港の輸入量は、短期の上下動は見られるものの、16-17 世紀を通じて維持されており、また地中海商業そのものが衰退したわけでもなかった[25]。変化したのは地中海、そしてヴェネツィアを出入りする商品や船舶の構成である。周知のように、16 世紀前半、ポルトガルがインド洋における香辛料交易に進出したが、これはヴェネツィアを含む地中海商業の集散地に一時的なダメージしか与えなかった。1530 年代以降になると再び地中海経由のルートが復活し、ヴェネツィアでも 1570 年代には海上商業の取引量は著しく回復している[26]。

しかし 17 世紀に入ると香辛料交易は徐々に大西洋ルートが主流となり、世紀後半には香辛料は完全に西方からの輸入品となった[27]。生糸や綿、砂糖等の輸入と再輸出も、時期は前後するものの、総じて 17 世紀後半にはヴェネツィアの手を離れている[28]。ヴ

---

22 星野秀利（1988）「オスマン帝国とフィレンツェ経済　15-16 世紀」『イタリア図書』1、15-16 頁；H.Hoshino & M.F.Mazzaoui (1985/86), “Ottoman markets for Florentine woolen cloth in the late fifteenth century”.

23 “*... ell quall me scrive la portta a conpratt[o] gran quantita de chanpi doro che a posutt[o] vender asp[r]i 150 ell pi[cco]...*”　複写帳 1 冊目、c.14.（[　]内は筆者による加筆）。

24 中世後期のヴェネツィアの海上商業については、齊藤寛海（2002）『中世後期イタリアの都市と商業』知泉書館、第 2 部を参照。

25 D. Sella (1994), "L'economia", *Storia di Venezia,* VI,pp.653-4.; C. Pezzolo, "L'economia", *Storia di Venezia,* VII, p.397.

26 Frederic C. Lane (1940), "The Mediterranean Spice Trade".

27 1680 年のヴェネツィア港輸入品統計では、香辛料は西方からの輸入品(*mercantie capitate di Ponente*)に区分されている(D. Sella (1961), *Commerci e industrie,* p.116)。

28 D.Sella (1961), *Commerci e industrie,* pp.53-58.

ェネツィアの住民にとって重要であった穀物輸入については、16 世紀前半盛んであったオスマン領からの「ギリシア」小麦輸入のブームは 1570 年までに終わり、かわってこの頃から、大陸領土（テッラ・フェルマ）の小麦が、海外からの輸入小麦を上回るようになっていった[29]。とはいえ食料の自給率は完全ではなく、17 世紀中も南イタリアやバルト海地域からの小麦輸入は続いていた。

変化はヴェネツィア商船隊にもあらわれており、その商船の数は、1560 年代を頂点として 1590 年代以降は減少傾向にあった[30]。それにかわって東地中海地域とヴェネツィアの間の海上輸送を担ったのは、フランス、イギリス、ハンザ、オランダ等の北方船である。これらの船は北方の豊かな森林資源を背景に安い建造費で作られ、運賃が安く、また航海技術の点でも従来の地中海船舶に勝っていたことから、当時アドリア海南部に横行した海賊（ウスコック）の被害も少なかった[31]。ヴェネツィアはこうした外国船舶に自国の商品を積むことで、16 世紀末まで交易の繁栄を維持したのである。ところが 1602 年にヴェネツィアで発令された航海条例は、外国船を締め出す結果となり、この後北西欧船舶はヴェネツィアに寄港せず、東地中海地域から本国への直接輸送や、地中海内の海上輸送サーヴィスを本格的に開始する[32]。

さらに、イタリア半島中部のアドリア海に面した港町アンコーナが、16 世紀前半から、東地中海地域との交易商品集散地として、ヴェネツィアの強力なライヴァルに成長した。アンコーナは対岸にあるオスマン帝国の貢納都市ラグーザ（ドブロヴニク）と連携することで、オスマン市場と結ばれていた。

後述するように、ヴェネツィアとアンコーナは、交易を支配するユダヤ教徒の誘致政策、ロマニア（旧ビザンツ帝国領）[33]からの生糸輸入に対する減税・免税等の措置を

---

[29] Maurice Aymard (1966), *Venise, Raguse et le commerce du blé pendant la seconde moitié du XVIe siècle*, Paris, pp.112ff.

[30] D.Sella (1994),, "L'economia", p.654.ヴェネツィアの商船隊は、1605-37 年の間に激減したが、1670 年ごろには世紀初めのレヴェルまで回復している。

[31] 1570 年代にヴェネツィアとオスマン帝国の間に起きたキプロス戦争の影響で、東地中海地域におけるヴェネツィアの海上輸送に大きな支障が生じたことも、北西欧船舶が地中海輸送に本格的に乗り出す契機となった(D.Sella (1994), "L'economia", p.655-8.)。

[32] ヴェネツィア元老院が可決した同条例では、ヴェネツィア船の優遇ならびにヴェネツィアへの輸入品輸送における外国船の使用が禁止されている。これは不況にあえぐヴェネツィアの造船・艤装業を救済する目的も持っていた。

[33] ロマニア(*Romania*)という名称は、四世紀末のローマ帝国の東西分裂後、東ローマ（ビザンツ）帝国の人びとが引き続き自らを(ギリシア人ではなく）ローマ人と称したことに由来する。帝国の領土縮小に伴い、次第にアナトリア、ギリシアに残された領土を指すようになったと考えられている。ヴェネツィアでは、11 世紀頃から、商業関係史料や年代記にロマニアの名称が登場するが、同世紀にビザンツ帝国を破ってアナトリアに建設されたトルコ系のセルジューク朝（ルーム･セルジューク朝）や、トルコ系の支配下に入った東地中海地域の旧ビザンツ帝国の人びとを指すこともあった。第四回十字軍のコンスタンティノープル占領（1204 年）によって、ヴェネツィアは「ロマニア帝国（＝ビザンツ帝国）領の八分の三」を領有する。(Freddy Thiriet (1959), *La Romanie Vénitienne au Moyen Age*, Paris, pp.1-3.)。ロマニアとヴェネツィアの関係については、大黒俊二(2003)「ヴェネツィアとロマニア―植民地帝国の興亡」『多元的世界の展開』（地中海世界史 2）青木書店、136-69 頁を参照。

次々に発令する[34]。ヴェネツィアは 1590 年、ダルマティア沿岸の都市スパラトを指定市場(*scala*)とし、ロマニア―スパラトヴェネツィア間の商品移動にかかる税を全廃または半減した。この措置はラグーサへの対抗も目的としており、オスマン側もヴェネツィアに協力するかたちで、道路網整備や安全対策を講じている[35]。

輸出向け製造業の発展

16-17 世紀にかけてみられた地中海海上輸送におけるヴェネツィアの相対的な地位低下は、ヴェネツィア港の流通量が維持されたことを見ても分かるように、必ずしもヴェネツィア経済全体の急激な縮小を意味しない。なぜならば、確かにヴェネツィア経済において海上交易が占める割合は減少したが、その一方で、輸出向け製造業（毛・絹織物、絹撚糸、ガラス）や養蚕、印刷・出版業等、海上交易以外の分野が成長しつつあったと考えられているからである。

中世後期において、西欧から東地中海地域へ輸出できる商品はかなり限定されており、その中心のひとつはフランドルや北イタリアで生産される毛織物であった[36]。ヴェネツィアは当初からこうした毛織物の輸出に深く関わっていたが、1520 年代以降、レヴァント市場向けの高級毛織物に特化する形で、急激に毛織物製造が成長していった。

ヴェネツィアの毛織物製造業は、1602 年にピークを迎えた後に減少に転じる[37]。それにかわって資本と労働力を吸収したのは、やはり輸出を目的とした高級品産業である絹織物製造業、ガラス製造業、そして印刷・出版業等であった[38]。これらはヴェネツィアが伝統的に得意としてきた、量よりもむしろ質を問われる分野であり、東地中海地域はその重要な市場となった[39]。前述したように、ヴェネツィア市内で輸出向け奢侈品製造が

---

34 L.Molà (2000), *The Silk Industry,* pp.70-71. 当時オスマン帝国の各地には、ユダヤ教徒追放令を逃れてイベリア半島から多くのユダヤ教徒や新キリスト教徒らが移住し、広範囲な商業ネットワークを利用してヨーロッパとの交易の世界で重要な地位を築きつつあった。

35 スパラトについては、Enzo Paci (1971), *La "scala" di Spalato e il commercio veneziano nei Balcani fra Cinque e Seicento*, Venezia を参照。

36 中世後期の東地中海市場におけるフィレンツェ毛織物の位置付けについては、齊藤寛海(2002)「ダマスクス市場のフィレンツェ毛織物」『中世後期イタリアの商業と都市』70-104 頁を参照。

37 海に囲まれたヴェネツィアは、染色に不可欠な大量の真水の水流がない等、元来毛織物の大量生産には決して向いているとはいえない。ヴェネツィアが一時的にせよこの分野で成功を収めた理由は、伝統的な東方交易の危機を感じた同国の商人が他に投資先を求めたこと、さらにフィレンツェをはじめとするヴェネツィア以外のイタリア半島の毛織物産地がイタリア戦争によって軒並み荒廃した機会を利用できたことであると考えられている。1570 年代以降ヴェネツィア毛織物製造業の成長率が鈍化していくのは、フィレンツェ（ただしその製品はヴェネツィア製品の模倣であった）等の復興が深く影響していたと見られている。ヴェネツィアの毛織物製造業については、D.Sella(1968), "The Rise and Fall of the Venetian Woolen Industry", Id.(1994), "L'economia", pp.679-684 を参照。

38 D. Sella (1961), *Commerci e industrie*, pp.65-68.

39 ヴェネツィアの印刷業には、当初より旧ビザンツ帝国から亡命・移住した知識人が多数参加し、ギリシア古典等の出版で一時代をなした。ヴェネツィアで出版されたギリシア語書籍は、初等教科書や民話本等にもおよび、近代に至るまでギリシア語圏に広い販売網を持っていた。ヴェネツィアの印刷業については、Claudia di Filippo Bareggi (1994), "L'editoria veneziana fra '500 e '600", *Storia di Venezia,* VI, Roma, pp.615-649 を参照。

発展する一方、大陸領土では桑栽培、養蚕、おもにアルプス以北の北西欧市場向けの絹撚糸製造業が本格化していったのである[40]。

ヴェネツィアに限らず、17 世紀の北イタリア各地では、主に輸出向けの奢侈品製造が成功したことによって、経済水準が維持された。生き残りに成功した事例としては、ヴェネツィアの毛織物・絹織物製造のほかに、フィレンツェの絹織物製造、ピエモンテの毛織物製造、ヴェネト、トスカーナ、アブルッツォの絹撚糸製造、クレモナのヴァイオリン制作、ムラーノ島（ヴェネツィア）のガラス製造、リグーリアやロンバルディアでの武器製造等が挙げられる[41]。

ヴェネツィア市内では、サテン等薄地で安価な新商品が開発されるのと並行して、パランゴン[42]やヴェルヴェット等の高級絹織物の生産も、近世を通じて途切れることなく続いていた。ヴェネツィアの絹織物製造史研究では、具体的なデータはないものの、16-18 世紀を通じて伝統的な厚地の高級絹織物製造が存続した理由として、オスマン帝国市場への輸出が続いていたことを挙げている[43]。

ヴェネツィアやフィレンツェ等、17 世紀北イタリアにおける高級絹織物製造業の最先端地域では、顧客の確保に向けて販売市場の嗜好に合わせた製品の製造をするために、様々な措置がとられた。例えば、オスマン帝国市場に関しては、地中海周辺からヨーロッパにかけて広い商業ネットワークを持つセファルディム（イベリア半島から亡命したユダヤ教徒）やレヴァンティーニ（その主体は、セファルディムのうち、オスマン帝国に移住して、スルタンの臣民になった者）の誘致が挙げられる。

ヴェネツィアでは、セファルディムやレヴァンティーニのネットワークを利用することに加えてユダヤ教徒税収入も目的として、16 世紀なかばに、ユダヤ教徒がヴェネツィア市内の居住区（ゲットー）に永住あるいは短期滞在することを許可し、後には海上交易に参加する権利も与えた。

またヴェネツィア政府は、1590 年にヴェネツィア領ダルマツィアの都市スパラトを指

---

40 大陸領土への土地投資の流行、湿地開墾の進展の結果、農業は商業に優越するという思想すら出現していた（和栗朱里(1997)「1520—1570 年におけるヴェネツィア人の土地所有」『地中海学研究』XX）。一方ドメニコ・セッラは、ヴェネツィア貴族の大陸領土における大土地所有は、養蚕や米作等、輸出向け商品作物栽培、在地製造業への原材料供給を目的とした土地への投資であったと評価している（D.Sella (1961), *Commerci e industrie,* pp.81-91）。

41 D. Sella (1997), *Italy in the Seventeenth Century*, pp.41ff.

42 パランゴン(*parangon*)とは、「比較する」という意味の動詞から派生した名称で、一種の商品展示場である。パランゴンに出される絹織物(*di/da parangone*)は、ヴェネツィアの最高級の絹織物、ヴェルヴェット類を意味し、布の両端に金糸で目印をつけられた。外国大使や要人がヴェネツィアに滞在する際にはパランゴンに誘い、商品の陳列を見せて買わせるという国際的な宣伝効果も狙ったものでもあった。1514 年のリアルト右岸大火災の影響を受けて、1519 年以降は、リアルト左岸の橋のすぐ脇に建設された「パランゴンの中庭(*Corte del parangon*)」で売買が行われるようになった（F.Brunello (1981), *Arti e mestieri a Venezia*, p.128; L.Molà (2000), *The Silk Industry*, pp.97-99.）。

43 L. Molà (2000), *The Silk Industry*, p.303.

定市場（*scala*）としたが、これはセファルディムのダニエーレ・ロドリゲス（Daniele Rodriguez またはダニエーレ・ロドリーゴ Daniele Rodrigo）の提案を受け、またユダヤ教徒やオスマン帝国領のバルカンの商人および地方役人の協力を得たものであった。指定市場は、同じくダルマツィア沿岸に位置するライヴァル都市ラグーザと、その対岸にある教皇領都市アンコーナとの間の海上輸送に対抗することを目的として設定された。スパラト経由で東地中海地域とヴェネツィアの間を輸送される商品に対しては、関税が半減又は全額免除となり、スパラトに居住するユダヤ教徒にも条件付きで完全免税の優遇措置がとられた[44]。

一方フィレンツェを事実上の首都（大公宮廷所在地）とするトスカーナ大公国では、1540 年代以降、ティレニア海に面したリヴォルノ港の機能強化に着手し、1593 年の通称「リヴォルノ憲章」(*La Livornina*)を中心とする特許状を発布して、セファルディムを中核とするユダヤ教徒を誘致した。1610 年代以降、「自由港」リヴォルノではユダヤ教徒の大商人が活動を開始し、1620 年代になるとイギリス人、フランス人、オランダ人、ドイツ人、フランドル人等の居留民団領事が出現する。さらに 1620 年代から 40 年代にかけて、ギリシア正教徒、オスマン帝国のムスリム、ラグーザ人、マグリブ人、アルメニア教徒等が来住し、17 世紀イタリアの港町としては、例外的に飛躍的発展を遂げた。リヴォルノの発展はアルプス以北の北西欧経済との結合が背景にあったが、それにはヨーロッパとオスマン帝国に広範な国際的ネットワークを持つ、セファルディムを主体とする移住ユダヤ教徒の活躍が、不可欠であった。

[44] 近世イタリアにおけるユダヤ教徒誘致については、以下を参照。齊藤寛海（1986）「アンコーナとラグーザ　16 世紀のレヴァント商業」『イタリア学会誌』35 号、118—138 頁；同（1996）「シャイロックの時代のユダヤ人」『一橋論叢』116 巻 4 号、621-640 頁（再録『中世後期イタリアの都市と商業』、258-276 頁）。

（2）公証人文書にみるヴェネツィアとオスマン帝国の輸出入貿易（1597―1604 年）

第 2 節では、16 世紀末から 17 世紀初頭にヴェネツィアで作成された公証人文書（海上保険証書）をもとに、ヴェネツィアとオスマン帝国の輸出入貿易について考察する。

利用する史料は、ヴェネツィアの公証人ジョヴァン・アンドレア・カッティ(Giovan Andrea Catti)と、アンドレア・スピネッリ(Andrea Spinelli)が、1592 年から 1609 年にかけてヴェネツィアを出入りする船舶および商品について作成した海上保険証書をもとにアルベルト・テネンティが作成・出版した一覧表[45]である。

証書に含まれる情報は不完全で、船舶名や保険契約関係者の氏名、商品名や数量はしばしば不備が見られる。また、わずか 2 名の公証人が 17 年間に関わった契約であるという史料上の限界があるが、そこに含まれる豊富な情報は、間違いなく近世ヴェネツィアの海上交易の一面を知る重要な手がかりである。

公証人カッティとスピネッリは、もっぱら商人を顧客に持ち、レヴァントとの交易および西方との輸送を専門としていた。カッティはヴェネツィア市民権を得たベルガモ起源の一族に属し、1577 年から 1609 年までは単独で、その後は 1621 年まで息子と共に公証人業務に携わり、1624 年頃死亡したと考えられる。ヴェネツィアの公証人組合の記録には、カッティの活動に関する数多い言及があり、組合において数々の重要な役職を務めていたことがわかっている。スピネッリの一族についてはあまり多くの情報がない。1591 年から公証人を務め、1594 年以降同組合でいくつかの重要な役職を務めた記録が残されている。スピネッリは 1609 年に役職を辞した後、甥と共に 1617 年まで仕事を続け、その後まもなく死亡したと考えられる[46]。

一覧のもととなった証書の大部分は、*cessio* とよばれる、保険契約に基づく保険の放棄である。つまり公証人の前で、保険契約によって予想された遭難、略奪、損害ないしはそうしたアクシデントを知った町の商人たち、彼らの代理人や店員が、商品や船舶に関する彼らの全ての権利を放棄したのである。これらの証書からは、船舶の名前、船長の名前、たどった航路、航海の中止に至った理由、また、被保険者と保険業者の名前等を読み取ることができる。

テネンティは、証書の内容を整理し、①船舶の名称もしくは種類、②被保険者の名前、③保険業者の名前、④輸送された商品、の 4 点を軸として、1021 点の証書を出発

---

[45] Alberto Tenenti (1959), *Naufrages, Corsaires et Assurances maritimes à Venise 1592-1609*, Paris.
[46] Idem., pp.8-9.

の年代順に列挙している。テネンティの関心は主に船舶および航路に向けられ、船舶の国籍、出発地と目的地、海賊や私掠船による被害、それに対してヴェネツィア政府が打ち出した対抗策、海上保険の利率の推移等について詳細に解説している。その一方で、公証人文書に記載された輸出入商品にはほとんど関心が払われていない。

そこで本稿では、テネンティが年代順に整理した 1021 件の保険契約（正しくは保険契約の放棄）を、ヴェネツィアからの輸出およびヴェネツィアへの輸入に分け、さらに相手地域別に分類して分析を行った。なお、本文中および脚注の「資料番号」は、テネンティが整理・出版の際に年代順に割り当てた番号を示している。

相手地域と主要貿易商品

カッティとスピネッリの公証人文書に記載された船舶は、ほぼ全てヴェネツィアを出港地または目的地としている。全 1021 件の契約を、ヴェネツィアからの輸出とヴェネツィアへの輸入に分け、さらに地域別に分類した結果が下記の表である。史料を校訂出版したテネンティは、当時のヴェネツィア人による海外貿易はイタリア半島およびヴェネツィアの海外領土を中心とした中・小規模なものに転化したとしている[47]。確かにイタリア諸地方・都市、およびヴェネツィアの海外領土は契約数の上位を占めているが、ヴェネツィアの海外領土を上回って輸出・輸入とも第 2 位を占めているのは、オスマン帝国との間を行き来した船舶である。

表 3　ヴェネツィアの輸出入貿易（1592-1609 年）地域別概要

（A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成）

輸出入 相手地域	ヴェネツィアより輸出 実数、(　)は内数で商品記載なし	ヴェネツィアへ輸入 実数、(　)は内数で商品記載なし	輸出入不明 実数、(　)は内数で商品記載なし
イタリア半島・シチリア	125　(54)	163　(37)	
イタリア半島・シチリア＋	10　(9)	4　(1)	
イベリア半島	24　(11)	52　(13)	
北西欧	24　(9)	67　(17)	
オスマン帝国	**100　(34)**	**140　(42)**	
ヴェネツィア領	78　(22)	118　(7)	
ヴェネツィア領*	5　(4)	1　(0)	
西地中海	1　(0)	6　(1)	
不明	1**　(0)	11　(2)	**95　(60)**
ヴェネツィアを経由しない	1***　(0)		
計	**369　(143)**	**562 (120)**	**1021 (323)**

*　「オトラントとアムステルダム」(c.673)のように、2 か所を目的地としている場合を示す。大半は商品内容が記載されていないため、本論文では、最初の目的地に換算している。
**資料番号 216　Osterdan へ干しブドウ　***資料番号　861　バーリからフェッラーラへ穀物。

[47] Idem., 11 ff.

同公証人文書に記載された主要な輸出商品を地域別に整理した結果が、次頁の表 4 である。表からわかるように、オスマン帝国に輸出された商品は主に毛織物・絹織物等の繊維製品であり、ヴェネツィアの海外領土と並んでオスマン帝国は、ヴェネツィアから輸出される織物の主要な販路となっている[48]。さらに、輸出された繊維製品の詳細をみると、毛織物・絹織物ともおおむね高級品はオスマン帝国へ輸出されており、ヴェネツィアの海外領土に向けた織物輸出に高級品は少ない。

その一方で、イタリア諸地方・都市への輸出商品に繊維製品はほとんど見られない。北イタリアへは陸路を通じた輸送が一般的であるので、当然のことながら本論文で分析した史料にその実態が反映されないという事情もあるが、当時ヴェネツィア等北イタリアの諸都市で毛織物・絹織物製造業が成熟し、各都市が自国製品の保護を目的とした外国製品の輸入規制を敷いていたことも、背景として考えられる。

イタリア半島における絹織物製造は、16 世紀に入ると中都市から小都市へ拡大し、1600 年頃までに、アルプスからシチリアまで全イタリアにおける重要な産業となっていた。産地間の競争や模倣・模造が一段と活発になる一方で、各産地は自国製絹製品の保護につとめた[49]。例えばヴェネツィアでは、1490 年に元老院がヴェネツィア本島、大陸領土ならびに全ての海外領土の貴族と住民を対象に、ヴェネツィア製ではない金銀襴絹織物の輸入および着用の禁止を強化している[50]。

イタリア半島各地で同様の規制が敷かれたことから、ヴェネツィア製絹織物をヴェネツィア領外のイタリア半島へ輸出することは（少なくとも公的には）困難であった。既存研究では、こうしたた規制の結果、販売市場は主として規制を受けない自国の領土やオスマン帝国、ドイツ、イギリス、フランス等に絞られたと考えられている[51]。

カッティとスピネッリの公証人文書では、北ヨーロッパ向けの輸出は、干しブドウやブドウ酒（大半はイオニア諸島等、ヴェネツィアの海外領土産品の再輸出と考えられる）が主体で、繊維製品の輸出はみられない[52]。少なくとも同史料においては、ヴェ

---

48 同史料に見られるヴェネツィアからイスタンブル、ドブロヴニク（ラグーザ）、ヴロラ（ヴァロナ）の 3 都市に向けた輸出商品については、拙稿「近世のヴェネツィア絹織物産業とオスマン市場」『港町と海域世界』（シリーズ港町の世界史①）歴史学研究会編、青木書店、2005 年、299-331 頁を参照。

49 L.Molà (2000), *The Silk Industry,* pp.33 ff.

50 A.S.V., Compilazione Leggi, b.349. (D. Davanzo Poli (1984), *I mestieri della moda, I Documenti,* vol.1, p.59).

51 ドイツ市場は三十年戦争（1618－48 年）により荒廃し、さらに世紀後半には、重商主義政策のもとでフランスやイギリスの市場においてもヴェネツィア製品の締め出しが始まる。. 一方でチリアコノは、フランス市場へのイタリア絹製品の輸入は、多少の浮沈はあったものの 18 世紀中葉に至るまで堅持されていたと主張している（S. Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy; D. Sella (1961), *Commerci e industrie,* p.85.こうした規制の存在によって、同史料においてヴェネツィアから輸出される織物、特に高級品は、基本的に他国製品の再輸出ではなく、ヴェネツィア領内で製造されたものと考えることができる。

52 ただし絹織物のような高価商品は、陸路輸送で北ヨーロッパへ運ばれた可能性もある。16 世紀に

ネツィアから輸出される高級繊維製品の最重要な販路は、オスマン帝国である。

表 4　ヴェネツィアの輸出入貿易（1592-1609 年）―主要貿易商品

相手地域	主要都市	主要輸出品目	主要輸入品目
ヴェネツィア領	ケファロニア	織物	干しブドウ
	コルフ	織物（高級品あり）	コードバン・絹・油・ブドウ酒等様々
	ザンテ	織物・現金	ブドウ酒・干しブドウ
	カンディア	様々・木材・穀物	ブドウ酒・干しブドウ・油・チーズ
オスマン帝国	イスタンブル	織物（高級品あり）	皮革・羊毛・呉絽
	イズミル	織物	綿
	フォカイア		綿
	ドゥブロヴニク（ラグーザ）	織物（高級品あり）	皮革・羊毛・呉絽
	レジャ（アレッシオ）		羊毛
	ドゥラス（ドゥラッツォ）	織物	
	ヴロラ（ヴァロナ）	織物	コードバン・絹
	キプロス	織物	綿・インディゴ
	シリア	織物（高級品あり）	絹・綿・スパイス・インディゴ
	アレクサンドリア	織物（高級品あり）	スパイス・インディゴ・火薬
イタリア・シチリア			
マルケ	マラン・デッレ・グロッテ		穀物
アブルッツォ	フォルトーレ	皮革	穀物・油
	ヴァスト		穀物・油
プーリア	モルフェッタ		油
	バーリ	織物等様々・高級品少ない	油
	レッチェ	織物	油
	オトラント		油
	プーリア	様々	
カラブリア	メッシーナ	金属等様々	
シチリア	パレルモ	木材・書籍・ガラス等様々	砂糖・スパイス
イベリア半島	リスボン	様々（織物なし）	砂糖
	イベリア		羊毛
北西欧	アムステルダム	干しブドウ	穀物
	ミデルブルフ		穀物
	ハンブルグ		穀物
	イングランド	干しブドウ･マスカットブドウ酒	穀物・ニシン・金属等様々
	ロンドン	干しブドウ	カージー・鉛

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

おけるイタリア～ヨーロッパ内陸部～アントウェルペンの陸上輸送（河川も利用）については、W.Brulez の論文(1959 年)を紹介した、中沢勝三(1993)『アントウェルペン国際商業の世界』同文社、159-168 頁を参照。

ヴェネツィアからオスマン帝国への絹織物輸出

前述のように、カッティとスピネッリの公証人文書は、ヴェネツィアから輸出される繊維製品（毛織物・絹織物）の大半がオスマン帝国領に輸送されていたことを示している。記載された繊維製品の件数は下記の表の通りであるが、全体として毛織物の数が絹織物を上回っている。さらに毛織物の場合、1 件の契約につき梱単位、あるいは「32」「25」「28」等まとまった数で輸送されているケースも多く、絹織物との差は、実際はさらに大きい。（文末の資料 20-26 参照）

ヴェネツィアでは、1520 年代以降に自国製の高級毛織物製造と輸出が急成長し、17 世紀初頭に最盛期を迎えていた。製品の大半はオスマン市場に輸出され同市場を席巻していたと考えられている[53]。既に第 1 節でみたように、15 世紀のヴェネツィア商人もコンスタンティノープル（イスタンブル）に繊維製品を送っており、その内訳において、毛織物の数および金額は絹織物を上回っている。つまり、15 世紀と 17 世紀初頭では、ヴェネツィアからコンスタンティノープル（イスタンブル）へ輸出された繊維製品のおおまかな商品構成には、さほど大きな変化はみられないことになる。

ヴェネツィアから輸出された繊維製品契約件数（1592-1609 年）

	毛織物	絹織物	織物*	帆布
（オスマン帝国）				
イスタンブル	29	22	11	-
ラグーザ（ドゥブロヴニク）	15	24	17	-
ヴロラ、レジャ、ドゥラス	21	10	16	-
イズミル	13	3	17	7
シリア	6	7	3	5
アレクサンドリア	9	5	21	-
（ヴェネツィアの海外領土）				
コルフ	16	6	14	-
ケファロニア	1	1	2	3
ザンテ	5	5	3	-
クレタ	1	2	4	2

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

＊ 史料中で「織物 (pani)」とのみ記載されている。
併記された内容からも毛織物か絹織物か判別不可能。

[53] D.Sella (1968), "The Rise and Fall of the Venetian Woolen Industry".

しかし毛織物輸出の最盛期においても、輸出品は決して毛織物に特化されていたわけではない。前述のように、毛織物にかわって 17 世紀には絹織物製造業が成長する。カッティとスピネッリの公証人文書でも、毛織物に比較すると数は劣るが、オスマン帝国への絹織物輸出が相当数認められる。

同公証人文書では、特にイスタンブルとラグーザ（ドゥブロヴニク）への絹織物輸出が目立つ。ラグーザへの絹織物輸出件数はイスタンブル宛てのそれを上回っているが、ラグーザに輸送された絹織物の大半は、イスタンブル方面に向かったと考えられる。なぜならば、当時アドリア海南部ではウスコック海賊が出没し海上輸送は危険であったことから、これを避けてラグーザからエグナティア街道を通って陸路でイスタンブルへ向かうルートの利用が盛んであったためである。ウスコックの問題は、イタリア半島東側の港町アンコーナとラグーザ間の海路輸送が成長した理由のひとつでもある[54]。

カッティとスピネッリの公証人文書においてオスマン帝国へ輸出された絹織物の内訳をみると、伝統的な厚地の高級絹織物であるヴェルヴェット、ダマスク、タビー[55]が比較的多い。薄地織物のサテンもみられるが、重厚な高級品がオスマン市場向け輸出品の中心となっている（84-85 頁の表 5 参照）。

第 1 章および第 2 章で検討したように、17 世紀のオスマン帝国、特に首都イスタンブルは、セラーセル、ヴェルヴェット、各種紋織りといった重厚な高級織物の大消費市場であった。1640 年のイスタンブル公定価格（ナルフ）台帳では、ヴェネツィア製の絹織物として、薄地織物の 1 点に対して、厚地の高級織物（ヴェルヴェット、ディーバー）は 4 点記載され、イスタンブルにおけるヴェネツィア製高級絹織物の人気の高さを示している。

1524 年付けのイスタンブルからの書簡では、ヴェネツィア商人やフィレンツェ商人は、機会あるたびに、自国製のヴェルヴェットやダマスク織の豪華な衣装やタイツで装い、ペラ地区で豪勢な祝宴を開催した様子が語られている。ヴェネツィア商人たちのもてなしはフィレンツェ商人たちのそれに勝るといわれていた。ヴェネツィア商人達は、同地に居住する有力者アルヴィーゼ・グリッティ（Alvise Gritti、ヴェネツィア総督アンドレア・グリッティの庶子）の屋敷やヴェネツィア領事の公館で、オスマン宮廷の高官を招待して大宴会をおこなったが、それはまた、自国製の絹織物をイスタ

---

54 *The Via Egnatia under Ottoman Rule (1380-1699),* Elizabeth Zachariadou (ed.), Crete University Press, Rethymnon, 1996. ; 齋藤寛海(1988)「アンコーナとラグーザ　十六世紀のレヴァント商業」『イタリア学会誌』35 号、118–138 頁。

55 原産地であるバグダードの街区名 *al-'attâbiyya* を語源とする、タフタに似た厚地の絹織物。

ンブルの富裕層に売り込む絶好の機会でもあった[56]。

イスタンブルにおけるイタリア製絹織物の人気があまりに高かったため、スレイマン一世の大宰相リュステン・パシャ（Rüsten Paşa、大宰相 1544-53、55-61 年）のもとで、財政立て直しの一環として、ヴェネツィアをはじめイタリアから輸入される高額な絹織物に対抗すべくイスタンブルで高級絹織物製造が大いに振興された。しかし国産高級絹織物生産が軌道に乗った後も、イスタンブルではイタリア製品に対する需要は根強く、17 世紀においてもイタリア製高級絹織物がオスマン帝国に輸入され流通していたことは、第 2 章でみた通りである。

リュステン・パシャ自身、1554 年に姪のためにヴェネツィアの絹製品を注文しており、他にもオスマン帝国の高官がヴェネツィア等のイタリア製品を愛好していた事例は少なくない[57]。また、国立ヴェネツィア文書館には、16 世紀後半に、オスマン宮廷から直接ヴェネツィアに高級絹織物を注文した、以下のような書簡が残されている。

①ヒジュラ暦 997 年ラマザン月第 1 週（西暦 1589 年 6 月 14-23 日）付け.

コンスタンティノープル[イスタンブル]発.

スルタン・ムラト三世より、ドージェ[パスクアーレ・チコーニャ]宛て。

「古くからの慣習に従って、スルタンは国庫役人ムスタファに対し、[オスマン]帝国国庫が支払うかたちで、ヴェネツィア製の金襴絹織物 2,000 ブラッチョ[58]を購入することを任せられた．代金はラグーザの貢納金で支払われるであろう」[59].

②ヒジュラ暦 997 年ムハッラム月第 3 週（西暦 1589 年 11 月 30 日-12 月 9　日）付け.

コンスタンティノープル[イスタンブル]発.

スルタン・ムラト三世より、ドージェ[パスクアーレ・チコーニャ]宛て.

「スルタンは、ハサンとメフメトに対し、宮廷の御用商人である使節のハリルに代わって、合わせて 14 半[60]の絹[生糸]をヴェネツィアに持参し、それを売却した利益でスルタンのために商品を購入することを任せられた」[61].

---

[56] Stella Mary Newton(1988),*The Dress of the Venetians, 1495-1525*, Brookfield, Vermont, pp.106-7. ; L. W. Mackie (2001), “Italian silks for the Ottoman Sultans”, p.6.
[57] Gürlü Necipoğlu (1990), "From International Timurid to Ottoman: A change of taste in sixteenth century ceramic tiles", *Muqarnas,* 7, p.169, n.49 (*İpek* (2001)*,* p.184).
[58] 1 ブラッチョは約 64 ㎝。
[59] A.S.V., I Documenti Turchi, b.8, n.991.; *I Documenti Turchi*, Maria Pia Pedani (ed.), Venezia, 1994, p.252.　（[　]内は筆者による補足である）。
[60] 本文中に単位なし。
[61] A.S.V., I Documenti Turchi, b.8, n.992.; *I Documenti Turchi,* p.252.

伝存するスルタン一族の衣装には、17 世紀のものも含め、イタリア製ヴェルヴェットを使用したものが多く含まれることから、上記の注文でみられるような宮廷や高官を中心としたイスタンブルの富裕層の間で、ヴェネツィア製ないしはイタリア製の厚地高級織物は 16、17 世紀を通じて安定した需要を維持していたと考えられる[62]。カッティとスピネッリの公証人文書の内容は、イスタンブルにおけるヴェネツィア製絹織物に対する評価を裏付けているといえよう。

なお第 2 章でみたように、17 世紀前半のイスタンブルおよびブルサ市場では、ヴェネツィア製の綿絹交ぜ織りが流通していたことが確認されたが、カッティとスピネッリの公証人文書では、交ぜ織りの輸出は確認されなかった。ただ、史料中で「織物」とのみ記載され、素材が不明の商品が多数記載されており、ここに交ぜ織りが含まれている可能性はある。

17 世紀後半の展開

1670 年代以降、ヴェネツィアの高級絹織物製造は、大陸領土の絹撚糸生産と並んで共和国経済回復の原動力となっていったと考えられている。17 世後半のヴェネツィアにおける絹織物製造に関して、セッラによってデータが提示されているが、これは登録された機の数と 1 日に織る長さ、さらに 1 年の労働時間をかけ合わせて、年間の生産量を概算したものである（次頁のグラフ参照）。この統計からは、17 世紀後半にヴェネツィアにおける絹織物生産量全体が減少傾向にあるなかで、金銀糸を用いた絹織物すなわち高級品の生産量はある程度のレベルを維持ないしは若干の増加傾向にあったことがわかる[63]。

サン・ディディエは、『ヴェネツィアの都市と共和国』（1685 年出版）のなかで、「トルコ人やアルメニア人が、[ヴェネツィアから]イスタンブルやペルシアに向けて想像しがたいほど沢山のブロケード、ダマスク織、金襴絹織物を絶えず送り出している」と記している[64]。また、イスタンブル駐在のヴェネツィア領事は 1682 年に本国に向けて、「金襴の[絹]織物の取引だけで、…（中略）…合計[金額は]30 万レアルに達する」と報告した[65]。1685 年頃のレヴァント交易に関するフランスの史料でも、イスタンブルに

---

62 “Italian silks for the Ottoman market”, pp.182-90.; L. W. Mackie (2001), “Italian Silks for the Ottoman Sultans”.; ヒュルヤ・テズジャン(1980)、「スルタンの衣裳とトルコの織物」、132-7 頁。オスマン宮廷におけるイタリア製ヴェルヴェットの使用は、1470 年代の写本用の装飾が始まりと考えられている。

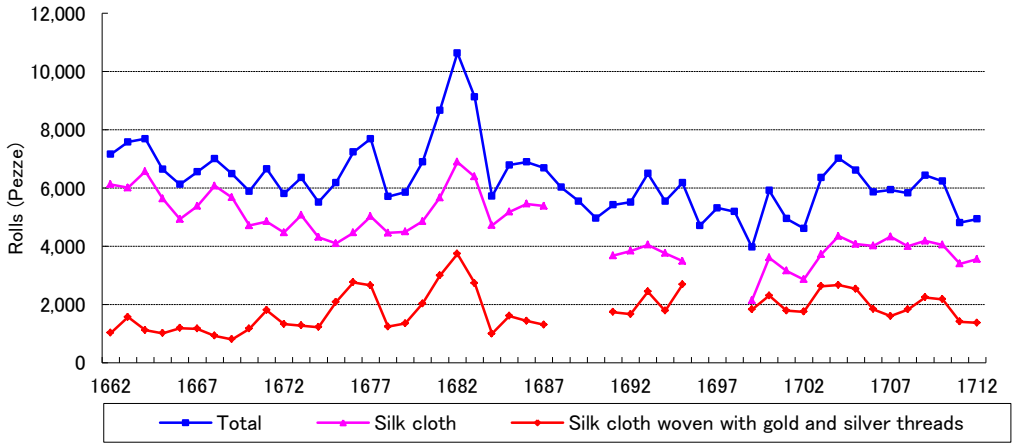
63 D. Sella (1961), *Commerci e industrie,* p.129 Tab. III.

64 Saint-Didier, *La ville et la république de Venise,* 4a ed., L'Aja, 1685, p.81.

65 A.S.V., Dispacci Costantinopoli, filza 162, al 3 gennaio 1681, *more veneto.* セッラは、イスタンブルにおけるヴェネツィア製高級絹織物の需要を示す同種の証言として他に Cornelio Magni,

おけるヴェネツィア商人の優位が認められている[66]。こうした同時代の証言は、最高級のヴェネツィア製絹織物が、17 世紀後半においても、依然としてイスタンブルとその周辺で非常に人気があったことを示している。

ヴェネツィア市内の絹織物生産量（1662―1712 年）



出典：D.Sella(1961), *Commerci e industrie*, Appendice.F.より筆者作成

Quanto di più curioso e vago ho potuto raccorre per la Turchia, Parma, 1679, p.54.、および Jacque Savary, *Le Parfait Négociant,* I, Den Hague, 1685 (4th ed.), p.412.の証言を挙げているが、筆者は原典で該当箇所の確認ができなかった。

[66] Archives Nationales de Paris, K1347-3,4,5. (Fernand Braudel et al. (1961), "Le déclin de Venise au XVIIe siècle", *Aspetti e cause della decadenza economica veneziana,* pp.59-60).

表 5　ヴェネツィアから輸送された絹織物（オスマン帝国およびヴェネツィアの海外領土向け、1592-1609 年）

輸出先	商品	数量・価格	史料番号
イスタンブル (22)	ヴェルヴェット	[ダマスク織とあわせて] 1 小箱	375
	ヴェルヴェット	280 ブラッチョ	711
	ヴェルヴェット	87 ブラッチョ	711
	ヴェルヴェット	1 *cavezzo*	868
	ヴェルヴェット	193 ブラッチョ	868
	ヴェルヴェット (6)	246 ブラッチョ	1009
	ダマスク織	[ヴェルヴェットとあわせて] 1 小箱	375
	パランゴンの緋色ダマスク織	56 ブラッチョ	399
	ダマスク織	[サテンとあわせて] 885 ブラッチョ	711
	ダマスク織 (4)	77½ブラッチョ	868
	タビー織	1718 ブラッチョ	711
	タビー織	488 ブラッチョ	711
	タビー織 *marizo* 付き	790 ブラッチョ	1009
	タビー織 (4)	3487 ブラッチョ	1009
	銀襴[絹]織物 (1)	410 ブラッチョ	475
	サテン	1252 ブラッチョ	475
	サテン	[ダマスク織とあわせて] 885 ブラッチョ	711
	サテン (3)	14 ブラッチョ	868
	絹織物	236 ブラッチョ	711
	絹織物		711
	絹織物		716
	絹織物 (4)	1000 ドゥカート相当	1009
ドゥブロヴニク (24)	銀ヴェルヴェット	260 ブラッチョ	214
	すみれ色のヴェルヴェット	25 ブラッチョ	347
	carnado ヴェルヴェット	12 ブラッチョ	347
	緑のヴェルヴェット (4)	38 ブラッチョ	347
	ダマスク織	540 ブラッチョ	214
	ダマスク織	1 大包	214
	ヴェネツィアのダマスク織	140¼ブラッチョ	347
	ダマスク織	3 ブラッチョ	347
	ダマスク織	1111 ブラッチョ	411
	ダマスク織 (6)	[サテンとあわせて] 1020 ブラッチョ	883
	タビー織	12½ブラッチョ	347
	タビー織 (2)	15¼ブラッチョ	464
	金蘭絹織物	2 箱	214
	銀襴[絹]織物	120 ブラッチョ	347
	金銀襴[絹]織物 (3)	86 ブラッチョ	347
	サテン	36 点（＝3613¾ブラッチョ）	4
	ヴェネツィア製サテン	3 点	210
	サテン	163 ブラッチョ	347
	ヴェネツィア製 *alti* のサテン	2 点	411
	すみれ色のサテン	14¼ブラッチョ	464
	サテン (6)	[ダマスク織とあわせて]　1020 ブラッチョ	883
	ブロカテール	12½ブラッチョ	347
	絹織物	[毛織物とあわせて]5 梱、1300 ドゥカート相当	155
	絹織物 (3)	2 小箱	622

輸出先	商品	数量・価格	史料番号
ヴァロナ (10)	ヴェルヴェット	38 ブラッチョ	608
	ダマスク織	[サテンとあわせて] 315 ブラッチョ	608
	ダマスク織		657
	タビー織		608
	金蘭[絹]織物	25 ブラッチョ	608
	金蘭[絹]織物	150 ブラッチョ	608
	サテン		657
	サテン	[ダマスク織とあわせて] 315 ブラッチョ	608
	絹織物	235 ブラッチョ	608
	絹織物		657
ヴィトロ* (2)	絹のヴェール		734
	絹の *dimitto*		734
イズミル (3)	絹織物	740 ブラッチョ	556
	絹織物	237 ブラッチョ	556
	絹織物	574 ブラッチョ	556
キプロス (4)	緋色サテン	144 ブラッチョ	454
	タビー織	［サテンとあわせて］54 ブラッチョ	454
	サテン	［タビーとあわせて］54 ブラッチョ	454
		1 ブラッチョにつき 2 ドゥカート	454
	絹織物		972
シリア (7)	緋色ダマスク織	1 小箱	16
	ダマスク織	51 ブラッチョ	529
	latado ダマスク織り	75 ブラッチョ	802
	金銀襴織物	161 と 1/2 ブラッチョ	254
	サテン	162 ブラッチョ	254
	サテン	2 点（408 ドゥカート相当）	254
	絹[織物]	400 ブラッチョ	1017
アレクサンドリア (5)	ダマスク織	[サテンとあわせて] 108 ブラッチョ	639
	ダマスク織	[サテンとあわせて] 1 箱（=771 ブラッチョ）	788
	サテン	[ダマスク織とあわせて] 108 ブラッチョ	639
	サテン	[ダマスク織とあわせて] 1 箱（=771 ブラッチョ）	788
	絹織物	2700 ドゥカート相当	788
コルフ	金銀のヴェルヴェット	95 ブラッチョ （1 ブラッチョにつき 5 ドゥカート）	
	サテン	161 ブラッチョ	
	緋色のヴェルヴェット	5 ブラッチョ	
	絹と金の縁飾り	20 ブラッチョ	
	絹のブロカテール	26 ブラッチョ	
	絹織物	1 箱（125 ブラッチョ）	
ケファロニア	サテン	1 箱（32 ブラッチョ）	
ザンテ	ダマスク織り		
	サテン[ダマスク織とあわせて]	400 ブラッチョ	
	サテン	430 ブラッチョ	
	絹織物	273 ブラッチョ	
	絹製品		
クレタ島	ダマスク織り	100 ブラッチョ	
	絹織物	3 小箱	

*コルフ島からヴィトロ（モレア南部）宛て
1 ブラッチョは約 64cm.

ヴェネツィア製絹織物のオスマン帝国市場流入とブルサ絹織物製造業

ここまで検討してきたように、17 世紀を通じて、オスマン帝国は高級品を主とするヴェネツィア製絹織物の重要な輸出先であったと考えられる。オスマン帝国に流入したイタリア都市の製品は、ヴェネツィアに限らない。例えばフィレンツェの毛織物・絹織物製造業も、オスマン帝国を重要なターゲットとして成長した。第 2 章で検討した公定価格（ナルフ）台帳には、フィレンツェ製の毛織物・絹織物が、ヴェネツィア製と同等かそれを上回る数で記載されている。

前述のように、近世にヴェネツィアやフィレンツェなどのイタリア製絹織物がオスマン帝国に大量に輸入・消費されたことは、当時、帝国財政を揺るがす程の大問題とみなされた。さらに現代の歴史研究では、イタリア製絹織物の存在は、当時のオスマン帝国における絹織物製造業中心地のひとつであったブルサの浮沈に多大な影響を与えたと考えられている。

つまり絹織物を軸とする近世のヴェネツィアとオスマン帝国の交易は、ヴェネツィアの急速な経済的衰退を回避させる一方で、オスマン帝国のブルサ絹織物製造業に対しては深刻な打撃となり、いずれも双方の社会経済に大きな影響を与えていた可能性が提示されていることになる。以下では、ヴェネツィア絹産業とブルサ絹織物製造業の関係を、絹織物と生糸の二つの方向から検討する。

オスマン帝国では、16 世紀なかばに、イタリア製絹織物に匹敵する高級絹織物製造の中心がブルサからイスタンブルに移った。1575 年を境にイスタンブルの宮廷からブルサの絹織物生産者に出される注文が、高級品から軽量の中級・低級品中心に変化していったことからもわかるように、16 世紀後半以降、ブルサでは比較的安価な中低級絹織物製造が主体となる[67]。

これまでブルサ絹織物製造業研究では、16 世紀から 17 世紀におけるブルサ絹織物製造業の質的変化を危機と衰退の開始とみなしてきた。さらにこうした認識は、ブルサという一都市の絹織物製造業の枠を越えて、オスマン帝国の経済史全体にまで適用された[68]。林佳代子の整理によれば、「[オスマン帝国の]16 世紀の繁栄と 16 世紀末以後の経済的危機を体現した場としてのブルサが描かれてきた」のである（[　]内は筆者による加筆）[69]。

---

[67] F. Dalsar (1960), *Türk Sanayı ve Ticaret Tarihinde Bursa'sa İpekçilik*, pp.230-232.
[68] M.Çizakça (1985), "Incorporation of the Middle East into the European World- Economy", *Review*, 8, pp.353-377.（*The Ottoman Empire and the World Economy* に再録）.
[69] 林佳代子(1991)「トルコ」『イスラム都市研究―歴史と展望』羽田正・三浦徹編、東京大学出版会、189 頁.

ブルサの絹織物印紙税請負額の分析をもとにしたチザクチャの研究によると、同地の絹織物生産は、特に 1577-1618 年にかけて激減している。チザクチャは、ブルサ絹織物製造業衰退の理由として、ブルサにおける原料（ペルシア産生糸）価格の上昇とブルサ製絹織物価格の下落という二重の圧力によって、オスマン帝国市場におけるブルサ製絹製品の競争力が低下したことを挙げている。さらに原因となる諸現象を引き起こしたのはいずれもヨーロッパの絹織物産業であり、同産業のペルシア生糸に対する需要の増大がブルサ市場における生糸価格の高騰を、また価格の安いヨーロッパ絹製品のオスマン市場への流入がブルサ製絹製品の価格低下を招いたと見なした[70]。

しかしチザクチャの主張には、当時のヨーロッパにおける絹織物製造の中心地であるイタリア、特にヴェネツィアのオスマン市場における動向に関する分析が欠落している。この弱点は彼自身も認めており、問題の重要性に鑑みて最終的な判断を一部保留している[71]。

このようなブルサの「危機と衰退」説に対して、例えばハーイム・ガーバー(Haim Gerber)は、17 世紀のブルサの経済構造は衰退を示すような変化を見せておらず、繁栄を維持していたと反論している[72]。また近年では特に美術史の分野において、ブルサ絹織物製造業に見られた 16 世紀の変化を、衰退というよりはむしろ質的変化と考え、さらにそれをオスマン帝国の絹織物製造業全体に当てはめることを疑問視するようになっている。その見解によれば、ブルサの絹織物が中・低級化する時期に、宮廷指導のもとイスタンブルで高級絹織物生産が本格化していき、オスマン帝国における絹織物製造業の最盛期はむしろ 17 世紀であった[73]。

チザクチャの分析では、ブルサ製絹織物の中でも、特に高級品に属するケムハー（金銀糸も使用した厚地の紋織り）が、1545 年から 1655 年にかけて相対的な価格の停滞を示している[74]。確かに本論文第 2 章および第 3 章で検討したように、17 世紀前半、

---

[70] M. Çizakça (1983), "A short history of the Bursa silk industry (1500-1900)".

[71] Id. (1980) "Price History", p.546.。チザクチャはまた、18 世紀以降に関しても一貫して「ヨーロッパ」絹織物産業の需要が、ブルサ絹織物製造業の盛衰や、ブルサ経済がオスマン生糸の輸出に特化していく過程に大きな影響を与えたとみなしている(M.Çizakça (1983), "A short history of the Bursa silk industry ".)。オスマン帝国の製造業衰退の理由として、ヨーロッパの需要増による原料価格の高騰と外国製品の流入を重視する見解は、テサロニキの毛織物製造業を分析した以下のブロード論文においても共有されている。Benjamim Braude (1979), "International Conpetition and Domestic Cloth in the Ottoman Empire, 1500-1650: A Study in Underdevelopment", *Review,* II,3, pp.437-451.

[72] Haim Gerber (1988), *Economy and Society in an Ottoman city, Bursa 1600-1700,* Jerusalem.

[73] オスマン絹織物の最盛期を 17 世紀とみる見解では、イスタンブルで官製高級品製造が軌道に乗ったことに加えて、西アナトリアで養蚕が本格化したことも重要視されている(*İpek* (2001), p.158.)。

[74] M.Çizakça (1980) "Price History", p.540, Fig.2, p.544. ブルサ絹織物製造業史を研究したダルサールは、1960 年に出版した文献のなかで、1600 年代以降ヴェネツィアやヨーロッパからオスマン市場へアトラス(サテン)の輸入が増えたと主張している。またチザクチャもダルサールの主張に従い、ブルサの遺産目録台帳をもとにオスマン帝国で製造された絹織物価格を検討する際、アトラスを国産

ヴェネツィアやフィレンツェの絹織物は高級品を中心にオスマン帝国市場に輸出され、かなりの評価を得ていた。セッラによると、イタリア製の絹織物がオスマン市場で顧客を獲得した理由として、卓越した織布技術（特にヴェルヴェット）、派手な色彩、見た目に比べて値段が安かったことが挙げられる[75]。したがって、オスマン帝国に流入したヴェネツィアなどイタリア製の高級絹織物が、ブルサ製品の強力なライバルとなり、後者のシェアを奪いながらオスマン帝国市場で需要を伸ばしていった可能性は小さくない。

しかし、近世のオスマン帝国における絹織物消費の中心である首都イスタンブルは、当時世界有数の巨大都市であり、既に第 2 章で見たとおり、繊維製品に関して、ある特定の産地の製品がその市場を独占するのではなく、多種多様な製品の市場が並立する、消費の多重興構造が成り立つような場であった[76]。イタリア製の絹織物も高い評価を受けていたとはいえ、決してイスタンブルやブルサの高級絹織物市場を独占していたわけではない。

したがって 16 世紀なかばから約 1 世紀間ブルサ製ケムハーにみられた価格停滞の理由は、イタリアをはじめとするヨーロッパ製品の流入のみならず、高級絹織物製造の中心がイスタンブルに移る一方で、ブルサでは中級以下の製品製造を主にしたことも大きく影響していると考えられる。

ヴェネツィアの生糸輸入貿易とシリア

ブルサ製絹織物製造業衰退のもうひとつの理由としてあげられている、ヨーロッパ（特にイタリア）商人によるブルサ市場でのペルシア生糸の購入競争についてはどうであろうか。

ヴェネツィアでは、絹織物製造業の発展に従い、13 世紀頃からモレア（ペロポネソス半島）および南イタリアからの生糸輸入が増え、その後ペルシア産生糸も輸入された。最高級のペルシア産生糸はカスピ海沿岸で生産され、陸路を通じて地中海沿岸地域へ運ばれた。16 世紀までは、シリアのアレッポとアナトリアのブルサが地中海地域

品の対象から外している(F. Dalsar(1960), *Türk Sanayı ve Ticaret*, p.38; M.Çizakça (1980), "Price History", p.538).

75 D. Sella (1961), *Commerci e industrie,* p.68.

76 オスマン帝国における市場や消費を重視した歴史分析は比較的新しい分野であり、いまだ十分な分析や議論はなされていない。この問題に関しては、試論の域を出ないものも多いが、*Consumption Studies and the History of the Ottoman Empire*、また *Ottoman Costumes, From Textile to Identity,* (2004). 所収の各論文を参照。オスマン帝国における繊維製品消費の多重構造については、綿製品に関するものとして、深沢克己（1986）「レヴァント更紗とアルメニア商人　―捺染技術の伝播と東西交易―」『土地制度史学』198 号、28-9 頁（深沢克己(2007)、『商人と更紗』に再録)を参照。

における生糸の二大集散地であった。ヴェネツィア商人は、15 世紀半ばまでは、主に黒海沿岸（タナ、トラブゾン）、コンスタンティノープルで生糸を買い付けていた。15 世紀後半になるとダマスクスとアレッポでの購入にかわり、16 世紀以降はアレッポが取引の中心となった[77]。

本論文で検討したように、ヴェネツィアからオスマン帝国市場に輸出された絹織物は、主にヴェルヴェットや紋織り等、金銀糸も用いた厚地の高級品であり、17 世紀を通じて概ね生産が維持された[78]。生糸は、産地によって糸の太さや強度、色等の性質に大きな違いが生じることを避けられない。したがって各製造者および製造者組合（アルテ）は、製造する織物にあわせて用いるべき生糸（正しくは生糸から製造する撚糸の織糸）の産地を細かく分類・指定していた[79]。ヴェネツィアで製造される高級絹織物に適した織糸は、やはり高級品のペルシア産やモレア産の生糸から製造される。ヴェネツィアの大陸領土で生産される絹撚糸は、大半がフランス等国外へ輸出された[80]。

ヴェネツィア絹製造業研究史家のモラは、16 世紀末から 17 世紀初め、ヴェネツィア領内で流通していた第一級生糸の量を、以下のように推計している。これは、国外との輸出入でヴェネツィアを通過した生糸と、大陸領土で生産された生糸の年間の総量である。なお、第二級生糸や屑糸はここに含まれない[81]。

シリアとペルシアから	50 万リブラ-ソッティーレ超
南イタリアとイベリア半島から	5 万リブラ-ソッティーレ
ギリシアとアルバニアから	推計データなし（15 万リブラ-ソッティーレ？）
大陸領土	50 万リブラ-ソッティーレ
計	約 120 万リブラ-ソッティーレ （1 リブラ-ソッティーレ＝301 g）

モラの推計によれば、当時のヴェネツィアではシリアとペルシアからの生糸輸入が大きな割合を占めていることがわかるが、これらはもっぱらアレッポで買付けられた

[77] L.Molà (2000), *The Silk Textile Industry,* pp.57-8. ヴェネツィアは 1545 年にシリア領事をダマスクスからトリポリに移し、さらに 1548 年にアレッポへ定めた。Bruce Masters (1999), "Aleppo: the Ottoman Empire's caravan city", *The Ottoman City between East and West, Aleppo, Izmir, and Istanbul,* E.Eldem, D.Goffman & B.Masters (eds), Cambridge, p.26.
[78] D. Sella (1961), *Commerci e industrie*, Appendice F.
[79] L.Molà (2000), *The Silk Textile Industry,* pp.56,68-70, 72ff.
[80] L.Molà (2000), *The Silk Textile Industry,* pp241ff.; モラは、オスマン帝国から輸入した生糸も全てヴェネツィア市内の絹織物製造に回されたのではなく、かなりの割合で再輸出されたと推論しているが、根拠となる史料は決定的に不足している。Idem., pp.59-60.
[81] Idem., pp.304-5.

ものと推測できる。

ブルサでは、前述のようにイタリア商人とオスマン商人の間で激しい生糸獲得競争がみられ、結果としてブルサの伝統的地場産業である高級絹織物製造の質低下を招く一因となったと考えられている[82]。これに対しアレッポでは、ある程度絹織物製造業の展開もみられたが、同地に集まるペルシア産生糸および周辺で生産されるシリア産生糸は、もっぱらヨーロッパ商人に売却された[83]。ヴェネツィア商人は、16 世紀のアレッポでフランス等を抑えて優位に立ち、17 世紀に入っても有力な存在であったが、次第にイギリスおよびフランスの商人、特に前者の数が増加していった。

この当時、ペルシアからアレッポを経由してヨーロッパへ輸出される生糸交易で活躍したのが、ペルシアの首都イスファハン郊外に居住するアルメニア商人である。ヨーロッパ商人は、銀ないしは毛織物との物々交換の形で、アルメニア商人からペルシア産生糸を入手し、トリポリおよびアレクサンドレッタ（イスケンデルン）の港からヨーロッパへ向けて輸送した[84]。カッティとスピネッリの公証人文書にみられる、シリアへ輸出された毛織物・絹織物も、生糸との取引に用いられる場合も少なくなかったであろう。

カッティとスピネッリの公証人文書でも、絹（生糸）はもっぱら「シリア」および「シリアのトリポリ」から輸送されており、史料中に記載は無いものの、その大部分はアレッポで買付けられたと考えられる。他の生糸輸入は、イオニア諸島のコルフ島（ヴェネツィア領）[85]、およびキプロス島（オスマン領）[86]からの商品に多少含まれる程度である。

シリアから輸送される生糸には、通常ペルシア産生糸とシリア産生糸の両方が含まれていた。16 世紀以降のヴェネツィアではシリア産生糸の需要が急増し、時にはペル

---

82 ブルサの生糸市場におけるイタリア商人と地元商人の関係については、チザクチャのほか以下の研究を参照。Halil İnalcık (1994), "Bursa and the silk trade", H. İnalcık & D. Quataert (eds.) *The Economic and Social History of the Ottoman Empire,* pp.218-255; F. Edler De Roover (1966), "Andrea Banchi, Florentine silk manufacturer and merchant in the Fifteenth Century"..

83 オスマン時代のアレッポについては以下を参照 Bruce Masters (1988), *The Origins of Western Economic Dominance in the Middle East.*; Id (1999), "Aleppo: the Ottoman Empire's caravan city", *The Ottoman City between East and West,* pp.1-78.

84 アレッポにおけるフランス商人の取引と現地社会との関わりについては、深沢克己(1999)「レヴァントのフランス商人　―交易の形態と条件をめぐって」『ネットワークの中の地中海』（歴史学研究会編）青木書店、113―142 頁を参照。18 世紀になると、アラビア語を話すキリスト教徒がアルメニア商人にかわってアレッポ商業を支配するようになる。またアナトリアのイズミルが、ペルシア産生糸の集散地として急成長していった。イズミルについては、Daniel Goffman (1990), *Izmir and the Levantine World* を参照。アレクサンドレッタには、1593 年に税関が創設され、1939 年までアレッポの主要な外港として存続した。Bruce Masters (1999), "Aleppo", p.29.

85 資料番号 241、808、852、1007。

86 資料番号 487、819

シア産生糸のそれを上回ることもあった[87]。カッティとスピネッリの公証人文書では、*beledi (beledina)*、*satar* 等、ペルシア産生糸であることが併記されているものもあるが、産地不明の生糸も多く含まれる。

同史料には、ヴェネツィア領のコルフ島からの絹（生糸）輸出も数点みられる。これらが地理的にコルフ島に近いモレア産生糸であった可能性はあるが、いずれも産地の併記はない[88]。モレア産生糸は、重厚な高級絹織物にも安価な薄地絹織物にも適する材料として需要があった[89]。しかしヴェネツィアでは、16 世紀半ば以降、モレア生糸をめぐってアンコーナやオスマン商人との競争が激しくなり、安価な輸入が困難になりつつあった[90]。こうした状況が、同史料にみられるモレア生糸輸入に影響を与えたともいえよう。

ヴェネツィアでは、絹織物製造のみならず、生糸の輸入および再輸出もおこなわれていた。モレア方面からの生糸輸入が少ないことは、ヴェネツィアにとって、アレッポでの生糸購入と本国への輸送が、本国の絹織物製造および生糸輸出入業にとって不可欠の活動であったことを示す。

17 世初頭、シリアからの生糸輸入は 15 世紀の約 5 倍にまで達した[91]。セッラによれば、シリアからの生糸輸入は、1604 年以降減少する[92]。しかしセッラの統計データは 1613 年までであり、この間のペルシア生糸輸入の減少は、キャラヴァンによって輸送されるペルシア産生糸の供給が、オスマン-サファヴィー間の政治紛争により不安定であった影響を受けていると考えられる[93]。特に 17 世紀初めには、サファヴィー朝のシャー・アッバース（在位 1587-1629 年）によって、オスマン帝国に対する妨害工作の一環として、アレッポへのペルシア産生糸輸送が激減した。シャー・アッバースの死後、アレッポにおけるペルシア産生糸交易は復活している。

なお、17 世紀前半におけるヴェネツィアとシリア（アレッポ）の交易関係は、生糸交易に限定されたものではない。カッティとスピネッリの公証人文書でも、シリアから相当量のインディゴ、スパイス、綿などがヴェネツィアへ輸送されている[94]。マスタ

---

87 L.Molà (2000), *The Silk Textile Industry,* p.59。
88 註 190 参照。他のイオニア諸島（ザンテ島、ケファロニア島）からは、ヴェネツィアへの生糸の輸出はみられない。
89 L.Molà (2000), *The Silk Textile Industry,* p.68.
90 Idem., pp.64-75.; 16 世紀以降のアドリア海におけるヴェネツィアとライヴァル都市の関係については、齋藤寛海「アンコーナとラグーザ　16 世紀のレヴァント商業」『イタリア学会誌』35 号、1988 年、118 -138 頁を参照。
91 L.Molà (2000), *The Silk Textile Industry,* p.58.
92 D. Sella (1961), *Commerci e industrie,* Appendice C.
93 オスマン帝国では、ペルシア産生糸への依存を脱するべくブルサ周辺での養蚕が奨励され、17 世紀になると軌道に乗り始める。*İpek* (2001), pp.155ff.
94 同史料にみられるヴェネツィアとシリアの輸出入貿易については、飯田巳貴（2012）「近世におけ

ーズによると、17 世紀前半にインド王族の代理としてアレッポに駐在したインド商人が、40,000 グルシュ相当という当時のアレッポでは他に類を見ない大量のインド産品をヴェネツィアに送った記録が残されている[95]。

以上のように、17 世紀前半、ヴェネツィア商人は主にアレッポでペルシア生糸およびシリア生糸を購入していた。したがってブルサにおける生糸購入競争に対するヴェネツィアの関与は、これまで主張されてきたほどには大きくなかったとも考えられる。しかし当時オスマン帝国内では、ヴェネツィア以外のイタリア商人が活発に生糸を購入し、生糸購入市場に影響力を持っていた可能性は残っている。

また、イタリア製絹織物はオスマン帝国市場を独占していたわけではないが、同地において大きな存在であったことは事実であり、ブルサ等オスマン帝国の地場産業に与えた影響力は無視できない。

オスマン帝国市場におけるヴェネツィア以外のイタリア製絹織物の存在、およびヴェネツィアを含めたイタリア商人によるブルサおよびアレッポ市場での生糸購入を軸とした交易の実態解明は、近世におけるオスマン帝国とイタリアの経済的関係を解明するうえで、今後検討すべき重要な課題である。

るヴェネツィア共和国とシリアの輸出入貿易、1592-1609 年」『専修大学人文科学研究所月報』258 号、1-17 頁を参照。「シリアとキプロス」（資料番号 877）および「シリアのトリポリとキプロス」（同 502）からの商品にも絹が含まれるが、この商品がシリアとキプロスどちらで船積みされたかは、文書からはわからない。

[95] B. Masters (1999), “Aleppo”, pp.34-35.

結論

17 世紀の地中海地域は、大きな変化の時代を迎えていた。北西欧諸国の船舶が本格的に海上輸送に進出する一方、中世以来海上交易の中心的存在であったイタリア船は相対的な地位を低下させつつあった。数世紀にわたりイスラーム世界からイタリアを通ってアルプス以北に伸びていたアジア産品のルートは、次第にオランダ船を主体とする喜望峰ルートに移行していく。

しかし古代から地中海によって結ばれたイタリアと東地中海の交易関係は、かつて考えられていたように 17 世紀において急速に衰退したと断定するわけにはいかない。この 20－30 年間で、地中海周辺のそれぞれの地域で 17 世紀経済の再考が別個に進められているが、そのなかに地中海地域内交易圏の存続を示唆する手がかりが、おぼろげな姿を現しているからである。

その手がかりとは、中世後期から近世にかけて北イタリアの各地で勃興した輸出向け製造業の成功と、オスマン帝国市場との結びつきである。イタリアの奢侈品製造業躍進の背景として、イスタンブルを中心とするオスマン帝国市場との結びつきの重要性を経済史の文脈でそれまでになく強調したのは、フィレンツェ毛織物製造業史を専門とする星野秀利であった。星野によれば、15 世紀におけるフィレンツェ毛織物製造業の復興は、膨大な人口を有するオスマン帝国市場での成功にあった。晩年の星野の研究対象のひとつは、レヴァントとフィレンツェとの経済関係史であり、その急逝（1991 年）によって果たされなかった著作の題名は、まさに、”Economic Relations between the Ottoman Empire and Florence in the Fifteenth and Sixteenth Centuries” であった[1]。

ヴェネツィアは中世以来 16 世紀まで地中海海上交易の中心のひとつであり、かつては歴史研究における「17 世紀衰退論」の象徴的存在でもあった。しかし現在では、16 世紀なかば以降に輸出向け製造業が成長し、17 世紀になると海上交易にかわって絹織物製造業、ガラス製造業、印刷・出版業、大陸領土での養蚕や絹撚糸製造業等が、共和国経済の急速な衰退をある程度まで回避したと考えられている。

近世ヴェネツィアの絹織物製造業研究では、オスマン帝国がヴェネツィア製絹織物の重要な市場であったことが繰り返し示唆されてきた。一方でオスマン帝国の染織史

[1] 星野秀利（齊藤寛海訳）(1995)『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』、397 頁。

研究および社会史研究では、ヴェネツィアをはじめとするイタリア製高級絹物が、近世を通じてイスタンブルの宮廷や上流階級で相当需要があったと考えられている。

したがって、17 世紀におけるヴェネツィアとオスマン帝国との絹織物を介した交易関係の実態を明らかにすることは、これまで看過されてきた 17 世紀地中海地域内交易圏の再考に対して、何らかの手がかりを提供しうると考えられる。本論文ではこうした問題意識のもと、17 世紀におけるヴェネツィアとイスタンブルを中心とするオスマン帝国との絹織物を軸とした交易関係について、一次史料を用いて実証的に検討した。そしてこれまでの研究史で欠落していた部分の、少なくともその一部を埋めることを目的とした。

第 1 章では、主に先行研究に依拠して、イスタンブルを中心としたオスマン帝国社会における奢侈品消費のありかた、そのなかで絹織物が果たした役割について概観した。オスマン帝国では、毎週の君主の行列や各種の祝祭、宮廷行事等に莫大な費用がかけられた。顕示的消費は単なる個人的な贅沢ではなく、帝国の威容と富を、帝国臣民および外国人に知らしめ、それによって支配の正当性を認識させるための、政治的に不可欠な舞台装置であった。

なかでも古来より富のイメージと深く結びついてきた絹織物は、衣服、敷物、贈答品等の形で重要な役割を担っていた。特に外交および宮廷の慣習としておこなわれたヒルア（恩寵の御衣）は、その内容によって贈った者と受けた者の支配・被支配関係や好意（あるいは不快や敵意）を示すものと考えられ、オスマン宮廷に集う外国領事は、自国他国の使節に送られるその数と質に神経を尖らせた。

首都イスタンブルでは、絹織物は大バザールのベデステンを中心に商われた。高級品を扱うベデステンに対しては、政府の関心も高く、メフメト 2 世が設立した最古のベデステンをはじめ、歴代のスルタンや高官がワクフ（宗教寄進）に設定したベデステンやハーン（製品製造及び売買をおこなう場所）、あるいは絹織物や繊維製品の名前をもつ小道が大バザールの内外にひらかれている。

第 2 章では、17 世紀前半にオスマン帝国で作成された公定価格（ナルフ）台帳を分析した。その結果、イスタンブルでは厚地の高級絹織物への言及が最も多く、奢侈品消費への関心の高さが認められる。1600 年と 1640 年の台帳を比較すると、後者は記載された絹織物の種類がかなり増加し、17 世紀半ばにかけて奢侈品市場が成長していたことが示唆されている。

イスタンブルにおける絹織物の消費傾向は、1624 年のブルサ台帳と比較すると一層明確になる。当時のブルサはアナトリアを代表する地方都市であり、商品の大集散地でもあった。ブルサのナルフ台帳に見られる絹織物の種類は、イスタンブルに比較すると高級品が少なく、中級・下級品の割合が高い。その背景には、宮廷や高官をはじめとする富裕層が集中するイスタンブルと、地方都市との消費文化や経済規模の違いがあったと考えられる。

絹織物の産地は帝国内外に広がっているが、毛織物や綿織物と比較すると、産地の分布が若干西寄り、つまりヨーロッパ寄りであった。16 世紀なかば以降のオスマン帝国では、イタリアを主とするヨーロッパ製絹織物の大量輸入は、帝国財政を揺るがすものとして非難され、その対抗策としてイスタンブルでの高級絹織物製造が振興されてきた。しかし第 2 章の分析からは、17 世紀前半においても、多くのヨーロッパ製（実態はイタリア製が主であると考えられる）、およびヴェネツィアやフィレンツェ等イタリア製の絹織物が、イスタンブルやブルサの市場で、地元の製品を上回るような相当の人気を得ていたことが示された。

ナルフ台帳にはキオス製の絹織物の記載も多く見られるが、キオスは中世以来ジェノヴァ支配下にあり、絹織物技術はジェノヴァから伝えられたものである。キオス製絹織物の人気は、イタリア製絹織物に対する需要の大きさを裏付けているともいえる。

オスマン帝国で流通し、台帳に記載されたヴェネツィアやフィレンツェの絹織物は高級品にとどまらない。たとえば 1624 年のブルサ台帳、1640 年のイスタンブル台帳では、ヴェネツィアやフィレンツェの名が併記された薄地絹織物や綿絹交ぜ織りが記載されている。16 世紀以降、北イタリア各地の絹織物製造業では、従来の重厚な高級絹織物製造に加えて、比較的安価な軽量（薄地）な絹織物や交ぜ織りが次々と開発されてきた。上記 2 点の台帳の記載内容は、その成果の現れであるといえよう。

第 3 章では、16 世紀末から 17 世紀初めにかけてヴェネツィアで作成された公証人文書（海上保険契約書）の分析から、当時ヴェネツィアの海上貿易では、オスマン帝国市場はもっぱら毛織物、高級絹織物を中心とした繊維製品の輸出先であったことが確認された。高級絹織物輸出は世紀後半も続いたことが、他の史料で認められた。

ヴェネツィアをはじめとするイタリアの絹織物が近世のオスマン帝国市場に流入したことは、オスマン帝国の絹織物産業史においても問題を喚起してきた。確かにイタリア製絹織物は、オスマン帝国市場を独占していたわけではないが、その存在は大きく、ブルサ等オスマン帝国の地場産業に与えた影響力は無視できない。しかし第 3 章

で分析の結果、17 世紀におけるヴェネツィア商人の生糸購入の中心はシリアのアレッポであったことが示された。ブルサ生糸購入市場におけるヴェネツィアの存在は、既存研究でいわれてきたほど大きくなかった可能性を提示している。

以上が第 1 章から第 3 章における検討結果の概略である。本論文の特徴は、17 世紀のヴェネツィア絹織物製造業とオスマン帝国市場の関係を、オスマン帝国とヴェネツィア双方の史料を用いて新たな視点で分析したことにある。両史料の分析結果は、かなりの部分で符合することが確認された。17 世紀前半の公定価格台帳の分析は、オスマン帝国市場のイスタンブルおよびブルサで高い評価を受けるヴェネツィア製絹織物は高級品が中心であることを示す。一方でヴェネツィアの公証人文書から、ヴェネツィアからオスマン帝国市場への輸出品は、毛織物および高級絹織物が大半を占めたことが確認された。

つまり、本論文の分析により、17 世紀の絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国間の交易の実態に関して、これまでヴェネツィア史とオスマン帝国史に分断されてまとまった形で提示されることがなかったばらばらの像を、ある程度まとまって描き出すことができたといえる。

17 世紀、ヴェネツィアの絹織物製造業は、それまでの海上交易にかわってヴェネツィア経済を支える主要産業のひとつに成長した。一方同時代のオスマン帝国では、絹織物消費は単なる個人の贅沢を超えて、帝国の政治理念を内外に発露する際に不可欠な小道具であった。つまり絹織物は、近世のヴェネツィアとオスマン帝国双方の社会経済において、非常に重要な役割を担っていたのである。このことを考慮すると、本論文で明らかにされた絹織物交易を軸とする両者の結びつきは、関係するそれぞれの社会において近世の地中海地域内交易が持つ意味は、これまで看過されてきたにもかかわらず、決して小さくなかったことを示している。

それでは、ヴェネツィアをはじめとするイタリア製高級絹織物が、オスマン帝国、特に首都イスタンブルで成功した要因、つまり両者を結びつけたものは如何なるものであったのか。フィレンツェ毛織物および絹織物製造業史研究では、イタリアの製造業者（ラナイオーロ、セタイオーロ）が、オスマン帝国に駐在する代理人を通じてオスマン帝国市場の消費者の嗜好を調査し、デザインや規格をオスマン帝国市場好みに仕上げた製品を製造・販売したことが指摘されてきた。あるいはイタリアでは奢侈品生産の産地間競争が激しく、各国政府は保護貿易政策をとったため、販売市場はイタリアの外に求められたが、戦争や自国製造業の発展によりヨーロッパ市場を失ったイ

タリアの製造業者が、いわば最後の陣地としてオスマン帝国市場に向かったとも考えられてきた。また第 3 章でも述べたように、ヴェネツィアやフィレンツェではオスマン帝国につながるユダヤ教徒を誘致するなどの政策を打ち出している。

さらに、これらの諸要素に加えて、ヴェネツィアとオスマン帝国双方が、絹織物をはじめとする奢侈品に対して、ある程度共通の認識を持っていたことが想定される。17 世紀のオスマン帝国は、当時のヨーロッパで最大級の都市人口、宮廷、富裕層を抱えていた。第 1 章で述べたように、特に首都イスタンブルあるいは君主の滞在先等における莫大な費用をかけた顕示的消費は、単なる個人的な嗜好を超えて、帝国の威信と富を内外に知らしめる必要不可欠な政治的な舞台装置であったことは、本論文第 1 章で見た通りである。オスマン帝国では宮廷儀礼は非常に厳しく、厳格な服装規定の存在で知られていた。顕示的消費を支配の重要な要とみなす習慣は、帝国の経済・財政状態（の悪化）と連動することなく、帝国崩壊時まで維持された。その結果、重厚な絹織物に対する需要は、宮廷人の服装が西欧化する 19 世紀初めまで絶えることがなかったのである[2]。

実はこのようなオスマン帝国のスルタン・宮廷・富裕層による顕示的消費の源流のひとつは、ビザンツ帝国にあったと考えられている。1453 年にメフメト 2 世はコンスタンティノープルを攻略し、ここを新たな帝国の首都として整備した。「征服者（ファーティフ）」メフメト 2 世は、アレクサンドロスやローマ帝国の後継者と自認し、ビザンツ帝国から世界帝国のイメージを継承したと自負していた。主都の再建事業は、「ローマの都の再建」を目指したものであり、イスラームの君主であることに加えて、東地中海世界の皇帝として中央集権体制を整備した[3]。

メフメト 2 世の時代を過ぎると、たとえばエヴレヤ=チェレヴィーに代表される 17 世紀のオスマン帝国の歴史家たちは、ビザンツ帝国の歴史についてはほとんど無関心だったようである。しかし実際には建築、染織、金細工、農場経営、航海術、商業、言語、料理、技術等々、多くのビザンツ帝国の文化、伝統、技術がオスマン帝国に継承されていたのである[4]。

---

[2] *A Social History of Ottoman Istanbul*, pp.28-71.

[3] 林佳世子（2008）『オスマン帝国 500 年の平和』講談社、96 頁；同（1997）『オスマン帝国の時代』（世界史リブレット 19）、山川出版社、20-21 頁

[4] Doğan Kuban (2010), “The Legendary History of Constantinople - Istanbul”, *From Byzantion to Istanbul - 8000 Years of a Capital*, Catalogue of Exhibition, Sabancı University, Sakıp Sabancı Museum, June 5 – September 4, 2010, İstanbul, pp.18-29.

残念ながらビザンツ帝国の物質文化を伝える現物史料の残存は、極めて限られている。しかし残された遺物、芸術作品、文書史料から、帝国では支配者とその周辺には常に豪華さが求められたことが十分に提示されている。皇帝が独占した貝紫の絹布に代表されるように、奢侈品の贈答は内外の政治折衝の道具としても用いられていた[5]。ビザンツ帝国における豪奢と支配のイメージの結びつきは、オスマン宮廷における君主のパレードや「恩寵の御衣」の慣習にもみられるように、確実にオスマン帝国に受け継がれたのである。

一方ヴェネツィアは、中世中期以来ビザンツ帝国やイスラーム世界と、地中海の海上交易によって深く結びつき、その過程で東地中海世界の文化に通じていた。実態はともかく、ヴェネツィアは名目上は長くビザンツ帝国皇帝を君主としていただいていた。絹織物製造技術は、ビザンツ帝国やイスラーム世界を通じて北イタリアに広まったが、伝承によれば、ヴェネツィアには直接ビザンツ帝国領からきた職人によって伝えらえたという。絹織物製造業に限らず、ヴェネツィアは「コンスタンティノープルの長女であり、後継者である」といわれるほど、芸術・文化面においても、東地中海地域との強い結びつきを維持していた[6]。

近世においてもヴェネツィアと旧ビザンツ帝国領の関係は途切れず続いた。イオニア海の諸島部は 18 世紀末の共和国末期までヴェネツィアの支配下にあった。またオスマン帝国支配下のクレタやイスタンブルなどから、ギリシア正教徒の商人や留学生がヴェネツィアを頻繁に訪れている。これらの人びとは、出身地に戻った場合は、上はオスマン帝国大宰相の侍医や帝国大通辞（外務大臣に相当）から、下は一介の商人まで、ヴェネツィアとオスマン帝国を結ぶ存在となった。中世から近世にかけて、ヴェネツィアにはヨーロッパで最大級のギリシア正教徒のコミュニティーが存在し、独自の教会とギリシア式典礼を許され、常に 3000~4000 人が定住もしくは往来した[7]。

ヴェネツィアの印刷出版業では、ギリシア語古典作品の出版に際して、旧ビザンツ帝国領から移住してきた知識人の貢献が大きかった。ヴェネツィアは近世を通じて、ギリシア語地域にむけて読本や初等教科書から哲学書に至る各種の出版物を提供して

---

[5] Anthony Cutler (2010), "Magnificence and the Necessity of Luxury in Byzantium", *From Byzantion to Istanbul,* pp.136-143; Anna Muthesius (1992), "Silk, Power and Diplomacy in Byzantium".

[6] Deborah Howard (2006), "Venice as an Eastern City", *Venice and the Islamic World 828-1797,* New York & Paris, p.59.

[7] ヴェネツィアにおけるギリシア正教徒、ヴェネツィアとギリシア正教世界との交流について全体を俯瞰するものとして以下を参照。*I Greci a Venezia* (atti del Convegno internazionale di studio, Venezia, 5-7 novembre 1998), a cura di Maria Francesca Tiepolo, Eurigio Tonetti, Venezia, Istituto Veneto de Scienze, Lettere ed Arti, 2002.

いる。おそらくヴェネツィアの絹織物製造業においても、イスタンブルを中心とする東地中海地域の顧客の嗜好を把握するために、旧ビザンツ帝国領出身もしくはその子孫の職人・商人の貢献があったと考えられる。

このようにヴェネツィア人は、中世中期から近世にかけて、一貫して政治・経済・文化等の多方面にわたり、ビザンツ帝国からオスマン帝国に受け継がれた東地中海地域の顕示的消費を重要視する文化に接し、また自らのなかにも取り入れてきたのである。こうした長年の経験に基づく東地中海地域の嗜好に対する理解と、少なからぬ共感もまた、本論文でみたように、17 世紀においてヴェネツィア絹織物製造業がオスマン市場の嗜好に対応しえた理由のひとつとも考えられるのではないか。

また第 2 章の分析では、ヴェネツィアのみならずフィレンツェ製品も、オスマン帝国市場で相当の評価をうけていたことが明らかになった。フィレンツェは、ヴェネツィアほど東地中海との多方面にわたる交流が強調されてきたわけではない。しかしフィレンツェ商人も中世後期以降イスタンブルやブルサで活発に商取引をしており、東地中海市場の嗜好に関しては、北西欧諸国に比較して一日の長があった。

交易はもの、ひと、かねだけではなく、文化や情報などのソフトパワーの移転をも促す。中世から続く、ヴェネツィアと東地中海地域との多方面にわたる結びつきは、近世においても形を変えつつ、両者の紐帯を支えていたといえよう。

しかしその一方で、多くの不明な点が今後の課題として残った。例えばオスマン帝国市場の需要に対してヴェネツィアの絹織物製造業が対応したのならば、市場の情報を把握し、製造現場に生かした担い手は誰であったのか。市民（cittadini）が中心であると考えられるセタイオーリ（絹織物の織元）か、もしくは絹織物輸出入に携わる貴族ないしは市民の貿易商人か、もしくはそれ以外の働きかけがあったのか、という問題である。

また、本論文で検討の対象としたのは、16 世紀末から 17 世紀前半に関する数点の史料に限られる。今後は史料間の間隙を埋める努力が必要となろう。もとより当時のヴェネツィアとオスマン帝国間の奢侈品貿易が、（ヴェネツィアの、オスマン帝国の、ないしは地中海の）貿易全体においてどの程度の割合を占めるのかということは、伝存史料上の問題もあり、依然として不明のままである。絹織物製造や消費が、両国の経済全体に占める大きさも不明である。ヴェネツィアおよびオスマン帝国の伝存史料について、現在も整理と目録化が進んでいるが、こうしたマクロ的な視野にたった分析に有効な史料は現在ほとんど見つかっておらず、その発掘には依然として相当の時間

が必要であると思われる。

したがって今後の課題は、引き続きオスマン帝国とヴェネツィア双方の史料を利用して、本論文で分析した各史料間の間隙を埋めることにある。たとえばオスマン帝国の絹織物消費に関する、さらに詳細な分析である。本論文では、公定価格に関して、ナルフ台帳としてまとめて公布された 3 点の史料を分析の対象とした。しかし実際にはこうした独立した台帳の他に、イスラーム法学者であるウラマーが主催する各地のシャリーア法廷でも、日常的に商品の公定価格が決定されていた。2008 年からはイスタンブルの İSAM (İslâm Araştırmaları Merkezi, Center for Islamic Studies)によって、16-18 世紀のイスタンブルの各地区におかれたシャリーア法廷の記録簿が、校訂版・ファクシミリ原版・CD-ROM の 3 点がセットになった形で続々と出版されている。

17 世紀イスタンブルの社会史は、これまでもっぱらエヴレヤ・チェレヴィー等の地誌、あるいは外国人の残した史料に依拠したものが多かったが、現在は前述の法廷記録簿を用いたイスタンブルの社会経済史研究も発表されつつあり、今後同史料を活用することで、イスタンブルにおける絹織物消費の実態の解明がより深まるものと予想される。

またトプカプ宮殿の各部署に関わる全ての帳簿が、近年デジタル化されて公開が開始された。筆者は未見であるが、同史料の利用には、複雑なオスマン宮廷財政組織の理解が必須であり、簡単に分析に着手できるものではないだろう。しかし同史料群は長年にわたり閲覧が厳しく制限されてきた歴史を持っており、その一般公開（しかもデジタル化）は、オスマン史研究者の間では宮廷史を塗り替える可能性がある一大事件と認識されている。少なくとも今後公表される研究成果を分析に取り入れることで、イスタンブルにおける奢侈品消費のありかたはさらに明らかになると考えられる。

一方で前述のように、近世のヴェネツィアにおいてオスマン帝国市場の顧客動向を把握し製造に生かす方向性を主導した主体の問題解明と共に、ヴェネツィアからの絹織物輸出に関する分析を進める必要がある。従来の研究では、絹織物輸出の分析はほとんどなく、その実態に関しては本論文第 3 章でおこなった分析が唯一といえるのではないか。今後は本論文でも使用した公証人文書群のなかから、17 世紀に関するものを抽出することが出発点となる。

また海外貿易等、国外の諸事を管轄する Senato Mare の議事録も参照することが必要となろう。現在国立ヴェネツィア古文書館では、公証人史料や Senato Mare 議事録のオンラインデジタル化が進んでいる。公開は現在のところ 15 世紀末ごろを下限とし

ており、全ての史料の公開には至っていないが、国外にいる外国人研究者としては、飛躍的に利用が容易になったことは間違いない。

絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国市場の交易は、本論文でも紹介したように、ヴェネツィアのみならずフィレンツェとオスマン帝国の関係との間にもいくつか共通点が見出される。その研究成果も参照することで、単なる二国間貿易の枠組みを超え、近世における地中海地域内交易の実態はさらに明らかになろう。

一方で、本論文で検討の対象としたのは、オスマン帝国のなかでもイスタンブルやブルサを中心とするごく狭い地域に過ぎない。第 3 章でヴェネツィアとアレッポの関係を分析したが、今後はイスタンブル以外の地域との関わりについても分析を重ねることで、近世の社会経済をより深く解明する手がかりが得られるであろうと考えている。

資料 1

1600 年台帳におけるセラーセルの産地と価格

①イスタンブル・刺繍入り・最上級　（単位記載なし 7300 アクチェ）
②イスタンブル・刺繍入り・中級　（同　6000 アクチェ）
③イスタンブル・刺繍入り・下級　（同　5000 アクチェ）
④イスタンブル・刺繍入り・低級　（同　4000 アクチェ）

1640 年台帳におけるセラーセルの産地と価格

①［イスタンブル］金・プラタナス葉紋様・900 ディルハム・最上級（873 アクチェ）[1]
②［イスタンブル］同・中級　（727 アクチェ）[2]
③［イスタンブル］同・下級　（582 アクチェ）[3]
④［イスタンブル］金銀白地にザクロ葉紋様・袖付き・緑ライン入り・935 ディルハム・ 最上級　（809 アクチェ）[4]
⑤［イスタンブル］同・中級　（673 アクチェ）[5]
⑥［イスタンブル］同・下級　（545 アクチェ）[6]
⑦［イスタンブル］金銀白地に白月紋様・緑ライン入り・中型・720 ディルハム・最上級　（527 アクチェ）[7]
⑧［イスタンブル］同・中級　（455 アクチェ）[8]
⑨［イスタンブル］同・下級　（391 アクチェ）[9]
⑩［イスタンブル］金銀白地にクジャクの尾羽紋様・緑と朱のライン入り・820 ディルハム 最上級　（855 アクチェ）[10]
⑪［イスタンブル］同・中級　（727 アクチェ）[11]
⑫［イスタンブル］同・下級　（618 アクチェ）[12]
⑬［イスタンブル］金銀白地にバラ紋様・860 ディルハム・最上級　（800 アクチェ）[13]
⑭［イスタンブル］同・中級　（691 アクチェ）[14]
⑮［イスタンブル］同・下級　（600 アクチェ）[15]
⑯［イスタンブル］金銀白地プラタナス葉紋様・緑と朱の葉紋様・600 ディルハム・最上級　（473 アクチェ）[16]
⑰［イスタンブル］同・中級　（400 アクチェ）[17]
⑱［イスタンブル］同・下級　（345 アクチェ）[18]
⑲［イスタンブル］金銀白地に孔雀尾羽紋様・緑のライン入り・中級[19]・760 ディルハム・ 最上級　（536 アクチェ）[20]
⑳［イスタンブル］同・中級　（464 アクチェ）[21]

---

[1] 11 ズィラーで 9600 アクチェ
[2] 11 ズィラーで 8000 アクチェ
[3] 11 ズィラーで 6400 アクチェ
[4] 11 ズィラーで 8900 アクチェ
[5] 11 ズィラーで 7400 アクチェ
[6] 11 ズィラーで 6000 アクチェ
[7] 11 ズィラーで 5800 アクチェ
[8] 11 ズィラーで 5000 アクチェ
[9] 11 ズィラーで 4300 アクチェ
[10] 11 ズィラーで 9400 アクチェ
[11] 11 ズィラーで 8000 アクチェ
[12] 11 ズィラーで 6800 アクチェ
[13] 11 ズィラーで 8800 アクチェ
[14] 11 ズィラーで 7600 アクチェ
[15] 11 ズィラーで 6600 アクチェ
[16] 11 ズィラーで 5200 アクチェ
[17] 11 ズィラーで 4400 アクチェ
[18] 11 ズィラーで 3800 アクチェ
[19] *orta*
[20] 11 ズィラーで 5900 アクチェ

㉑［イスタンブル］同・下級　（409 アクチェ）[22]
㉒［イスタンブル］金銀白地に緑葉紋様・バラ紋様・中級・700 ディルハム・最上級
（491 アクチェ）[23]
㉓［イスタンブル］同・中級　（418 アクチェ）[24]
㉔［イスタンブル］同・下級　（364 アクチェ）[25]
㉕［イスタンブル］金銀白地にプラタナス葉紋様・緑縁飾り付き・中級以下・785 ディルハム
最上級　（455 アクチェ）[26]
㉖［イスタンブル］同・中級　（391 アクチェ）[27]
㉗［イスタンブル］同・下級　（345 アクチェ）[28]
㉘［イスタンブル］金銀白地に月紋様・バラ袖付き・緑ライン入り・中級以下
720 ディルハム・最上級　（436 アクチェ）[29]
㉙［イスタンブル］同・中級　（382 アクチェ）[30]
㉚［イスタンブル］同・下級　（336 アクチェ）[31]
㉛［イスタンブル］金銀白地にピスタチオ紋様・もつれた葉入り・緑ライン入り・低級
560 ディルハム・最上級　（328 アクチェ）[32]
㉜［イスタンブル］同・中級　（282 アクチェ）[33]
㉝［イスタンブル］同・下級　（245 アクチェ）[34]
㉞［イスタンブル］金銀白地にプラタナス葉紋様・緑ライン入り・低級・525 ディルハム
最上級　（300 アクチェ）[35]
㉟［イスタンブル］同・中級　（255 アクチェ）[36]
㊱［イスタンブル］同・下級　（218 アクチェ）[37]
（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

[21] 11 ズィラーで 5100 アクチェ
[22] 11 ズィラーで 4500 アクチェ
[23] 11 ズィラーで 5400 アクチェ
[24] 11 ズィラーで 4600 アクチェ
[25] 11 ズィラーで 4000 アクチェ
[26] 11 ズィラーで 5000 アクチェ
[27] 11 ズィラーで 4300 アクチェ
[28] 11 ズィラーで 3800 アクチェ
[29] 11 ズィラーで 4800 アクチェ
[30] 11 ズィラーで 4200 アクチェ
[31] 11 ズィラーで 3700 アクチェ
[32] 11 ズィラーで 3600 アクチェ
[33] 11 ズィラーで 3100 アクチェ
[34] 11 ズィラーで 2700 アクチェ
[35] 11 ズィラーで 3300 アクチェ
[36] 11 ズィラーで 2800 アクチェ
[37] 11 ズィラーで 2400 アクチェ

資料 2

1600 年台帳におけるヴェルヴェットの産地と価格

①ヨーロッパ・カーネーションの刺繍入り　（単位記載なし 700 アクチェ）
②アレッポ　（同　600 アクチェ）
③ヨーロッパ・最上級　（同　550 アクチェ）
④ジェノヴァ　（同　400 アクチェ）
⑤産地記載なし・金銀糸入り・最上級　（同　400 アクチェ）
⑥産地記載なし・金銀糸入り・中級　（同　350 アクチェ）
⑦産地記載なし・金銀糸入り・下級　（同　300 アクチェ）
⑧キオス　（同　200 アクチェ）

1640 年台帳におけるヴェルヴェットの産地と価格

①ヨーロッパ・ケルメス染・最上級　（600 アクチェ）
②ヨーロッパ・ケルメス染・中級　（550 アクチェ）
③[ヨーロッパ]・ケルメス染以外・最上級　（500 アクチェ）
④ヨーロッパ・ケルメス染・下級　（500 アクチェ）
⑤[ヨーロッパ]・ケルメス染以外・中級　（450 アクチェ）
⑥[ヨーロッパ]・ケルメス染以外・下級　（400 アクチェ）
⑦ヴェネツィア・金銀糸入り　（370 アクチェ）
⑧イスタンブル・金銀糸入り　（360 アクチェ）
⑨イスタンブルとブルサ・ケルメス染，深緑，スミレ色・最上級　（340 アクチェ）
⑩イスタンブルと ブルサ・ケルメス染，深緑，スミレ色・中級　（300 アクチェ）
⑪イスタンブル と ブルサ・ケルメス染，深緑，スミレ色・下級　（280 アクチェ）
⑫[イスタンブルとブルサ]ケルメス染以外，深緑以外，スミレ色以外　（260 アクチェ）
⑬ヴェネツィア・刺繍入り　（255 アクチェ）
⑭イスタンブル・刺繍入り　（245 アクチェ）
⑮[イスタンブル]・深緑以外　（70 アクチェ）
（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

資料 3

1600 年台帳における紋織りの産地と価格

①産地記載なし（ケムハー）・ケルメス染　（200 アクチェ）
②フィレンツェ（ケムハー）・ケルメス染　（［180]アクチェ］）
③ヨーロッパ（ケムハー）・全ての色　（［180]アクチェ］）
④フィレンツェ（ケムハー）・ケルメス染以外　（［140]アクチェ］
⑤キオス（ケムハー）・ケルメス染　（110 アクチェ）
⑥キオス（ケムハー）・ケルメス染以外　（90 アクチェ）
・イスタンブル（セレンク）・最上級　（単位記載なし 2700 アクチェ）
・産地記載なし（ディーバー）　（同　300 アクチェ）
・ヨーロッパ（ダーラーイー）・広幅・最上級　（同　120 アクチェ）
・ヨーロッパ（ダーラーイー）・狭幅　（同　60 アクチェ）
（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

1640 年台帳における紋織りの産地と価格

①ペルシア（ディーバー）・多色・最上級　（540 アクチェ）
②ヨーロッパ（ディーバー）・厚地・スミレ色・金銀糸入り, 刺繍入り　（440 アクチェ）
③ヤズド（ダーラーイー）・縞　（420 アクチェ）
④ペルシア（ディーバー）・多色・下級　（400 アクチェ）
⑤ヴェネツィア（ディーバー）・多色・金銀糸入り　（320 アクチェ）
⑥フィレンツェ（ディーバー）・金銀糸入り, 刺繍入り　（300 アクチェ）
⑦ヴェネツィア（ディーバー）・多色・刺繍入り　（280 アクチェ）
⑧ヨーロッパ（ダーラーイー）・縞　（250 アクチェ）
⑨フィレンツェ（ダーラーイー）・縞　（240 アクチェ）
⑩［イスタンブル］（セレンキ・ゼルバーフト）
白とケルメス染地にバラ紋様・450 ディルハム[38]・最上級　（229 アクチェ）[39]
⑪［イスタンブル］（セレンク・ゼルバーフト）
濃い赤（又は紫）と青と白・格子縞紋様・450 ディルハム・最上級（228 アクチェ）[40]
⑫ヨーロッパ（ダーラーイー）・多色・光沢　（200 アクチェ）
⑬［イスタンブル］（セレンク・ゼルバーフト）
濃い赤（又は紫）と青と白・格子縞紋様・450 ディルハム・中級（200 アクチェ）[41]
⑭［イスタンブル］（セレンク・ゼルバーフト）
白とケルメス染地にバラ紋様・450 ディルハム・中級　（200 アクチェ）[42]
⑮フィレンツェ（ダーラーイー）・多色　（185 アクチェ）
⑯ヨーロッパ（ケムハー）・ケルメス染　（180 アクチェ）
⑰［イスタンブル］（セレンク）
白地に青と花模様[43]とつぼみバラ模様・415 ディルハム・最上級（173 アクチェ）[44]
⑱［イスタンブル］（セレンク・ゼルバーフト）
濃い赤（又は紫）と青と白・格子縞紋様・450 ディルハム・下級（173 アクチェ）[45]
⑲［イスタンブル］（セレンク・ゼルバーフト）
白とケルメス染地にバラ紋様・450 ディルハム・下級　（171 アクチェ）[46]
⑳[ヨーロッパ]（[ケムハー]）・ケルメス染以外　（170 アクチェ）

---

[38] 1 ディルハム（*dirhem*）＝約 3.207g。
[39] 10 ズィラー 6 ルブウで 2400 アクチェ
[40] 11 ズィラーで 2500 アクチェ
[41] 11 ズィラーで 2200 アクチェ
[42] 10 ズィラー 6 ルブウで 2100 アクチェ
[43] *sürmâî*
[44] 11 ズィラーで 1900 アクチェ
[45] 11 ズィラーで 1900 アクチェ
[46] 10 ズィラー 6 ルブウで 1800 アクチェ

㉑[ヨーロッパ]（[ケムハー]）・白　（150 アクチェ）
㉒［イスタンブル］（セレンク）
白地に青と花模様とつぼみバラ模様・415 ディルハム・中級　（145 アクチェ）[47]
㉓イスタンブル（ディーバー）・深緑・金銀糸入り・最上級　（140 アクチェ）
㉔[イスタンブル]（ディーバー）・深緑以外・[金銀糸入り]・極最上級　（120 アクチェ）
㉕［イスタンブル］（セレンク）
白地に青と花模様とつぼみバラ模様・415 ディルハム・下級　（118 アクチェ）[48]
㉖[イスタンブル]（ディーバー）・深緑以外・[金銀糸入り]・下級　（110 アクチェ）
㉗キオス（ケムハー）・ケルメス染・（縁(ケルメス染 ?)　（90 アクチェ）
㉘キオス（ケムハー）・深緑 と スミレ色（縁ケルメス染?）　（80 アクチェ）
㉙イスタンブル（ケムハー）・深緑　（80 アクチェ）
㉚キオス（ケムハー）　（70 アクチェ）
㉛イスタンブル（セレンキ）　（70 アクチェ）
㉜シリアとアレッポ（ダーラーイー）・深緑　（50 アクチェ）
㉝[シリアとアレッポ]（[ダーラーイー]）・濃赤 と ケルメス染　（45 アクチェ）
㉞[シリア ＆ アレッポ]（[ダーラーイー]）深緑以外，濃赤以外、ケルメス染以外
（42 アクチェ）

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

[47] 11 ズィラーで 1600 アクチェ
[48] 11 ズィラーで 1300 アクチェ

資料 4

1600 年台帳における薄地絹織物の産地と価格

①ヨーロッパ（サテン）・ケルメス染・最上級　（200 アクチェ）
②フィレンツェ（サテン）・ケルメス染　（180 アクチェ）
②ヨーロッパ（サテン）・ケルメス染以外　（180 アクチェ）
④フィレンツェ（サテン）・ケルメス染以外　（140 アクチェ）
⑤産地記載なし（ロカ）・ケルメス染　（120 アクチェ）
⑥産地記載なし（ロカ）・ケルメス染以外　（110 アクチェ）
⑦キオス（サテン）・全ての色　（80 アクチェ）
⑧産地記載なし（タフタ）・ケルメス染・最上級　（60-65 アクチェ）
⑨ブルサ?（タフタ）・トカトのケルメス染　（24 アクチェ）
⑩ブルサ(タフタ)　（20 アクチェ）
⑩ブルサ?（タフタ?）・トカトのケルメス染以外?　（20 アクチェ）
・インド（サテン）・最上級　（1 着分 360-400 アクチェ）
・ブルサとキオス（ヴェール）　（単位記載なし 60 アクチェ）
・フィレンツェ（サテンのヴェール）　（同　90 アクチェ）
・産地記載なし（タフタのヴェール）　（同　40 アクチェ）
（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）
（*1 アルシンあたりの価格。1 アルシン≒ 1 ズィラー）

1640 年台帳における薄地絹織物の産地と価格

①ヤズド（ハターイー）　（960 アクチェ）
②ヤズド（ハターイー）白と深緑・インド風　（620 アクチェ）
③[ヤズド]（[ハターイー]）白以外と 深緑以外・[インド風]　（560 アクチェ）
④ヨーロッパ（サテン）・縞・刺繍入り　（220 アクチェ）
⑤フィレンツェ（サテン）・深緑, 白・刺繍入り　（185 アクチェ）
⑥ヨーロッパ（サテン）・ケルメス染, 深緑, 赤、スミレ色　（180 アクチェ）
⑦[フィレンツェ]（[サテン]）・深緑以外 と 白以外　（175 アクチェ）
⑧[ヨーロッパ]（[サテン]）・ケルメス染以外　（170 アクチェ）
⑨フィレンツェ（サテン）・深緑　（165 アクチェ）
⑩イスタンブル（ヴェール）・金銀糸入り, 刺繍入り　（160 アクチェ）
⑪[フィレンツェ]（[サテン]）・深緑以外　（155 アクチェ）
⑫フランス（サテン）・多色・刺繍入り　（125 アクチェ）
⑬キオス（サテン）・ケルメス染　（60 アクチェ）
⑭シリアとアレッポ（タフタ）・ケルメス染, 深緑、濃赤　（60 アクチェ）
⑮[シリア & アレッポ]（[タフタ]）・ケルメス染以外, 深緑、濃赤（55 アクチェ）
⑯[キオス]（[サテン]）・ケルメス染以外　（50 アクチェ）
⑰イスタンブル（ヴェール）・多色・金銀糸入り・ 縞　（50 アクチェ）
⑱ブルサ（タフタ）・最上級　（30 アクチェ）
⑲ブルサ（タフタ）・下級　（23 アクチェ）
（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒75~90cm）

資料 5

1600 年台帳における交ぜ織り（絹綿）の産地と価格

①*Fereskûrî*（アラジャ）・純絹	（単位記載なし 1200 アクチェ）
②*Fereskûrî*（アラジャ）	（同　750 アクチェ）
③ブーラーク（アラジャ）	（同　440 アクチェ）
④ダミエッタ（アラジャ）	（同　400 アクチェ）
⑤ホムス（アラジャ）	（同　200 アクチェ）
⑥産地記載なし（クトゥニー）・最上級	（同　900 アクチェ）
⑦産地記載なし（クトゥニー）・中級	（同　800 アクチェ）
⑧インド（クトゥニー）・最上級	（同　600 アクチェ）
⑨インド（クトゥニー）・中級	（同　500 アクチェ）
⑩インド（クトゥニー）・下級	（同　400 アクチェ）
⑪バグダード? アレッポ?（クトゥニー）	（同　240 アクチェ）
⑫産地記載なし（ハーレ）・金銀糸入り	（同　170 アクチェ）
⑬産地記載なし（ハーレ）	（同　120 アクチェ）
⑭バグダード?（バグダーディー[49]）	（同　900 アクチェ）
⑮シリア？（バグダーディー[50]）	（同　580 アクチェ）

1640 年台帳における交ぜ織り（絹綿）の産地と価格ランキング

①インド（クトゥニー）[51]	（1000 アクチェ）
②バグダード（バグダーディー）・最上級	（426 アクチェ）
③バグダード（バグダーディー）・中級	（360 アクチェ）
④ペルシア（クトゥニー）・多色・インド風	（240 アクチェ）
⑤ヨーロッパ（サンダル）・刺繍入り	（150 アクチェ）
⑥ヴェネツィア（ハーレ）・刺繍入り	（150 アクチェ）
⑦ヨーロッパ（サンダル）	（130 アクチェ）
⑧ブルサ（ハーレ）・両面・金銀糸入り・最上級	（120 アクチェ）
⑨フィレンツェ（ハーレ）・最上級	（110 アクチェ）
⑩ブルサ（ハーレ）・両面・金銀糸入り・下級	（105 アクチェ）
⑪フィレンツェ（ハーレ）・下級	（100 アクチェ）

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格、1 ズィラー≒68cm）

49 *Nefs-i Bağdâdî*
50 *Şâmî Bağdâdî*
51 *Meselipeten (Masulipatan)*

資料 6

1600 年台帳におけるモヘア（＝アンゴラ山羊毛織物）・毛織物の産地と価格

モヘア（アンゴラ山羊毛織物）

①トスヤ（モヘア[52]）・波紋・光沢・最上級	（単位記載なし 170,180 アクチェ）
②産地記載なし（モヘア[53]）・最上級	（1 枚 66 アクチェ）[54]
③産地記載なし（モヘア）・最下級	（単位記載なし 1600 アクチェ）
④トスヤ（モヘア）・波紋・光沢[55]	（単位記載なし 300 アクチェ）

毛織物（チュハー）

①産地記載なし（100 のチュハー毛織物[56]）・ケルメス染・最上級	（600 アクチェ）
②産地記載なし（100 のチュハー 毛織物）・ケルメス染・中級	（500 アクチェ）
③産地記載なし（100 のチュハー毛織物）・ケルメス染・下級	（450 アクチェ）
④産地記載なし（100 のチュハー毛織物）・ケルメス染以外	（400 アクチェ）
⑤産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・ケルメス染・最上級	（300 アクチェ）
⑥産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・ケルメス染・中級	（270 アクチェ）
⑦産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・ケルメス染・下級	（250 アクチェ）
⑧ヴェネツィア?（60 のチュハー毛織物）・多色・最新	（240 アクチェ）
⑨産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・ケルメス染以外・最上級	（240 アクチェ）
⑩ボドルム（チュハー毛織物）・テサロニキ風？	（120 アクチェ）
⑪ヴェネツィア（70 のチュハー毛織物）・ケルメス染	（120 アクチェ）
⑫ヴェネツィア（チュハー毛織物）	（100 アクチェ）
⑬ヴェネツィア（カージー・チュハー毛織物）	（90 アクチェ）

毛織物（その他）

①ウストルムジャ Ustrumca（アバ厚地毛織物）	（22 アクチェ）
②産地記載なし（サーデ平織毛織物）・濃灰色	（21 アクチェ）
③カルチン Kalçın（アバ厚地毛織物）	（20 アクチェ）
④産地記載なし（サーデ平織毛織物）・ハチミツ色	（18 アクチェ）
⑤クルド（アバ厚地毛織物）・良質	（13 アクチェ）

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

52 *muhayyer*
53 *sof*
54 32 枚（*yaprak*）で 2100 アクチェ
55 *cendereli*
56 100 *çile*

資料 7

1640 年台帳における毛織物・モヘア（アンゴラ山羊毛織物）の産地と価格

モヘア（アンゴラ山羊毛織物）

①アンカラ（モアレモヘア[57]）・七色・最上級	（単位記載なし 200 アクチェ）
②アンカラ（モアレモヘア）・バラ色・最上級	（同　200 アクチェ）
③アンカラ（モアレモヘア）・七色・中級	（同　190 アクチェ）
④アンカラ（(モアレモヘア）・バラ色・中級	（同　190 アクチェ）
⑤アンカラ（モアレモヘア）・七色　　・下級	（同　180 アクチェ）
⑥アンカラ（モアレモヘア）・バラ色・下級	（同　180 アクチェ）
⑦トスヤ（モアレモヘア）・七色・最上級	（同　110 アクチェ）
⑧トスヤ（モアレモヘア）・七色・中級	（同　90 アクチェ）
⑨トスヤ（モアレモヘア）・七色・下級	（同　80 アクチェ）
⑩アンカラ（モヘア）・特別に上品・極最上級	（［１ズィラーにつき］[86]アクチェ）
⑪アンカラ（モヘア）・特別に上品・中級	（同　[79]アクチェ）
⑫アンカラ（モヘア）・特別に上品・下級	（同　[68]アクチェ）
⑬アンカラ（モヘア）・特別に上品・低級	（同　[54]アクチェ）
⑭アンカラ（モヘア）・特別に上品・低級全て	（同　[39]アクチェ）
⑮アンカラ（モヘア）・七色・最上級	（１ズィラーにつき 86 アクチェ）[58]
⑯アンカラ（モヘア）・七色・中級	（同　79 アクチェ）[59]
⑰アンカラ（モヘア）・七色・下級	（同　68 アクチェ）[60]
⑱アンカラ（モヘア）・七色・低級	（同　54 アクチェ）[61]
⑲アンカラ（モヘア）・低級全て	（同　39 アクチェ）[62]
⑳トスヤ ＆コチュヒサール（モヘア）・最上級	（単位記載なし 115 アクチェ）
㉑トスヤ ＆コチュヒサール（モヘア）・下級	（同　105 アクチェ）
㉒産地記載なし（[モヘア][63]）・七色・最上級	（同　600 アクチェ）
㉓産地記載なし（[モヘア][64]）・七色　　・下級	（同　460 アクチェ）
㉔アンカラ（[モヘア]の外套[65]）・紫，ケルメス染ほか・最上級	（900 ディルハムで 2000 アクチェ）
㉕アンカラ（[モヘア]の外套[66]）・紫，ケルメス染ほか・中級	（同　1600 アクチェ）
㉖アンカラ（[モヘア]の外套[67]）・紫，ケルメス染ほか・下級	（同　1200 アクチェ）
㉗アンカラ（モヘア）・黒	（単位記載なし 580 アクチェ）

57 *muhayyer* 波紋のあるモヘア織り
58 28 ズィラーにつき 2400 アクチェ。
59 28 ズィラーにつき 2200 アクチェ。
60 28 ズィラーにつき 1900 アクチェ。
61 28 ズィラーにつき 1500 アクチェ。
62 28 ズィラーにつき 1100 アクチェ。
63 ﻛﻨﺎوﯾز *kanevizi*
64 ﻛﻨﺎوﯾز *kanevizi*
65 *kanevisi*
66 *kanevisi*
67 *kanevisi*

毛織物（チュハー）

①産地記載なし（[チュハー毛織物]）・七色　（500 アクチェ）
②産地記載なし（70 のチュハー毛織物）・パランゴン[68]・「アリの足」[69]　（490 アクチェ）[70]
③産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・パランゴン・ケルメス染　（480 アクチェ）
④産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・パランゴン・スミレ色、緑、青、濃茶緑、黒、紫・最上級　（360 アクチェ）[71]
⑤産地記載なし（チュハー毛織物）・パランゴン　スミレ色、緑、青、濃茶緑、黒、紫・中級　（320 アクチェ）
⑥産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・濃茶とシナモン色・最上級　（290 アクチェ）
⑦［フィレンツェ?］（70 のチュハー毛織物）・サンマルティーノ[72]? ケルメス染・最上級　（280 アクチェ）[73]
⑧産地記載なし（チュハー毛織物）・パランゴン　スミレ色、緑、青、濃茶緑、黒、紫・下級　（280 アクチェ）
⑨産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・濃茶とシナモン色・中級　（260 アクチェ）
⑩［フィレンツェ?］（70 のチュハー毛織物）・サンマルティーノ[74]? ケルメス染・下級　（240 アクチェ）
⑪イングランド? パリ? カルカソンヌ?（チュハー毛織物）・極最上級　（240 アクチェ）
⑫産地記載なし（チュハー毛織物）・パランゴン　スミレ色、緑、青、濃茶緑、黒、紫・下級以下　（240 アクチェ）
⑬産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・濃茶とシナモン色・下級　（230 アクチェ）
⑭パリ（チュハー毛織物）・七色・最上級　（230 アクチェ）
⑮パリ（チュハー毛織物）・七色・中級　（220 アクチェ）
⑯産地記載なし（チュハー毛織物）・パランゴン・緑と紫・最下級　（220 アクチェ）
⑰パリ（チュハー毛織物）・七色・下級　（200 アクチェ）
⑱イングランド? パリ? カルカソンヌ?（チュハー毛織物）・下級　（200 アクチェ）
⑲カルカソンヌ?（[チュハー毛織物]）・「古いカルカソンヌ」・七色・最上級　（145 アクチェ）[75]
⑳カルカソンヌ?（[チュハー毛織物]）・「古いカルカソンヌ」・七色・中級　（140 アクチェ）
㉑産地記載なし（70 のチュハー毛織物）・黒　（140[410?]アクチェ）
㉒カルカソンヌ?（[チュハー毛織物]）・「古いカルカソンヌ」・七色・下級　（135 アクチェ）
㉓テサロニキ（チュハー毛織物[76]）　（90 アクチェ）

毛織物（ロンドラ）

①アルジェリア[77]？（ロンドラ毛織物）・最上級　（170 アクチェ）
②アルジェリア？（ロンドラ毛織物）・中級　（160 アクチェ）
③アルジェリア？（ロンドラ毛織物）・下級　（150 アクチェ）
④産地記載なし（ロンドラ毛織物）・七色・最上級　（135 アクチェ）
⑤産地記載なし（ロンドラ毛織物）・七色・中級　（130 アクチェ）
⑥産地記載なし（ロンドラ毛織物）・七色・下級　（125 アクチェ）

毛織物（カージー）

①産地記載なし（カージー毛織物）・最上級　（90 アクチェ）
②産地記載なし（カージー毛織物）・中級　（85 アクチェ）

---

68 *parangon* とは赤系に染色された布地のこと（Redhouse, *Türkçe-İngilizce Sozluk*）
69 *karınca ayağı*
70 幅 1 ズィラー1 ルブ（1 ルブ≒45-55cm）.
71 幅 1 ズィラー 1 ギリ（1 ギリ≒6.6cm）.
72 *samartin çuka*
73 幅 1 ズィラー 1 ギリ
74 *samartin çuka*
75 幅 1 ズィラー 1 ギリ（1 ギリ≒6.6cm）
76 *Bodrum*
77 *Cezâir*

③産地記載なし（カージー毛織物）・下級　（80 アクチェ）
④ハンガリー（カージー毛織物）・　（55 アクチェ[78]）

毛織物（アバ）

①イズレヴ（アバ毛織物）・最上級
②ウストルムジャ（アバ毛織物）・パイル有と無
③ギョズレヴェ（アバ毛織物）・黒
④キル（アバ毛織物）
⑤クルド（アバ毛織物）・ケルメス染、 紫、シナモン色・極上・最上級
⑥クルド（アバ毛織物）・ケルメス染、 紫、シナモン色・下級
⑦クルド（アバ毛織物）・紫・最上級
⑧クルド（アバ毛織物）・紫・下級
⑨クルド（アバ毛織物）・黒
⑩クルド（アバ毛織物）・白
⑪シェイフ（アバ毛織物）・白・最上級
⑫シェイフ（アバ毛織物）・白・下級
⑬プロヴディフ （アバ毛織物）・黒
⑭ロフチャ（アバ毛織物）・最上級
⑮産地記載なし（アバ毛織物）・白・ファスティアン風・最上級
⑯産地記載なし（アバ毛織物）・白・ファスティアン風・下級
⑰クルド（アバ毛織物の上着[79]）・白・極上・1 アルシン 2 ルブ
⑱チュブ（アバ毛織物のブーツ？）・最上級
⑲チュブ（アバ毛織物のブーツ？）・下級
⑳クルド（アバ毛織物[80]）・白・極上・2 ズィラー 2 ルブ

毛織物（サーイェ）

①産地記載なし（サーイェ粗厚毛織物）・ケルメス染, 紫[81], スミレ色　（520 アクチェ）[82]
②イングランド（サーイェ粗厚毛織物）・七色・最上級　（140 アクチェ）
③イングランド（サーイェ粗厚毛織物）・七色・中級　（130 アクチェ）
④フィレンツェ（サーイェ粗厚毛織物）・七色・最上級　（130 アクチェ）
⑤フィレンツェ（サーイェ粗厚毛織物）・七色・中級　（125 アクチェ）
⑥イングランド（サーイェ粗厚毛織物）・七色・　（120 アクチェ）
⑦フィレンツェ（サーイェ粗厚毛織物）・七色・下級　（120 アクチェ）
⑧ベンリュレル（サーイェ粗厚毛織物）・白

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

78 幅 5 rubu‘
79 *dolama*
80 *tatar yapuncası*
81 *erguvânî*
82 幅 1 ズィラー 1 ギリ

資料 8

1600 年台帳における綿織物の産地と価格

ベズ綿布

①リゼ（ベズ綿布）・最上級	（1 アルシンあたり 60 アクチェ）
②リゼ（ベズ綿布）・中級	（同 40 アクチェ）
③リゼ（ベズ綿布）・下級	（同 20 アクチェ）
④スィノプ（ベズ綿布）・最上級	（同 14 アクチェ）
⑤アクジャシェヒール Akcaşehir（ベズ綿布）	（同[13.5 アクチェ]）[83]
⑥ベイシェヒール（ベズ綿布）・最上級	（同[13 アクチェ]）[84]
⑦スィノプ（ベズ綿布）・中級	（同 12 アクチェ）
⑧エレウリ Ereğli（ベズ綿布）	（同[12 アクチェ]）[85]
⑨ベイシェヒール（ベズ綿布）・中級	（同[11 アクチェ]）[86]
⑩スィノプ（ベズ綿布）・下級	（同 10 アクチェ）
⑫ジャニク Canik（ベズ綿布）	（同[8 アクチェ]）[87]
⑬ナズィッリ Nazilli（ベズ綿布）・ピンク	（同[8 アクチェ]）[88]
⑭アコヴァ Acova（ベズ綿布）・アラジャ帆布？	（1 点[89]80 アクチェ）
⑮メネメン（ベズ綿布）帆布？	（同　190 アクチェ）

モスリン

①モスルとアルメニア（モスリン）	（1 点[90] 90-100 アクチェ）
②産地記載なし（モスリン）・無地[91]?・最上級	（同　1200 アクチェ）
③産地記載なし（モスリン）・金銀糸入り・最上級	（同？ 600 アクチェ）
④産地記載なし（モスリン）・無地[92]?・最下級	（同　600 アクチェ）
⑤産地記載なし（モスリン）・金銀糸入り・中級	（同？ 480 アクチェ）
⑥産地記載なし（モスリン[93]）	（同　360 アクチェ）
⑦モスル（モスリンのスカーフ）・ケルメス染	（同　11 アクチェ）
⑧メルメルシャーヒーMermerşâhî?（モスリン）	（1 エンダーゼあたり 33 アクチェ[94]）
⑨産地記載なし（モスリン[95]）・最上級	（1 点[96]330 アクチェ）
⑩産地記載なし（モスリン[97]）	（同　240 アクチェ）
⑪産地記載なし（モスリン[98]）・最上級	（同　220 アクチェ）

83 1 点（*top*=10*zira'*）につき 135 アクチェ
84 1 点（*top*=10*zira'*）につき 130 アクチェ
85 1 点（*top*=10*zira'*）につき 120 アクチェ
86 1 点（*top*=10*zira'*）につき 110 アクチェ
87 1 点（*top*=6*zira'*）につき 50 アクチェ
88 1 点（*top*=6*zira'*）につき 50 アクチェ
89 *top*
90 *tane*
91 حصا, 長さ 20 ズィラー, 幅 1.52 ズィラー
92 長さ 20 ズィラー, 幅 1.52 ズィラー
93 *demekle ma'ruf*
94 30 エンダーゼ（*endâze*≒60cm）につき 1000 アクチェ
95 *caneper*
96 *tane*
97 *permeni* または *mehker*
98 *sersaleme*

ボアシ綿布

①インド（ボアシ綿布[99]）・赤・最上級　（単位記載なし　200 アクチェ）
②産地記載なし（ボアシ綿布）・濃茶緑、ラピスラズリとインディゴブルー（同　190 アクチェ）
③産地記載なし（ボアシ綿布）・青と濃茶緑・幅広？平織？・最上級（同　170 アクチェ）
④ボルル Borlu（ボアシ綿布）・白・最上級　（同　150 アクチェ）
⑤産地記載なし（ボアシ綿布）・青と濃茶緑・幅広？平織？・中級　（同　120 アクチェ）
⑥ペルシア（ボアシ綿布）　（同　120 アクチェ）
⑦アレッポ（[ボアシ綿布)]　（同　120 アクチェ）
⑧ボルル Borlu（ボアシ綿布）・白・中級　（同　110 アクチェ）
⑨ボルル Borlu（ボアシ綿布）・白・下級　（同　70 アクチェ）

ファスティアン

①メネメン（ファスティアン綿布[100]）　（1 エンダーゼあたり 12 アクチェ）[101]
②キオス（ファスティアン綿布）　（同　10 アクチェ）[102]

アスタル綿布

①カラマン（アスタル綿布）・[茶]　（単位記載なし 55 アクチェ）
②アダナ（アスタル綿布）・[茶]　（同　45 アクチェ）

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

99 *boğas*　綾織り綿布
100 ディミ（*dimi*）　厚地綾織り綿布
101 1 エンダーゼ（*endâze*≒60cm）の価格
102 1 エンダーゼ（*endâze*≒60cm）の価格

資料 9　1640 年台帳における綿織物と麻織物の産地と価格

麻織物

①イスタンブル(麻布)・極上、混色（または混紡）　（1 アルシン[103]あたり 18 アクチェ）
②イスタンブル(麻布)・麻織物・極上　（同　13 アクチェ）

ベズ綿布

①イスタンブル（ベズ綿布のシャツ）・極上で絹の縁付き　（1 着分 300 アクチェ）[104]
②イスタンブル（ベズ綿布のシャツ）・極上・中級　（1 着分 200 アクチェ）[105]
③イスタンブル（ベズ綿布のシャツ）・極上・最下級　（1 着分 100 アクチェ）[106]
④イスタンブル（ベズ綿布[107]）　（1 アルシンあたり 9 アクチェ）
⑤リゼ（ベズ綿布）・最上級　（同 70 アクチェ）[108]
⑥リゼ（ベズ綿布）・　（同 46 アクチェ）[109]
⑦リゼ（ベズ綿布）・最上級　（同 32 アクチェ）[110]
⑧スィノプ（ベズ綿布）・極最上級　（同 11 アクチェ）
⑨マルディン（ベズ綿布）・白　（1 ズィラーあたり 11 アクチェ）[111]
⑩ナジィッリ（ベズ綿布）　（1 アルシンあたり 6 アクチェ）[112]
⑪モスル（ベズ綿布）・ケルメス染　（1 ズィラーあたり 4 アクチェ）[113]
⑫ソマ（ベズ綿布）・極最上級　（同 8 アクチェ）
⑬ソマ（ベズ綿布）・最上級　（同 7 アクチェ）
⑭ソマ（ベズ綿布）・最下級　（同 6.5 アクチェ）

ボアシ綿布

①インド（ボアシ綿布[114]）・白　（1 ズィラーあたり 31 アクチェ）[115]
②モスル（ボアシ綿布）・黒　（同 29 アクチェ）[116]
③産地記載なし（ボアシ綿布[117]）・白　（同 26.5 アクチェ）[118]
④モスル（ボアシ綿布）・白・長い　（同 24 アクチェ）[119]
⑤マニサ（[ボアシ綿布]）・緑系　（同 23 アクチェ）[120]
⑥インド（ボアシ綿布）　（同 17 アクチェ）[121]
⑦インド（ボアシ綿布）・七色　（同 16.5 アクチェ）[122]
⑧マニサ[ボアシ綿布]・ザクロ色？緑系?　（同 15 アクチェ）[123]
⑨トカト（ボアシ綿布）・ケルメス染・ディヤルバクル風　（同 14 アクチェ）[124]

---

103 1 アルシン≒68cm
104 長さ 2 ズィラー 1 ルブ 1 ギリ
105 長さ 2 ズィラー 2 ルブ
106 長さ 2 ズィラー 1 ルブ
107 *Hacı Ali*
108 幅 1 ズィラー 1 ギリ
109 幅 1 ズィラー 4 ギリ
110 幅 1 ズィラー 3 ギリ
111 長さ 22 ズィラー、幅 1 ズィラー 1 ギリ
112 1 *top*=7 アルシンあたり 40 アクチェ
113 長さ 7.5 ズィラー、幅 1 ズィラー 1 ルブで 30 アクチェ
114 *burûcî*
115 長さ 20 ズィラー、幅 1 ズィラー 1 ルブ
116 長さ 7 ズィラー、幅 1 ズィラー
117 *bayrâmî*
118 長さ 12 ズィラー、幅 1 ズィラー5 ルブ
119 長さ 21 ズィラー 2 ルブ、幅 1 ズィラー1 ルブ 1 ギリ
120 長さ 7 ズィラー6 ルブ、幅 1 ズィラー2 ルブ
121 長さ 19 ズィラー、幅 6 ルブ 1 ギリ
122 長さ 11 ズィラー、幅 6 ルブ 1 ギリ
123 長さ 11.5 ズィラー、幅 1 ズィラー 1 ルブ 1 ギリ

⑩イェメン（ボアシ綿布[125]）・白　（同 14 アクチェ）[126]
⑪カスタモヌ（ボアシ綿布）・ケルメス染・最上級　（同 13 アクチェ）[127]
⑫カスタモヌ（ボアシ綿布）・ケルメス染・中級　（同 12 アクチェ）[128]
⑬カスタモヌ（ボアシ綿布）・ケルメス染・最下級　（同 11 アクチェ）[129]
⑭マニサ（ボアシ綿布）・白・最上級　（同 11 アクチェ）[130]
⑮マニサ（ボアシ綿布）・白・中級　（同 10.5 アクチェ）
⑯イスタンブル（ボアシ綿布）・青　（同 8 アクチェ）
⑰イスタンブル（ボアシ綿布）・七色　（同 7 アクチェ）
⑱イスタンブル（ボアシ綿布）・白　（同 6 アクチェ）[131]
⑲イスタンブル[ボアシ綿布[132]]・白・最上級　（同 4 アクチェ）[133]
⑳イスタンブル[ボアシ綿布]・青　（同 4 アクチェ）
㉑イスタンブル[ボアシ綿布[134]]・白・中級　（同 3.5 アクチェ）[135]
㉒イスタンブル[ボアシ綿布[136]]　（同 3.5 アクチェ）
㉓イスタンブル[ボアシ綿布[137]]・白。最下級　（同 3 アクチェ）[138]
㉔イスタンブル[ボアシ綿布]・黒　（全体で[139]105 アクチェ）

ファスティアン

①産地記載なし（ファスティアン）・*pertebvan* 毛織物風・最上級（1 ズィラーあたり 50 アクチェ）
②産地記載なし（ファスティアン）・*pertebvan* 毛織物風・中級（同 40 アクチェ）
③キオス（ファスティアン[140]）　（同 15 アクチェ）
④キオス（ファスティアン）　（同 14.5 アクチェ）
⑤アダ（ファスティアン）　（同 15 アクチェ）
⑥キプロス（ファスティアン[141]）　（同 14 アクチェ）
⑦マイドス（ファスティアン）・刺繍あり　（同 13 アクチェ）
⑧マイドス（ファスティアン）・平織　（同 13 アクチェ）
⑨メネメン（ファスティアン）　（同 6 アクチェ）

アラジャ綿布

マニサ(アラジャ綿布)　（全体で 130 アクチェ）
ティール(アラジャ綿布)・最上級　（単位記載なし 60 アクチェ）
ティール(アラジャ綿布)・最下級　（同　50 アクチェ）

---

124 長さ 10 ズィラー、幅 1 ズィラー
125 *bafte*
126 長さ 14 ズィラー、幅 7 ルブ
127 長さ 10 ズィラー、幅 1 ズィラー
128 長さ[10 ズィラー]、幅[1 ズィラー]
129 長さ[10 ズィラー]、幅[1 ズィラー]
130 長さ 11.5 ズィラー
131 長さ 11.5 ズィラー
132 *astarı*
133 幅 7 ルブ
134 *astarı*
135 幅[7 ルブ]
136 *nebâtî*
137 *astarı*
138 幅[7 ルブ]
139 *bütünü*
140 *kız*
141 *kız*

綿布（その他）

①ペルシア（*semânî* 綿布）・白	（1 ズィラーあたり　29 アクチェ）[142]
②産地記載なし（*lekepûrî cihangîr* 綿布）	（同　26 アクチェ）[143]
③ペルシア（*lekepûrî* 綿布）・深緑とバラ色・最上級	（同　26 アクチェ）[144]
④ペルシア（*lekepûrî* 綿布）・七色	（同　25 アクチェ）[145]
⑤産地記載なし（*lekepûrî* 綿布）・白・最上級	（同　25 アクチェ）[146]
⑥産地記載なし（*lekepûrî* 綿布）・白・中級	（同　23 アクチェ）[147]
⑦ペルシア（*Haydarâbâdî* 綿布）・白	（同　17 アクチェ）[148]
⑧ペルシア（*Haydarâbâdî* 綿布）・七色	（同　17 アクチェ）[149]
⑨ペルシア（*ferespûrî* 綿布）・七色	（同　12.5 アクチェ）[150]
⑩ペルシア（*ferespûrî* 綿布）・最上級	（同　12 アクチェ）[151]
⑪ペルシア（*ferespûrî* 綿布）・中級	（同　11 アクチェ）[152]

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

142 長さ 11.5 ズィラー、幅 1 ズィラー 3 ルブ 1 ギリ
143 長さ 17.5 ズィラー、幅 1.5 ズィラー
144 長さ 6.5 ズィラー、幅 1 ズィラー 3 ルブ 3 ギリ
145 長さ[6.5 ズィラー]、幅[1 ズィラー 3 ルブ 3 ギリ]
146 長さ 16 ズィラー、幅 1 ズィラー 3 ルブ
147 長さ 15 ズィラー
148 長さ 17.5 ズィラー、幅 1 ズィラー 1 ルブ
149 長さ 8.5 ズィラー、幅 1 ズィラー
150 長さ 11 ズィラー、幅 6 ルブ 1 ギリ
151 長さ 16 ズィラー、幅 6 ルブ 1 ギリ
152 長さ 15 ズィラー 6 ルブ、幅 6 ルブ 1 ギリ

資料 10

1600 年台帳におけるフェルトの産地と価格

フェルト

①テサロニキ（フェルト）（100 アクチェ）
②テサロニキ（フェルト）・下級（80 アクチェ）
③サドランジ Sadrancî（フェルト）・デルヴィーシュ用？（70 アクチェ）
④エディルネ（[フェルト]）（60 アクチェ）
⑤ロードス（[フェルト]）（50 アクチェ）
⑥ハル Halı（[フェルト[153]]）（価格記載なし）

薄地フェルト

①ヤンボル（薄地フェルト[154]）・青、ケルメス、濃茶緑・最上級（300 アクチェ）
②ヤンボル（薄地フェルト）・青、ケルメス、濃茶緑・中級（240 アクチェ）
③ヤンボル（薄地フェルト）・青、ケルメス、濃茶緑・下級（220 アクチェ）
④イムロズ（薄地フェルト）（200 アクチェ）
⑤イスケニド Iskenid（薄地フェルト）（*1 kıt'a*　160 アクチェ）
⑥リムイェとイスケルドス Limye,Iskerdos（薄地フェルト）・最上級（120 アクチェ）
⑦リムイェとイスケルドス Limye,Iskerdos（薄地フェルト）・中級（90 アクチェ）
⑧イスケニド Iskenid（薄地フェルトの上着）（88 アクチェ）
⑨イムロズ（薄地フェルトの上着）（65 アクチェ）
⑩エリミイェ（薄地フェルトの服）（60 アクチェ）
⑪وتزنده（薄地フェルト）（50 アクチェ）
⑫カーフィル Kâfir（薄地フェルト）（40 アクチェ）

毛布

①カラフェルイェ Karaferye（大判厚地毛布）・ケルメス染（580 アクチェ）
②カラフェルイェ Karaferye（大判厚地毛布）・白・最上級（500 アクチェ）
③カラフェルイェ Karaferye（中判厚地毛布）・最上級（250 アクチェ）
④カラフェルイェ Karaferye（中判厚地毛布）・中級（240 アクチェ）
⑤カラフェルイェ Karaferye（中判厚地毛布）・下級（200 アクチェ）
⑥カラフェルイェ Karaferye（厚地毛布）・白ケルメス以外（500 アクチェ）
⑦テサロニキ（厚地毛布[155]）（価格記載なし）

（注記のないものは、全て 1 ズィラーあたりの価格。1 ズィラー≒68cm）

153 ケチェ *keçe*
154 ケベ *kebe*
155 ヴェレンセ *velense*

資料 11

1624 年ブルサ台帳におけるヴェルヴェットの産地と価格

キオス（ヴェルヴェットのカフタン）・ケルメス染	（1 点[156]　1340 アクチェ）
キオス（ヴェルヴェットのカフタン）・ケルメス染	（単位記載なし 1280 アクチェ）
キオス（ヴェルヴェットのカフタン）・緑と青	（同　1230 アクチェ）
キオス（ヴェルヴェットのカフタン）・ケルメス染	（同　1220 アクチェ）
キオス（ヴェルヴェットのカフタン）・緑と青	（同　1100 アクチェ）
キオス（ヴェルヴェットのカフタン）・緑と青	（同　1070 アクチェ）
Şehrî（ヴェルヴェットのカフタン）	（同　1000 アクチェ）

1624 年ブルサ台帳における紋織り絹織物の産地と価格

①ヴェネツィア（ケムハー）・多色	（180 アクチェ）
②ブルサ（ケムハー）・厚地・ケルメス染	（160 アクチェ）
③ブルサ（ケムハー）・厚地・七色	（150 アクチェ）
④キオス（ケムハー）・ケルメス染	（140 アクチェ）
⑤キオス（ケムハー）・暗胡椒色、白、スミレ色	（120 アクチェ）
⑥キオス（ケムハー）・七色と暗緑	（110 アクチェ）
⑦ブルサ（ケムハー）・ケルメス染	（100 アクチェ）
⑧ブルサ（ケムハー）・キオス=ハーン・七色	（85 アクチェ）
⑨アレッポ（ダーラーイー）	（60 アクチェ）
⑨シリア（ダーラーイー）・各種	（60 アクチェ）
⑪産地記載なし（ダーラーイー）・金銀糸入り	（50 アクチェ）
⑪産地記載なし（ダーラーイー）・"urban"・全て	（50 アクチェ）
⑬産地記載なし（ダーラーイー）・光沢?	（40 アクチェ）
・シリア（ダーラーイーのカフタン）	（1 点　720 アクチェ）
・ペルシア（ダーラーイー）・金銀糸入り・最上級	（1 着[157]　380 アクチェ）
・バグダード（ダーラーイー）・縞・アラジャ風？	（1 着　340 アクチェ）
・ペルシア（ダーラーイー）・各種	（1 着　200 アクチェ）
・シリア（ダーラーイーの子供用上着）	（単位記載なし 320 アクチェ）

（注記のないものは、全てエンダーゼあたりの価格。1 エンダーゼ≒60cm）

1624 年ブルサ台帳における薄地絹織物の産地と価格

①ヴェネツィア（サテン）・ケルメス染・最上級	（240 アクチェ）
②ヨーロッパ（サテン）・ケルメス染	（240 アクチェ）
③ヨーロッパ（サテン）・ケルメス染	（220 アクチェ）
④ヨーロッパ（サテン）・七色	（185 アクチェ）
⑤ヴェネツィア（サテン）・多色	（180 アクチェ）
⑥フィレンツェ（サテン）・ケルメス染	（180 アクチェ）
⑦ヴェネツィア（サテン）・フィレンツェ風	（160 アクチェ）
⑧フィレンツェ（サテン）・　七色	（160 アクチェ）
⑨ヴェネツィア（サテン）・　多色	（140 アクチェ）
⑩ブルサ（サテン）・フィレンツェ風	（140 アクチェ）
⑪ブルサ（サテン）・フィレンツェ風・*cilesine*	（120 アクチェ）
⑫産地記載なし（サテン）・縞　・アラジャ・都会風？	（100 アクチェ）
⑬産地記載なし（サテン）・ケルメス染・都会風？	（40 アクチェ）
⑭産地記載なし（サテン）・黄, 緑, 縞	（35 アクチェ）

156 *aded*
157 *donluk*

・産地記載なし（ヴェール）[158]・堅撚り　（1ディルハム[159]につき 6 アクチェ）
・産地記載なし（ヴェール）・都会風？・堅撚り・上質（1ディルハムにつき 2 アクチェ）
（注記のないものは、全てエンダーゼあたりの価格。1 エンダーゼ≒60cm）

1624 年ブルサ台帳における交ぜ織り絹織物の産地と価格

①産地記載なし（ハーレ）・新タイプ？	（320 アクチェ）
②ヨーロッパ（ハーレ）・ケルメス染 と七色・金銀糸入り	（240 アクチェ）
③産地記載なし（ハーレ）・刺繍入り, 紋様なし	（160 アクチェ）
④産地記載なし（ハーレ）・黄	（130 アクチェ）
⑤産地記載なし（ハーレ）・深緑・光沢?	（60 アクチェ）
⑥ヴェネツィア（ハーレ）	（50 アクチェ）
⑦産地記載なし（ハーレ）・光沢?	（50 アクチェ）
・バグダード?（バグダーディーの子供用上着）	（1 着　900 アクチェ）
・バグダード?（バグダーディー［のカフタン］）	（1 着　700 アクチェ）
・バグダード?（バグダーディーのカフタン）	（単位記載なし 460 アクチェ）
・バグダード?（バグダーディーのカフタン）	（単位記載なし 430 アクチェ）
・バグダード?（バグダーディーのカフタン）	（単位記載なし 400 アクチェ）
・産地記載なし（アラジャ[160]のカフタン）	（単位記載なし 320 アクチェ）
・エジプト（アラジャ[161]のカフタン）	（単位記載なし 280 アクチェ）
・エジプト（アラジャ[162]のカフタン）	（単位記載なし 170 アクチェ）
・　エジプト（アラジャ[163]のカフタン）・空色	（単位記載なし 140 アクチェ）
・ヴェネツィア（ハーレ）・刺繍入り	（価格記載なし）
・産地記載なし（ハーレ）・金銀糸入り	（価格記載なし）

（注記のないものは、全てエンダーゼあたりの価格。1 エンダーゼ≒60cm）

1624 年ブルサ台帳におけるその他の絹織物の産地と価格

ヨーロッパ（絹糸）・上質	（1ディルハムで 4 アクチェ）
産地記載なし（絹のナプキン）・都会風	（同　3 アクチェ）[164]
産地記載なし[絹糸]	（同　3 アクチェ）
シリア（絹のナプキン）	（同　3 アクチェ）
アラシェヒール（絹のナプキン）	（同　2 アクチェ）[165]
ペルシア?（絹のナプキン）	（同　2 アクチェ）[166]
産地記載なし（絹のバスタオル）・堅撚り	（同　2 アクチェ）
産地記載なし（絹のバスタオル）[167]　・堅撚り	（同　2 アクチェ）
産地記載なし（絹紐）・ムスク色	（単位記載なし　40 アクチェ）

158 *ma'a nul*
159 1 オッカ（*okka*）=400 ディルハム（*dirhem*）＝2.8 リブラ（*libre*）。
1 リブラ≒327.45g(453.6g)、 1 ディルハム≒2.3g(3.18g)。
160 *Ebu-reşm*
161 *Ebu-reşm*
162 *Menzele*
163 *Ibn-i baba*
164 100 ディルハムで 300 アクチェ
165 107 ディルハムで 250 アクチェ
166 107 ディルハムで 220 アクチェ
167 *ma'a nul?*

資料 12　1624 年ブルサ台帳における毛織物の産地と価格

毛織物（チュハー）

産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・ケルメス染・最上級	（480 アクチェ）
産地記載なし（70 のチュハー毛織物）・黒	（400 アクチェ）
産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・スミレ色・最上級	（450 アクチェ）
産地記載なし（チュハー毛織物）・パランゴン・青・最上級	（300 アクチェ）
産地記載なし（70 のチュハー毛織物）・ケルメス染	（260 アクチェ）
産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・極最上級	（250 アクチェ）
産地記載なし（60 のチュハー毛織物）・紫, 緑とスミレ色	（250 アクチェ）
産地記載なし（チュハー毛織物）・パランゴン・青	（250 アクチェ）
ロンドン（チュハー毛織物）・最上級	（150 アクチェ）
ボドルム（チュハー毛織物）・最上級	（120 アクチェ）
エディルネ（チュハー毛織物）・ボドルム？	（70 アクチェ）

毛織物（カージー）

ヴェネツィア（カージー毛織物）・最上級	（100 アクチェ）
産地記載なし（カージー毛織物）・粗目	（70 アクチェ）

毛織物（アバ）

エイン（アバ毛織物）・黒・最上級	（20 アクチェ）
エイン（アバ毛織物）・灰色・最上級	（18 アクチェ）
エイン（アバ毛織物）・黄とケルメス染・最上級	（18 アクチェ）
エイン（アバ毛織物）・白・最上級	（16 アクチェ）

（注記のないものは、全てエンダーゼあたりの価格。1 エンダーゼ≒60cm）

資料 13　1624 年ブルサ台帳における、麻と綿織物の産地と価格

麻

エジプト（麻布）	（1 ヴァッキイェ[168]で 20 アクチェ）
ブルサ？（麻布）	（1 ヴァッキイェで 16 アクチェ）

ベズ綿布

デミルジ（ベズ綿布）・最上級	（1 アルシンで 11 アクチェ）
ソマ（ベズ綿布）	（1 アルシンで 9 アクチェ）
ペンベ（ベズ綿布）・最上級	（1 アルシンで 8 アクチェ）
ペンベ（ベズ綿布）・下級	（1 アルシンで 6 アクチェ）

ボガシ綿布

ディヤルバクル（ボガシ綿布）	（16 アクチェ）[169]
ハミディエ（ボガシ綿布）・極薄（または極上）	（13 アクチェ）[170]
ハミディエ（ボガシ綿布）・染め	（12 エンダーゼで 140 アクチェ）
ハミディエ（ボガシ綿布）・白・上質・	（本[171]？140 アクチェ）
ペルシア（ボガシ綿布）・牧神のパイプ？[172]	（12 アクチェ）[173]
マニサ（ボガシ綿布）・染め	（10 アクチェ）[174]
Şehrî　ボガシ綿布・染め	（8.5 アクチェ）[175]
イマーム・ムーサ（ボガシ綿）	（14 アクチェ）[176]
ハミディエ（ボガシ綿布）・服？[177]	（12 アクチェ）[178]
ハミディエ（ボガシ綿布）・白・上質	（12 アクチェ）
産地記載なし（*lelepûlî* ボガシ綿布）	（12 アクチェ）[179]

モスリン

Ferhadhânî（モスリン）	（1 点[180]　320 アクチェ）
産地記載なし（モスリン）・金糸入り・最上級	（1 点 320 アクチェ）
産地記載なし（モスリン）・金糸入り・中級	（1 点 280 アクチェ）
産地記載なし（モスリン）・ポピーの？[181]・最上級	（1 点 160 アクチェ）
産地記載なし（モスリン）・*sersâleme*・最上級	（1 点 120 アクチェ）

その他の綿織物

産地記載なし（アスタル綿布）・染めと白	（5 アクチェ）
メネメン（ファスティアン）・最上級	（8 アクチェ）

（注記のないものは、全てエンダーゼあたりの価格。1 エンダーゼ≒60cm）

---

168 *vakiyye*
169 10 エンダーゼで 160 アクチェ
170 12 エンダーゼで 155 アクチェ
171 *kitabesı*
172 *miskâlî*
173 10 エンダーゼで 126 アクチェ
174 12 エンダーゼで 120 アクチェ
175 12 エンダーゼで 100 アクチェ
176 7 エンダーゼで 98 アクチェ
177 *donluk*
178 8 エンダーゼで 96 アクチェ
179 22 エンダーゼで 330 アクチェ
180 *aded*
181 *haşhâşî*

図 56　絹織物産地（1600 年）

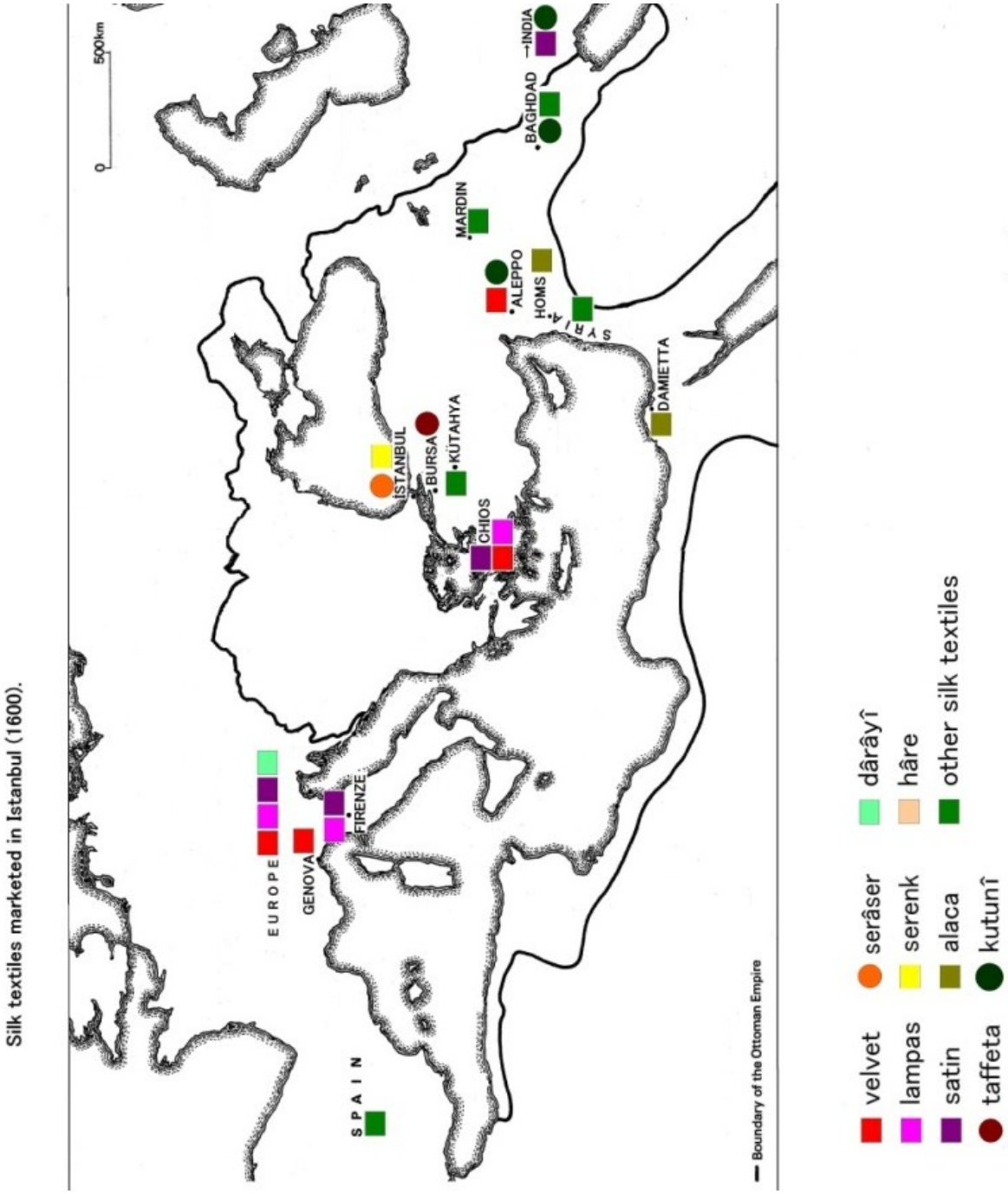


図 57　絹製品産地（1640 年）

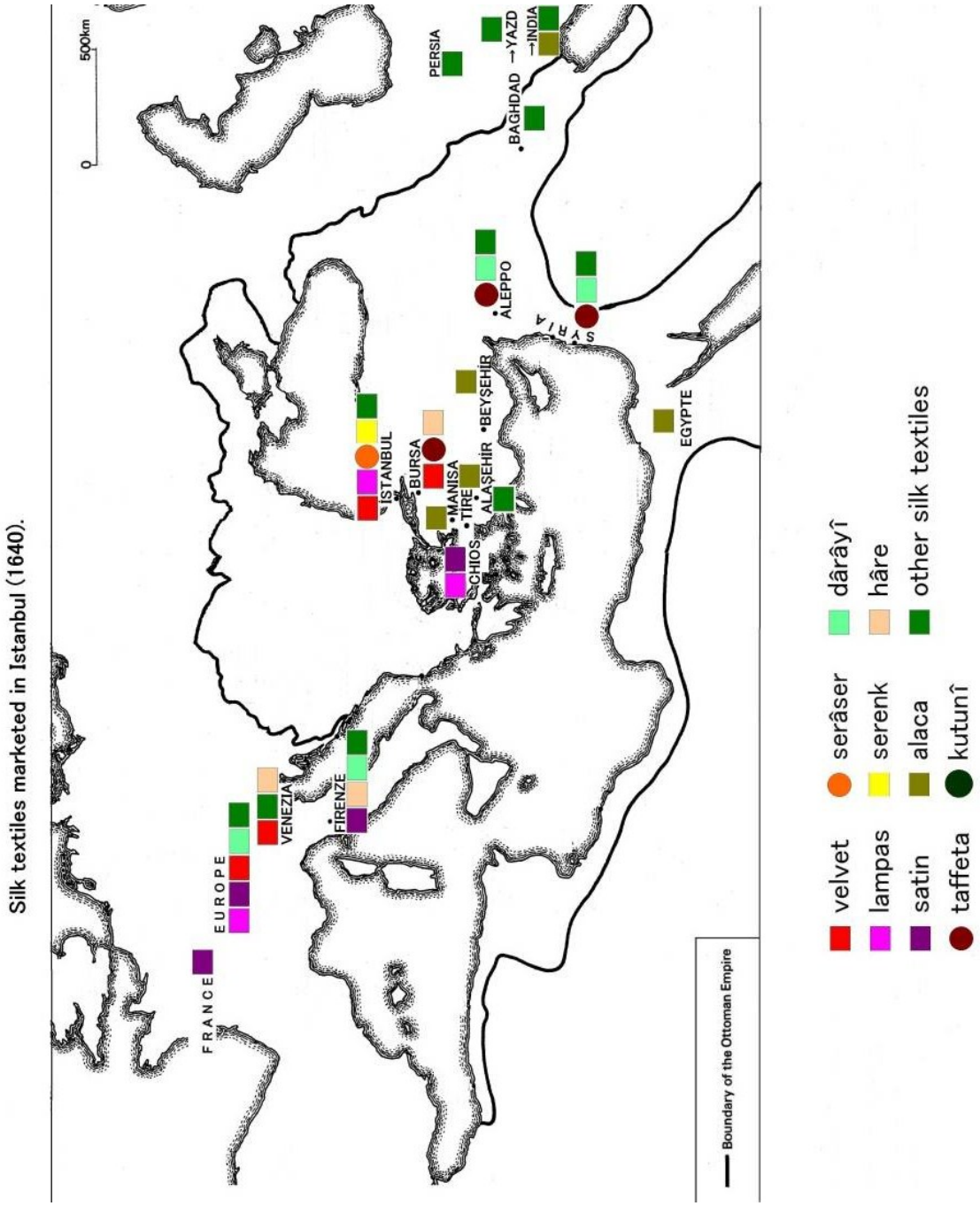
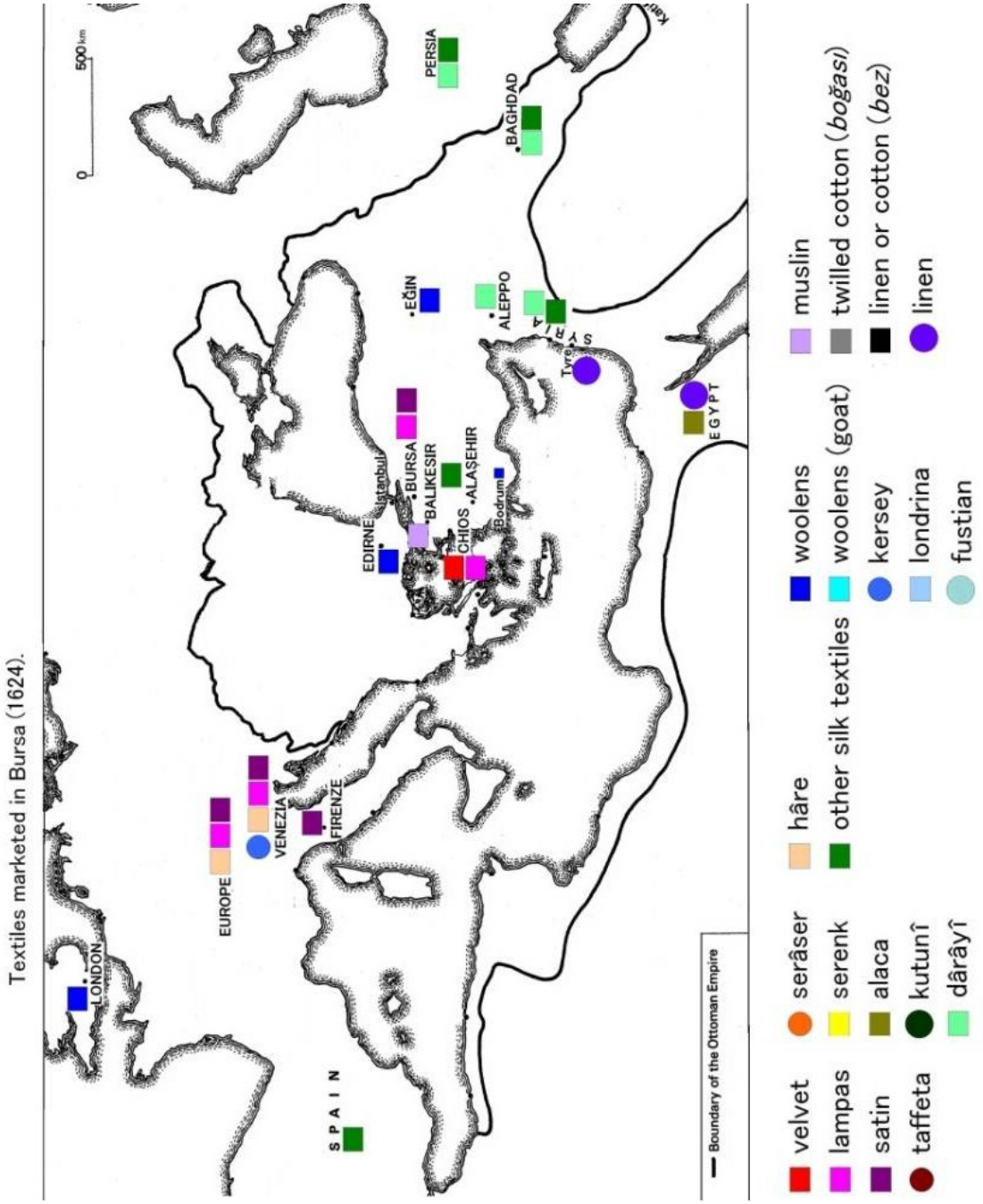


図 58　繊維製品産地（1624 年）



資料 14　ジャコモ・バドエルの取扱商品（金額）

順位	商品名	金額（無印：売却価格）（＊印：購入価格）	比率（%）	数量
1.	毛織物	perp. 66369 car. 3	27.55	886反(peza)+9枚(chavezo)
2.	蜜ロウ	* perp. 21447 car. 1	8.90	791ｷﾝﾀｰﾙ 25ﾙｵﾄﾘ
3.	薄地絹織物	perp. 22019 car. 10	9.14	小箱(casete)408＋1梱
4.	コショウ	* perp. 17774 car. 18	7.38	357ｷﾝﾀｰﾙ 43ﾙｵﾄﾘ
5.	絹糸	* perp. 14802 car. 6	6.15	3402ﾘﾌﾞﾗ 6ｵﾝﾁｬ
6.	銅	* perp. 13428 car. 21	5.58	773ｷﾝﾀｰﾙ 23ﾙｵﾄﾘ
7.	錫	perp. 10192 car. 16	4.23	167束(fasso)
8.	金（金箔・金貨・金糸）	perp. 8628 car. 16	3.58	(1)
9.	赤色染料	* perp. 7938 car. 7	3.30	4200ﾘﾌﾞﾗ 11ｵﾝﾁｬ
10.	絹織物（金襴織類）	perp. 7264 car. 13	3.02	24点
11.	インディゴ	* perp. 6209 car. 15	2.58	39ﾁｳﾙﾛ ＋ 1454ﾘﾌﾞﾗ
12.	牛革	* perp. 4881 car. 16	2.03	2684枚 ＋ 189反
13.	ワイン	perp. 4262 car. 18	2%以下	246樽（mitri9908+α）
14.	オリーブ油	perp. 3779 car. 20		41ﾎﾞｯﾃ(bote)
15.	羊毛	* perp. 3519 car. 18		214袋（689ｷﾝﾀｰﾙ 77ﾙｵﾄﾘ）
16.	スオウ（染料）	* perp. 2826 car. 11		(2)
17.	奴隷	* perp. 2692 car. 0		40人
18.	羊革	* perp. 2587 car. 9		10,168枚
19.	リネン	perp. 1855 car. 3	1%以下	(3)
20.	穀類（小麦・粟）	* perp. 1655 car. 9		(4)
21.	種(? semenzia)	* perp. 1552 car. 17		14ｷﾝﾀｰﾙ 41½ﾙｵﾄﾘ (5)
22.	ショウガ	* perp. 1473 car. 20		51ｷﾝﾀｰﾙ 42½ﾙｵﾄﾘ
23.	丁子	* perp. 1417 car. 20		9ｷﾝﾀｰﾙ 45ﾙｵﾄﾘ
24.	針金	perp. 1399 car. 4		1391束
25.	ファスチアン(綿粗布)	perp. 1397 car. 1		164反
26.	塩漬け豚肉・豚脂身	perp. 1271 car. 12		437ｷﾝﾀｰﾙ 35ﾙｵﾄﾘ
27.	コルク	perp. 1092 car. 0		26ﾐｴﾗ(miera)
28.	銀	perp. 839 car. 18		32ﾘﾌﾞﾗ 11ｵﾝﾁｬ s. 8
29.	灰	* perp. 807 car. 14		77½袋 (6)
30.	鉛白（塗料）	perp. 801 car. 0		78桶
31.	胸白テン・イタチ毛皮(革)	* perp. 765 car. 20		テン574枚／イタチ325枚
32.	乳香	* perp. 608 car. 16		19 ｷﾝﾀｰﾙ 51ﾙｵﾄﾘ
33.	鉛	* perp. 587 car. 6		161ｷﾝﾀｰﾙ 99ﾙｵﾄﾘ
34.	ムスク	* perp. 566 car. 6		226½ｻｯｺ(sazi)
35.	セッケン	perp. 421 car. 14		40ｷﾝﾀｰﾙ 31ﾙｵﾄﾘ
36.	ミョウバン	* perp. 347 car. 0		80ｷﾝﾀｰﾙ 7ﾙｵﾄﾘ
37.	キャヴィア	perp. 367 car. 22%		23ｷﾝﾀｰﾙ 3ﾙｵﾄﾘ
38.	いしゆみの柄	perp. 269 car. 18		1000
39.	紙	perp. 191 car. 9		5梱2連
40.	銀細工品	perp. 185 car. 15		8個
41.	塩漬け魚	perp. 159 car. 5		7樽(34ｷﾝﾀｰﾙ78ﾙｵﾄﾘ)(7)
42.	干しブドウ	* perp. 137 car. 17		63ｷﾝﾀｰﾙ 50ﾙｵﾄﾘ
43.	砂糖	perp. 131 car. 0		2ｷﾝﾀｰﾙ
44.	荷敷用板	perp. 114 car. 20		500枚
45.	馬革	* perp. 88 car. 21		94枚
46.	ガラス製品	perp. 80 car. 6		2134個
47.	ダイオウ（薬料）	* perp. 57 car. 12		11ﾘﾌﾞﾗ6ｵﾝﾁｬ
48.	はがね(azali)	perp. 49 car. 14		240束
49.	アルカリ	perp. 44 car. 12		800
50.	ゼドアリア（薬料）	* perp. 14 car. 0		33ﾘﾌﾞﾗ 9ｵﾝﾁｬ
51.	スカモニン（薬料）	* perp. 12 car. 12		4ﾘﾌﾞﾗ 2ｵﾝﾁｬ

総計　perp. 240,872 car. 20

売却価格、購入価格のどちらを採用するかについては、便宜上、バドエルの帳簿上での記録に従い、以下の基準で分類した。

a．同一種の商品の全部あるいは大部分が、コンスタンチノープルで売却、と記録された商品は、売却価格（無印）を採用。

例）ヨーロッパ製の毛織物・絹織物、ワイン、オリーブ油など

b．同一種の商品の全部あるいは大部分が、コンスタンチノープルで購入され、かつコンスタンチノープル以外の土地へ船積み発送、と記録された商品は、購入価格（＊印）を採用。

例）コショウなどの香辛料、絹糸、染料、奴隷、皮革製品など

c．同一種の商品の全部あるいは大部分がコンスタンチノープル以外の土地で購入され、かつ、コンスタンチノープル以外の土地へ船積み発送、と記録された商品は、購入地での購入価格（＊印）を採用。

例）穀物：上記(4)～アガトポリで購入、直接トラブゾンへ船積み発送し、売却.

ただしいずれの場合も、コンスタンチノープルやそれ以外の購入地または輸送先は、必ずしも各商品の原産地、あるいは最終的な消費地であるとは限らない。

資料 15　ジャコモ・バドエルの取扱商品・件数　　(　)は取扱総額の順位

件数順位	品目 (　) 内は取り扱い総額の順位	件数	割合	備考
1	(1) 毛織物	66件	18.43%	
2	(2) 蜜ロウ	45件	12.57	
3	(4) コショウ	26件	7.26	
4	(3) 絹織物（薄地）	20件	5.59	
5	(6) 銅	16件	4.47	
5	(18) 羊革	16件	4.47	
7	(15) 羊毛	15件	4.19	
8	(9) 赤色染料	11件	3.07	
8	(11) インディゴ	11件	3.07	
10	(5) 絹糸	10件	2.79	
10	(10) 絹織物（金襴織類）	10件	2.79	
10	(12) 牛革	10件	2.79	
13	(8) 金	7件	1.96	金箔5件／金貨1件／金糸1件
14	(17) 奴隷	6件	1.68	
14	(31) テン・イタチ毛皮（革）	6件	1.68	
14	(7) 錫	5件	1.40	
17	(13) ワイン	5件	1.40	
17	(23) 丁子	5件	1.40	
19	(14) オリーブ油	4件	1.12	
19	(16) スオウ（染料）	4件	1.12	
19	(22) ショウガ	4件	1.12	
19	(32) 乳香	4件	1.12	
19	(37) キャヴィア	4件	1.12	
24	(24) 針金	3件	0.84	
24	(28) 銀	3件	0.84	
24	(34) ムスク	3件	0.84	
24	(48) はがね(? azali)	3件	0.84	
24	(19) リネン	3件	0.84	アレクサンドリア2件/ロンバルディア1件
29	(20) 穀類（小麦・粟）	2件	0.56	
29	(21) 種(? semenzia)	2件	0.56	
29	(25) 綿布	2件	0.56%	
29	(26) 塩漬け豚肉・豚脂身	2件	〃	
29	(30) 鉛白（塗料）	2件	〃	
29	(35) セッケン	2件	〃	
29	(36) ミョウバン	2件	〃	
29	(39) 紙	2件	〃	
29	(41) 塩漬け魚	2件	〃	
29	(45) 馬革	2件	〃	
39	(27) コルク	1件	0.28	
39	(29) 灰	1件	〃	
39	(33) 鉛	1件	〃	
39	(38) いしゆみの柄	1件	〃	
39	(40) 銀細工品	1件	〃	
39	(42) 干しブドウ	1件	〃	
39	(43) 砂糖	1件	〃	
39	(44) 荷敷用板	1件	〃	
39	(46) ガラス製品	1件	〃	
39	(47) ダイオウ（薬料）	1件	〃	
39	(49) アルカリ	1件	〃	
39	(50) ゼドアリア（薬料）	1件	〃	
39	(51) スカモニン（薬料）	1件	〃	

計　358件　(100.00%)

資料 16　ジャコモ・バドエルが扱った絹織物（1436-1440 年）

	商品名	扱い件数	内訳	扱い件数
厚地絹織物	ゼターニ織	12	ヴェルヴェット風ゼターニ織	7
			ゼターニ織	4
			サテン風ゼターニ織	1
	ヴェルヴェット	5		
	ダマスク織	4		
小計		**21**		
薄地絹織物	薄地絹織物	20 （408 箱＋1 梱）	しわ加工ヴェール	8（331 箱＋1 梱）
			光沢ヴェール	6（19 箱）
			柔らかいヴェール	6（58 箱）
小計		**20**		
合計		**41**		

史料頁	記載内容 (⑳以外は全て 1 点)	長さ	売却価格		備考
			1 ピッコあたり	総額	
c.10	①緑ヴェルヴェット (*veludo pian verde*)	44 ブラッチャ			諸経費・手数料（計 30 ペルペロン）清算の後、Zuan da Scarpanto に引き渡し。
	②黄色ヴェルヴェット (*veludo pian zialo*)	40 ブラッチャ			
	③緑ヴェルヴェット風ゼターニ織 (*zetanin verde aveludà*)	32 ブラッチャ 1 クアルタ			
	④朱紅ヴェルヴェット風ゼターニ織 (*zetanin aveludà vermio*)				
	⑤コローニャ製緑金襴ヴェルヴェット風ゼターニ織 ([*zetanin aveludà*] *verde brochado d'oro da Chologna*)	39 ブラッチャ			
c.92	⑥ケルメス染ヴェルヴェッド (*Veludo cremexi*)	13 ブラッチャ			用船料（1 ペルペロン 12 カラーティ）清算の後、Tomaxo Beneventi に引き渡し。
c.113	⑦白ダマスク織 (*damascin biancho.*)	32 ピッコ 2 と 1/2 クアルタ	6/4 ペルペロン	227 ペルペロン 18 カラーティ	ケルメス[染料]と物々交換及び売却。
	⑧アレクサンドリア風ダマスク織 (*damascin alesandrin*)	41 ピッコ	5 ペルペロン	205 ペルペロン	インディゴと物々交換。
	⑨白地にグラーナ[紋入り]ヴェルヴェット風ゼターニ織 (*zetanin aveludà chanpo biancho operà di grana*)			⑬と[あわせて]300 ペルペロン	カンディアへ輸送。
	⑩純紫ゼターニ織 *un zetanin paonazo scieto*)			200 ペルペロン	カンディアへ輸送。
	⑪白地で緑の斑点入り紫の毛羽あり[絹織物] (*peza de apiziolato chanpo biancho e pelo paonazo apizolà de verdei*)	36 と 1/2 ピッコ	10 ペルペロン	365 ペルペロン	ケルメス[染料]およびインディゴと物々交換。
	⑫緑地ヴェルヴェット (*veludo pian verde*)	42 ピッコ	6 ペルペロン	252 ペルペロン	
	⑬グラーナ地ヴェルヴェット (*veludo pian de grana*)			(⑨と[あわせて]300 ペルペロン	カンディアへ輸送。
	⑭ケルメスと白のゼターニ織 *zetanin cremexi e biancho*)	31 ブラッチャ (35 ピッコと 3 クアルタ)	9 と 1/2 ペルペロン	339 ペルペロンと 15 カラーティ	ヴェネツィアでの原価（*stravai* 生糸と物々交換）は 343 ペルペロン 16 と 1/2 カラーティ相当。

c.244	⑮白金蘭ダマスク織 (*damascin biancho brochà d'oro e seda*)	38 ピッコ	10 と 1/2 ペルペロン	[418 ペルペロン 23 と 1/2 カラーティ]	アドリアノープルへ輸送・売却。
	⑯純緑ダマスク織 *damascin verde scieto*)	46 ピッコ	6 ペルペロン	276 ペルペロン	
c.256	⑰ケルメスと白と緑金蘭[ヴェルヴェット風]ゼターニ織 (*zetanin cremexi e biancho e verde brochà d'oro*)	32 ブラッチャ 2 クアルタ (36 ピッコ 3 クアルタ)	15 ペルペロン	551 ペルペロン 8 カラーティ	ヴェネツィアでの原価は 487 ペルペロン 12 カラーティ相当。 コンスタンティノープルで[ジェノヴァ人？]Lunardo Spinola と、[インディゴと]物々交換。
c.259	⑱白地にケルメス染毛羽ありヴェルヴェット風ゼターニ織 (*zetanin aveludì chanpo biancho e pelo cremexi*)	35 ブラッチャ 2 クアルタ			経費 3 ペルペロン
c.361	⑲ケルメス染地金蘭ゼターニ織 (*zetanin pian cremexi brochà d'oro*)	32 ブラッチャ (38 ピッコ 3 クアルタ)	18 ペルペロン	697 ペルペロン 12 カラーティ	ヴェネツィアでの原価は、605 ペルペロン 5 カラーティ相当。
c.384	⑳緑と黒ヴェルヴェット風ゼターニ織 (*zetanini aveludadi verdi e negri apizoladi in 4 grize*)	4 点で 146 ブラッチャ (163 ピッコ)	7 と 1/2 ペルペロン		2 ピッコは廃棄。
	㉑ケルメス染サテン[風]ゼターニ織 (*zetanin raxo cremexi*)	50 と 1/2 ブラッチャ			ヴェネツィアでの原価は 435 ペルペロン 13 カラーティ相当。ジャコモ=バドエルがコンスタンティノープルを離れる際に、Charlo Chapelo に委託。

資料 18　ジャコモ・バドエルがコンスタンティノープルからオスマン朝支配都市へ送った商品　　（1436-1440 年）

送付先	送付商品	数量	価格	備考
アドリアノープル	白金蘭ダマスク織	38 ピッコ	perp. 418　car. 23½	
	しわ加工[絹]ヴェール	14 箱	773.　0.	
	バスタルド毛織物	25 反	1999.　7.	
	パドヴァ製毛織物	11 反	1345.　23.	
	フィレンツェ製毛織物	7 反	1140.　12.	
	ヴェルヴィック製毛織物	1 反	80.　0.	
	アロスト製毛織物	1 反	45.　0.	
	その他の毛織物	11 反	1309.　21.	
	ファスティアン	10 反	60.　0.	3 反返送される。
	ルビー	1 個	100.　0.	
	カンディア産マルヴァシアブドウ酒	7 樽	161.　0.	
	カンディア産ブドウ酒	15 樽	374.　10.	
	金糸	10 巻	30.　0.	7 巻返送される。
	鉛白	40 桶	420.　0.	
ブルサ	しわ加工[絹]ヴェール	3 箱	perp. 624. car.　0.	
	バスタルド毛織物	2 反	150　14.	返送される。
	フィレンツェ製毛織物	3 反	480.　3.	
	パルマ製毛織物	1 反	88.　6.	返送される。
	その他の毛織物	3 反	394.　12.	
	針金	110 束	110.　0.	
ガリポリ	しわ加工[絹]ヴェール	8 箱	420.　0.	
ロドスト	バスタルド毛織物	1 反	86.　18.	
	フィレンツェ製ガルボ毛織物	1 反	156.　0.	
テサロニキ	キャヴィア	6 小樽	300.　17.	

資料 19　ヴェネツィア商人アルヴィーゼ・マリピエーロの、イスタンブルにおける売却商品　（1481 年 11 月 29 日-1483 年 8 月 29 日）

書簡日付	数量	商品名	単価（アスプロ）（ピッコあたり）	単価（アスプロ）（反あたり）	備考
1481.11.29		カージー毛織物（*le charixe*）	55		
1481.11.29		バスタルド毛織物（*li bastardi*）		1,000	
1481.11.29		ブレシア製の毛織物（*bresani*）		1,000	
1481.11.29		モンティヴィリエ製の毛織物（*el pano mostoualier*）	55		
1481.11.29		絹[生糸]（*i sed[i]*）		125, 130, 140	
1481.12.14		ヴェルヴィック製の毛織物（*i veruii*）		1450(1150?)	
1481.12.14		ブレシア製の毛織物（*bresani*）		1400	大変需要がある。宮廷で売却。入手単価は 1200 アスプロ。
1481.12.18		ヴェルヴィック製の毛織物(*i verui*)		1,200	値下がり。
1481.12.18		ベルガモ製の毛織物（*i bergamaschi*）	8.5		1200 アスプロ。
1481.12.18		ブレシア製の毛織物（*i bresani*）		1,150 – 1,200	
1481.12.18		**絹織物"リヨンの羽"(*i sedi pello dellion*)**	**65**		
1481.12.18		**ダマスコ絹織物（*el damaschin*）**			
1481.12.18		オリーブ油（*ogli*）	19*		*lena* あたり。
1481.12.10	9 反	カージー毛織物（*le charixe*）		[約 280]	6 ﾄﾞｩｶｰﾄ以上。
1481.12.10	14 反	呉絽[ラクダ・山羊]毛織物・小（*zanbellott pizolle*）			大小合わせて計 200 アスプロ[?]。
1481.12.10	3 反	呉絽[ラクダ・山羊]毛織物・大（*zanbellott grande*）			[同上]
1481.12.10		ベルガモ製の毛織物（*pani bergamaschi*）	7		
1481.12.10	13?	フォンダコのモヘア織物（*pani moiaroni de fonteggo*）			大量に取引（*auea fatto bazaro*）。
1481.12.10		モンティヴィリエ製の毛織物（ *pano mostouallier*）	55		
1481.12.10	6 反	ヴィチェンツァ製の毛織物（ *pani vexentini*）		約 1000	
1481.12.10	13.5	濃紫上質の毛織物（ *paonazo fino*）	100		残りを 110 アスプロで売却希望。
1481.12.10	13 反	フォンダコの毛織物（ *pani de fontego*）		140	
1481.12.10	**12 反**	**緑色ダマスコ絹織物（*damschini verdi*）**	**60**		**ガリポリで売却。**
1481.12.10	**4 点**	**紫色ダマスコ絹織物（*[damaschino] paonazo*）**	**80**		**ガリポリで売却。**
1482.5.24	697 *lena*	オリーブ油（*ogli*）			計 13266 アスプロ。
1482.5.13		ヴェルヴィック製の毛織物（*v[er]ui*）		1,130	
1482.5.13		ベルガモ製厚地の毛織物（*berga grosso*）	7		
1482.5.13		ブレシア製の毛織物（*i bresani*）		1,200	
1482.5.13		上質の毛織物（*i [pani] fini*）	8.5		
1482.10.4	48 枚	ヴェルヴィック製良質半長毛織物（*verui… di bona*）		[約 940] 470	[半分の長さで]10 ドゥカート。
1482.10.4	**13.5 ピッコ**	**金蘭水色の毛織物（*pano doro biauo*）**	**220**		
1482.11.3	4 反	西方の毛織物（*pani di ponentte+* ）	50		162 ピッコ。
1482.11.3	**1 反**	**金蘭[絹]織物（*[pani] chanpi doro*）**	**220**		**13 ﾋﾟｯｺのみ売却。**
1482.11.3	1 反	水色の毛織物（*[pano] biauo*）	58		
1482.10.28	**13 ﾋﾟｯｺ**	**金蘭水色の[絹]織物（*li chanpi doro biauo*）**	**220**		**[1482.11.3 と重複？]。**
1483.1.8	2 反	赤の毛織物 （*[pani] rosse*）	65		アドリアノープルで売却。
1483.1.8	1 反	緑の毛織物（*[pano] verde*）	55		

1483.2.4		*le panine*			全て良い値で取引終了。
1483.2.4		**絹織物"リヨンの羽"(*pello dellion*)**	**65**		
1483.2.4		**ダマスコ絹織物（*pani de seda… dell damaschin*)**	**67**		**[以前の取り引きの]残り**
1483.4.20	9 反のうち	西方の 100 の上質の毛織物 (*pani fini (pani di ponentt+ di Cento)*	50,58,47		赤？何反かはアドリアノープルに残す。
1483.4.5	10 反	カージー毛織物（*charixe*)		240, 260, 225	
1483.4.5	3 反	バスタルド毛織物（*li bastardi*)		1,080	
1483.4.5	4 反	バスタルド毛織物（*li bastardi*)		1,050	2ヶ月の期限付き。
1483.4.5	8 反	ベルガモ製の毛織物（*pani bergamaschi*)	7		233 ﾋﾟｯｺ。20 反のうち。
1483.4.5	11 反	80 の毛織物（*[pani] de 80*)			
1483.4.5	2 反	赤の毛織物（*[pani] rossi*)	65		
1483.4.5	1 反	赤の毛織物（*[pano] rossa*)	47, 53		
1483.4.5	3 反	色物の毛織物（*[pani] a cholloradi*)	47, 53		
1483.4.5	3 反	毛織物（*pani*)			風袋込みの価格。
1483.4.5	1 反	毛織物（*pani*)			風袋無しの価格。
1483.4.5	2 反	毛織物（*pani*)	50, 55		
1483.6.18	1 反	大きい耳付き緑と水色 100,の毛織物 （*pano di 100 verdi e biauo chon le ziamose large*)			*starauai* 絹[生糸]と交換。
1483.6.18	1 反	偽の[?]耳付き幅狭の赤 100 の毛織物 (*pano di 100 rossa stretta chon le ziamosse postize*)	50		*starauai* 絹[生糸]と交換。
1483.6.18		麻（ *lini*)			蜜蝋と物々交換。
1483.6.18(7.5)	正味 134 ﾋﾟｯｺ	グラーナ染め 80 の濃紫の毛織物 （*pani di 100 paonazi di 80 de grana [da venexia]*)	100		3(2？)反。 *starauai* 絹[生糸]と交換。
1483.6.18(7.5)	3 反	80 風の耳付きの濃紫の 100 の毛織物 （*pani di 100 paonazi chon le zimosse a modo di 80*)	100(50?)		310.5 ﾋﾟｯｺ[?]。 *starauai*[生糸]絹と交換。
1483.7.5	66 ﾎﾞｯﾃ	ワイン（*vini*)	800**		**100*mistatt* あたり。4 ﾎﾞｯﾃ売却。
1483.8.9	2 ﾋﾟｯｺ	金のマント[?] (*mantt+ doro*)	300		
1483.8.9		*sonttone*		130	絹[生糸]と交換。
1483.9.13		ワイン（*vini*)	800**		**100 *mistatt* あたり。8 ﾎﾞｯﾃ残る。
1483.8.29	4 反	バスタルドの毛織物（*[pani] bastardi*)			アドリアノープルで羊皮、綿と交換.
1483.8.29		*sontone*		120	アドリアノープルで羊皮、綿と交換.

資料 20　イスタンブルへ輸出（1592-1609 年）

史料番号／年		／船舶	／船名	／商品
375	1599	na	BAROZZA	織物　150 ヴェルヴェット ダマスク織り［ヴェルヴェットとあわせて］1 小箱 宝石箱 1　6000 ドゥカート相当 毛織物 ヴェネツィア製織物　4
387	1600	ga	GOTTARDO	記載なし
399	1600	na	SANGIUSEPPE ET SAN BONAVENTURA	毛織物　2 点 砂糖　4 箱 ガラス器　3 大箱と 1 箱 陶器　4 箱 鉛白　100 樽 皮革　18 袋 様々な商品［が入った］8 樽とクルミ材の箱 1 60 のすみれ色染め織物　6 パランゴンの緋色のダマスク織り　56 ブラッチョ
475	1601	na	MARTINELLA	サテン 1252 ブラッチョ 銀糸を織り込んだ織物 410 ブラッチョ 1 barile de grisiole da orese 様々な商品 18 包 鉛白　20 樽 毛織物 水銀（1400 ドゥカート相当） 毛織物 ヴェネツィア製毛織物 14 商品 1 箱 鉛白 150 樽 数珠玉 paternostrami　1 樽 船舶、1500 ドゥカート相当 ヴェネツィア製毛織物 4 梱
503	1601	na	CIGALA	上質砂糖 2 箱（985 リブラ） 毛織物　4 梱
648	1603	na	REATA ET GUIDOTTA	鉛白　20 樽 ナイフ　1 樽 箱と crovati 帽子ばらで 1 樽（250 個）
711	1604	na	SILVESTRA	様々な商品 8 樽と箱 タビー織 1718 ブラッチョ ヴェルヴェット　280 ブラッチョ tellette　230 ブラッチョ 様々商品 16 包 紙 5 連 ヴェルヴェット　87 ブラッチョ サテン ダマスク織[サテンとあわせて]885 ブラッチョ 縁なし帽子 布 600 luzi 水銀　164 リブラ 絹 タビー織　488 ブラッチョ 毛織物 4 絹織物 236 ブラッチョ

				絹織物
				毛織物
716	1604	na	AQUILA	毛織物 絹織物
868	1607	na	ZENA	毛織物 2、 300 ドゥカート相当 毛織物 9、 1260 ドゥカート相当 毛織物 6 ヴェネツィア製毛織物 25 ヴェネツィア製毛織物 32　各 150 ドゥカート 織物 11 毛織物 9 毛織物 2、 260 ドゥカート相当 織物 3 毛織物 2 毛織物 4 毛織物 2 サテン 14 ブラッチョ 70 の nefti の織物 4 ブラッチョ 60 のヴェネツィア製織物 ヴェネツィア製織物 2 290 livres de verzin 70 の織物 9 ブラッチョ 紙 6 balloni と 3 箱 毛織物 5 terra rossa と紅色染料 cramoisi [両方で]2500 ドゥカート相当 様々800 ドゥカート相当 織物 6 毛織物 5 毛織物 10 塩化アンモニウム therebentine(テレビンの木?油？） 普通のさび止め laque de Verzin（スオウの漆？） verzin intero colla caravella 陶器 織物 7、1000 ドゥカート相当 織物 4、 600 ドゥカート相当 ガラス器 ナイフ[ガラス器とナイフ]その他、300 ドゥカート相当 毛織物 18 ヴェルヴェット　1 cavezzo 毛織物 ヴェネツィア製織物 4 ヴェルヴェット　193 ブラッチョ ダマスク織 77 と 1/2 ブラッチョ 織物 2、250 ドゥカート相当 ヴェネツィア製織物 8
1004	1609	na	MULA ET FOSCARINA	普通の紙　20 包
1006	1609	na	MARTINELLA	ヴェネツィア製毛織物　10
1009	1609	na	PASQUALIGA	様々な商品 4 botterelle ナイフ ガラス器 8 包 ヴェルヴェット　246 ブラッチョ タビー織 avec marizo 790 ブラッチョ タビー織 3487 ブラッチョ 絹織物 1000 ドゥカート相当 1400 ドゥカート相当

A.Tenenti (1959), *Naufrages,*より筆者作成

資料 21　ラグーザ（ドゥブロヴニク）へ輸出（1592-1609 年）

史料番号／年		／船舶	／船名	／商品
4	1592	ga		サテン　36 点（＝3613 と 3/4 ブラッチョ）
155	1595	fregata		毛織物 絹織物　[毛織物とあわせて]　5 梱、1300 ドゥカート相当
198	1596	fregata		現金　500 ハンガリー金貨
210	1596	fregata		ヴェネツィア製サテン　3 点 zanfroti　400 ヴェネツィア製 alti の織物　4、500 ドゥカート相当
214	1596	ga		70 の織物　2 絹と金の織物　2 箱 ダマスク織　540 ブラッチョ 銀ヴィロード　260 ブラッチョ 織物　1 梱 織物　1 織物　14、1 点につき 130 ドゥカート 織物　16、1 点につき 130 ドゥカート 織物　12 ハンガリー金貨　172
214	1596	ga		フェルディナンド・ターレル銀貨　201 毛織物　4 ダマスク織　1 大包
236	1597	fregata		織物　2 梱 60 の織物　2、230 ドゥカート相当
261	1597	fregata		上質 lagiverdi カージー　6 点（1/2 点につき 24 ドゥカート）
262	1597	fregata		記載なし
324	1598	galion		記載なし
326	1598	na	SPIRITO SANTO ET SANTO ANDREA	記載なし
347	1599	fregata		ツェッキーノ金貨　50 すみれ色のヴィロード　25 ブラッチョ carnado ヴィロード　12 ブラッチョ 緑のヴィロード　38 ブラッチョ ブロケード(brocatelle)　12 と 1/2 ブラッチョ タビー織　12 と 1/2 ブラッチョ 染めた絹の[壁掛け用の]粗織の布 canevas 毛織物　2 梱 カージー　5 点 濃い色の 70 の織物　4 ブラッチョと 1/2 ダマスク織　3 ブラッチョ 縁なし帽　3 船の舷灯または角灯(fanal)　1 絹 5 リブラ サテン　163 ブラッチョ 銀糸を織り込んだ織物　120 ブラッチョ スオウ（verzino）　4189 リブラ 金銀糸を織り込んだ織物　86 ブラッチョ ヴェネツィアのダマスク織　140 と 1/4 ブラッチョ 緑の織物　2 と 2/1 ブラッチョ カージー　28 点 緑のカージー　24 点

			織物
356	1599	fregata	記載なし
411	1600	ga	ダマスク織　1111 ブラッチョ ヴェネツィア製 alti のサテン　2 点 ヴェネツィア製 alti の織物　8 ナイフ　1000 丁 segadori　380 ダース 深紅の縁なし帽　100
441	1600	ga	記載なし
464	1601	fregata	書籍 布地 すみれ色のサテン　14 と 1/4 ブラッチョ タビー織　15 と 1/4 ブラッチョ 青みがかった白テンの毛皮　4 と 1/2 ブラッチョ カモシカの皮　1 羽ペン　200 grograno della Signoria　12 ブラッチョ ハンガリー金貨　2 銅製手桶　2 銅製つる付き大鍋　1 ほうき　2 ふいご　2 組 renso　7 ブラッチョ 毛の靴　10 足 毛のズボン下　2 組 白 rovesia サーイア毛織物 羽　18 coprena　2 と 1/2 ブラッチョ orieletto　1
469	1601	fregata	記載なし
576	1602	ba	すみれ色の織物　1 点 石鹸　1 箱(=300 リブラ)
622	1603	na	絹織物　2 小箱
764	1605	ba	織物 カージー 織物 毛織物　6、720 ドゥカート相当
883	1607	fregata	織物　4、640 ドゥカート相当 ダマスク織り サテン　[ダマスク織りとあわせて]　1020 ブラッチョ 織物　9、　900 ドゥカート相当
951	1608	fregata	織物　4

A.Tenenti (1959), *Naufrages.*より筆者作成

資料 22　ヴロラ（ヴァロナ）・レジャ（アレッシオ）・ドゥラス（ドゥラッツォ）へ輸出（1592-1609 年）

史料番号／年		／船舶	／船名	／商品
211	1596	ga		ガラス器　4 箱　125 ドゥカート相当
445	1600	ma	BAROZZA	記載なし
608	1603	ma	BAROZZA	毛織物　24 点 カージー　40 点 ヴェルヴェット　38 ブラッチョ 金ラメ　260 カージー　11 点（1 梱） 絹織物　235 ブラッチョ 織物　42 織物 砂糖　1 箱 クルミ材の板　1 セッケン　4 箱 terra bianca　2 箱 明礬 200 リブラ ガラス器の cassoni　2 秤　1 織物　26 と 1/2 点 カージー　11 点 ダマスク織とサテン　315 ブラッチョ ケルメス染めの…　10 金糸を織り込んだ織物　25 ブラッチョ 60 の深紅の ecarlate 織物 9 と 1/2 ブラッチョ 60 のすみれ色の織物　3 と 1/2 ブラッチョ 60 の濃い色の織物　3 と 1/2 ブラッチョ 縫い針 8 gome 織物　17 梱 [織物用の]金糸 7 オンチャ 60 のすみれ色の織物　1（6 ブラッチョ） 砒素 100 リブラ 1 drap 1/2 水銀　1 箱(boite) sulima 1 箱(boite) 緋色染料　13 リブラ 彩色箱　50 セッケン　1 箱 busso の織物　13 ブラッチョ 紙　115 連 織物　7 金糸を織り込んだ織物　150 ブラッチョ 濃い色と緑の 70 の織物 13 ブラッチョ 織物　30 点 黒ヴェルヴェットの ruba 付きカージー6 点 石鹸　4 箱 紙　178 連 砒素　100 リブラ 毛織物 タビー織 金ラメ[の織物] 様々な商品、720 リブラ・ピッコラ相当 毛織物
657	1603	sa		毛織物 サテン ダマスク織 毛織物

			毛織物 絹織物 カージー 毛織物 カージー ヴェネツィア製 alti の織物　4
657	1603	sa	石鹸　15 箱（＝6000 リブラ） 加工済皮革　1 樽（=50 リブラ）
807	1606	ga	キャヴィア　　1 樽（=400 リブラ） 織物 織物 織物 織物 カージー ダマスク織り 米　5 袋
882	1607	sa	種々　100 ドゥカート相当
394*	1600	sc	カージー
880*	1607	ga	織物　6 カージー　6 ［織物とあわせて］ 約 2000 ドゥカート相当
101**	1594	Schirazzo	記載なし
122**	1594	ga	ヴェネツィア製織物　28 毛織物　130 ドゥカート相当
419**	1600	ga	織物 13 梱

無印　ヴロラ（ヴァロナ）宛て
*　レジャ（アレッシオ）宛て
**　ドゥラス（ドゥラッツォ）宛て

A.Tenenti (1959), *Naufrages,*より筆者作成

資料 23　イズミルへ輸出（1592-1609 年）

史料番号／年		／船舶	／船名	／商品
40	1593	ga	CURZOLAN	記載なし
330	1599	ga	CIGA	記載なし
385	1599	ga	MAZZOCO ET CIGALA	織物
416	1600	ma	MEMA ET SADORINA	60 の織物　3 点 カージー　15 点 140 ドゥカート
556	1602	berton	GUARDIANO	織物　560 ドゥカート相当 船舶、7000 ドゥカート相当 絹織物　740 ブラッチョ 西方の高級(alti di ponente)織物　2 点 60 の織物　2 点 絹織物　237 ブラッチョ ピアストル貨　500 鏡　2 小箱 帆布　1 梱 織物　4 ナイフ 2 樽 帆布　180 ブラッチョ
817	1606	na	BRAGADINA	カージー　24 点 60 の織物　1 梱
863	1607	berton	TAPINO	綿　37 キンタル 綿　22 袋　1 袋につき 80 ドゥカート
866	1607	na	PEGOLOTTA	現金　600 レアル 縁なし帽子　1 箱 帆布　2 梱 織物　6 点 毛織物　9（60 が 8、70 が 1） 帆布　1 梱 織物 毛織物　4、560 ドゥカート相当 毛織物　8、1120 ドゥカート相当 帆布　2 織物　4、520 ドゥカート相当 現金　1000 レアル
867	1607	na	ANDRIZZA	鏡 ブドウ酒 現金　銀貨 織物　5、700 ドゥカート相当 帆布　9 織物　48、1 点につき 148 ドゥカート 織物 10、 1300 ドゥカート相当 ヴェネツィア製織物　20 カージーと織物、714 ドゥカート相当 現金　8 レアル銀貨 2000 枚 織物 10、 1400 ドゥカート相当
908	1608	na	FALCON	毛織物　20 紙　1 ballot 船舶　7000 ドゥカート相当

948	1608	berton	NANTI	織物　3、　390 ドゥカート相当 織物　10、1250 ドゥカート相当
1019	1609	berton	NANTI	織物　10 60 の織物　3 縁なし帽子　40 ダース 織物　6、 840 ドゥカート相当 ヴェネツィア製毛織物　8 帆布　240 ブラッチョ 織物 ヴェネツィア製織物　4 絹織物　574 ブラッチョ
183*	1595	na	BRAGADINA	lagiverdi のカージー　24 点 ヴェネツィア製 60 の織物　3

* Foglie(イズミル近郊）とイズミル宛て

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

資料 24　シリアへ輸出（1592-1609 年）

史料番号／年		／船舶	／船名	／商品
16	1592	na	GRATAROLA	緋色ダマスク織　1 小箱
217	1596	na		記載なし
254	1597	na	SILVESTRA	60 の織物　18 白帆布　207 ブラッチョ 金銀糸を織り込んだ織物　161 と 1/2 ブラッチョ サテン　162 ブラッチョ 毛織物　6 帆布　84 ブラッチョ 織物　12 点 帆布　300 ブラッチョ 現金　300 ongari （ハンガリー金貨） サテン 2 点（408 ドゥカート相当）
529	1601	na	MORESINA	帆布　2 梱 ガラス　4 箱 板　200 60 の織物 上質砂糖　1 箱 ナイフ　1 樽 ダマスク織　51 ブラッチョ 板　200
570	1602	na	MORESINA BONA FORTUNA	記載なし
802	1605	na	GIUSTINIANA ET VIDALA	絹　2 包 latado ダマスク織り　75 ブラッチョ
1017	1609	na	REATTA	織物　21 60 の織物　45 織物　7 絹[織物]　400 ブラッチョ 紅色染料 cramoisi 1 collo (livre につき 6 ドゥカート） 衣類 下着類 毛織物 16 加工済み琥珀[竜涎香？ambre]130 リブラ ヴェネツィア製毛織物　6 帆布　260 ブラッチョ
928	1608	na	SALVETTA	記載なし
409	1600	na	LANDI	記載なし

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

資料 25　アレクサンドリアへ輸出（1592-1609 年）

史料番号/	年/	船舶/	船名	商品
110	1594	galion	SANTA MARIA DEL ROSARIO	スミレ色織物　2
124	1594	saitia	SANTA MARIA DI CONSOLATIONE	深紅の織物　7 スミレ色の織物　5 緑の織物　1 深紅の織物　1 sguardo の織物　1
206	1596	ga	TEGGIACHIN	銀　1000 エキュ
639	1603	berton	MARUBIN	60 の深紅の織物 1 サテンとダマスク織 108 ブラッチョ 織物と布地 1030 ドゥカート相当 数珠玉 paternostrami 27 箱 織物 ガラス器[織物とあわせて]　350 ドゥカート相当
788	1605	na	FERASTANA	深紅の織物 79 点、1 点につき 140 ドゥカート サテン ダマスク織 [サテンとあわせて]1 箱 (=771 ブラッチョ) 織物 52 点,1 点につき 140 ドゥカート 毛織物 3 毛織物 絹織物　2700 ドゥカート相当 鉛丹（さび止め）　4 樽 酒石 4 樽 d'or piniente　2 箱 緑青と soie da peneli 1 箱 鉛白 50 bariletti カージー16 点 琥珀原石(ambre brut) 786 リブラ 100 の織物 6 点 ヴィチェンツァ製織物 6 点 深紅の織物 27 点 毛織物 32 点 現金 1000 ドゥカート 織物 織物 8 点　1250 ドゥカート相当 毛織物 12、1800 ドゥカート相当 織物 14、1960 ドゥカート相当 織物 深紅の織物 25 点 織物 船舶、16000 ドゥカート相当 織物 深紅と festechini のヴェネツィア製織物 24 砒素 4 樽 織物 毛織物 60 の織物 16 点 織物 48 点、1 点につき 150 ドゥカート
885	1607	na	PEGOLOTTA	記載なし
902	1608	na	MORZATISCE	記載なし

1001	1609	berton	GIUSTINIAN	記載なし

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

資料 26　ヴェネツィア領へ輸出（1592-1609 年）

史料番号／年		／船舶	／船名	／行先	／商品
662	1603	ma		ケルソ（ツレス）	船舶　1000 ドゥカート相当
304	1598	fregata		ザラ	1 muda de razzi ヴェルヴェット［張りの］肘掛の無いイス　12
435	1600	ma		Paga（ザラ近郊）	記載なし
64	1593	na	SANTA MARIA DELLA NEVE	［クルゾーラ（コルチェラ）］	記載なし
203	1596	ma		スパラト	記載なし
82	1594	ba		ナレンタ	記載なし
793	1605	ba		ナレンタ	船舶　600 ドゥカート相当
938	1608	ba		ナレンタと復路	記載なし
957	1608	grippo		ナレンタと復路	記載なし
114	1594	ma	GENOA	コルフ	ナイフ　2 樽 縁なし帽子と箱(boites)　1 樽
125	1594	na	SANTA MARIA ET SANTO FRANCESCO DE PAULA	コルフ	記載なし
178	1595	na ou sa	MARTINENGA	コルフ	ヴェネツィアの織物　4 現金 ハンガリー金貨 500 alti 60 の織物　10 点 織物　4 点 ヴェネツィアの alti の織物　2 点 金銀のヴェルヴェット　95 ブラッチョ （1 ブラッチョにつき 5 ドゥカート） ヴェネツィアの毛織物　2 ヴェネツィアの alto 毛織物　1 ヴェネツィアの毛織物　12 毛織物　1 織物の scavezzi　31 と 1/2 ブラッチョ サテン　161 ブラッチョ alto 70 の織物　1 a teclise の織物　1/2 点 ガラス器　1 箱 緋色のヴェルヴェット　5 ブラッチョ 絹と金の縁飾り　20 ブラッチョ 様々な商品　2 箱(boites) ヴェネツィアの alto 織物　2 絹織物　1 箱（125 ブラッチョ） ヴェネツィアのグラーナ[染め]のすみれ色の織物 1 lagiverdi のカージー　2 点 massarie de pietra de Treviso　24 箱 絹の錦 brocatelle　26 ブラッチョ 帽子　24 ダース 錫の subioti,　4 migliara
333	1599	ma	GOTTARDA	コルフ	alti の 60 の織物　2 梱 木材
563	1602	ma	MAGONA	コルフ	商品　700 ドゥカート相当

					毛織物 毛織物
682	1604	ga	BACILIER ou BENCILEO	コルフ	現金　800 ドゥカート カージー キビ 穀物
878	1607	ga	BERTRAME	コルフ	船舶　3000 ドゥカート相当
920	1608	berton	RECHINO	コルフ	織物 織物 カージー ヴェネツィア製毛織物 カージー
922	1608	ma	CASTANTINA	コルフ	織物　4 織物　4 梱 de retagli 鉄　2 樽 織物 カージー 織物 紙　2 梱 織物 verzini 織物 カージー　[織物とあわせて]　800 ドゥカート相当 ビスケット
91	1594	ga	CARUZA	ケファロニア	干しブドウ
117	1594	galion		ケファロニア	カージー織　1 梱(5 点) 帆布　1 梱（1006 ブラッチョ） サテン　1 箱（32 ブラッチョ） calecon(ズボン下？）の織物　1 500 venetiani 金貨 ツェッキーノ金貨 帆布，[金貨とあわせて]　150 ドゥカート相当 帆布　2 梱（＝1247 ブラッチョ） ツェッキーノ金貨　262
548	1602	ma	ROSSETTA	ケファロニア	加工済みロウ　　ト ランプ 織物　5 点 米　2 袋 石鹸　4 箱 様々な商品　1 箱 船舶　5000 ドゥカート相当 キャヴィア
691	1604	ga	SANTA MARIA DE SCARPELLA	ケファロニア	記載なし
753	1605	ma	BAGLIONA	ケファロニア	formentate ライ麦　2500 スタラ
31	1592	ma	CARIDDI	ザンテ	記載なし
268	1597	ma	PEGOLOTTA	ザンテ	米 ブドウ酒　［米とあわせて］　40 ドゥカート
310	1598	sa	FRANCESCHINA	ザンテ	記載なし
318	1598	ma	COSTA	ザンテ	記載なし

343	1599	ma		ザンテ	60 の織物　4 サテン　430 ブラッチョ 現金　ハンガリー貨　200 (=100 ドゥカート)
392	1600	na	CORDES	ザンテ	絹織物 273 ブラッチョ（ザンテ宛て）
505	1601	na		ザンテ	ヴェネツィア製毛織物　7 ダマスク織り サテン［ダマスク織りとあわせて］400 ブラッチョ
524	1601	ma		ザンテ	板　828
600	1602	ma	MOLINA	ザンテ	穀物
688	1604	ma		ザンテ	カルタ一式 帽子　5 ダース 黒呉絽　6 da muro 織物　23 ブラッチョ 上質呉絽　28 damasquette 4 ガラス器　1 大箱
736	1604	ma	GROSSA	ザンテ	現金　ハンガリー金貨　258
783	1605	berton	MORESINI	ザンテ	現金　600 ドゥカート
787	1605	ma	PEGOLOTTA	ザンテ	1 botta et 1 caratello　de seches dessechees （乾燥させたタバコ？）2 箱 lariz の板　100（全部で 100 ドゥカート相当） ハンガリー貨　120 ハンガリー金貨　200 現金　ハンガリー貨　107 現金　150 レアル
798	1605	sa	BONAVENTURA	ザンテ	ビスケット
833	1606	ma	BOCHINA	ザンテ	現金　500 ドゥカート
924	1608	ga	BONSEGNO	ザンテ	3200 ドゥカート相当 モミの板　200 現金　400 ドゥカート ツェッキーノ金貨　200 200 toleri 60 の織物　6 薬品　80 ドゥカート相当 香辛料 織物 絹製品　等々
901	1608	na	SAN GIORGIO	ザンテ、Chiarenza および復路	記載なし
1	1592	ga	RIZZARDI ET VIVALDI	カンディア	船舶　10000 ドゥカート相当 様々商品　2 箱 鉛小箱 1 manarini 1 樽（70 点） はがね 1 箱 シャベル[が入った]　1 樽 クルミ材の駕籠　1 様々商品　1 箱 石鹸 37 箱 pannine　2 箱 帆布 1 梱 石鹸 鉄 in spiaza の薄板 32 枚 窓の蝶番の受けがね 1 ligozzo

					マスト 2 本 モミ 85 rulli モミ 12 quarti モミの板 300 枚 lariz の板　200 maggieri　41 lariz　102 rulli lariz の大型鍵 60 lariz の小型鍵 モミの pianette 12 ばらの固形松脂(ピッチ) 1000 リーヴル 炭 25 コルバ(corbe) アンフォラ 50 cercles クルミ材 da pozo の椅子 6 クルミ材の腰掛 12 クルミ材の駕籠(litiers)　2 錨　2（1800 リブラ） 1 fasso di ferro verzida (=377 リブラ) 釘 4 樽 鉛　1 小箱（＝500 リブラ） pironi per nave14 小箱 14（＝14migliara） はがね 1 balletta 1 bota et una mezana de tagiere ガラス　大ケース 1 麻　1 ferrandine　1 包 織物　6 梱 様々な商品　12 箱 石鹸　40 箱（＝26migliara） 帆布　9 梱 ひも　1 包 馬　1 頭 絹織物 3 小箱 色を塗ったブナ材の箱　50 クルミ材の大箱　1 鉛の小箱　1 ガラス製品　1 大箱 ナイフ 1 樽 ミツロウ　1 大箱 薬品　3 箱 クルミ材の箱　4 鉛　1 箱 シャベル　1 梱 斧 1 樽 鐘 4 ベルガモ製濃い緋色の織物　1 小箱 albedo grezza　（生の果物の皮？）1 小箱 （様々な商品と共に） 大きな斧 46[が入った]　1 樽 様々な香辛料　2 箱 砂糖　1 小箱 液体状のニス 1 樽（＝150 リブラ） 500 cercles de XII (in 10 mazzi)
14	1592	na	MOCENIGA	カンディア	香辛料　1 小箱
84	1594	na	GIRARDA ET CORRERA	カンディア	船舶 200 ドゥカート 120　ツェッキーノ
94	1594	ma	RIZARDA ET COLOMBA	カンディア	石鹸　17 箱、10727 リブラ相当 イワシとアンチョビ　14 樽と moiazzi 水銀　7 箱

					200 ツェッキーノ 粗布の頭巾付き長衣　172 （うち 88 は回収された）
234	1597	ma	CORDES	カンディア	錫　6 箱 メガネ　2 樽 カミソリ　2 箱
365	1599	ma		カンディア	記載なし
382	1599	na	TRIVISANA	カンディア	船舶　4000 ドゥカート相当 鉄 101 lastre 板と scorzoni　300 板　100 梁(putres)　100 ブロンズ製の鐘　1 呉絽 2 と一緒の箱 2 ズボン下用の織物　4 ブラッチョ 白テンの裏の付いた帽子　6 石鹸　10 箱 クルミ材のベッド　3 tamisailles　553 ダース 棕櫚の箒 8 ボッテ モミの板　1050
501	1601	na	RHENIERA	カンディア	記載なし
515	1601	ma	SOLDA	カンディア	記載なし
645	1603	ma	COSTANTINA	カンディア	106 ドゥカート相当
666	1603	berton	ZOGIA	カンディア	記載なし
732	1604	na	JESUS	カンディア	海賊は塩漬けイワシ 1668 樽のうち 28 を奪った
737	1604	na	ZENA ET VLUSTIZZA	カンディア	穀物　4000 stara
773	1605	ma	VIDALA	カンディア	穀物
830	1606	na ou ga	GOTTARDA(na) ou Gottardin (ga)	カンディア	火薬(poudre)　1 樽 皮革　1 箱 鉄床　1 箱 縁なし帽子　1 箱 固形タールピッチ　4550 リブラ lariz の板　100 lariz 100 rulli spiazza 鉄　215lame (=14954 リブラ) 鉄の駕籠 1 様々　1000 ドゥカート相当
927	1608	galeon	VENERIO	カンディア	記載なし
997	1609	sa		カンディア	皮革（アレクサンドリアより）
1008	1609	berton	VENIER	カンディア	加工済み銀　300 オンチャ ガラス製品　4 cassoni 干し草(seches)　20 migliara 鋼鉄　1200 リブラ
836	1606	ga	PERASTAN	カニア（クレタ島）	未精錬の鉄　77 個 火薬　1 ボッテ スキアヴォーニ縁あり帽子　1 ボッテ 刺繍の箱　2 縁あり帽子

				リネン布(toilerie) 斧　1 樽 樽のたが　2 migliara クルミ材の駕籠　2 クルミ材のテーブル　1 da pozo のクルミ材の腰かけ　2 洗濯用スツール　2 Candie vides 10 ボッテ 油　1 ボッテ 商品でいっぱいのタンス　2 bassi の織物　7 点 ダマスク織り　100 ブラッチョ
26	1592	ma	ペスキエーラ(ガルダ湖畔)	船舶　1300 ドゥカート相当
406	1600	ba	ペスキエーラ(ガルダ湖畔)	胡椒　175 リブラ 上質砂糖　165 リブラ da tolla ロウ　214 リブラ 丁子の fusti　12 リブラ 上質丁子　4 リブラ 黒マスカット　4 リブラ 粉砂糖　30 リブラ 石鹸　1 箱 アンチョビ　10 樽 ガラス器　350 リブラ 商品　260 リブラ
690	1604	ba	ペスキエーラ(ガルダ湖畔)	記載なし

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

資料 27　イタリア半島（マルケ地方、アブルッツォ地方、プーリア地方およびシチリア島）へ輸出（1592-1609 年）

マルケ地方へ

史料番号／年		／船舶	／船名	／行先	／商品
350	1599	na	BABALLA	アンコーナ	牛皮革 400
626	1603	na	LA FORTUNA	アンコーナと チヴィタヴェッキア	記載なし
627	1603	na	SPERANZA	アンコーナと チヴィタヴェッキア	記載なし
628	1603	na	SPERANZE 又は SANTA MARIA DEL ROSARIO	アンコーナと チヴィタヴェッキア	記載なし
693	1604	na	SANTA MARIA DE GRATIA SANT'ISEPPO BONAVENTURA	アンコーナとナポリ	記載なし
694	1604	na	SAN GIOVANNI BATTISTA	アンコーナとナポリ	記載なし
744	1605	na	SANTA MARIA DI CARMINI ET HELISABET FELICE	アンコーナとナポリ	記載なし
965	1608	ba		アンコーナと復路	記載なし
676	1604	na	SAN GIACOMO	マルケとナポリ	記載なし
686	1604	sa ou ga	LEOPARDO BONVENTURA	マルケとナポリ	記載なし
751	1605	ba		ヴァスト	鉄
759	1605	ba		ヴァスト	船舶　1500 ドゥカート相当
718	1604	na	SAN GIORGIO	ラヴェンナとリヴォルノ	記載なし

アブルッツォ地方へ

史料番号／年		／船舶	／船名	／行先	／商品
752	1605	ba		ペスカーラ	鉄
961	1608	ba		ペスカーラ	織物　4 梱、梱につき 300 ドゥカート 船舶　800 ドゥカート相当
590	1602	ba		ランチャーノ	ベルガモ製織物　3 梱
145	1595	ba		フォルトーレ	記載なし
317	1598	ba		フォルトーレ	未加工皮革　44 枚
361	1599	ba		フォルトーレ	皮革　10 梱 皮革　2790 リブラ 未加工皮革　2000 リブラ 鋼鉄　3950 リブラ

					洗浄済み皮革　2000 リブラ 針金　120 mazzetti
367	1599	ba		フォルトーレ	皮革　2000 リブラ 鋼鉄　2000 リブラ
393	1600	ma		フォルトーレ	皮革　4400 リブラ
401	1600	ba		フォルトーレ	furlane の長柄鎌　6 梱
408	1600	ba		フォルトーレ	皮革 6 包
420	1600	ba		フォルトーレ	針金　480mazzetti　（ナポリ宛て）
457	1601	ba		フォルトーレ	長柄鎌　6 梱
483	1601	ba		フォルトーレ	ロウ　2 箱 砂糖　2 箱 呉絽　1 tavola （［ロウ、砂糖とあわせて］630 ドゥカート相当） ラピスラズリ 錫 アロエ［ラピスラズリ、錫とあわせて］460 ドゥカート相当）
610	1603	ba		フォルトーレ	記載なし
611	1603	ba		フォルトーレ	麻布　1 梱（600 ドゥカート相当）
656	1603	ba		フォルトーレ	布 くず鉄 ozze 織物　2 梱、470 ドゥカート相当 織物　2 梱
728	1604	ba		フォルトーレ	コードバン　1340　(10 梱)
735	1604	ba		フォルトーレ	細棒の真鍮　5 箱 針金　3 樽 鉄の ardia　2 箱 コードバン
760	1605	ba		フォルトーレ	revo 262, 140 ドゥカート相当
761	1605	ba		フォルトーレ	記載なし
769	1605	ba		フォルトーレ	羊の粗皮
960	1608	ba		フォルトーレ	白ロウ　1 箱 上質シナモン　1 箱
979	1609	ba		フォルトーレ	記載なし
402	1600	ba		［フォルトーレ］	皮革　6 包

<u>南イタリア・シチリア島・マルタ島へ</u>

史料番号／年		／船舶	／船名	／行先	／商品
467	1601	ba		マンフレドーニア	記載なし
109	1594	ma		バーリ	記載なし

115	1594	ma		バーリ	アーモンド　39 袋
275	1597	ma		バーリ	ribola 5 ボッテ
336	1599	ma		バーリ	船舶、1500 ドゥカート相当
417	1600	ma	ALBANESE	バーリ	板　450 鍵　20 50 の織物　6 様々な板 梁 食品
432	1600	ma	FANZAGA	バーリ	織物
446	1600	ma		バーリ	毛布　44cavezzi 1 caisse de rasse cottonade ロウ　2 箱 織物　5 梱 ベルガモの織物　7 梱 bassi 織物　5 梱 様々な商品　5 箱 かご(basquet)　1 鉄　10 caratelli (=20 migliara 1/2) 四角い鉄　4 ロウ　5 箱 様々な商品　1 樽と 1 梱 板　600 普通の梁　200 板　800
528	1601	ma	TAGGIACHINA	バーリ	胡椒　10 carichi コードバン　1300
552	1602	ma	FACHINELLA	バーリ	様々な商品　11 箱 皮革　1 包 desfatte 110 箱 真鍮　3 sachetti 鉛　6 樽 錫めっきされた金属　3 樽 鉛白　1 包 濃硫酸　2 包 タラ　1 piteretto キャヴィア　1 piteretto
774	1605	ba		バーリ	船舶　800 ドゥカート相当
809	1606	ma		バーリ	獣脂　2 包、350 ドゥカート相当
854	1607	na	AGUSTINA	バーリ	記載なし
140	1595	grippo		モノーポリ	記載なし
199	1596	sa		モノーポリ	木材
337	1599	ma		モノーポリ	記載なし
398	1600	ma	RIGOLA	モノーポリ	記載なし
573	1602	ba		モノーポリ	船舶　600 ドゥカート相当
518	1601	ba		Rodici（プーリア）	コードバン 羊の粗皮［コードバンとあわせて 4 梱］ suriane ベッドカバー　14 basso 織物　1

					胡椒　1 箱 バガッティーノ貨で 66 ドゥカート
53	1593	ba		ブリンディシ	記載なし
345	1599	ma	FIDEL	ブリンディシ	記載なし
138	1595	ma	POMA	レッチェ	記載なし
146	1595	ma	AIROLDA	レッチェ	本　1 箱と 1 梱
245	1597	ma	POMA	レッチェ	布　3 包と 2 樽 綿　1 袋
276	1597	ma		レッチェ	加工済み鉄　19208 リブラ 織物　3 梱 bassi 織物　2 梱
299	1598	ma	ZOGLIA	レッチェ	記載なし
362	1599	ma	OLIVIERA	レッチェ	記載なし
593	1602	ma	RIGOLA	レッチェ	記載なし
851	1607	ba		レッチェ	小麦
942	1608	ma		レッチェ	540 ドゥカート相当
281	1597	ba		オトラント	アーモンド ラード パン　10 キンタル ブドウ酒　25 樽 ヒヨコマメ　10 tornidi ソラマメ　6 tordini チーズ
208	1596	ma		ガリポリ	記載なし
778	1605	ma	NORIS	ガリポリ	船舶　5000 ドゥカート相当 bottami
380	1599	ga	SANTA MARIA ET SANTA TRINITA	ガリポリの後アンコーナ　雌牛と雄牛の皮革　960	
3	1592	sa	SALVARESSA	メッシーナ	ferro spiaggia (=10176 リブラ)、127 樽 farri de fer　60 (20170 リブラ) 濃硫酸　11 樽(=600 リブラ) 釘　7 樽 テレピン　6 樽 皮革のすね当て　22 梱　(=4296 リブラ) 鉛白　5 樽 釘　2 ボッテ 呉絽　1 包 ガラス　3 箱
165	1595	sa		メッシーナ	帆布に包まれた鋼鉄 104fassi 先端にダイアモンド付き鏡 1[入り]箱(boite) 1 鉄　482 樽 軽鉄(fer sotil)　59fassi
209	1596	sa ou ga		メッシーナ	没食子　28 包 書籍 紙 彫刻［又は版画］［書籍、紙とあわせて］3 箱 石鹸　miaro につき 38 ドゥカート 針金 紙

					ガンの羽 鉄　203barres (=12156 リブラ) ムラーノ製ガラス器 書籍 皮革 加工済みの板 陶器 紙 ガンの羽 水銀 鍵 鉛白
260	1597	sa	ROCCATAGLIATA	メッシーナ	記載なし
283	1598	berton	PIGNA	メッシーナ	砂糖 6 caratelli passoli　40 樽 絹　3 梱 5 caratellide menuali 砂糖　14 caratelli
315	1598	sa		メッシーナ	記載なし
557	1602	sa		メッシーナ	現金で 3000 ドゥカート
992	1609	na	LA FORTUNA	メッシーナ、トラーパニ、復路	記載なし
2	1592	ma	BADOERA ET MICHELA	メッシーナ、パレルモ	書籍　2 箱と 2 梱
49	1593	ma	BACHINA ET PANEGHETTA	パレルモ	釘　2 樽 加工済み皮革　100 リブラ ブナの椅子 da pozo　200 斧　200 加工済み鉄製品 糸　6 袋 干しブドウ　40 stara イナゴマメ　190 カンタル 穀物　3000stara
50	1593	ma	GOTTARDA	パレルモ	300 rulli クルミ材の板　112 モミ材の板　250 加工済みロウ 10 箱（メッシーナ宛て） 紙　6 包 ガラス　13 包 様々な書籍と商品　1 箱 針金 皮革 真鍮　[針金、皮革とあわせて]1 箱
50	1593	ma	GOTTARDA	パレルモ	ガラス 2 caisson　と 2 箱 ナイフ　4 樽 ガラス　2 caissons 紙　2 梱 加工済みロウ　1 箱と 2 小箱 laria の板　150 塩漬けウナギ　1caratello inghistere en verre　1 箱 加工済みの鉄　1100 リブラ
123	1594	na		パレルモ	記載なし

166	1595	ga	MANICELLI	パレルモ	薬種　2 箱、2 bariletti、1 梱 書籍　8 大箱 加工済みロウ　2664 リブラ（シチリア副王宛て） ムラーノ製上質ガラス器　4 箱と 1 大箱 書籍　3 箱 紙　2 箱
170	1595	ma		パレルモ	書籍　6 箱 ガラス器　2 casselle 白い紙　4 梱 70 の黒織物　3 点 1 fangotto avec figures in papier 米　13 箱と 6 袋　10200 リブラ相当 釘　1 balletta 金メッキされた鉄の駕籠　1 印刷用インク　4 樽 チーズ　1 個
170	1595	ma		パレルモ	1 小樽 bariletto 11 fassi de fer 長い lariz の梁 100 モミ材の梁　142 普通のモミ材の梁　700 lariz の大きな板　6 lariz の板　337 モミ材の板　633 1/2 ピエの板　462 米　13 箱と 6 袋　(=10200 リブラ)
303	1598	na	LIONA	パレルモ	建築［用］木材 普通の鍵　70 クルミ材の板　50 lariz の板　300 モミ材の板　3237 ブレンタの梁　176 ブレンタの半梁(demi-putres) 50 普通の梁　1400 普通の半梁　900 クルミ材の腰かけ　24
327	1598	na	MORESINA ET COLOMBA	パレルモ	記載なし
512	1601	na		パレルモ	記載なし
514	1601	berton	SANGIOVANNI BATTISTA	パレルモ	鉄の薄板　4 梱 針金　22 caratelli 加工済み皮革　3 梱 商品　1 箱 紙のちりとり？(pelles papier) 2 梱 板　5868 様々な商品　32 包 クルミ材の腰かけ　6
599	1602	na	SAN PAOLO	パレルモとトラーパニ	記載なし
59	1593	na	SANTA MARIA DE LORETTO ET SAN PIETRO	トラーパニ	記載なし
964	1608	na	RE DAVIT	トラーパニとジェノヴァ	記載なし
967	1609	na	LION ROSSO	トラーパニとジェノヴァ	記載なし

968	1609	na	SANSON	トラーパニと復路	記載なし
977	1609	na	NARANZE	トラーパニと復路	記載なし
978	1609	na	GRIFON	トラーパニと復路	記載なし
996	1609	na	SANSON	トラーパニと復路	記載なし
998	1609	na	LA SERENA	トラーパニと復路	記載なし
344	1599	ga	MORESINI	アウグスタ	木材　75 ドゥカート相当
131	1594	ga	MANICELLI ET FIANDRA	シラクーザ	米 ガラス器 木材
914	1608	sa		シラクーザ	クリスタルガラス製品 2 箱 石鹸　3252 リブラ 加工済みロウ　498 リブラ viole 1 箱 金メッキした鉄の駕籠　1
613	1603	ga ou be	COLOMBO	シチリア	光沢呉絽　tavole 象牙の櫛
684	1604	ma	SANTA MARIA DELL'ARSENAL	ナポリ	船舶、2500 ドゥカート相当
741	1605	sa		ナポリ	記載なし
826	1606	na	ROSSIGNOL	ナポリ	記載なし
1002	1609	sa		ナポリ	鏡 錫他[鏡とあわせて]34 包
111	1594	vassello		ナポリ	綿　2 袋
112	1594	sa		ナポリ	テレピン　10 樽 染料(couleurs)　3 箱 verioli　4 箱
758	1605	na	LA ROSA	Cha Brusa とナポリ	記載なし
762	1605	na	SAN FRANCESCO DE SCITA	Cha Brusa とナポリ	記載なし
659	1603	na	SANTISSIMA NONCIATASANFRANCESCO DE PAULA ET SAN PLACITTO	セニガッリアとナポリ	記載なし
540	1602	na	MORESINA	マルタ	記載なし
912	1608	sa	FRANCEA	マルタ	米 160 migliara
295	1598	galion	COLOMBO	マルタ	lariz の梁 50 lariz の板　100 モミ材の板　200 釘　4 樽 石鹸　1 cassela 書籍　1 ligazzo ガラス器 1 籠 corbeille 260 rulli de liriz lariz の鍵　100 lariz の板　300

80	1594	ma		バルレッタ	記載なし

イタリア西北部（ジェノヴァ、チヴィタヴェッキア、リヴォルノ）へ

史料番号／年		／船舶	／船名	／行先	／商品
634	1603	na	CALDERA	ジェノヴァ	8[レアル銀貨]　10000 レアル 絹織物　2 箱 ヴェネツィア製毛織物　18 点
635	1603	orca	SALVATOR	ジェノヴァ	8[レアル銀貨]　5000 レアル
680	1604	na	EMA	ジェノヴァ	現金　4000 レアル 現金　300 レアル 8[レアル銀貨]　2500 ヴェネツィア製 alti の織物　6
827	1606	na	ANGELO GABRIELE	ジェノヴァ	穀物　8 lastre ライ麦　140 lastre
205	1596	na	SANTA CROVE ET SAN NICOLO	チヴィタヴェッキア	記載なし
672	1604	na	SANTISSIMA NONCIATA	チヴィタヴェッキア	記載なし

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

資料 28　シリアからヴェネツィアへの輸入（1592-1609 年）

A.Tenenti (1959), *Naufrages* より筆者作成

史料番号／年		／船舶	／船名	／出発地	／商品
338	1599	ma	TIBONA	アレッポ	記載なし
41	1593	ga	THEBALDO	シリア	絹　5 包 丁子の茎　9 包 白テンの毛皮 (1 点につき 3 と 1/2 ドゥカート) 没食子（*miaro* につき 130 ドゥカート） コードバン スカモニン ピスタチオ 20 包（700 ドゥカート相当） インディゴ 2 箱 メース　1 包 クルミ 1 包 丁子 1 包 ビスケット（保存用固パン） 絹製品 8 包 ルバーブ 1 包 ピスタチオ 15 包 インディゴ 1 箱（400 ドゥカート相当） 絹製品 4 包 丁子の *capelette* 7 梱 ピスタチオ 小麦粉 ビスケット（保存用堅パン） 絹　7 梱 チーズ 絹 絹 2 包 インディゴ　2 箱
90	1594	na	BALBIANA	シリア	キプロスの小鳥 6 *migliara* 油　2 樽 羊毛　1 袋 ビスケット（保存用堅パン）600 リブラ 絹　1 包 インディゴ　1 箱 *fillado*　2 袋 コードバン　1 梱 [没食子]　24 包 ロウ　2 包 *filadi*　12 袋 *galanga*　9 包 インディゴ　2 箱
126	1594	na	NANA ET RUGINA	シリア	記載なし
134	1594	na	RENIERA	シリア	ルバーブ 絹　2 包 シナモン　7 箱 綿　29 袋 *filadi*　4 包 *beledi* 絹　3 包 *satar* 絹　3 包 ルバーブ 2 *buste* シナモン　1 *inchessa* インディゴ　2 箱 絹　2 包 綿　30 袋

					canari 絹　1 梱 *dozzenal* ベッドカバー　13 アーミンの縁取り付きベッドカバー　4 *boutanes*　72 梱
139	1595	na	PEGOLOTTA	シリア	綿　8 袋 絹　3 包 綿　14 袋 絹　7 包 *filladi*　6 包 没食子　4 包 絹　5 包 ルバーブ　1 *busta* *beledina* 絹　1 包と 1 大包 *boutane*　2 梱(=267 個) 没食子　10 包 *filladi*　5 包 没食子　15 包 *filadi*　4 包 絹　1 包 絹　11 包 コードバン　5 梱 羊の粗皮　30 梱 スカモニン　1 梱 ナツメグ　4 包 ルバーブ　1 箱(*boite*) 綿　28 箱 セイロンのシナモン　6 包 *canari satar* 絹　2 包 インディゴ 絹　11 包 絹　3 包(1400 ドゥカート相当) 絹　1 包 綿
160	1595	ga	PATTI	シリア	記載なし
308	1598	na	RAGAZZONA	シリア	記載なし
368	1599	na	BAROZZA	シリア	記載なし
567	1602	na	GIUSTINIANA ET BENVENUTA	シリア	絹　3 包 インディゴ　10 箱 絹　1 包 インディゴ　1 箱 インディゴ　1 *zurli* 薬種　3 包
609	1603	ma	CARIDDI	シリア	船舶　6000 ドゥカート相当 同[船舶　6000 ドゥカート相当] イナゴマメ　40*stara* ソラマメ　1 大包 libretti 皮革　20 キプロスのビスケット　1 *migliaro* 塩漬け肉　1 樽 キプロスのブドウ酒 1 *caratello* と 4 樽
641	1603	na	BALBIANA	シリア	織物　800 ドゥカート相当 絹織物　2162 ブラッチョ 現金　500 ドゥカート 金糸を織り込んだ織物　984 現金　2000 ドゥカート サテン　512 ブラッチョ 金銀糸を織り込んだ織物　272 現金　1000 ドゥカート 絹織物　1600 ブラッチョ サテン　1555 と 1/2 ブラッチョ

					ダマスク織り　193 と 3/4 ブラッチョ 金色の羊毛[織物]　230 ブラッチョ 金色の毛織物　12
714	1604	na	RENIERA	シリア	記載なし
848	1607	na	LIONA	シリア	*lauri* インディゴ *filladi* 22 袋 綿　12 袋 *lauri* インディゴ　2 箱 インディゴ　4 包 絹　3 包 *filladi* 20 包 キプロスの綿　53 袋 塩の *savorna* 1/3 インディゴ　2 箱 *filladi*　12 袋 インディゴ　1 箱 *filadi*　12 包 インディゴ　4 箱 絹　2 包 絹　2 包 ブドウ酒　12 *barilami* *boutanes* 100 状態の悪い皮革　2 *cantara* *filladi* 2 大きな梱 インディゴ 16 *scafacci* ベッドカバー　1 大包
870	1607	na	STROZZA	シリア	記載なし
939	1608	na	BUONA SPERANZA	シリア	記載なし
944	1608	berton	GIUSTINIAN	シリア	記載なし
986	1609	na	SALEVETTA	シリア	絹　3 包 インディゴ　1 箱 インディゴ　10 箱 シナモン　59 包 コードバン　5 梱 呉絽　1 *tavola* 絹　17 包 アンモニア塩　5 包 *assa foetida* 7 包 メース　4 包 没食子　*migliaro* につき 130 ドゥカート 絹　2 包 *lauro* インディゴ　4 箱 没食子　2 包 じゅうたん　1 梱 絹　2 包 インディゴ　2 箱 *filladi*　1 包 モスリン　15 点 綿 *filladi*　8 袋 インディゴ　5 箱 呉絽　6 インディゴ　20 箱 シナモン　15 包 *filadi* 12 包 コードバン　6 包 絹　4 梱 ルバーブ　1 大包 羽根飾り　166 *migliara*

					絹　5 包 宝石類　5000 ドゥカート相当 インディゴ 絹 羽根布団 絹 インディゴ 絹 インディゴ 綿
189	1595	na	RHENIERA	シリアのトリポリ	没食子　10 包 綿　3 袋 *boutanes* 1 梱
545	1602	na	PEGOLOTTA	シリアのトリポリ	羊毛
555	1602	na	CANEVALA	シリアのトリポリ	*beledi* 絹　4 包 洗浄済み羊毛　480 袋 没食子　6 包 灰　204 袋 干しブドウ　116 と 1/2 *buste*
745	1605	na	PIGNA	シリアのトリポリ	*beledi* 絹　1 梱 絹　3 包 牛皮革　640 *boutanes* 3 梱 *boutanes amuine* [ヴェルヴェット](*vellade*) *mantili bagadeti* *bordi* *giurini* *sesse* ハンカチーフ ナプキン *dimiti* *tachie* *zebibo* プラム 石鹸　1 箱 羽根布団　30 *boutanes*　1 梱（＝100 個） 織物 シャツ ブドウ酒 ビスケット 油　等々 （[織物、シャツ、ブドウ酒、ビスケットとあわせて]　443 ピアストル相当） 大砲の部品 鉄 帆布 工具　等々 アンモニア塩　2 箱、245 ドゥカート相当
801	1605	na	BALBA	シリアのトリポリ	絹 胡椒 *galle*
805	1606	na	GIUSTINIANA ET BENVENUTA	シリアのトリポリ	絹 1 包 絹 1 包 布類 布地 床屋の道具

参考文献

一次史料

Archivio di Stato di Venezia

Cinque Savi alla Mercanzia, b.958. (*Il libro dei conti di Giacomo Badoer*)

Miscellanea di carte non appartenenti a nessun archivio, b.29.

I Documenti Turchi.

校訂史料

Evliya Çelebi, *Seyahatnâmesi*, 4 volls, İstanbul, Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık Ticaret ve Sanayi A.Ş, 2001-

Mubahat Kütükoğlu（1978）"1009/1600 Tarihli Narh Defterine göre İstanbul'da Çeşitli Eşya ve Hizmet Fiatları"（「1009/1600 年付けナルフ台帳によるイスタンブルにおける諸物資の価格と賃金」）, *Tarih Enstitüsü*, 9.

Mubahat Kütükoğlu, (1983), *Osmanlılarda Narf Müessesesi ve 1640 Tarihli Narh Defteri*, (『オスマン朝におけるナルフ制度と 1640 年付けナルフ台帳』）, İstanbul.

Mubahat Kütükoğlu ,(1984), "1624 sikke tashihinin ardından hazırlanan narh defterleri", （1624 年の貨幣 改正の後作成されたナルフ台帳）*Tarih Dergisi,* 34.

Il libro dei conti di Giacomo Badoer : Costantinopoli (1436-1440), Umberto Dorini & Tommaso Bertelè (a cura di), Roma, Istituto poligrafico dello Stato, 1956.

I mestieri della moda a Venezia nei sec. XIII-XVIII, Documenti, Parte I, Doretta Davanzo Poli (a cura di) Venezia, 1984

Domenico Malipiero, *Annali veneti dall'anno 1457 al 1500*, a cura di A.Sagredo*, Archivio Storico Italiano,* 7, (1843-44)

I diarii di Girolamo Priuli, [AA.1494-1512], a cura di A. Segre, Città di Castello & Bologna

I diarii di Marino Sanuto, Federico Visentini (a cura di), reprint. Bologna : Forni Editore (1969-70)

Pegolotti, *La pratica della mercatura*, Allan Evans (ed.), Cambridge Mass., 1936, New York, 1970

二次文献

外国語文献

R. Ago (1998), *Economia Barocca, Mercato e istituzioni nella Roma del Seicento*, Roma.

Eliyahu Ashtor (1969), *Histoire des prix et des salaires dans l'Orient médiéval*, S.E.V.P.E.N., Paris.

Eliyahu Ashtor (1971), *Les métaux précieux et la balance des payements du Proche-Orient à la basse époque*, S.E.V.P.E.N., Paris.

Eliyahu Ashtor (1976), *A social and economic history of the Near East in the Middle Ages*, University of California Press.

Eliyahu Ashtor (1978), *Studies on the Levantine trade in the Middle Ages*, Variorum Reprints, 1978.

Eliyahu Ashtor (1978), *The Medieval Near East : social and economic history : collected studies*, Variorum Reprints, 1978.

Eliyahu Ashtor (1983a), *Levant trade in the later Middle Ages*, Princeton University Press.

Eliyahu Ashtor (1983b), *The Jews and the Mediterranean economy, 10th-15th centuries*, Variorum Reprints.

Eliyahu Ashtor (1986a), *East-West trade in the medieval Mediterranean*, edited by Benjamin Z. Kedar, Variorum Reprints.

Eliyahu Ashtor (1986b), *Technology, industry and trade : the Levant versus Europe, 1250-1500*, edited by B.Z. Kedar, Variorum.

Aspetti e cause della decadenza economica veneziana nel secolo XVII (atti del convegno 27 giugno, 2 luglio 1957, Venezia, isola di San Giorgio Maggiore) Istituto per la collaborazione culturale, 1961.

At the Centre of the Old World: Trade and Manufacturing in Venice and the Venetian Mainland, 1400-1800, edited by Paola Lanaro, Centre for Reformation and Renaissance Studies, Toronto, 2006.

Ömer Lutfi Barkan (1942), *Türkiyede imparatorluk devirlerinin büyük nüfus ve arazi tahrirleri ve hâkana mahsus istatistik defterleri*, Istanbul (「15 世紀末の主要ないくつかの都市における物資と食料の価　格を統制する目的で制定された法令」)

P.L. Baker (1967), "Islamic Honorific Garments", *Costume*, 1, pp.25-35.

Francesco Battistini (2000), "La tessitura serica italiana durante l'età moderna: dimensioni, specializzazione produttiva, mercati", Luca Molà, Reinhold.C.Müeller, Claudio Zanier (eds.),*La seta in Italia, dal Medioevo al Seicento, Dal baco al drappo*, Venezia, pp.335-351.

Francesco Battistini (1997), *Gelsi, bozzeli e caldaie, L'industria della seta in Toscana tra città*

borghi e campagne (secc. XVI-XVIII), Firenze.

Francesco Battistini (2003), *L'industria della seta in Italia nell'eta moderna*, Bologna.

Ebru Boyal & Kate Fleet (2010), *A Social History of Ottoman Istanbul*, Cambridge Univ. Press.

Benjamin Braude (1979), "International Competition and Domestic Cloth in the Ottoman Empire, 1500-1650: A Study in Underdevelopment", *Review,* II,3, pp.437-451.

Palmira Brummet (1994), *Ottoman seapower and Levantine diplomacy in the age of discovery*, Albany

Ogier Ghiselin de Busbecq, *The Turkish Letters of Ogier Ghiselin de Busbecq, Imperial Ambassador at Constantinople 1554-1562,* Translated by E.S.Forster, Oxford Univ. Press, 1927, Louisiana State Univ. Press, 2005

F. Braudel (1949), *La Méditerranée et le monde méditerraneen à l'époque de Philippe II*, I-II, Paris ;『地中海』（全 5 巻）浜名優美訳、藤原書店、1991—1995 年

F. Brunello (1981), *Arti e mestieri a Venezia nel Medioevo e nel Rinascimento,* Vicenza

Peter Burke (1982), "Conspicuous consumption in seventeenth-century Italy", *Proceeding, The Eighteenth International Economic History Congress,* reprinted in *The historical anthropology of early modern Italy,* Cambridge, 1987, pp.132-149.

Byzantium to Turkey, 1071-1453, edited by Kate Fleet (The Cambridge history of Turkey, v. 1) Cambridge University Press, 2009.

M. Carmignani (2005), *Tessuti, Ricami e Merletti in Italia,* Milano.

I. Cecchini (2000), *Quadri e commercio a Venezia durante il Seicento*, Venezia

Carlo Maria Cipolla (1959), "Il declino economico dell'Italia", *Storia dell'economia italiana,* Torino, translated in English by J.Pullan, "The Economic Decline of Italy", *Crisis and Change in the Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Centuries,* P.Mathias (ed.), London, 1968.

Salvatore Ciriacono (1981), "Silk Manufacturing in France and Italy in the XVII Century: Two Models Compared," *The Journal of European Economic History,* X, pp. 167-199.

Salvatore Ciriacono (1993), "The Venetian Economy and its Place in the World Economy of the 17th and 18th Centuries. A Comparison with the Low Countries", *The Early Modern World-System in Geographical Perspective,* H.J.Nitz (ed.), Stuttgart.

Salvatore Ciriacono (2006), *Building on water：Venice, Holland and the construction of the Europe an landscape in early modern times*, (translated by Jeremy Scott), N.Y.

Salvatore Ciriacono (1988), "Mass Consumption Goods and Luxury Goods: the De-Industrialization of the Republic of Venice from the Sixteenth Century to the Eighteenth Century", *The Rise and Fall of the Urban Industries in Italy and the Low Countries (late Middle Ages – Early Modern Times),* H.van der Wee (ed.), Leuven

Univ. Press

Salvatore Ciriacono (1993), “The Venetian Economy and its Place in the World Economy of the 17th and 18th Centuries. A Comparison with the Low Countries”, *The Early Modern World-System in Geographical Perspective,* H.J.Nitz (ed.), Stuttgart.

Murat Çizakça (1978), *Sixteenth -Seventeenth Century Inflation and the Bursa Silk Industry: A Pattern for Ottoman Industrial Decline?,* Ph.D. Thesis, University of Pennsylvania

Murat Çizakça (1980), "Price History and the Bursa Silk Industry：A Study in Ottoman Industrial Decline, 1550-1650", *The Journal of Economic History*, XL(3), pp.533-550.

Murat Çizakça (1983), "A short history of the Bursa silk industry (1500-1900)", *Journal of the Economics and Social History of the Orient,* XXIII, pp.142-152.

Crisis and change in the Venetian economy in the sixteenth and seventeenth centuries, edited with an introduction by Brian Pullan, Methuen, 1968.

Fahri Dalsar (1960), *Türk Sanayı ve Ticaret Tarihinde Bursa'da İpekçilik*, İstanbul

Doretta Davanzo Poli (1984), *I mestieri della moda a Venezia nei sec.XIII-XVIII*, *Documenti,* Associazione degli industrali della Provincia di Venezia,Consorzio maestri calzaturieri del Brenta, Consorzio Venezia Moda, 2 volls.

Doretta Davanzo Poli (1993), "La produzione serica a Venezia", *Tessuti nel Veneto, Venezia e la Terraferma,* Verona.

Doretta Davanzo Poli, Stefania Moronato (1994), *Le stoffe dei Veneziani*, Venezia.

Ralph Davis (1967), *Aleppo and Devonshire Square：English traders in the Levant in the eighteenth century*, Macmillan.

Florence Edler De Roover (1966), "Andrea Banchi, Florentine silk manufacturer and merchant in the Fifteenth Century", *Studies in Medieval and Renaissance History*, III, pp.223-285

M. Douglas & B. Isherwood (1979), *The World of Goods*, New York.（ダグラス、イシャウッド『儀礼としての消費　財と消費の経済人類学』浅田、佐和訳、新曜社、1984 年

Eric R. Dursteler (2006), *Venetians in Constantinople：nation, identity, and coexistence in the early modern Mediterranean,* Johns Hopkins University Press.

An economic and social history of the Ottoman Empire, 1300-1914, edited by Halil İnalcık, with Donald Quataert, Cambridge University Press, 1994.

Edhem Eldem (1999), *French trade in Istanbul in the eighteenth century*, Brill, Leiden.

Suraiya Faroqhi (1987), “The Venetian Presence in the Ottoman Empire, 1600-30”, *The Ottoman Empire and the World Economy*, Hali İslamoğlu-İnan (ed.), Cambridge, pp.311-344.

Suraiya Faroqhi (1995), *Making a living in the Ottoman lands 1480 to 1820*, Istanbul.

Suraiya Faroqhi (2009), *Artisans of empire：crafts and craftspeople under the Ottomans*, London.

Firenze e la Toscana dei Medici nell'Europa del '500, Firenze, 1983.

Kate Fleet (1999), *European and Islamic trade in the early Ottoman state：the merchants of Genoa and Turkey*, Cambridge University Press.

A.G. Frank (1998), *ReOrient*, Univ. of California Press（フランク、『リオリエント　アジア時代のグローバル・エコノミー』山下範久訳、藤原書店、2000 年

Friends and rivals in the East：studies in Anglo-Dutch relations in the Levant from the seventeenth to the early nineteenth century, edited by Alastair Hamilton, Alexander H. de Groot, Maurits H. van den Boogert, Brill, 2000.

From Byzantion to Istanbul - 8000 Years of a Capital, Catalogue of Exhibition, Sabancı University, Sakıp Sabancı Museum, June 5 – September 4, 2010, Istanbul.

Katsumi Fukasawa (1987), *Toilerie et commerce du Levant：d'Alep à Marseille*, Editions du Centre national de la recherche scientifique.

Richard Goldthwaite (1987), "The Empire of Things: Consumer Demand in Renaissance Italy", *Patronage, Art, and Society in Renaissance Italy*, Camberra & Oxford, pp.153-175.

Haim Gerber (1988), Economy and society in an Ottoman city: Bursa, 1600-1700, Hebrew University.

Daniel Goffman (1990), *Izmir and the Levantine World, 1550-1650*, University of Washington Press.

Daniel Goffman (1998), *Britons in the Ottoman Empire, 1642-1660*, University of Washington Press.

Rossitsa Gradeva (2007) "On 'Frank' Objects in Everyday Life in Ottoman Balkans, the Case of Sofia, Mid-17th – mid 18th Centuries", *Relazioni economiche tra Europa e mondo islamico secc. XIII-XVIII (Europe's economic relations with the Islamic world 13th-18th centuries)*(Atti della Trentottesima Settimana di Studi 1-5 maggio 2006), a cura di Simonetta Cavaciocchi, Fondazione Istituto Internazionale di Storia Economica " F. Datini", Prato, vol.1, Le Monnier, pp.769-799.

Wilhelm Heyd(1885-86), *Histoire du commerce du Levant au moyen-âge,* transl. par F.Raynaud. I-II, Leipzig, 1885-1886.

E.J. Hobsbawm (1954), "General Crisis of the European Economy in the 17th Century" , *Past and Present,* 5, (E.J.ホブズボーム、今井博編訳「十七世紀におけるヨーロッパ経済の全般的危機」『十七世紀危機論争』創文社、1975 年、3-71 頁)。

Yutaka Horii (2005), "Venetians in Alexandria in the First Half of the Sixteenth Century",(Special Issue II. Ports, Merchants and Cross-cultural Contacts), 『日本中東学会年報 』(20-2), 131-144 頁

Hidetoshi Hoshino (1980), *L'arte della lana in Firenze nel basso Medioevo*, Firenze（星野秀利『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』齊藤寛海訳、名古屋大学出版会、1995 年）

Hidetoshi Hoshino (2001), *Industria tessile e commercio internazionale nella Firenze del tardo Medioevo*, Firenze.

Hidetoshi Hoshino & M.F.Mazzaoui (1985/86), "Ottoman markets for Florentine woolen cloth in the late fifteenth century", *The International Journal of Turkish Studies,* 3-2, pp.17-31.

Hidetoshi Hoshino (1984), "Il commercio fiorentino nell'impero ottomano : costi e profiti negli anni 1484-1488", *Aspetti della vita economica medievale, Atti del convegno di studi nel Xe anniversario della morte di Federigo Melis,* Firenze, 1984, pp.81-90.

Hidetoshi Hoshino (1985/86), "Alcuni aspetti del commercio dei panni fiorentini nell'impero ottomano ai primi del '500", *Annuario dell'Istituto Giapponese di Cultura* (Roma), XXI, pp.7-19.

Miki Iida(1998), "Trades in Constantinople in the First Half of the Fifteenth Century", *Mediterranean World*, XV, pp.41-49.

Miki Iida-Sohma (2006), "I tessuti serici veneziani e il mercato ottomano nell'epoca premoderna (secoli XVI-XVIIo)," *Mediterranean World*, XVIII, pp. 63-73.

Miki Iida-Sohma.(2008), "The Textile Market in Istanbul and Bursa in the First Half of the Seventeenth Century: An Introduction", *Mediterranean World*, XIXpp.161-197.

Miki Iida (2012), "Florentine Textiles for the Ottoman Empire in the Seventeenth Century", *Mediterranean World*, XXI, pp.179-196.

Halil İnalcık (1994), "Bursa and the silk trade", Halil İnalcık & Donald Quataert (eds.)*The Economic and Social History of the Ottoman Empire, 1300-1914*, Cambridge, pp.218-255

Halil İnalcık(1980), "The Hub of the City: The Bedestan of Istanbul", *International Journal of Turkish Studies,* I, pp.1-17.

Halil İnalcık(1985), *Studies in Ottoman social and economic history*, Aldershot, Ashgate.

Halil İnalcık(2008), *Türkiye Tekstil Tarihi üzerine araştırmalar,* Istanbul.

İpek, The Crescent and the Rose, Imperial Ottoman Silks and Velvets, Julian Raby & Alison Effeny (eds.), London, 2001.

"Italian silks for the Ottoman market", *İpek, The Crescent and the Rose, Imperial Ottoman Silks and Velvets,* Julian Raby & Alison Effeny (eds.), London, 2001, pp.182-190.

David Jacoby (1997), "Silk crosses the Mediterranean", *Le vie del Mediterraneo. Idee, uomini, oggettti (secoli XI-XVI)*, a cura di G. Airaldi, Genova.

David Jacoby (2000), "Dalla materia prima ai drappi tra Bizanzio, il Levante e Venezia: La prima fase dell'Industria serica veneziana", *La seta in Italia,* pp.265-304.

Mubahat Kütükoğlu, “narkh”, *Encyclopaedia of Islam,* 2nd Ver., vol. VII, pp.964-965.

Frederic Chapin Lane (1934), *Venetian ships and shipbuilders of the Renaissance*, The Johns Hopkins historical publications.

Frederic Chapin Lane (1940), “The Mediterranean Spice Trade: Further Evidence of its Revival in the Sixteenth Century”, *American Historical Review,* XLV.

Frederic Chapin Lane (1944), *Andrea Barbarigo：merchant of Venice, 1418-1449,* Johns Hopkins Press.

Frederic Chapin Lane (1966), *Venice and history：the collected papers of Frederic C. Lane*, edited by a committee of colleagues and former students；foreword by Fernand Braudel, Johns Hopkins Press.

Frederic Chapin Lane (1973), *Venice, a maritime republic*, Johns Hopkins University Press.

Frederic Chapin Lane (1962), “La Marine marchande et le trafic maritime de Venice à travers les siècles”, *Les Sources de l’histoire maritime en Europe du moyen âge au xviii siècle,* Michel Mollat (ed.), Paris, pp.7-32

Frederic Chapin Lane (1979), *Profits from power：readings in protection rent and violence-controlling enterprises*, State University of New York Press.

Frederic Chapin Lane (1985), *Money and banking in medieval and Renaissance Venice*, Johns Hopkins University Press.

Frederic Chapin Lane (1987), *Studies in Venetian social and economic history,* edited by Benjamin G. Kohl and Reinhold C. Mueller, （Collected studies series, CS254）, Variorum Reprints.

The later Ottoman Empire, 1603-1839, edited by Suraiya N. Faroqhi（The Cambridge history of Turkey, v. 3）,Cambridge University Press, 2006.

Robert S. Lopez (1945), "Silk Industry in the Byzantine Empire", *Speculum,* 20, pp.1-42.

Robert S. Lopez (1955), *Medieval trade in the Mediterranean world*：illustrative documents translated with introductions and notes by Robert S. Lopez and Irving W. Raymond, Oxford University Press.

Robert S. Lopez (1971), *The commercial revolution of the Middle Ages, 950-1350,* Prentice-Hall, 1971（ロバート・S.ロペス、宮松浩憲訳『中世の商業革命：ヨーロッパ 950-1350』法政大学出版局、2007 年）.

Lo Stile dello Zar, Arte e Moda tra Italia e Russi dal XIV al XVIII secolo, (Prato, Museo del Tessuto, 19 settembre 2009-10 gennaio 2010), Milano, 2009.

Gino Luzzato (1960), *Storia economica dell’età moderna e contemporanea*, Padova.

Gino Luzzato (1995), *Storia economica di Venezia dall’XI al XVI secolo*, Venezia.

Louise W. Mackie (2001), “Italian Silks for the Ottoman Sultans”, Electronic Journal of oriental Studies, IV (= M. Kiel, L Landman & H. Theunisse (eds.), Proceedings of the

1th International Congress of Turkish Art, Utrecht- The Netherlands, August 23-28, 999), No.31, 1-21.

Louise W. Mackie (2004), "Ottoman *kaftans* with an Italian identity", *Ottoman Costumes, rom Textile to Identity,* S.Faroqhi & C.K.Neumann(eds.,), Istanbul, pp.219-229.

Robert Mantran (1962), *Istanbul dans la second moitié du XVIIe siècle,* Paris.

Roger Mason (1998), *The Economics of Conspicuous Consumption,* Cheltenham & Northampton, MA, （メイソン『顕示的消費の経済学』鈴木・高・橋本訳、名古屋大学出版会、2000 年）.

Bruce Masters (1988), *The origins of western economic dominance in the Middle East : mercantilism and the Islamic economy in Aleppo, 1600-1750*, New York University Press.

Bruce Masters (1999), "Aleppo: the Ottoman Empire's caravan city", *The Ottoman City between East and West, Aleppo, Izmir, and Istanbul,* E.Eldem, D.Goffman & B.Masters (eds), Cambridge, pp.1-78.

Il Mediterraneo nella seconda metà del '500 alla luce di Lepanto (Atti del convegno di studi promosso e organizzato dalla Fondazione Giorgio Cini, Venezia, 8-10 ottobre 1971), a cura di Gino Benzoni, L.S. Olschki, Firenze, 1974.

Federigo Melis (1962), *Aspetti della vita economica medievale : studi nell'archivio Datini di Prato,* Monte dei Paschi di Siena.

Federigo Melis (1972), *Documenti per la storia economica dei secoli XIII-XVI.* con una nota di paleografia commerciale a cura di Elena Cecchi, L.S. Olschki.

Federigo Melis (1984), *I trasporti e le comunicazioni nel Medio*evo, con introduzione di Michel Mollat ; a cura di Luciana Frangioni, Le Monnier.

Federigo Melis (1990), *I mercanti italiani dell'Europa medievale e rinascimentale,* con introduzione di Hermann Kellenbenz ; a cura di Luciana Frangioni, Le Monnier.

Federigo Melis (1991), *L'azienda nel Medioevo*, con introduzione di Mario Del Treppo ; a cura di Marco Spallanzani, Le Monnier.

Merchants in the Ottoman empire, Suraiya Faroqhi & Gilles Veinstein (eds.), Louvain, 2008

Luca Molà(1994), *La communità dei lucchesi a Venezia. Immigrazione e industria della seta el tardo Medioevo,* Venezia

Luca Molà (2000), *The Silk Textile Industry of Renaissance Venice*, Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore & London.

Pompeo G. Molmenti (1880), *La storia di Venezia, nella vita privata : dalle origini alla caduta della repubblica*, Trieste, 7th edition, 1973.

Anna Muthesius (1992), "Silk, Power and Diplomacy in Byzantium", *Proceeding for 3rd*

Biennial Symposium of Textile Society of America, September 24-26, 1992 Seattle, 再録 Id. *Studies in Byzantine and Islamic Silk Weaving*, London 1995, pp.231-244.

Gülrü Necipoğlu (1990), "From International Timurud to Ottoman: A Change of Taste in Sixteenth Century Ceramic Tiles", *Muqarnas,* 7. pp.

Stella Mary Newton(1988),*The Dress of the Venetians, 1495-1525*, Brookfield, Vermont

J.L.Nevinson (1959), "Siegmund von Herberstein. Notes on 16th Century Dress", *Waffen und Kostumkunde*, 1/2, pp.86-93.

Ottoman Costumes, From Textile to Identity, S.Faroqhi & C.K.Neumann(eds.,), Istanbul, 2004.

The Ottoman empire as a world power, 1453-1603, edited by Suraiya N. Faroqhi, Kate Fleet （The Cambridge history of Turkey, v. 2）, Cambridge University Press, 2013.

Tahsin Öz (1950), *Turkish textiles and velvets : XIV-XVI centuries*, Ankara.

Mine Esiner Özen(1980/81), "Türkçe'de kumaş adları", *Tarih Dergisi*, 33, pp.291-340.

Enzo Paci (1971), *La "scala" di Spalato e il commercio veneziano nei Balcani fra Cinque e Seicento*, Venezia

Şevket Pamuk (2000), *A Monetary History of the Ottoman Empire,* Cambridge Univ. Press.

Maria Pia Pedani (1994), *In nome del Gran Signore. Inviati ottomani a Venezia dalla caduta di Costantinopoli alla Guerra di Candia*, Venezia.

Maria Pia Pedani Fabris (1994), *I "Documenti Turchi" dell'Archivio di Stato di Venezia*, Venezia.

Maria Pia Pedani Fabris (2009), *Inventory of the Lettere e Scritture Turchesche in the Venetian State Archives*, Brill.

Maria Pia Pedani Fabris (2010), *Venezia, porta d'Oriente*, Bologna.

Luciano Pezzolo (1997), "L'economia", *Storia di Venezia,* VII (La Venezia Barocca), Roma, pp.369-433.

Richard T. Rapp (1976), *Industry and economic decline in Seventeenth-Century Venice,* Harvard Univ. Press.

Relazioni economiche tra Europa e mondo islamico secc. XIII-XVIII (Europe's economic relations with the Islamic world 13th-18th centuries)(Atti della Trentottesima Settimana di Studi 1-5 maggio 2006), a cura di Simonetta Cavaciocchi, Fondazione Istituto Internazionale di Storia Economica " F. Datini", Prato, 2 volls., Le Monnier.

Halil Sahillioğlu (1967), "Osmanlılarda Narh Müessesesi ve 1525 Yılı Sonunda İstanbul'da Fiyatlar" 「オスマン朝におけるナルフ制度と 1525 年末のイスタンブルの物価」）, *Bergelerle Türk Tarihi Dergisi*, 1.

Philippa Scott (2001), *Turkish delights*, London, Thames & Hudson.

Domenico Sella (1957), "Les mouvements longs de l'industrie lainière à Venise aux XVIème et

XVIIème siècle", *Annales: Économies, Sociétes, Civilisations,* XII, translated in English by the author, Sella (1968), "The Rise and Fall of Venetian Woolen Industry", *Crisis and Change in the Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Centuries,* P.Mathias (ed.), London, 1968. pp.106-126.

Domenico Sella (1961), *Commerci e industrie a Venezia nel secolo XVII*, Venezia & Roma.

Domenico Sella (1994), "L'economia", *Storia di Venezia*, VI, Roma;

Domenico Sella (1997), *Italy in the Seventeenth century* (Longman History of Italy), London & New York.

La seta islamica, Temi ed Influenze culturali. Islamic Silk, Design and Context (9th international conference on oriental carpets), C.M.Suriano & S. Carboni (a cura di), Firenze, Museo Nazionale Bargello ,(1999)

La seta in Europa secc. XIII-XX, a cura di S. Cavaciocchi, Firenze, 1993.

La seta in Italia, dal Medioevo dal Seicento, Dal Baco al drappo, L. Molà, R.C. Mueller & C. Zanier (a cura di), Venezia, 2000.

Silks for the Sultans, Ahmet Ertug and Patricia Baker and Hulya Tezcan and Jennifer Wearden (eds.), Istanbul, 1996.

A Social History of Ottoman Istanbul, E. Boyar & K. Fleet (eds), Cambridge, 2010.

Werner Sombart (1922), *Luxus und Kapitalismus,* Munchen（ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』金森誠也訳、論創社、1987 年）

Lo Stile dello Zar, Arte e Moda tra Italia e Russia dal XIV al XVIII secolo, (Prato, Museo del Tessuto, 19 settembre 2009-10 gennaio 2010), Milano, 2009.

Alberto Tenenti (1959), *Naufrages, corsaires et assurances maritimes à Venise, 1592-1609,* S.E.V.P.E.N., Paris.

Alberto Tenenti (1961), *Venezia e i corsari, 1580-1615*, Laterza.

Alberto Tenenti (1962), *Cristoforo da Canal, la marine vénitienne avant Lépante,* S.E.V.P.E.N., Paris.

Alberto Tenenti (1968), *Piracy and the decline of Venice, 1580-1615*, With an introduction and glossary by Janet and Brian Pullan, University of California Press.

Alberto Tenenti, Branislava Tenenti (1985), *Il prezzo del rischio : l'assicurazione mediterranea vista da Ragusa, 1563-1591*, Jouvence.

Tessuti nel Veneto, *Venezia e la Terraferma,* Banca Popolare di Verona, 1993.

HülyaTezcan (2006), *Children of the Ottoman Seraglio,Customs and costumes of the princes and princesses,* Istanbul.

Freddy Thiriet (1957), "Les lettres commerciales des Bembo et le commerce vénitien dans l'Empire ottoman à la fin du XVe siècle", *Studi in onore di Armando Sapori*, Milano-Varese.

Trade and cultural exchange in the early modern Mediterranean : Braudel's maritime legacy, edited by Maria Fusaro, Colin Heywood, Mohamed-Salah Omri, Tauris Academic Studies, 2010.

Ugo Tucci (1957), *Lettres d'un marchand vénitien Andrea Berengo (1553-1556)*, Avant-propos de Gino Luzzatto, S.E.V.P.E.N., Paris.

Ugo Tucci (1981), *Mercanti, navi, monete nel Cinquecento veneziano*, Il Mulino, Bologna.

Ugo Tucci (1991), *I servizi marittimi veneziani per il pellegrinaggio in Terrasanta nel Medioevo : prolusioni*, Venezia.

Tulpen Kaftane und Levnî , Höfische Mode und Kostümalben der Osmanen aus dem Topkapı Palast Istanbul / Tulips Kaftans and Levnî, Imperial Ottoman Costumes and Miniature Albums from Topkapı Palace in Istanbul, D.Erduman-Çalış (ed.), Museum für Angewandte Kunst-Frankfurt, 2008, Hirmer Verlag, Münhen.

Venezia : centro di mediazione tra Oriente e Occidente, (secoli XV-XVI) : aspetti e problemi (Atti del convegno internazionale di storia della civiltà veneziana, 2d, Venice, Italy, 1973), a cura di Hans-Georg Beck, Manoussos Manoussacas, Agostino Pertusi, L. S. Olschki, Firenze, 1977, 2 volls.

Venezia e il Levante fino al secolo XV ("Atti del I Convegno internazionale di storia della civiltà veneziana promosso e organizzato dalla Fondazione Giorgio Cini, Venezia, 1-5 giugno 1968), a cura di Agostino Pertusi, L.S. Olschki, Firenze, 1973-1974, 3 volls.

Venezia e Istanbul. Incontri, confronti e scambi, E.Concina (a cura di), Udine, 2006.

Venice and the Islamic World 828-1797, N.Y & Paris, 2007.

FrancescoVianello (2004), *Seta fine e panni grossi, Manifattura e commerci nel Vicentino 1570-1700*, Milano.

Immanuel Wallerstein (1974), *The modern world-system: the capitalist agriculture and the origins of the European World-economy in the Sixteenth century,* （ウォーラーステイン『近代世界システム農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』川北稔訳、岩波書店、1981 年

Jennifer M. Wearden (1985), "Siegmund von Herberstein: An Italian Velvet in the Ottoman Court", *Costume*, 1, pp.22-29.

Zdzisław Żygulski, Jr (1991), *Ottoman Art in the service of the empire* , New York

邦語文献

セルジョ=ベルテッリ、川野美也子訳（2006）『ルネサンス宮廷大全』、東洋書林

『地中海世界史』、歴史学研究会編、全 5 巻、青木書店、1999-2003 年

サルヴァトーレ・チリアコノ(2003)、「17－19 世紀イタリアにおける手工業・奢侈品工業・大量

生産」（唐澤達　之訳）、『比較都市史研究』22、59－67 頁
深沢克己（1986）「レヴァント更紗とアルメニア商人　―捺染技術の伝播と東西交易―」『土地制度史学』198 号、18-37 頁（深沢克己(2007)、『商人と更紗』、東京大学出版会に再録）
深沢克己(1999)「レヴァントのフランス商人　―交易の形態と条件をめぐって」『ネットワークの中の地中海』（歴史学研究会編・地中海世界史 3）青木書店、113―142 頁
深沢克己（2007）『商人と更紗：近世フランス=レヴァント貿易史研究』東京大学出版会.
服部春彦(1992)、『フランス近代貿易の生成と展開』ミネルヴァ書房
林佳世子（1997）『オスマン帝国の時代』（世界史リブレット 19）、山川出版社
林佳世子（1999）「都市を支えたワクフ制度　イスラム世界の宗教寄進制度の経済的側面」『地中海世界史３　ネットワークの中の世界史』歴史学研究会編、青木書店、256－284 頁
林佳世子「ベデステン」『岩波イスラーム辞典』871 頁、岩波書店、2001 年
林佳世子（2008）『オスマン帝国 500 年の平和』講談社
『比較史のアジア　所有・契約・市場・公正』三浦徹・岸本美緒・関本照夫編（イスラーム地域研究叢書④）、東京大学出版会、2004 年
堀井優(1994)「一六世紀前半のオスマン帝国とヴェネツィア：アフドナーメ分析を通して」史學雑誌 103(1), 34-62, 149-148 頁
堀井優(1997)「オスマン朝のエジプト占領とヴェネツィア人領事・居留民--1517 年セリム 1 世の勅令の内容を中心として」東洋学報 78(4), 33-60 頁
堀井優(2002)「オスマン帝国とヨーロッパ商人　―エジプトのヴェネツィア人居留民社会」深沢克己編著『国際商業』（近代ヨーロッパの探求⑨）、233-259 頁、ミネルヴァ書房
飯田巳貴「近世のヴェネツィア絹織物産業とオスマン市場」『港町と海域世界』（シリーズ港町の世界史①）歴史学研究会編、青木書店、2005 年、299-331 頁.
飯田巳貴(2012)「近世におけるヴェネツィア共和国とシリアの輸出入貿易　1592-1609 年」『専修大学人文科学研究所月報』259 号,
『イラン式簿記術の発展と展開：イラン、マムルーク朝、オスマン朝下で作成された理論書と帳簿』高松洋一編、共同利用・共同拠点イスラーム地域研究拠点、2011 年
『イタリア都市社会史入門』齊藤寛海、山辺規子、藤内哲也編、昭和堂、2008 年
加藤博（2001、初出 1995）『文明としてのイスラーム　―多元的社会記述の試み』東京大学出版会。
加藤博(1999)「アレクサンドリアの憂愁　―近代地中海世界の光と影」『ネットワークの中の地中海』202―229 頁、再掲『イスラム経済論―トリックスタートしての神』東京大学出版会、2002 年、137―167 頁
加藤博(2005)『イスラム世界の経済史』NTT 出版
亀長洋子(2005)「キオスに集う人々　- 中世ジェノヴァ公証人登録簿の検討から」『港町と海域世界』（歴史 学研究会編）青木書店、333-363 頁.

鴨野洋一郎（2006）「15 世紀前半から 16 世紀後半にかけてのイスタンブルのフィレンツェ人居留地における領事裁判制度」『年報地域文化研究』（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻）(10), 27-45 頁
鴨野洋一郎(2010)「1500 年前後のフィレンツェ絹織物工業と国際市場--セッリストーリ金箔会社の経営記録から」『西洋中世研究 』(2), 141-160 頁
鴨野洋一郎（2011）「15-16 世紀におけるフィレンツェ・オスマン関係と貿易枠組み」（特集 オスマン帝国史の諸問題--世界秩序と国際関係）『 東洋文化』(91), 25-45 頁
『記憶と表象　史料が語るイスラーム世界』林佳世子・桝屋友子編（イスラーム地域研究叢書⑧）、東京大学出版会、2005 年
北田葉子（2002）『近世フィレンツェの政治と文化』刀水書房
ウィリアム・マクニール（清水廣一郎訳）（2004）『ヴェネツィア ： 東西ヨーロッパのかなめ、1081-1797』東京、岩波書店.
三木亘・山形孝夫編（1984）『イスラム世界の人びと－5　都市民』東洋経済新報社、1984 年
三浦徹（2003）「中東・イスラム世界にみる法廷の契約と当事者の合意」『日本中東学会年報』（19-1）、45-74 頁
守田正志・篠野志郎(2008)「『イスタンブル・ワクフ調査台帳』にみる 16 世紀後半のイスタンブルのワクフの実態と都市構造の変容　―オスマン朝初期におけるイスラーム都市の史的研究　2―」『日本建築学会計画系論文集』第 73 巻 624 号、483 頁
永井三明（2004）『ヴェネツィアの歴史 ： 共和国の残照』刀水書房
永沼博道（1993）「中世ジェノヴァ植民活動の特質--マオ-ナ・ディ・キオの事例によせて」『関西大学経済　論集』Vol.42, No.5, 837-854 頁.
中平希（2003）「十六世紀ヴェネツィア共和国財政と税制―テッラフェルマ支配理解に向けて」『史學研究』（広島大学）241 号、45－65 頁
齊藤寛海（1989）「ダマスクスにおける毛織物の価格」『イタリア学会誌』、39 号
齋藤寛海（1988）「アンコーナとラグーザ　十六世紀のレヴァント商業」『イタリア学会誌』35 号、118―138 頁
齊藤寛海（2002）『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書院
佐野敬彦（1999）、『織りと染めの歴史―西洋編』、昭和堂.
塩谷正史（2002）「十九世紀前半のアジア綿織物市場におけるロシア製品の位置」『ロシア史研究』70,16―29 頁
鈴木董・大村次郷（1993）『図説イスタンブル歴史散歩』河出書房新社
『スルタンの衣裳』（トプカプ宮殿博物館）森雅夫監修、トプカプ宮殿博物館全集刊行会、東京、1980 年
高松洋一（2004）「オスマン帝国における文書・帳簿の作成と保存　―18 世紀から 19 世紀初頭を中心に』『東 京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」』、106-126 頁

ヒュルヤ・テズジャン（1980）（高橋昭一・護雅夫訳）「スルタンの衣裳とトルコの織物」『トプカプ宮殿博物館　スルタンの衣裳』護雅夫監修、トプカプ宮殿博物館全集刊行会、117-167 頁
『トプカプ宮殿の至宝展: オスマン帝国と時代を彩った女性たち：トルコ・イスタンブール歴史紀行』（展覧会カタログ）（2007）朝日新聞社.
藤内哲也（2005）『近世ヴェネツィアの権力と社会：「平穏なる共和国」の虚像と実像』昭和堂
アルフレッド・ヴィッジャーノ（2007）（高田京比子訳）「地中海の海港都市ヴェネツィア：15～18 世紀の盛衰」　『海港都市研究』（神戸大学）　(2), 3-23 頁
アルフレッド・ヴィッジャーノ（2008）（高田京比子訳）「ルネサンス期ヴェネツィアにおける市内と海上支配領域のギリシャ人」『海港都市研究』（神戸大学）　(3), 31-59 頁
和栗朱里(1990)、「ヴェネツィア芸術の興隆と土地所有」『イタリア学会誌』40 号、179—204 頁
和栗朱里（2004）「ポスト・カンブレー期ヴェネツィアの寡頭支配層とパトロネジ」『西洋史学』214 号,1—21 頁
ヤマンラール水野美奈子(2007)「トプカプ宮殿の至宝とオスマン芸術」『トプカプ宮殿の至宝展』198－199 頁

図表一覧

図 1　17 世紀の東地中海 ..... 4 頁
図 2　17 世紀なかばのイタリア ..... 5 頁
図 3　ヴェネツィアの海外領土 ..... 6 頁
図 4　『スール・ナーメ(Surnâme-i Hümâyûn)』、1582 年頃、
イスタンブル、トプカプ　宮殿図書館蔵、H1344, fol. 12 a. ..... 32 頁
図 5　（左より）　海軍提督（カプダン・パシャ）、大元帥（イムラホル・パシャ）、3 人の侍従長（カプバシ）、3 人の財務長官（デフテルダール）。Domenico de' Franceschi による木版画、1568 年、ヴェネツィアで出版。(*SULEYMAN GOING TO FRIDAY PRAYER by Domenico de'Franceschi*, 2001, İstanbul, Ertug & Kocabiyik) ..... 34 頁
図 6　宰相（同）
図 7　大宰相、小姓、スレイマン 1 世　（同） ..... 35 頁
図 8　オスマン宮廷におけるオーストリア大使への食事供応、1628 年（*Venezia e Istanbul. Incontri, Confronti e Scambi*, a cura di Ennio Concina, Udine, 2006, p.109） ..... 36 頁
図 9　オーストリア大使のスルタン謁見、16 世紀（同、p.107）
図 10　ヴェネツィアとオスマン帝国の和平協定文書に貼り付けられた絹織物、緑と金糸（西暦 1612 年 1 月 8-17 日付、オスマン 2 世の花押入り）、ヴェネツィア国立文書館蔵（*Venezia e Istanbul,* 2006, p.89）
図 11　同、赤色（西暦 1625 年 4 月 19-28 日付け、ムラト 4 世の花押入り）、同蔵(同)
図 12　カリフのアル・カーヒルから下賜された衣装を着るガズナ朝の君主マフムード、1000 年。（*Encyclopedia of Islam*, 2nd Edition） ..... 37 頁
図 13　恩賜の御衣、ムラト 3 世が大宰相メフメトらに恩賜の御衣を与える（『スール・ナーメ』）
図 14　オスマン朝のスルタンへの使節としての服装 (Siegmund von Herberstein, *Gratae Posteritati*, 1560) ..... 39 頁
図 15　オスマン朝のスルタンから下賜された衣装　(同)
図 16　ポーランドおよびロシアへの大使としての服装　(同) ..... 40 頁
図 17　モスクワ大公より下賜された衣装　(同)
図 18　スペインその他の諸国への大使としての服装　(同)
図 19　第 2 回のロシアへの大使を務めた際に下賜された衣装と帽子(同)

図 20　高位の宗教官僚たち　「スレイマン・ナーメ」より……41 頁
図 21　晩年のスレイマン大帝（同）
図 22　イスタンブルの商業中心地　（R.Mantran (1962), *Istanbul dans la second moitié du XVIIe siècle,* Paris, Carte13 より作成）……45 頁
図 23　『イスタンブル・ワクフ調査台帳』からみる 1600 年時点の店舗数および増加数（守田正志・篠野志郎(2008)「『イスタンブル・ワクフ調査台帳』にみる 16 世紀後半のイスタンブルのワクフの実態と都市構造の変容　―オスマン朝初期におけるイスラーム都市の史的研究　2―」『日本建築学会計画系論文集』第 73 巻 624 号、483 頁）
図 24　グランドバザールの内部とその周辺（鈴木董・大村次郷（1993）『図説イスタンブル歴史散歩』より作成）……46 頁
図 25　セラーセルのカフタン、17 世紀、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵.（『スルタンの衣裳』（1980）図 47）……55 頁
図 26　セラーセルのカフタン、16 世紀後半、同蔵（同図 46）
図 27　同部分　（*İpek*(2001), p.36, plate 1.）
図 28　ビロード（ヴェルヴェット）織りの組織（佐野（1999）7 頁、図 8）……56 頁
図 29　ヴェルヴェット（カディフェ）のカフタン、チンタマニ模様（三円文と二重波状線）、メフメト 2 世、15 世紀、イスタンブル、トプカプ宮殿博物館蔵、(『スルタンの衣裳』（1980）図 32）……57 頁
図 30　イタリア製ヴェルヴェット（チャトマ）のカフタン、ムラト三世（1574－95 年）、同蔵（『スルタンの衣裳』図 21、『トプカプ宮殿の至宝展』（展覧会カタログ）（2007）106－107 頁）
図 31　ケムハーのカフタン、バヤジット 2 世、15 世紀、同蔵（『スルタンの衣裳』（1980）図 36）……58 頁
図 32　ケムハー子供用カフタン、17 世紀、同蔵（Hülya Tezcan (2006), *Children of the Ottoman Seraglio,Customs and costumes of the princes and princesses,* Istanbul, p.247, plate219）……59 頁
図 33　カフタン、セレンキ（シャーベネッキ）、セリム 1 世、16 世紀、同蔵（『スルタンの衣裳』（1980）図 59）
図 34　ダマスクのカフタン、部分、オスマン 2 世（在位 1618－1621）、同蔵（*Silks for the Sultans* (1996), p.132）……60 頁
図 35　サテン（アトラス）のカフタン、スレイマン 1 世、同蔵、『スルタンの衣裳』（1980）図 3. ……61 頁
図 36　タフタの子供用カフタン、16－17 世紀、同蔵（Hülya Tezcan (2006), *Children of the Ottoman Seraglio,* p.257, plate 229 ）……62 頁

図 37　ハターイー（「中国風」）のカフタン、18 世紀、クリーム色地に
濃いベージュの模様、同蔵（『スルタンの衣裳』（1980）64 頁）
図 38　ハーレのカフタン、スレイマン 1 世、同蔵（同 64 頁、図 14）……63 頁
図 39　クトゥヌ（H.İnalcik (2008), *Türkiye Tekstil Tarihi üzerine araştırmalar,*p.106）……64 頁
図 40　クトゥヌの子供用カフタン、キルティング、1610 年頃、
スルタン・アフメド 1 世の皇女のものと推定される、
同蔵（H.Tezcan (2006), *Children of the Ottoman Seraglio,*
p.230, plate196）
図 41　クトゥヌのエンターリ（H.İnalcik (2008), *Türkiye Tekstil Tarihi üzerine araştırmalar,* pp.107）
図 42　各種のクトゥヌ（同、 pp.108-109）……65 頁
図 43　紋織り、ペルシア（ヤズド又はイスファハン）、16 世紀末-17
世紀初め、フィレンツェ、バルジェッロ美術館蔵（C.M.Suriano
& S. Carboni (acura di) (1999), *La seta islamica, Temi ed Influenze culturali. Islamic Silk, Design and Context* (9th
internatilnal conference on oriental carpets), Firenze,
Museo Nazionale Baegello, Plate 39）……69 頁
図 44　紋織り、ペルシア（ヤズド?）、16 世紀後半、同蔵（同、plate 40）
図 45　トスカーナ大公妃エレオノーラ・ディ・トレドと息子、アニョーロ
・ブロンズィーノ作、1545 年、フィレンツェ、ウフィッツィ美術館蔵
（Philippa Scott (2001), *Turkish delights*, London, Thames &
Hudson）……89 頁
図 46　オスマン二世のカフタン、フィレンツェ製ヴェルヴェット、
1540 年頃、イスタンブル、トプカプ美術館蔵（同）
図 47　ヴェネツィアの大陸領土　（*At the Centre of the Old World*,2006,
p.17 より作成）……91 頁
図 48　近世ヴェネツィア共和国の絹産業概略図……92 頁
図 49　「円環連珠文の中のセンムルブ」、ササン朝ペルシア、6-7 世紀頃、
サミ織り、ロンドン、ヴィクトリア＆アルバート美術館蔵（『染織
の美』(1984)29 号、14 頁）……95 頁
図 50　「獅子狩文」ビザンツ帝国、８－９世紀頃、同蔵（同 10-11 頁）
図 51　ワシと円環蓮花文様」、ヴェネツィア製、14 世紀、絹と金糸、リヨン、
染織博物館蔵(D.Davanzo Poli(1994) *, Le stoffe dei veneziani*,
Venezia, p30）
図 52　サミト織り、ヴェネツィア、13 世紀（同 pp. 22-23）

図 53　サミト織り、多色絹と麻、ヴェネツィア、13 世紀、フェリチアーノ
・ベンヴェヌーティ・コレクション蔵（同、p.21）……96 頁
図 54　サミト織り、ヴェネツィア、14 世紀、サン・マルコのライオンの
紋章付き、フォルリ大聖堂蔵（同、p.12.）
図 55　「ザクロ文様」ヴェルヴェット織、ヴェネツィア、15 世紀、ヴェネ
ツィア染織・衣装研究所蔵（*Tessuti nel Veneto* (1993), p.25）……97 頁

表 1　ナルフ台帳に記載された絹織物数（1600 年, 1624 年 1640 年）……67 頁
表 2　イタリアにおける絹織物織機の数、1500－1700 年（概数）……98 頁
表 3　ヴェネツィアの輸出入貿易（1592-1609 年）地域別概要……107 頁
表 4　ヴェネツィアの輸出入貿易（1592-1609 年）―主要貿易商品……109 頁
表 5　ヴェネツィアから輸送された絹織物（オスマン帝国および
ヴェネツィアの海外領土向け、1592-1609 年）……115-6 頁